京都府「教師力養成講座」
第　16　期
修了レポート集

「教師力養成講座」事務局

はじめに

令和５年春、コロナウイルス感染症拡大という出口の見えない長いトンネルをようやく抜け、社会は新たな生活様式を確立する時期を迎えました。２月１日に開講し５月 31 日に閉講式を迎えた、第 16 期京都府「教師力養成講座」の実施時期は、with コロナから after コロナへの転換期そのものであったと言えます。今期の養成講座に迎えた学生は 80 余名、大学入学と新型コロナウイルス感染拡大が重なり、制約の大きい大学生活を送ってきた学生も少なくなかったと思います。授業やサークル活動等への戸惑い、リアルな人間関係形成の悩み、加速するデジタル化への対応、様々な課題に対応しながらも京都府の教員となることを進路として選んだ彼らとの出会いを大切にし、その意欲をサポートしたいと考えました。

京都府「教師力養成講座」は、京都府公立小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校の教員を志望する学生に、本府の特色ある教育実践や理論を学ぶ機会と、演習校において教員としての基礎的な素養を学ぶ実践演習の機会を提供することで、実践的指導力をもち採用後も学び続けることができる教員の養成を目指すものです。

この制度は平成 20 年度に小学校対象に始まり、22 年度には中学校、24 年度には特別支援学校、28 年度には高等学校へと全校種に拡充したことにより、京都府教育委員会と大学が連携して教員養成を行うという一つのシステムが完成したと言えます。

本講座は例年２月初旬からの約４ヶ月間に、講義を主とする「夢・未来」講座と、演習校における「教育実践演習」の二つのプログラムを実施しています。

教員として知っておくべき基本的な知識、時代が求める新たな知識を学ぶ「夢・未来」講座の講師には、府教育委員会の課長、経験豊かな現職校長、各分野に卓越した指導力を持つ教員・指導主事等があたっています。そして、京都教育大学教育創生リージョナルセンター機構・教職キャリア高度化センター、「学び続ける教員へのメッセージ」講演会（独立行政法人教職員支援機構理事長　荒瀬　克己氏）や、京都府総合教育センター所員の講義と模擬授業から学ぶ「授業実践講座」も対面での実施となり、より一層学びの深まりを感じました。また、今年度は特別にオープン講座Ⅱで、「教員を目指すみなさんへのメッセージ」と題した前川教育長の熱い思いを学生が受け取る機会もありました。

22 の演習校における「教育実践演習」では、専門に配置した指導教員を中心に多くの教員の指導・支援を受け、ボランティア活動や教員養成サポートセミナー等での体験をより深化・発展させることはもちろん、長期にわたる演習で児童生徒、学級・学年の変化や成長に感動を覚えたり、数多くの授業体験で、指導することの楽しさ、喜び、責任、厳しさを感じ取ったりしていました。また、異なる大学の学生同士が交流、情報交換、切磋琢磨することで、教員への思いをより強固にする姿も見られました。

一方でコロナ禍を機に「夢・未来」講座の講座レポート作成を自宅課題とした点は大きく変更せず、学生の帰宅時刻に配慮しました。自己管理能力を高め、大学での学び、「夢・未来」講座での学び、演習校での「教育実践演習」をそれぞれ省察によって充実・深化させ、「理論と実践の往還」を重視した人材育成の好循環を実現させる取組としたいと考えました。

ここに第 16 期「教師力養成講座」84 名(22 大学)の学びを修了レポートとしてまとめました。受講生一人一人の熱意と努力に敬意を表するとともに、この講座での学びや経験を生かせる日が一日も早く来ることを願います。そしてここでの経験を基盤として、教職生涯を通じて自ら学び続けると共に子ども一人一人の学びを最大限に引き出す教師として力強く歩んでいくことを期待します。

最後になりましたが、受講生を温かく受け入れていただき、きめ細かく御指導いただきました演習校の管理職はじめ、指導教員、教職員の皆様、並びに「夢・未来」講座で講師としてお世話になりました方々、さらには教員養成に係る各種事業に多大な御協力をいただいております大学関係者や関係諸機関等の皆様に深く感謝申し上げます。

今後、教職を目指す学生への御指導に本修了レポートを御活用いただければ幸甚に存じます。

令和６年１月

京都府「教師力養成講座」事務局

目　　次

はじめに　1
目　次　2
求められる京都府の教員像　3

小田　帆夏　向日市立向陽小学校　6
荻野　紗瑛　向日市立向陽小学校　8
小島　美穂　向日市立向陽小学校　10
櫛谷　瑞希　向日市立向陽小学校　12
森兼　陽向　向日市立向陽小学校　14
六島　新菜　向日市立向陽小学校　16
中島　咲里　向日市立第４向陽小学校　18
赤松　佑唯　向日市立第４向陽小学校　20
坂根　日那子　向日市立第４向陽小学校　22
徳永　朋大　向日市立第４向陽小学校　24
鶴丸　優月　向日市立第４向陽小学校　26
和泉　穂香　大山崎町立大山崎小学校　28
服部　翔　大山崎町立大山崎小学校　30
大畑　千裕　大山崎町立大山崎小学校　32
入江　優香　大山崎町立大山崎小学校　34
荒川　瑠璃亜　大山崎町立大山崎小学校　36
田中　杏実　宇治市立宇治小学校　38
中西　千笑　宇治市立宇治小学校　40
濵村　奈桜子　宇治市立宇治小学校　42
大原　さくら　宇治市立宇治小学校　44
植村　莉早　宇治市立宇治小学校　46
五十棲　紅葉　宇治市立宇治小学校　48
武末　夏野　宇治市立宇治小学校　50
楠　青空　宇治市立菟道小学校　52
馬場　寿理　宇治市立菟道小学校　54
村山　唯菜　宇治市立菟道小学校　56
梅原　彩華　宇治市立菟道小学校　58
足立　玲菜　城陽市立久津川小学校　60
谷口　翔　城陽市立久津川小学校　62
石塚　知帆　城陽市立久津川小学校　64
堀池　古都美　城陽市立久津川小学校　66
中川　敦貴　城陽市立久津川小学校　68
谷口　翔一　八幡市立くすのき小学校　70
髙橋　胡桃　八幡市立くすのき小学校　72
大橋　昂河　八幡市立くすのき小学校　74
上治　来夢　八幡市立くすのき小学校　76
下村　優月　八幡市立くすのき小学校　78
西田　隆哉　京田辺市立田辺小学校　80
松原　加奈　京田辺市立田辺小学校　82
田中　隼平　京田辺市立田辺小学校　84
相良　果歩　京田辺市立田辺小学校　86
金尾　敢巳　木津川市立高の原小学校　88
太田　遥香　木津川市立高の原小学校　90
西本　れんげ　木津川市立高の原小学校　92
杉島　信吏　木津川市立高の原小学校　94
石野　夏実　木津川市立高の原小学校　96
渡邉　楓華　亀岡市立千代川小学校　98
平岡　桜夏　亀岡市立千代川小学校　100
中園　みお　亀岡市立千代川小学校　102
宇古　和矢　亀岡市立千代川小学校　104
福井　健人　亀岡市立大井・千代川小学校　106
福原　向葵　南丹市立園部第二小学校　108
馬渕　莉奈　南丹市立園部第二小学校　110
辻本　帆花　南丹市立園部第二小学校　112
村山　果奈　南丹市立園部第二小学校　114
樋口　航生　宇治市立宇治中学校　116
西村　奏　宇治市立宇治中学校　118
永田　翔大　宇治市立宇治中学校　120
公文代　一希　宇治市立東宇治中学校　122
西山　将真　宇治市立東宇治中学校　124
松浦　裕樹　城陽市立城陽中学校　126
黒田　義一　城陽市立城陽中学校　128
上村　ちひろ　城陽市立西城陽中学校　130
佐々木　菜月　城陽市立西城陽中学校　132
納谷　駿輔　亀岡市立詳徳中学校　134
西村　将太　府立山城高等学校　136
村野　侑香　府立山城高等学校　138
瀧　愛佑美　府立山城高等学校　140
佐々木　凜　府立鴨沂高等学校　142
平岡　慎也　府立鴨沂高等学校　144
畠中　凜太郎　府立鴨沂高等学校　146
徳山　晴香　府立洛東高等学校　148
松山　綾花　府立洛東高等学校　150
井上　萌　府立洛東高等学校　152
山本　七海　府立洛東高等学校　154
竹畑　柊汰　府立南陽高等学校　156
城元　裕生也　府立南陽高等学校　158
山田　涼太郎　府立南陽高等学校　160
立川　紗良　府立宇治支援学校　162
廣田　湖都　府立宇治支援学校　164
岡田　紗香　府立宇治支援学校　166
平井　泉　府立宇治支援学校　168
辻村　日和　府立八幡支援学校　170
岡本　眞里奈　府立八幡支援学校　172

「夢・未来」講座各回の感想　174
教育実践演習校一覧表　201
「夢・未来」講座日程表　202
各演習校での演習の様子　203
京都府教員等の資質能力の向上に関する指標（一部抜粋）　206

京都府の教員に必要な５つの力

■気づく力

児童生徒一人一人を深く理解し、寄り添った指導ができるよう、小さな変化にも**気づくことができる力**

■伸ばす力

豊かな人間性と高い専門性に基づく優れた指導力を有し、児童生徒一人一人が豊かな未来を切り拓いていけるよう、それぞれの個性や能力を最大限に**伸ばすことができる力**

■挑戦する力

探究心や自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を高めながら、諸課題の解決に向け、**挑戦することができる力**

■つながる力

他の教職員、保護者や地域社会、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担しながら、組織的・協働的に諸課題を解決するため、チームの一員として**つながることができる力**

■展望する力

次代を担う人材に必要な学びを提供できるよう、広い視野で時代や社会、環境の変化を的確につかみ取り、未来を**展望することができる力**

求められる京都府の教員像

児童生徒の変化に「気づく力」

○　児童生徒への教育的愛情と、教職への使命感や情熱を有している。
○　高い人権意識や多様性を尊重する姿勢を持ち、自らが人権教育の担い手であるという自覚を有している。
○　児童生徒一人一人を深く理解し、その小さな変化を見逃さず、愛情と信頼と期待とで包み込みながら、受容的・共感的に関わることができる。
○　様々な要因により困難な状況におかれている児童生徒や、特別な配慮を必要とする児童生徒の状況を理解し、適切な支援を行うことができる。

児童生徒の可能性を「伸ばす力」

○　豊かな感性とコミュニケーション能力を持ち、明朗かつ健康で、人間的魅力にあふれている。
○　教科や教職に関する高い専門性と優れた指導力を有している。
○　高い授業力を有し、児童生徒に確かな学力をはぐくむことができる。
○　児童生徒一人一人の自己肯定感を高めながら、その個性や能力を引き出し、最大限に伸ばして、未来を切り拓く力をはぐくむことができる。

自らを高め、新たな課題に「挑戦する力」

○　自律的に学ぶ姿勢を持ち続け、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を教職生涯にわたって高め、教育改革の推進や教育課題の解決に積極的に取り組むことができる。
○　探究心や学び続ける姿勢を持ち、研修やＯＪＴ等を通じて自己研鑽に不断に取り組むとともに、同僚性の構築や若手教職員の人材育成に積極的に関わることができる。
○　適切なセルフマネジメントと効率的な業務の遂行に取り組み、日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、人間性を高め、児童生徒への効果的な教育活動を行うことができる。

学校内外の多様な人材と「つながる力」

○　社会的良識と高いコンプライアンス意識を持ち、児童生徒や保護者、職場の同僚、地域社会から信頼される。
○　組織の一員としての自覚を有し、自らの使命を理解して、役割を積極的に果たすことにより、学校運営に貢献することができる。
○　他の教職員、保護者や地域社会、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、チームの一員として、様々な教育改革や教育課題に組織的・協働的に対応することができる。

広い視野で未来を「展望する力」

○　広い視野で時代や社会、環境の変化を把握しながら、情報を適切に収集・選択・活用し、知識を有機的に結び付け構造化することができる。
○　様々な教育改革や複雑化・多様化する教育課題を的確に把握し、改革の実現や課題の解決に向け適切に対応することができる。
○　次代の京都府を担う人材や国際社会で活躍する人材を育成するために、京都の自然、歴史、伝統・文化について理解を深めるとともに、多様な文化に興味・関心を持ち、地域創生やグローバル化に対応した教育を推進できる。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「主体的な学びを実現するための授業づくり」

受講生氏名：小田　帆夏

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

めまぐるしく変化していく社会において、変化を前向きに受け止め主体的に行動する力を育成することが、現代の教員に求められていると考える。

これまで、教育実習や学生ボランティアで学校現場に入らせていただくことが多く、様々な先生方の授業を参観させていただいた。その中で、児童の興味や関心を引き出すとともに、児童の発見や気づきをひろって授業を進行する教師の姿に感銘を受け、児童が主体となって学ぶための授業づくりについて学びたいと感じた。

そこで、現場の先生方が具体的にどのような工夫をされているのかを観察し、児童が自ら進んで学びに向かえる授業づくりについて研究したいと考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　配属学級における担任の先生の授業参観
イ　発問の言葉、発問までの動き、児童の様子の観察
ウ　体験授業、研究授業での実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期演習では第４学年、後期演習では第１学年の学級に入らせていただき、それぞれの発達段階に応じた工夫や、児童が主体となって学ぶことのできるような授業実践を観察した。また、日常生活や授業内で積極的に児童と関わり、児童と近い目線で児童理解に努め、授業実践に繋げた。担任の先生と振り返りや話をさせていただく中で、授業や学級経営の中で大切にされていることや工夫されていることを学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業における工夫

前期演習と後期演習でそれぞれ別の先生の授業を見学させていただいた。どちらの先生も授業の中で、児童が活躍できる場を多く設定されていた。普段からそれぞれの児童の理解度や特性を理解されており、授業の中で活躍できそうな児童を意図的に指名することで児童が主体的に学べる授業づくりをされていた。

実際に授業をしてみて、導入の際には、児童にとって身近な例を挙げることで心を掴み、学びたいという気持ちを引き出すことができた。しかし、その後の展開では、あやふやな発問や説明をしてしまい、児童が何をすればよいのかが伝わらず、混乱させてしまった。主体的な学びを実現する授業の難しさを実感した、学びの多い経験となった。また、授業づくりと学級経営は両輪であるという認識のもと、児童の実態を具体的にイメージし、主体的な学びを実現する授業づくりをする必要があると学んだ。

イ　児童との関わり方

朝の挨拶や机間指導、休み時間の遊びを通して、「気づく力」の大切さを実感した。児童をよく観察していると、いつもより元気がなかったり、悲しそうにしたりしている様子に気づくことがあった。このことから、まずは「気づく」こと、そのために日頃から一人一人の児童との関わりを大切にしていくことが重要だと学ぶことができた。

３　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、授業や学級経営、児童理解をはじめ、様々な分野の知識を身につけることができた。また、講師の先生方の講義を聞いて終わるのではなく、受講生同士で議論し話し合うことで自分にはない考えや価値観に触れ、多面的な視点で考える力がついた。その中でも特に印象に残っていることは以下の２つである。

１つ目は、「ICTを活用した授業実践」の講義である。この講座では、ICTを活用し、個別最適な学びと協働的な学びを組み合わせて学ぶことの大切さを学んだ。ICT機器を、より効果的に活用するための方法や可能性を考える中で、ICTを使うことを目的とするのではなく、児童が主体的対話的で深い学びを実現するための手段として活用することが大切だと学んだ。

２つ目は、「小学校における児童理解と学級経営」の講義である。講師の方の、「児童や保護者の、知ろうとしてくれているという感覚は、教師とのより良い信頼関係の第一歩。」という言葉が強く印象に残っている。この講義で、行動だけで決めつけずに相手の言葉にしっかりと耳を傾け、想いを受け止めることの大切さに気づいた。

これからは、講座で学んだことを意識しつつ、児童に安心感を持たせる対応や、教師としての引き出しを増やせるよう、多くの経験を積んでいきたい。

４　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力の向上

実践授業では、時間配分や明確な発問、問い返しや板書など、基本的な技術を身につけることができた。板書では、学年ごとに気をつけるべきポイントがあり、とくに第１学年での実践で、１文字１文字を丁寧に濃く書くことができるようになった。また、授業後の事後研究会では、自分の授業の良かった点や改善点を俯瞰してみる力がついたとともに、他の演習生や担当の先生、校長先生のアドバイスを受けてよりよい授業への視点が広がった。

この経験から、さまざまな方法を模索し、繰り返し実践して改善し、児童の実態に合わせて授業をつくることの大切さを実感することができた。

(2) 児童との関わり方

演習の中では、教育実習での反省を活かし、積極的に児童に話しかけ、関わることを意識した。児童との信頼関係を少しずつ構築することができたとともに、児童一人一人に応じた支援の仕方や、接し方を学ぶことができた。しかし、第１学年の児童との関わりでは、学生という立場であるゆえに甘えられることが多く、児童が自分で出来ることと、支援が必要なことの区別の仕方に苦戦した。この経験が、児童一人一人の発達に応じた関わり方を意識していくきっかけとなった。

５　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

京都府教師力養成講座に参加することで、教員の仕事を間近で見ることができた。教員の仕事の責任や大変さも知ったが、児童の成長を間近で見たり児童と一緒に喜びを共有したりすることのできるというやりがいや魅力を感じ、教員になるという思いがより強くなった。また、私自身が主体的に児童と関わることで、児童の心が少しずつ開いていくことを実感できた。この感覚を忘れずに、前向きな姿勢で児童と関わっていきたい。今回の経験と、私の明るく優しい性格を活かし、児童を愛情いっぱいに包み込む教員になれるよう、自己研鑽に励んでいく。

(2) 今後の課題

課題としては、授業実践力だ。45分という時間の中で、学ばせたいポイントをつかみ、児童の発言を大切に授業をつくっていきたい。教員として、児童が主体的に学び考える力を授業で生み出せるよう、教材研究や児童理解を通して学び続けていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「ひとりひとりの児童の支援と学級づくり」

受講生氏名：荻野　紗瑛

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

これまで教育実習や教師力養成講座の教育実践演習で多くの授業や学校生活の様子を見てきた。教師は30人前後の学級で児童を担任し学級経営を行なっていく一方で、ひとりひとりの学習支援や日々の生活指導も行っていく。細やかな個別の支援、最適な学習を行うことが求められる中で、こうした学級経営という全体への働きかけと、それぞれ特性の異なる児童へ指導していくことの両立をどのようにしていけばよいのかに関心をもつようになった。この個と集団での関わりの両立に注目して観察することで、自分が教員になった際に授業内外での充実した指導をもとに学級経営を行なっていくことができると考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業外の学活や休み時間において、教師の児童との関わりの様子を観察する。

イ　授業中の教師の個と集団にかける発言の量や内容に着目して観察する。

ウ　授業実践を通して児童と関わり集団と個への指導を試みる。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習では、進級に向けた学年のまとめを行なっていく様子を授業やそれ以外の場面で観察を行った。後期の演習においては、新学期が始まり学級開きを行う中で児童と担任がどのように関わっているのかについて授業やそれ以外の場面で観察を行った。特に、学級担任が個と集団にかける言葉の量や内容に着目し、どのように個別指導と集団指導のバランスをとっているのかに着目した。また、自身の授業実践を通して集団指導の中に、どのように個別支援を組み込んでいくのかを研究した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　目的を明確にした机間支援

授業の中で、個人で考えたり作業を行ったりする活動の場面で、発問や指示を全体に出した後に机間支援を行う様子が多く見られた。個への支援の方法として多く用いられるが、全体への意識も忘れないためにきちんと意図・目的をもって机間支援を行うことが大切だと気づいた。このような気づきから、授業実践において学習課題に困難を抱える児童や集中力が保ちづらい児童に対し机間支援を重点的に行なった

イ　個から集団、集団から個へ

この演習テーマを設定した段階では、個への指導、集団への指導というようにそれぞれ別の視点として考えていた。しかし、演習を通して学級全体への支援が個別支援にも繋がっているというように両者は互いに作用し合っているということに気づいた。児童同士の助け合いや教え合いを活発に行う姿が多く見られる学級では、集団への声かけを多くしなくても児童が主体的に助け合いながら話し合いを行なっている場面が見られた。そのような雰囲気を学級づくりや授業の中で積み重ねていくことで、集団への指導が個別支援にもつながると考えた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の目指す教育のあり方や教員に求められている資質や能力について実際に事例等をもとに学ぶことができた。また、各講座でのグループ協議を通して同じ教員を目指す者同士で意見や考えを共有することで、自分の新たな発見や気づきにつながった。それらがさらに深い知識理解になり、意識と自覚が高まった。

特に、人権教育についての講座では京都府が人権教育を重点的に行なっているということを学び印象に残った。「京都府教員等の資質能力の向上に関する指標」(平成30年策定) では、７つの観点のうち人権は京都府が独自に設けている観点であり重点的に取り組んでいることを知った。このような特徴をもつ京都府の教員を目指す上で、人権課題について組織的に取り組んでいくための高い人権意識が求められることを再認識した。また、児童たちが集団の中で良好な人間関係づくりができるように、「ちがい」を認め合える学級づくりを行なっていく覚悟が芽生えた。児童が安心して通うことのできる学級、学校づくりそのものが人権教育になり、基本的人権の尊重になるという意識をもって取り組んでいきたいと考える。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

授業を重ねるたびに成果と同時に改善点を得ることがきでき、授業をする上での自分の癖や得意なポイントを見つけることができた。また、同じ演習校の演習生の授業を積極的に参観することによって、客観的に授業を分析することができた。

特に、授業作りの中で「学びの必然性」を児童自身が感じられるような発問や流れを組み立てることに苦戦した。実践した活動としては、学習したことが生活にどう生かされているのかを振り返りなどで考える時間を設けることで、なぜこの学習が必要なのか、もっと学びたいという思いを引き出すことができた。

一方で、授業の流れの中で生まれた児童のつぶやきや疑問を拾い、さらなる思考を深めるきっかけとして広げていく臨機応変な力はまだまだ未熟である。視野を広げ、児童の思考に沿った授業計画を立てることで授業の幅を広げられるよう努力する。

(2) 組織で動く学校を実感

教育実践演習では、新学期に向けて学校が動き出す春休みの期間にも演習に行かせていただいた。そして、卒業式や入学式の準備、当日の式にも関わらせていただき大変貴重経験をした。その中で、細かく役割分担された教員同士が連携しながら学級開きや式に向けて動く姿を見ることができた。日々学校生活や授業を支えるために、一人ではなく組織で取り組む大切さを学んだ。私自身、組織で動くことで充実感を得ることができ、自分も学校の一員として携わりたいという思いが一層強まった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

講座や演習を通して、児童の置かれている社会と求められている教育の姿を学ぶことができた。最も大切にしたいのは、児童が安心して包み込まれている感覚を育てることである。良さを認め合い、喜びや達成感を共有することのできる学級づくりを行なっていくことを心に決めた。

(2) 今後の課題

教師として最も大きな仕事である授業をさらに改善していく必要があることを実感した。個と集団へのアプローチのバランスを授業の中で臨機応変にとれるようにしていきたい。また、授業に向けた児童理解も日々の会話を通じて積極的に深めたい。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「個に応じた支援をするためには」

受講生氏名：小島　美穂

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定の理由

私は、教師力養成講座を受講する前に教員養成サポートセミナーや学生ボランティア、教育実習に参加させていただいた。実際に様々な児童と関わる中で、通常学級に教育的支援が必要な児童が多いと感じることがあった。特別な支援を必要とする児童への支援は、学級における全ての児童にも通じることである。児童が学校生活を過ごしやすくするために今回の教育実践演習では、今の自分に足りないところに向き合い、困り感を抱える児童への支援について研究したいと思い、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　児童と積極的に関わり、児童の特性を掴み、対応の仕方を学ぶ。

イ　担任の先生の声掛けや取り組みを観察し、自分なりに考察する。

ウ　先生方の児童との関わり方から学び、実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習の前期では第五学年、後期では第三学年の学級に入らせていただいた。前期は、学期末の児童の様子と個と集団の支援の仕方について観察を行った。後期では、新学期始めの児童同士の関わり方や先生方の関わり方の観察を行った。特別な支援を必要とする児童が社会的に自立できるようになるための必要な支援の様々を考え、実践を行った。児童が何に対して困っているのかに向き合い、考え、児童が「できる」ようになる為の支援を行った。授業実践では、児童が学ぶことの意義が実感できるように児童の興味・関心を「惹きつける導入」や「シンプルなめあてと発問」を心がけた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童の言葉や行動の背景を理解する

児童の言葉や行動に表れる小さな変化に「気づく」力の大切さに気付いた。そして、日々の児童の様子の変化や小さな成長に気付くことはもちろん、「なぜその言葉や行動をしたのか」ということに一度立ち止まり、児童の思いに気づくことの大切さを学んだ。意思表示が苦手な児童と関わった時に、相手に物を尋ねる言い方やお願いする言い方が分からないということが話を聞いてわかった。演習を通してまずは本人の思いを受け入れ、共感的な態度で話を聞く姿勢を常に心がけてきた。実践を通して児童の言動に隠れた背景を理解し、児童が示すサインに気付く大切さを学んだ。

イ　個と集団の一体的な指導を心がける

個に応じた支援だけでなく、個をとりまく集団の支援も欠かせないことを学んだ。支援の一つとして、できていない児童を叱るだけでなく、できている児童を褒めることで、周りの児童にも気づかせることや学級の目標だけでなく個々に合わせた目標を定めることで小さな成功体験を積み重ねながら集団の志気を高める。目の前の児童と向き合い、その児童ができるようになる為には何が必要かを児童の目線に立って考えることが大切であることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、現場で実践を積み重ねてこられた先生方からのお話を聴き、人権教育や特別の教科道徳の授業実践についてなど様々な分野の知識を得ることができた。また、グループセッションを通して、多面的な考え方を身に付けることができた。

特に印象に残っている講義が、第４回「小学校における児童理解と学級経営」の講義である。講義の中で、「子どもの思いや考えは保護者ともつながっている」という言葉が印象に残っている。学級経営の充実を図るために児童だけでなく保護者の方とのつながりが欠かせないことを学んだ。日々の教育活動を通じて学級経営の土台となる児童理解は、教師と児童の信頼関係を築き、児童相互のよりよい人間関係を育むことにつながる。講義内容を生かし、課題点を克服できるように意識しながら、教育実践に取り組んでいきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 個々に合わせて支援を工夫する力

授業に集中し続けることが難しい場合には時間を区切る、ノートよりＩＣＴ機器を用いて打ち込むと理解が進むなど、個に応じて支援や理解の仕方が様々である。先生方から伺った児童の情報や児童の表情から最適な支援を実施することについては試行錯誤しながら机間指導で実践することができた。

児童は一工夫で「できる」ようになる。個々の能力に差はあるが、挑戦する気持ちやできるように導いていくことが教師の務めであることを学んだ。児童の心情は動作に表れることを知り、児童の行動に着目して何を求めているのか、どこまでわかっていてどこがわからないのかなど児童のつぶやきを拾いあげながら、一つ一つ確認して、その児童に合わせた支援を行うことの大切さを学んだ。

(2) 粘り強く児童と向き合う力

演習を通して様々なタイプの児童と関わることができた。特別な配慮を必要とする児童や不登校傾向の児童など様々なタイプの児童に対応していかなければいけないという自覚をもつことができた。また、「児童が学校に行くのが楽しいと思える学級・学校作りを行うためにはどうすればよいのか」という事を常に模索している自分がいることに、教員としての自覚・責任感が身に付いたと感じている。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、児童が成長していく姿を何度も目の当たりにした。そしてその成長を児童や先生方と共に喜び合うことのできる教員という仕事に魅力とやりがいを感じた。また、児童を褒めて伸ばすというスタイルを崩さず、児童一人一人の良さや可能性を最大限に引き出し、輝かせてあげられる教員を目指す。そして、どんな児童であっても粘り強く向き合い、決して妥協しない教師でありたい。

(2) 今後の課題

今後の課題は、「授業力」と「対応力」である。児童のつぶやきを拾い、児童が発した言葉から学びを深める授業を行うことに課題がある。授業の目的や意図をしっかりと持ち、シンプルな課題を設定して進めることを心がけて児童にとって分かりやすい授業作りを目指す。また、教員を演じることの大切さに気付いた。児童を怒るのではなく「叱る」、「諭す」ことを常に心がけ、様々な児童に対応できるようにこれからも現場での経験を積み重ね、教員としてのスキルや人間的な魅力を磨き続けたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「主体的に学びに向かう発問・導入について」

受講生氏名：櫛谷　瑞希

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習を終え、児童が主体的に学びに向かうには、授業での学ぶ必然性を感じさせる導入や発問が鍵となることを学んだ。児童がどのような時に主体的に学びに向かうのか、教員がどのようにして学ぶ必然性をうみだすのかについて学びたいと思い、設定した。

また、第２期京都府教育振興プランでは、目指す人間像に向け、はぐくみたい力の一つとして「主体的に学び考える力」が示されている。そこで、どのようにして、このような力を育むのかについても学びたいと思い、演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　学級担任を始めとする先生方の授業における導入・発問・指示・声掛け等を観察する。

イ　先生方の導入・発問・指示・声掛けに対する児童の反応を観察する。

ウ　体験授業、研究授業での実践

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習前期は第６学年、後期は第２学年の学級に入らせていただき、授業観察と授業実践を通して研究を行った。授業観察に関しては、様々な学年、学級の授業観察を行い、発達段階に応じた導入・発問・指示・声掛け等の違いや工夫を観察した。授業実践に関しては、同一授業を二学級で行わせていただき、発問に対するつぶやきの多様性を実感した。また、児童のつぶやきから、学習のめあてを作成することや教具の工夫を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア　意図・目的をもつこと

演習を通して、意図・目的をしっかりともち、指導を行うことの大切さを学んだ。直接的に伝えることも一つの指導でもあるが、『児童に気付かせ、考えさせる』ような意図をもった指導が、より児童の成長に繋がることを学んだ。児童の素敵な姿を価値付けし、その姿を見て、周りの児童に気付かせる指導など、何事にも、意図・目的をもち、指示・発問を行うことの重要性を学んだ。また、導入に関して、日常と結びつけて『学ぶ意義を感じさせる』ような意図をもった導入が、児童の主体的な学びに繋がることを学んだ。

イ　つぶやきから発問へ

授業において、児童のつぶやきを拾うことは重要である。だが、つぶやきを拾うだけではなく、つぶやきを取捨選択することがより重要になることを学んだ。単元・本時の目標に迫るつぶやきを取捨選択し、児童の声で授業をつくることで、児童の主体的な学びにつながることを学んだ。また、つぶやきに耳を傾けることで、児童の思考に合わせた授業が展開できることや、つぶやきを問い返して発問につなげ、思考の過程に沿った授業が展開されることで、児童が主体的な学びにつながることを学んだ。

ウ　学級経営と授業は両輪

児童が主体的に学びに向かう為には、『この学級なら、間違っても大丈夫』と思えるような安心感のある学級づくりが基盤にあるということを学んだ。学級経営と授業は、切っても切り離せないものであることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員に求められている資質・能力やこれからの教育や社会について理解を深めることができた。その中でも、特に印象に残っている講座を挙げる。

(1) 特別の教科　道徳

この講義を通して、『心はダイヤモンド』であり、心と心を磨き合うことで道徳性を育むことが大切であると学んだ。また、心が見えないときも見ようとすることが大事であるということについても学び、このことを、学校現場において、児童の言動を表面的に解釈するのではなく、見えない部分を見ようとし、児童理解を深める実践にも活かしていきたい。

(2) 教育実践講座

個別最適な学びや協働的な学びについて、一斉授業の中で、ICT端末を用いて、どのように個別最適な学びを実現していくのか学ぶことができた。個別最適な学びが独立した学びにならないために、ICT端末を用いて、協働的な学びに結びつけていくことが、令和の日本型学校教育において、大切であるということを学ぶことができた。ICT端末を利用することを目的化せず、学びを深めるための一つの手段として活用し、よりよい学びの場を提供できるよう、自身の知識・技術向上に努めていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 気づく力

児童との関わりを通して、より広い視野をもち、気づく力が身に付いた。登校時の朝の挨拶では、児童の表情から小さな変化に気づき、声をかけたり、気づきを行動に移すことができた。また、普段の授業の様子や児童の様子を観察して気づいたことを、授業準備に活かしたり、気づきを基に多角的に考えることができた。そして、指示や発問の意図を考えながら授業観察をしたことにより、より多くの工夫や手立てを吸収することができた。

(2) つぶやきを拾う力

第６学年、第２学年での体験授業・研究授業を通して、児童のつぶやきに耳を傾けるという意識から、つぶやきを拾う力が成長した。以前は、つぶやきを拾う余裕がなかったが、つぶやきを拾うことで、児童の思考に合わせた授業が展開できることに気付くことができた。また、つぶやきを拾い、授業に反映させることも、児童が主体的に学びに向かうきっかけになるということも実感した。今後は、つぶやきを取捨選択する力、そして、児童の想像力豊かなつぶやきを楽しむことを意識し、授業力向上に努めたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教員の仕事の多忙さも知ったが、児童の成長を間近で見るこができる教職の魅力ややりがいを感じ、教師になるという思いがより一層強くなった。子どもたちを送り出す社会を見据え、どのような力が必要になるか、そして、力をつける為にどのような取り組みを行っていくのかを考え、授業づくりや指導を行っていきたい。また、子どもたちの豊かな想像力にふれながら、成長を共に喜び、自身も成長し学び続ける教師になりたい。

(2) 今後の課題

今後の課題については、授業力の向上だ。今回の演習テーマである「主体的に学びに向かう発問・導入について」の研究を今後も続け、授業力の向上に努めたい。また、児童のつぶやきを取捨選択し、児童の声で、児童主体の授業をつくりあげることを意識し、今後の課題に向き合っていきたい。また、児童の想像力豊かなつぶやきや発言を、楽しむことができるよう、授業力を伸ばしていきたい。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「学級担任の児童へのかかわりとその効果」

受講生氏名：森兼　陽向

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は教師力養成講座を受講する以前に、教員養成サポートセミナーにおいて演習校で学ばせていただいていた。学級担任は 30 人ほどの児童を一人で担任し学級経営していく一方、一人ひとりに適した指導も行っている。指導の個別化と学びの個性化が求められている中で、どのように学級全体への指導と両立していけばよいか関心をもつようになった。学級担任が行う個別指導と全体指導の様子を観察することで、自分が教員になった際に、相互を関わらせながらより良く児童の資質・能力を育むとともに、児童集団としての成長を促すことができると考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業における全体指導と個別指導（配慮や工夫）を観察する。

イ　授業外の時間での児童への学級担任のかかわりを観察する。

ウ　授業実践を通して児童と関わり、担任に向ける視線との違いを感じる。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習では、次の学年を見据えて学級経営及び個人指導を行っていく様子を観察した。特に学習のまとめを行う授業において、学習に向かいにくい児童へのかかわりを中心に観察した。後半の演習では、学級開きを行う中で何を意識して児童及び児童集団と関わっているのかについて観察した。学級担任が個別指導と全体指導を行う場面や内容、さらにはその効果に着目した。また、学習に向かいにくい児童に対する学級担任の関わり方や意識を確認した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　ほめることを中心にした関わり

個人指導と全体指導どちらにおいても、意識的に児童を褒めることが行われていた。個人指導において、活動意欲が低いや学力の低い児童には、成長した部分や少しでも努力している部分を見つけ、学習を続けられるようにしていた。意欲や能力の面で、将来を見据えた対応を学んだ

全体指導では、するべきことをできている児童を褒めることで、他の児童が気づき、自主的に取り組む姿勢を育んでいた。頑張っている児童が肯定されると同時に、児童同士の自治を促していた。悪い部分を直すのではなく、より良く伸ばす意識の大切さを学んだ。

イ　学習困難児への思い

学級担任が学習に向かいにくい児童や不登校の児童を諦めない姿勢が大切だと学んだ。他の児童と同じように動いたり学びを積み上げていくことが難しかったりする児童には、その困難さや課題に目が向きやすい。その困難さを意識しながらも、できる部分や得意なことと絡めてどう解決していくのかを常に考えていく必要がある。学級担任が児童それぞれと向き合うことで、児童の課題を解決しようとする姿勢を育むことができると考えた。配属学級の担任教員が言っていた、「しない」状態が続き何かに取り組みたいと思っても「できない」状態にならないように、今頑張れることは「させる」という言葉が印象に残っている。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

(1) 学校教育の目指す姿や理念に関する知識

より良い児童の資質・能力を育み、将来を切り拓いていけるように教育理念は存在しており、一見違う内容でも、相補関係にあるのだと学んだ。新型コロナウイルスの流行等、社会が大きく変化している中で、何がどのように変化したのかを捉えることの重要性を感じた。京都府が目指す児童の姿と、そのために必要な教員の能力について、知ることができた。特に、演習テーマに関わる学びとして、個別最適な学びに関する内容が大きな学びとなった。個別最適な学びには指導の個別化と学びの個性化の２種類あり、それぞれ場面に合わせて行うことが必要だと知った。学習の到達点すら児童によって変化させることが必要であるという言葉は衝撃だったが、その可能性を獲得することができたのは大きな学びだった。

(2) 授業実践を工夫する観点の拡大

授業実践を行う際、児童主体の授業を目指したいと考えている。他の児童の見方・考え方を知ることで、より深くより多様な考えができるようになると思う。「夢・未来」講座では、そのような児童主体の授業のための工夫をたくさん知ることができた。特に、ICT 機器の積極的な活用が促される中で、それをどう扱うべきか考えた。ICT の活用は必要不可欠であるが、それによって児童がどう学び、どう変化したのか評価する視点が大切であると考えた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 個別支援のために学級全体を整える考えの獲得

演習の中で､学習に向かいにくい児童に対して周囲が支えようとする雰囲気を感じた。児童個人に対して直接働きかけるだけでなく、学級全体としてどのような姿を目指すのか共有することの大切さを感じた。困難さを抱える児童に対してフォローしてくれた児童を褒めることで、周りに気づき関わろうとする児童が増えていくことを感じた。

(2) 児童を諦めない姿勢

様々な児童とかかわる中で、児童は私が思っていたよりも様々なことを考えており、努力しているのだと感じた。できていることや頑張っていることを褒めることを通して、児童の良さを発見しようと考えることができた。児童に肯定的な思いを伝えるようにすることで、信頼関係を築こうと努力する姿勢を身に付けることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私は教師力養成講座に参加したことで、より教員になりたいという気持ちが強くなった。公立学校には学習や家庭環境に困難のある子が多く、学級の中で孤立したり学校に通いにくさを感じたりしている状況があることを知った。そんな児童に対して、学級担任として学校の楽しさを教え、将来をより良く生きていく力を育む教員になりたいと強く思う。児童

一人ひとりの力を信じ、個々の力を高めることができるよう、私も学び続けることができる教員を目指す。

(2) 今後の課題

授業力である。様々な個性や特徴のある児童がともに学び、考えを深めていくことができるよう、授業づくりを頑張っていきたい。演習での授業実践の反省から、授業技術に関する書籍をたくさん読むことに取り組んでいる。協働的な学びの活かし方に着目しながら、児童にとって学びの必然性があり、学びたいと感じることができるような授業ができるように学んでいく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人が自分の個性を最大限活かせる学級経営について」

受講生氏名：六島　新菜

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、教師力養成講座を受講する以前に教育実習や学校ボランティアで教育現場に行かせていただくことが多かった。その中で、様々な特性のある児童や背景・事情を抱える児童と関わる機会があった。授業に集中できず座ることも難しい児童や、言葉がうまく話せず手が出てしまい友人関係がうまくいかない児童などがいたが、どの児童にも個性があり、その児童だからこその魅力を感じた。実際に教員になってから担任をもったり、児童と関わったりする中で、たくさんの魅力や個性をもった児童と出会うことになる。そこで、児童一人一人の個性や魅力を最大限引き出すためには日頃の学級経営でどのようなことを行い、児童とどのように関わっていくのかを考えていく必要があると考えたため、テーマとして設定した。

(2) 研究方法

ア　学級での担任の児童への接し方や指導を観察
イ　児童理解のため、私自身が児童一人一人と関わる
ウ　児童一人一人に合わせた支援と個性を活かした授業実践
エ　担任の先生への質問

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

私は、児童と関わる上で貢献を引き出すことを大切にしていた。児童は自分のよさやしたよいことをたくさんアピールしてくれる。それを「えらいね」だけではなく「〇〇さんが△△をしてくれるからみんなが快適に過ごせるね」などと学級のみんなのためになる行動を見つけ、みんなの前で取り上げたりした。毎日の生活の中で児童は多くの時間を学校の中でも学級で過ごすことになる。そのため、児童が自ら行動し、自分のよさを発揮するためには、まずは自分を受け入れてもらえているという安心感が必要である。その安心感を与えるためには、教員はこれらの行動の積み重ねを大切にしていく必要があると感じた。

(2) 演習校で学んだこと

学級経営において、児童のやる気を引き出す仕掛けが個性を引き出すことに繋がると学んだ。やる気を引き出す仕掛けとして、足場的支援を行うことと児童に成功体験を積ませることが重要であると考える。まず始めに足場的支援であるが、足場的支援を行うことで児童はやり方を理解することができる。朝、教室に入ったらどんな手順で何をするのか、各教科の授業で今日はどのようなことを学習するのかがわかるように掲示物や板書で示しておくことで、児童が不安から適応できなくなるということがなくなる。

次に、児童に成功体験を積ませることである。児童は取り組んだことの結果の多くが思うものでなかったり、失敗したりしたものであれば、自信を失い、新しいことに挑戦しようと思わなくなる。そのため、小さいことでも成功体験を積み重ねることが児童にとって大切である。しかし、児童と話していると成功体験よりも失敗体験の方が記憶に残りやすいため、成功を目に見えるようにしておくという工夫が必要であると学んだ。ただ、失敗するという経験も宝物になる。そのため、失敗を宝物と感じ、失敗を乗り越える力も育てられるようにしたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

(1) 京都府の教育が大切にしている基本理念を実現するための教育

これまで聞いたことがある言葉や教育に携わる者が大切にすべき教育に関する理念などに関する知識である。それとともに、それらは全て独立しているのではなく、互いに相補していることを学んだ。生徒指導、学級経営などがすべて繋がっているようにそれぞれの法規なども関係し合っている。その法規や言葉がどのような意味であるかを確認しておくことも大切であるが、それがあることで何がどのように変わり児童にどういう効果が得られるのかまで深く考えることで、自分自身の実践にもつなげていくことができると思った。

(2) 自分に求められる力

これから教員になる上で、自分に求められている力を学ぶことができた。令和の日本型学校教育、特別支援教育など「夢・未来」講座でテーマにされていたことは全て自分が知っておかなければならず、実践できる必要があると感じた。自分が学習した、知っている、と思っていることでも時代は変化し、児童に求められる力が変化していくように教師に求められる力も変化していく。主に、ICTの活用は私たちが小学生だった時と大きく変わったことである。ICTがまるで文房具のように使えるようにならなければならない時代で、自分の経験や知識がない分、実践を通して試行錯誤し考え続けていかなければならないことを学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) その児童を伸ばす力を身につけた

これまで、児童が困っていたら一緒に取り組む、隣で教えるということをしてきたがそれだけでは児童が自立できないことに気付いた。将来、社会に出た時に私がいなくても児童が自立して自分で考えていくためには、児童ができることをできなくしてしまう指導だけは絶対してはいけないと感じた。教員が何もかも説明して教えてしまうのではなく、児童ができることは児童にやらせることを徹底して支援していくことを学んだ。

(2) 授業力が成長した

これまで指導案を丁寧に書きすぎてしまい、自分の授業が指導案と比較してどうなのかこだわってしまい、目の前の児童を意識した授業とは程遠かった。しかし、この教師力養成講座を通して、目の前の児童を一番に考えることの大切さを知った。目の前の児童が学ぶ必然性を感じながら、身の回りの生活と結びつけ、主体的・対話的に学べるようにはどうすればいいのかを常に考えながら授業をする力がついた。授業の回数を重ねるごとに児童の発言に対する切り返しや指導案での予定の変更などが臨機応変にできるようになり、目の前の児童と一緒に授業をつくることができるようになった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

私は教職実践演習に参加したことで、より教員になりたいという気持ちが強くなった。目の前の児童が学ぶ必然性を感じながら、思わず「考えたい」と思える授業をつくることが大切であると思った。しかし、私たちが小学生だった時と学び方がずいぶん異なっていたため、ICTの活用は今後の課題であるといえる。児童に求められる資質・能力を身につけさせるための手段や手法というものを学び、今後も学校現場に出向き実践力を高めていく。

最後に、私は児童の成長に寄り添い、成長した時には児童と一緒に喜べる教員になりたい。児童は毎日変わった姿や成長した姿を見せてくれる。その一瞬、一瞬に携われるのは教員の魅力でありやりがいだと感じる。私は、とある児童の「先生がこの学校に来るのを待ってるよ」という言葉が忘れられない。私のことを必要としてくれる児童の力になりたいと思う。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「信頼関係を築く児童との関わり」

受講生氏名：中島　咲里

、

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 信頼関係を築く児童との関わり

児童と信頼関係を築くことは、授業面・指導面・学級経営面のすべてにおいて大切であり、信頼関係が基盤となっていると考える。そこで私は本研究テーマを設定し、児童との距離感を大切にしながらも信頼関係を築いていくための授業づくりや学級経営を学び、信頼する教員がいることで児童が安心した学校生活が送れるようにしたいと考えた。

(2) 研究方法

ア　児童一人一人と積極的に関わり、児童理解を深める。

イ　様々な場面での児童と先生方の関わり方を観察

ウ　疑問に思ったことを先生方に聞いて学んだことを実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期は４年生、後期は３年生に入らせていただき、演習では児童と積極的に関わることを心掛けた。授業中には、机間指導から児童の苦手なことや得意なことを学習面での児童理解をするよう努めた。休み時間にはたくさん話をしたり遊んだりすることで、授業以外の児童の一面を知ることで児童理解を行った。先生方の様々な面での児童との関わり方や言葉がけを観察し、放課後にはその行動がどのようなことを意図していたかを先生方に聞くことで学びを深めた。

また、様々な会議に参加させていただいた。担任と児童との関わりだけでなく、学年会議や教職員全体の会議で児童の実態や関わり方を共有していた。様々な視点から配慮することとチーム学校で教育を進めることの大切さを学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童理解

児童との信頼関係を築くために一番大切なことは児童理解を行うことであると学んだ。学級全体でのルールを決めたうえで、支援が必要な児童にはさらに個々の約束を決めて机の上に貼る取組をされていた。様々な面から児童一人一人をしっかり理解し、児童の個性に合わせた支援が行われていた。児童を理解することで「先生は自分のことをわかってくれる」と児童は感じることができる。児童理解をすることは、学級経営や授業づくりにもかかわる大切なことであり、たくさん児童と関わりなるべく早く正確に児童理解をすることが大切だと考える。

イ　児童との関わり方

学校生活を送る中で児童が何か嫌な思いをしたり、喧嘩になったり、問題が起こった時に先生に助けを求めたりする場面がある。その中で大切だと学んだことは、事実確認をするために周りにいた児童や関わっている児童一人一人に聞いたうえで、児童の考えや思いを理解することである。そして、何がいけなかったのかを自分たちで考えさせて反省すること、謝る素直さにも気づかせて児童同士の関係も築いていきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、様々な講師の方から貴重なお話を聴き、教師になるうえで大切なことを学んだ。グループディスカッションや集団討論では、同じ夢を目指す仲間の様々な視点や考え方を知り、新たな学びを発見することができた。

その中で最も印象に残っているのは、第７回の「小学校における外国語活動」である。私は、小学校の頃から今まで英語が苦手で、外国語の授業を行うことに不安があった。この講座を通して教師の授業の工夫によって児童の苦手意識がなくなるということが分かった。「子どもの興味を引き出す授業を作る」ということだ。授業の中でゲームを取り入れることで、児童が楽しく興味がもてるような授業を行っていく。ゲーム感覚で行うことで勉強の苦手意識を改善していき、勉強が苦手な人でも授業に積極的に参加したくなるように児童の興味を引き出していく。興味を引き出す授業を行い、児童が誰１人の取り残されない授業を実践していきたい。また、「人は褒められた方向にのびていく」という言葉が心に残った。児童のいいところにたくさん気づいてさまざまな方向から褒めることで児童自身が向上していくような成長の仕方ができるようにしていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 身に付けた力→気づく力

私は、児童理解のために児童とたくさん関わることで、児童の変化や成長に気づくことができた。そして、その変化に気づいて児童に寄り添った声かけを行ったり、児童の良さやできるようになったことを褒めながら伝えたりすることで、一緒に喜ぶことができた。また、先生の児童への関わり方を観察することで関わり方の工夫に気づいたり、担任の先生の行動を先読みしたりして行動することが出来た。

(2) 成長したこと→児童理解を生かした児童との関わり方

児童理解をしっかり行なった上で、それぞれの児童にどのような支援が必要か考えて実践することができた。発表が苦手な児童へ机間指導で声掛けをして、児童が発表したいと思えるよう工夫ができた。最後には、児童が「先生のおかげで発表ができた。この意見いいねと褒めてくれたのが嬉しかった」と児童が一歩踏み出すために背中を押してあげることができた。児童の成長と共に自分も教員として成長できるということを感じた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私は「夢・未来」講座や教育実践演習を通して、児童と一緒に成長したり、一緒に喜べたりする教師の仕事により一層京都府の教員になりたいという想いが強くなった。児童との関わりや授業だけでなく、年度末や年度初めの仕事について知ることもできた。会議やこれからの学級経営をどうしていくか考える教師の裏の仕事の大切さも学ぶことができた。児童一人一人を理解して、児童の変化に気づき、児童に寄り添う教員になっていく。

(2) 今後の課題

授業力の中で、児童のつぶやきを拾って児童の意見から学びを広げることについて課題が残った。児童の大切な気づきを見逃さないように広い視野と聞く耳を持って授業に臨んでいきたい。教師力養成講座で身につけた、「気づく力」と「児童理解を生かした児童との関わり方」を生かしながら、自身の授業力向上のために学ぶ姿勢を持ち続けていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の考えを引き出す発問の工夫」

受講生氏名：赤松　佑唯

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1)　演習テーマの設定理由

児童主体の授業を行うには、児童の意見が必要であり、それを引き出す教師の発問が重要であると考えた。分かりやすく、考えやすいような発問はどのようなものなのか、正解を求めすぎない発問の仕方はどうすればいいのか、考えを深める・広げるにはどうしたらいいのかなど、児童中心となった授業が展開したいと思ったからである。

また、児童が「考えたい！」「知りたい！」「分かりたい！」と意欲的に授業に向かい、「勉強は楽しい」と思わせることができるような発問の工夫を追求したいと考え、これを研究テーマに設定した。

(2)　研究方法

ア　配属学級の担任の先生の授業での発問の内容や仕方を観察し、工夫されている点について学ぶ。

イ　体験授業、研究授業を通して実践し、児童の反応を見る。

ウ　体験授業、研究授業の振り返りで児童の考えを引き出せていたか振り返る。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1)　演習テーマに関わる実践内容

前半は４年生、後半は２年生に入らせていただいた。それぞれの担任の先生方がどのような発問をしているのかに注目し、それに児童はどのような反応をしているのかを観察した。

体験授業２回、研究授業１回の授業実践では、学年に合わせて発問内容や言い回しに気をつけることや発問を黒板にも提示するなどして視覚でも情報を得られるようにすることを実践した。また、発問が全体に伝わるように、発問に至るまでの授業の雰囲気作りも大切にした。日頃から児童たちとコミュニケーションをとることで、授業に意欲的になれるような関係性を作ることにも意識して取り組んだ。

(2)　演習校で学んだこと

ア　補助発問の大切さ

主発問で大まかに内容を捉えるために児童に問うが、その児童の答えに対して、「なぜそう思ったの？」「それはどういうこと？」と補助発問を噛み砕いて行うことで、より深く詳しく児童の意見を引き出せるのだと学ぶことができ、主発問だけでなく、補助発問の大切さにも気がつくことができた。

イ　児童との信頼関係

入らせていただいた学級のどちらも児童と担任の先生との関係がよく、だからこそ授業でも意欲的に参加する児童が多いのだと感じた。この先生ならしっかり話を聞いてくれそうという安心感を与えることで、間違いを恐れることなく、児童が自由に発言できるのだと感じることができた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、大学では学べない、京都府の教育についてや、京都府の教員に必要な資質・能力についてなど、様々な角度から、今後に生かしていけるような大切なことをたくさん学ぶことができた。

特に印象に残っている講義としては、第８回の「特別の教科道徳」の講義である。私の演習テーマである発問の仕方や補助発問の有効性についてであったり、発問した後、返ってきた児童の反応の対応や広げ方についてであったり、大いに学ぶことができた。実際に模擬授業のような形で授業を受けてみて、ここまで意見を広げることができるのだと驚いた。私自身、発問に対する答えを考えがちで、その考えを求めてしまうような癖があったのだが、その答えを用意していなくても、考えを引き出すことができるのだと実感することができた。

他の講座でも、グループ活動が多数あり、同じ仲間と意見を交流することができ、今後の教育観を固めていくきっかけにもすることができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

体験授業と研究授業を通して、授業の作り方や、進め方を身につけることができたと感じている。また、先生方にアドバイスをいただき、どうすれば児童をひきつけることができ、意見を引き出せるのかについて学ぶことができた。ただ教科書の内容を順番に進めるだけでなく、自分らしさや児童にあわせた展開の仕方や発問の仕方がとても重要であり、それが、児童にとっての意欲にもつながると実感した。実践してみることで、そういった授業力を身につけることができたと感じている。

(2) コミュニケーション能力

担当の学年だけでなく、他学年との交流も積極的に行ったことで、コミュニケーション能力の成長につながった。低学年と高学年では、話し方やスピード、内容の伝え方を変えるということの重要性も学ぶことができた。話し方に柔らかさがあると、児童も心を開きやすいということに気づき、実践し、自分なりの児童とのコミュニケーションの取り方を身につけることができたと感じている。

先生方とのコミュニケーションも積極的に取れるよう努力した。話を重ねるごとに、お互いに緊張がとれ、児童の実態の把握や先生との教育に対する考え方の共有など、講義だけでは学べないことも学ぶことができた。４ヶ月の間に自分から積極的に話しかけるというコミュニケーション能力が身についたと実感している。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、京都府で教員をしたいという思いがより一層強くなった。演習校の先生方や「夢・未来」講座をしてくださった講師の先生方は教育に対して素敵な考えを持っておられる先生ばかりで、私もそのような先生方と一緒に教員として働きたいと強く感じた。自分自身の教育に対する考えをしっかりと持ち、教職に取り組んでいきたい。

(2) 今後の課題

体験授業や研究授業でICTの活用をすることができなかった。タブレットやテレビモニターを使うことで、児童の学びに対する意欲や学びの充実を図ることができるのは間違いない。今後は、ICTを１つの手段として、積極的に取り入れていくことが課題であると考える。そのためには、まずは、自分がICTの可能性について学ばなければいけない。有効的にICTを活用し、自分らしさを忘れずに授業展開できるようにしたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の発言を生かす授業づくり」

受講生氏名：坂根　日那子

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習で授業を行う中で、児童が発言する機会が少ないという課題が挙げられた。教師が一方的に教える授業では、児童の学習意欲を高めることはできない。児童がより主体的に、意欲をもって学習に取り組めるような授業を展開していくためには、児童の発言を生かしていくことが必要である。そこで、授業の中でどのように児童の発言を引き出し、取り入れていけばよいのかを学びたいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　担任の先生の授業において発問や声かけを観察する。

イ　担任の先生の発問や声掛けに対する児童の反応や表情を観察する。

ウ　授業実践を通して、自分の授業について考察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマにかかわる実践内容

前期には第２学年、後期には第５学年の学級に入らせていただいた。それぞれの学級で担任の先生だけでなく他の学級の先生の授業、養成講座生の授業を見学し、先生の発問や声掛けとそれに対する児童の反応を観察した。授業中だけでなく、休み時間等の児童の様子も観察し、児童理解に努めた。そして、それらを生かして授業実践を行い、自分の授業の考察や先生方からの助言をもとに改善点を明確にし、授業改善に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業について

児童の発言を生かす授業づくりの工夫として、二つのことを学んだ。一つ目は、児童が発言しやすい環境を作ることである。全体で意見を交流するときには事前にペアワークやグループワークを取り入れ、自分の意見に自信を持たせることが必要である。二つ目は、一対一にならないための工夫である。児童の考えに対して同じ考えを持つ他の児童に、なぜそう思ったのか発言させたり、具体的な例を挙げさせたりすることで、より多くの児童の発言を生かした授業を展開できるよう意識した。今後も、児童が発言しやすい環境づくりや、児童の意見を広げ、深められる授業を展開できるようにしていきたい。

イ　児童理解について

児童の発言を生かすためには、十分な児童理解をもとに授業づくりを行うことが重要であるということを学んだ。前期の授業実践では、道徳科の同じ教材の授業を２つの学級で行った。１回目は、自分が入らせていただいている学級での授業だったため、発言をよくする児童や支援を必要とする児童について十分把握し、個別支援を行うことができた。しかし、２回目は、異なる学級での授業であったため、児童とかかわる時間が不十分であり、机間指導の際に支援を必要としている児童を把握できておらず、困惑する場面があった。日々の児童との関わりの時間を大切にし、児童理解を十分にしたうえで授業づくりを行い、適切な指導や支援ができるようにしていきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員に必要な資質・能力や、実践に生かすことができる知識・技能を学ぶことができた。また、同じ京都府の教員を目指す学生と校種をまたいで交流することで、新たな視点や考え方にも触れることができた。「夢・未来」講座での学びによって、演習校での実践をより学びの深いものにすることができた。

その中でも、最も印象に残っているのは、第８回の道徳に関する講座である。道徳科では正解がないため自分の意見を発言することをためらうことがある。そのため、だれもが発言しやすい雰囲気を作ることが大切だと学んだ。導入の初めの発問をだれでも答えやすい簡単なものに設定する、質問や発問する際も児童の前に立っているだけでなく児童の中に入っていき、近づいていくなどの工夫をしていくことで、意見を言いやすい雰囲気づくりをし、多様な意見が飛び交う授業を展開していけるようにしたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業について

多くの先生や養成講座生の授業を観察したことで、様々な授業の工夫について学ぶことができた。前期の道徳科の授業では、１回目の反省を生かして２回目の際はペアワークを取り入れたり、発問を変えたりして、授業がよりよくなるよう改善することができた。また、児童の意見に対してそう考えた理由や具体例を聞くなどして児童の考えを深め、授業に生かせるように意識することができた。後期では、外国語科の授業を行い、児童が楽しく学習に取り組めるよう、動作を取り入れたり、ゲームの中でも難易度を変化させたりするなどの工夫をすることができた。英語科は、自分自身の専門教科であるため、児童に身につけさせたい力や理想とする姿を具体的に想像しながら授業づくりをすることができた。これからは､英語に限らず他の教科に関しても教科特有の見方考え方について学びを深め、授業づくりができるようにしたい。

(2) 児童理解について

前期の授業実践で児童理解の重要性を強く実感したため、後期の演習では前期以上に十分な児童理解ができるよう行動し、自分の授業に生かすことができた。担任の先生の授業を見学させていただいているときにも、積極的に児童の考えを観察し、声掛けや机間指導を行った。また、宿題提出のチェックや丸付けを行うことで、児童が得意とする教科や苦手とする教科について知ることができた。今後は、日々の様子からだけでなく、児童の提出物もしっかりと観察し、授業づくりに生かしていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、授業づくりの工夫や学級経営について学び、児童理解の重要性を改めて感じることができた。そして、児童のかけがえのない一日にかかわることができるという教員という仕事の魅力を改めて感じることができた。自分自身は教員として未熟な部分が多くあるが､今後も学生ボランティアを続け､教師力の向上に努めていきたい。

(2) 今後の課題

今回の演習を通して、授業力に課題があると感じた。児童の発言を生かすことをテーマとして演習を行ってきたが、まだ教師の説明が多くなり、児童の発言の機会を減らしているという部分があった。今後は、児童の発言に対する切り返しの質問の質を上げ、児童の考えが深まるようにしたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「取り残されない、実りある全員参加型授業」

受講生氏名：徳永　朋大

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習や学生ボランティアを経験する中で、集団授業でのスピードと自身の学習スピードが合わず授業内で取り残されてしまう児童が一定数いるということを感じた。私が教員になった際、そうした児童が取り残されることなく、かつ全員が主体的に学習に参加できる授業を実践したいと思い、本演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業における個別支援の方法と、それを受けた児童の様子を観察する。

イ　授業における全員参加型授業の工夫を観察する。

ウ　授業実践を通して、自身の授業を省察し、よりよい授業を追求する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習では６年生、後期の演習では２年生の学級で演習をさせていただき、授業観察と授業実践を行った。

授業観察では､個別支援を行うタイミングや行う際のポイントに注目して観察を行った。また、学年や児童の実態に応じた指示の仕方についても観察を行った。加えて、全員参加の授業を展開するための発問や活動に注目し観察を行った。

授業実践では、授業観察での学びや指導教官からいただいた助言をもとに､「取り残されない授業」と「全員参加型授業」の二観点を意識した授業づくりと実践を行った。その後、自身の授業を省察し改善に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

授業観察では以下のことを学んだ。個別支援の工夫として、６年生では、ICTのクラウド機能を活用して支援を必要とする児童を素早く把握すること、一つの活動に一つの事柄のみを説明する「一時一事」で指示が明確に伝わることを学んだ。また、２年生では、擬音を用いて表現すること、机の上を整理するように指示することで注意力散漫が防げるということを学んだ。全員参加型授業の工夫として、６年生では、ものの大きさを表現する際にみんなで体を使い表現することで、誰でも興味・関心を持って取り組めると学んだ。２年生では､「やりたい」を強く引き出す導入が実りある45分授業を行う上で大切だと学んだ。

授業実践ではこれらの学びを踏まえ、以下のことを実践し多くの学びを得た。６年生では､ICTのクラウド機能を活用して､意見が書けていない児童に素早く気づくことが出来た。しかし、タブレットを見るばかりで児童の表情を捉えることがあまりできなかったため、まずは児童の表情を捉えることをすべきと学んだ。２年生では、教具を用いて児童の「やりたい」を引き出しつつ、なぜこの活動をするのかという趣旨を共有したことで、全ての児童が前向きに学習に取り組めていた。しかし、教具の数が少なく取り合いになったり、一人当たりの活動時間が短くなったりしたため、活動に応じて教具の数を調整する必要があると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

本演習テーマとの関連性が高く、特に印象的であった２つの講座について記述する。

(1) 小学校における児童理解と学級経営

学級経営の充実を図るには、児童理解が大切である。そして、児童理解のためには教師と児童とのつながりだけでなく、児童同士のつながり、教師と保護者のつながりも大切であることを学んだ。こうした多くのつながりが深まることで、児童一人一人の個性や人間関係を把握でき、本演習テーマの授業実践に生かされると考えた。それぞれのつながりを構築するための方法についても多く学ぶことが出来たため、実践していきたい。

(2) 模擬授業

模擬授業を体験する中で、個別支援の方法について学ぶことが出来た。全体で活動の指示をした後、先生が「わからない子は前に来てね」と招集し、活動に取り残されそうになっていた子を多く救っていた。それだけではなく、前に行かなかった子にも机間指導をすることで、誰一人として取り残さない徹底された支援の仕方を学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 子どもに伝える力

演習が始まったころ、私の喋り方には優しさがあるものの、トーンが単調で子どもに伝える力が不足していると感じていた。教員にとって必要な「伝える力」を養うために、演習先の先生方や養成講座生､｢夢･未来｣講座でご講演されていた先生方の話し方を観察し、実践していった。その結果、教壇では大げさに演じること、間を使うこと、子どもの行動や発言の背後にあるものまで理解しようとして、その理解をもとに伝えることなど、あらゆる方法を得ることができた。これからも「伝える力」にさらに磨きをかけていきたい。

(2) つながる力

これまでの教育実習や学生ボランティアでは、児童とのつながりを持つ機会が多かったが、本実習では保護者や先生方と密につながることが出来た。特に保護者とのつながりに関しては、不登校児童の保護者とお話をする機会があり、保護者の思いを聞いたり、楽しくお話をしたりすることが出来た。また、保護者懇談会にも参加する機会があり、保護者に安心してもらうには、どのような表情で、どのような内容を話すべきかについても吸収することが出来た。そういった児童以外とのつながり方を学ぶことが出来たことは、養成講座でしか得られない学びであり大変有意義なものとなった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

養成講座に参加したことで、児童たちとの関わりだけでなく、保護者とお話をしたり、先生方と協力して仕事をしたりする経験を積むことが出来た。これらの経験を通して、教員という職業の難しさと同時にたくさんの魅力を実感することが出来た。今回得た多くの学びを土台として、たくさんのつながりの中で、学び・成長し続ける教員になる決意だ。

(2) 今後の課題

学校生活の中で最も時間を費やすものが授業である。授業力を高めていくために、今後も本演習テーマに沿った授業を追求していく。また、演習の中での課題であった、児童のつぶやきから学習目標を組み立てる授業展開を行っていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「学級で児童一人一人が居場所を感じられる学級づくり」

受講生氏名：鶴丸　優月

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

学校生活の大半を過ごす学級は児童にとって安心できる居場所でなければならない。学級で児童一人一人が安心して過ごすためには、教師の学級経営が肝心になると考える。先生方がどのような考えや工夫を持ち学級経営をされているのか学びたいと思い、本研究を設定した。

(2) 研修方法

ア　授業内や日常生活での学級担任と児童の関わりを観察する。

イ　学級担任の関わりの様子から学んだことを実践する。

ウ　積極的に児童と関わり、一人一人の良さを知り児童理解に努める。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は５年生、後期は４年生の学級で演習を行った。最高学年に向けて学級をまとめる姿や、３年生から４年生になり上級生になった自覚を持たせるような学級開きの様子を観察した。また、授業中や休み時間の様子の他、６年生を送る会、卒業式、入学式、春の遠足などの各行事からも児童とどのように関わっておられるのか観察した。さらに、児童との関わりについて疑問に思ったことを質問し、教えていただいたことを実践することで学びを深めた。積極的に児童と関わり、良さを見つけ伝えることで児童とコミュニケーションをとり、一人一人の児童理解に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業について

教師対発言している児童の一対一になるのではなく、一人の児童から出た意見を全体に共有し、自分事として考えさせることが大切であると学んだ。例えば、道徳の授業では様々な考えを持つのはあたり前のことであり、出てきた意見を「みんなはどう思うか」問いかけ共有することで、自分の考えへと変わり、より深く考えることができる。また、発言した児童も安心することができる。これは、道徳の他でも全員参加型の授業にするために必要なことであると考えるため、どのような授業でも出てきた意見を共有し児童が考える時間をつくっていきたい。

イ　学級づくりについて

児童の良いところを見つけ名前を呼び伝えることで、児童と良いコミュニケーションがとれることを学んだ。学級では、担任が些細なことでも児童の変化に気がつき、それをすぐに児童に伝えている姿を何度も見た。褒められた児童は笑顔になり、担任の周りにはいつも児童が多く集まっていた。変化に気が付くというのは、普段から児童をよく見ていなければ分からないことである為、児童理解が学級づくりに大きく影響していることが分かった。

また、学級開きの際、特別な配慮が必要な児童について、そのほかの児童の理解が得られるように丁寧に伝えておられたことも印象的であり、誰もが安心して過ごせる学級をつくっていくことが大切であると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の目指す教育や教員に求められる資質・能力、今後自分の実践に活かしていきたことを様々な先生方から学ぶことができた。また、集団討論では様々な校種の演習生と交流することで、新たな考えや価値観を得ることができた。

特に印象に残っている講義は、「京都府における人権教育」の講義である。京都府がどのような思いで人権教育に力を注いできたのか学び、それが京都府の教育の基本理念と強く結びついていることが分かった。また、人権教育はあらゆる教育活動の基盤であることを知り、人権問題を取り扱った授業のみが人権教育ではないことを理解することができた。教員として一人一人が安心して過ごせる学校・教室になるよう環境づくりを行っていく。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 様々な活動に参加して

教師力養成講座では、授業の他に「保護者懇親会」「六年生を送る会」「卒業式・入学式」「一日仮担任」「一年生を迎える会」「春の遠足」「様々な職員会議」などに関わらせていただき、イメージをつかむことができた。それぞれの活動にねらい・目的があることや、行事を通して児童の成長を間近で感じることができた。各行事の準備は忙しく大変だったが、先生方・児童が行事成功に向け団結している姿を見ることができ、どのような思いで取り組んでいるのか感じることができた。また、一日仮担任を任せていただく日があり、その日は朝から児童の前に立ち健康観察や朝の会、帰りの会などを経験した。その経験から担任のイメージをしっかり持つことができ、大きな自信に繋がった。

(2) つながる力

演習を通して多くの先生方、児童、保護者、地域の方々、演習生などと関わることができた。初対面の相手と話すことはいつでも緊張するが、明るく笑顔でいることが大切だと学んだ。保護者懇親会では何人かの保護者の方と話す機会があり、その中の参加されていた保護者の方と入学式で再開し、「先生、お久しぶりです！」と声をかけて下さった時は本当にうれしかった。また、年度が替わり、違う学級に配属されてからも、前学級の児童が話に来てくれたり、すれ違っても笑顔であいさつをしてくれたりした。今後も、これまでの出会いやこれからの出会い、つながりを大切に、様々な人々と関わり、多くの人から信頼される教員を目指す。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

京都府「教師力養成講座」を通して、教員になりたいという思いがより強くなった。演習校の先生方、多くの児童、保護者の方々と関わる中で教員として自分の意識が高まっていった。児童が短期間で心身ともに成長する姿に喜びを感じたり、常に児童の為を思い行動したりされている先生方の姿を見て、教職は忙しく大変なことも多いが魅力的な職だと再確認できた。養成講座で学んだ経験を活かし、常に学び続ける姿勢を大切にする。そして、互いを尊重し合い、児童一人一人が居場所を感じられるような学級をつくっていく。

(2) 今後の課題

今後の課題は、授業力を高めることである。授業内での発問の仕方や、机間指導、板書、児童の意見をよく聞くこと、説明を分かりやすく端的にすることなど、課題が山積みである。また、ねらいに沿った授業づくりや、導入の工夫、個々の児童理解なども大切にしなければならない。何より、身近なものを紹介するなどの工夫をし、児童が前向きに楽しく学習に取り組めるような授業づくりを目指したい。今後、ボランティアを通して、先生方の発問の仕方や個別支援の仕方をよく観察し、授業力を向上させていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人が安心して過ごせる学級づくり」

受講生氏名：和泉　穂香

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

このテーマを設定した理由は、これまでに教育実習やスクールサポーターで学習や人間関係などに不安に思っている児童が多いと実感したからである。学級は、児童が学校生活において大半の時間を過ごす場所であり、生活のベースである。そのため、児童一人一人が安心して過ごせる居場所にしたい。そうすることで、児童一人一人の個性のよさ、可能性を伸ばすことができ、児童一人一人の成長につながる。そこで、担任の先生方がどのような関わり方をしているのか、児童一人一人が安心して過ごせる学級づくりのための方策について研究したいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　児童一人一人に対する担任の声掛けや工夫を観察する。

イ　積極的に児童と関わり、児童理解を深める。

ウ　観察で気付いたことを児童との関りや体験授業、研究授業で実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期演習では第２学年、後期演習では第６学年の学級に入らせていただき、学校生活や授業での担任と児童との関わり方の観察を行った。そこで、児童一人一人が安心して過ごせる学級をつくるためには、まずは児童理解が重要であることを学んだ。そのため、休み時間や放課後などに児童の行動や誰とどのような遊びをしているのか、どのような表情をしているのかなどに着目しながら積極的にコミュニケーションを取るよう意識した。また、観察するだけでなく、担任から児童の様子を伺いながら、児童のことを理解した上で児童に適した声掛けや発問の工夫をするなど多くのことを意識して授業実践をした。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学級経営について

学級全体でのルールを全員が共通理解しておくことが重要であることを学んだ。学級開きから「こんな学級にしたい」「こんな学級は嫌だ」ということを一人一人が模造紙に記入し、誰もが嫌な思いをしないようにと徹底されていた。担任がルールを全て決めるのではなく、担任の思いや考えがあり、その範囲内で児童の意見を尊重し、学級全員が納得し決めていることもあった。児童自身が「自分たちで決めたことは自分たちで守っていこう」という思いをもたせ、自主的に活動させるために様々なことを仕組まれていることを学んだ。この仕組みこそが「安心して過ごせる学級づくり」には欠かせないことだと実感した。加えて、日々の指導の徹底ということも重要であることを学んだ。

イ　授業について

児童が安心して過ごすためには､「わかる授業」をすることが重要であることを学んだ。発問はもちろん児童の実態に合わせて具体物やICTを使うことで、具体的なイメージをもちやすくなり、児童にとっても分かりやすくなり、授業が楽しくなる。授業が分かれば、学校も楽しくなり、安心して過すことができる。そのため、児童一人一人が安心して過ごせる学級をつくるためにも、「わかる授業」をしなければならないことを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教員として積極的に取り組んでいきたいことやこれからの教員に求められている資質・能力について学ぶことができた。また、京都府の教員を目指す学生と共に、グループワークや集団討論などで交流することで、自分とは異なった視点の意見を聞くことができ、視野を広げながら考えることができた。

特に、印象に残っている講座は、第８回「特別の教科　道徳」の講義である。道徳は、児童の心を見ることが基本とされており、そのためには、意見を出しやすい雰囲気づくりが重要であると学んだ。また、担任が児童に道徳を教えるだけではなく、教員も豊かな人間性を身につけるために、共に考え、学んでいく重要性を学ぶことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

児童の成長には「児童一人一人が安心して過ごせる学級」があり、その中で、「質の高い授業」をすることが必要である。そのことを意識して授業実践に臨んだ。指導案作成時では、児童の目線に立って考えることはできた。実際の授業では、時間配分がうまくいかなかったり、ねらいとまとめが合わなかったり、児童に何を身につけさせたいのかが明確になっていない授業になってしまった。事後研で、受講生の考えを聞いたり、先生方にアドバイスをいただいたり、授業を重ねるごとに改善することができた。すべての活動に同じ時間をかけるのではなく、中心となる活動に時間をかけることを学んだ。また、児童の考えを揺さぶる発問の重要性も実感することができた。これらの学びを生かして「児童一人一人が安心して過ごせる学級づくり」と共に「授業力」をさらに磨いてきたい。

(2) 気付く力

積極的に児童とコミュニケーションをとることで、児童の変化や成長に気付き声を掛けることができた。児童との関わりを通して、児童の表情、人間関係、学習の姿をよく観察した。観察することで、小さな変化にも気付くことができ、児童の成長を褒めたり、学習で困っている児童に声を掛けたり、元気がない児童に声を掛けたりと、その児童に合った対応をすることができた。また、担任が指導される場面から、児童と目線を合わせることや指導後のフォローも必要であることを学んだ。「児童一人一人が安心して過ごせる学級づくり」には、児童に寄り添っていくことが大切であり、そのためには、児童の小さな変化に気付く力が必要であり、今後経験を積んでさらに高めていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座での演習や講座を通して、教師になりたいという思いがさらに強くなった。授業だけではなく様々な業務に携わり、教師の仕事の多忙さ、責任の大きさを実感した。実践演習では、様々な児童と出会い、たくさんの笑顔を見ることができた。この笑顔を守るためにも、一人一人が安心して過ごせる学級にするためにも毎日元気で、明るく笑顔を欠かさずに過ごし、児童に合った声掛け、指導をすることができる教員になりたい。

(2) 今後の課題

今後の課題は、授業力の向上である。「分かる授業」をするためには、児童の実態把握にあわせた発問や話し方の抑揚が大切である。授業実践では、活動が一定のペースで進んでしまい、振り返りで自分が考えていたことと違う内容になっていることがあった。「分かる授業」にするために、この授業でどのような力を身に付させたいのかを明確にして授業することが課題である。児童が安心して過ごせる学級にするためには「わかる授業」も大切である。身に付けて欲しい力を明確にして、授業力の向上に努めていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「わかりやすく考えやすい発問の工夫」

受講生氏名：服部　翔

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

授業での発問は、児童に主体的・対話的で深い学びをするために行うものである。そのため、教師は発問がよりわかりやすく、考えやすい工夫をする必要がある。これらは意識しないと気付かないことでもある。教師は、授業の中で、児童がより内容について考えられるようにしたり、学ぶ楽しさを引き出したりすることが求められる。その中でも、最も重要なのは発問であると考えこのテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　担任の授業や発問の方法等を観察する。

イ　発問を受けた子どもたちの反応等を観察する。

ウ　観察の中で気付いたことを児童と関わることや体験授業、研究授業で実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期では第５学年、後期では第４学年に入り、授業中に先生方がどのような発問をしているのかを観察した。また、発問を通して、児童がどのような反応をしているのかを観察した。そこから、より分かりやすく考えやすい発問の工夫について模索した。授業実践では、児童の興味を引く問いかけや発問ができるように意識した。また、児童がどのような反応であったのかを事後研究で考察を行った。

(2) 演習校で学んだこと

児童が理解しやすく考えやすい発問として、３つのことを学んだ。まず、１つ目は「具体的である」ことである。「このことについてどう思いますか。」という発問を行った時、児童の反応はあまりよくなかった。実際、先生方が行っている発問に着目すると、「この部分は教科書ではどのように書いていますか。」や「この川の特徴について考えましょう。」といった具体的な発問を行われていた。ここから、発問は抽象的なもので行うのではなく、より具体的に考えやすいような発問が必要である。

２つ目は、「端的である」ということである。先生が行った発問の１つで少し長文の発問があった。複数の解答を求められているものだったため、児童は混乱していた。その後、先生は発問を分けたところ、児童はしっかりと考えることができた。ここから、発問は１つずつ丁寧に分けた端的なものがより分かりやすくなっていると考えた。

３つ目は「１回で理解させる」ということである。授業実践を行った時、発問を１回のみしてから、机間指導を行った。そこで発問は何だったのかと数人に問われ、再度発問を繰り返したことがあった。ここから、１回できちんと伝える必要があると考えた。大きな声で抑揚のついた話し方で学級の全員に伝える必要がある。また、学級を見まわし、全員が聞く態勢になっているかなどを確認することも大切である。学級の様子をしっかりと見て、本当に全員に伝わっているのかを確認し、「1回で理解させる」ことが必要である。

分かりやすく考えやすい発問の工夫として「具体的で」「端的に」「１回で理解させる」という３つのことを意識して実践していきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、学習指導要領や道徳教育、学級経営等幅広い内容について学び、教員になる上で必要な知識を身に付けるとともに、演習生との意見交流で自分自身の見識を深めることができた。特に印象的だった内容は２つある。１つ目は学級経営である。第３回「学び続ける教員のへのメッセージ講演会」での言葉が印象強く残っている。ここでは「一人一人の児童を主語にする学校をつくる」というものであった。この信念は学級経営に大きく影響があると考えた。児童に制度を合わせるのではなく、制度を児童に合わせる考えが学級をよりよいものにしていくと学んだ。児童自身に選択できるような環境づくり、学級づくりを目指していくことを学んだ。２つ目は個別最適な学びである。「夢・未来」講座を受けるまでは､机間指導を行うことや個別に対応するとこといった知識のみしかなかった｡しかし、「指導の個別化」と「学習の個性化」の２つの個別最適な学びが存在することを知った。教師をメインに置くのか、児童をメインに置くのかを明確にして個別最適な学びがあることを学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座で教師という職業について知り、より教師という職業の面白さと難しさを知った。「夢・未来」講座では、自分の知らなかった教師という職業について知ることができた。学習指導要領や道徳教育、学級経営等幅広い内容は自分の教師へのビジョンが明確になった。

演習校での実践では、発問というテーマから、授業の仕方やコミュニケーションの取り方について学んだ。複数の学級で同じ授業をさせてもらう機会があり、その中で、わかりやすい発問をするためには、授業をする学級の児童の様子をよく理解する必要があることを体感した。他の学級でした発問がわかりやすかったからといって、次もわかりやすいとは限らない。また、授業をする時間によっても、児童の様子によって耳に残る発問が変わってくる。このように、発問に着目しながら実践することを通して、学級経営との関係、児童の反応を常に考えながら授業をすることの重要性を学んだ。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座で得た知識や経験は、今後教師として働いていく上でとても大きな学びとなった。教師力養成講座に参加したことで得た知識や経験を惜しみなく発揮していき、教育に精進していきたい。テーマに設定した「わかりやすく考えやすい発問の工夫」は授業を行う上で大切なものになってくるので、教師という職業についた時も意識していこうと考える。

(2) 今後の課題

今後の課題は授業力の向上である。その中でも、今回のテーマであるわかりやすく考えやすい発問の工夫を重視する。教師になると、授業は毎日行われる。もちろん、発問も毎日行うのである。だからこそ、「具体的である」、「端的である」、「１回で理解させる」という３つの観点を大切にし、自分の中のわかりやすく、伝わりやすく、考えやすい発問ができるよう目指していこうと考える。

テーマとした「発問」について、意識的に先生方はどのように発問しているのか、児童に伝わりやすくするにはどのようにしたらよいのかを模索してきた。今後できることはボランティア等で先生方の授業をさらに深く観察したり、児童と触れ合い、児童の考えを理解する機会をつくったりすることである。「わかりやすく考えやすい発問」を追究し、授業力を高められるように常に学び続けていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「学習意欲を引き出す児童との関わり」

受講生氏名：大畑　千裕

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

この演習テーマを設定した主な理由として、自分の経験がある。元々学ぶことの意義がわからず、そのため勉強が好きではなかった。授業で学ぶことの意義や楽しさを感じることができなければ、教員の思いに応えて「がんばろう」という気持ちは生まれない。したがって、児童の学習意欲を引き出し、学校に通うことが「楽しい」、「明日もがんばろう」と感じさせるために、どのように児童と関わっていくのかを研究しようと考えた。

(2) 研究方法

ア　担任の声掛けに着目して、学級担任の授業を参観する。

イ　児童の身近な生活を意識した授業の導入のあり方を考える。

ウ　児童の実態に応じて、教材の難易度や提示の仕方などを工夫する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業観察では、児童の学習意欲を引き出す声掛けと導入のあり方に着目した。担任は、児童のがんばりを認め励ます声掛けを実践されていた。授業実践ではそれを意識し、児童の様子に常に気を配りながら、前向きで明るい声掛けを行った。導入では、身近な生活に関することや自分の経験などを取り入れることで学習の意義を見いださせ、児童のやる気を引き出すようにした。また分かりやすい授業にするために、既習事項を整理し、児童の理解度に合わせて発問を考えたり、教材の難易度や提示のタイミングなどを変えたりした。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学級経営の重要さ

児童の学習意欲や学習に向かう態度は、担任の学級経営のあり方に深く関わっていると学んだ。児童の学習意欲が高い学級は、担任が児童の意見を否定せず、常に傾聴する姿勢をもっていた。また、担任が授業を一方的に進めるのではなく、児童の発言やつぶやきを生かした、児童主体の授業展開となるようにしていた。このことから、学級経営こそが授業の土台であり、児童の学習意欲を左右するのだと学んだ。

イ　視野を広くもつこと

児童の学習意欲を引き出すために、予想される児童の反応をいろいろな方向から考え、児童のつまずきに対する手立てを考えておくことが大切だと学んだ。児童が学習内容を理解できないまま授業を進めると、児童は学習に集中できず、学習意欲が下がる。そのため、教員は教えるという教員としての立場と同時に、自分が児童ならどこでつまずくかという立場をもつことが大切である。広い視野をもち、柔軟な授業展開を行うために、深い教材研究と指導内容の理解、丁寧な児童理解をこれからも心掛けていく。

ウ　資質能力としてのレジリエンス

教育現場の毎日は、多様で変化が激しい。したがって、教員は心身の健康を常に保ち、自己管理を徹底することが重要だと学んだ。心身が健康であれば、自然と仕事へのやる気も高まり、児童に対して前向きな声掛けができるようになる。また、児童と余裕をもって丁寧に接することができ、学習への意欲を高めることができると考える。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教員として必要な知識や資質能力を学ぶことができた。その中で、特に学んだことは２点ある。１つ目は、教育的愛情である。「夢・未来」講座における講師の方々は、それぞれに教育への思いや考えがあり、教育的愛情にあふれていた。そうした愛情は、教員として長年現場に立つなかで涵養されていくものだと考える。今後、児童の信頼や願い、期待に応えていくためにも、児童と積極的に関わり、教員として不易の資質能力の一つである教育的愛情を培っていきたい。２つ目は、具体的な行動として捉えることである。「夢・未来」講座におけるレポートでは、単なる講義の感想ではなく、教員として自分はどのように行動していくかを明確にすることが重要だと学んだ。教育現場では即戦力となることが求められる。即戦力となるために、レポート１つに対しても、常に現場にいる自分の姿を思い描きながら記述するよう、今後もあらゆる場面で自分を磨いていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業づくりの力

これまで授業づくりといえば、教科書や指導書、学習指導要領などを読み込み、それに沿って展開を考えるというものであった。しかし、それだけでは目の前の児童へ指導することは難しい。演習では、指導教員から授業後に児童がどのような力を身に付け、何ができるようになっているかを意識しながら、展開を考えるとよいと助言を受けた。これをきっかけに、目的意識をもって資料を探す等、教材研究をより充実したものにすることができただけでなく、児童の学習意欲を高める授業づくりという点で重要な考え方だと気付くことができた。

(2) 自己を管理し調整する力

「教員は体力勝負」という言葉があるが、演習ではまさにその通りだった。体力面はもちろん、将来を担う児童を育てるという強い責任と使命で、精神的にも大変な仕事だと実感した。したがって、日頃から心身の健康管理に努め、児童の学習のやる気を引き出すために、自分から授業に向かって前向きに臨むことができた。また、現場では、多様かつ多量の業務をやり切らなければならない。適切な時間配分をもって、先を見通して行動する力も身に付けることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

演習の中で、担任のある言葉「大変なこともあるけれど、児童の思いに応えて努力を続けていれば、必ずその成果が返ってくる仕事だから。」が印象に残っている。児童の思いは様々であるが、「知りたい」、「わかりたい」という学ぶことへの思いは人一倍もっていると考える。教員はその児童の思いに応えることが義務であり、使命である。そのために、常に学び続ける教員として、地道に努力を積み重ね、自己の研鑽に励んでいく。

(2) 今後の課題

主な課題は学習指導である。学習指導の中でも、ICT活用の基礎的な知識や技能がまだまだ足りないと考える。京都府は「教育環境日本一プロジェクト」の一環として、ICTを新しい時代の必須アイテムと位置づけ、積極的に活用している。ICTを活用することで、より広い視点から児童の学習意欲を引き出す授業を構想することができると考える。研修等を活用しながら、効果的なICTの運用スキルを身に付けるようにする。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童が安心・安全に過ごせる学級づくり」

受講生氏名：入江　優香

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

児童にとって学級は学校生活の大半を過ごす場所である。そのため、学級はどの児童にとっても居心地のよい場所だと感じることが大切だと考える。学級の雰囲気は授業にも影響する。互いに個性や能力を認め合い、「失敗しても大丈夫」という安心感があることで、自分の意見が言いやすくなる。この安心感が児童の主体性にもつながると考える。

そこで、児童一人一人を大切にし、個性や能力を最大限に伸ばすために、誰もが安心・安全に過ごせる学級づくりが大切だと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　休み時間や授業中における担任の児童への関わり方を観察

イ　担任への聞き取り

ウ　学びの実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習全体を通して、担任の先生をはじめたくさんの先生方の児童に対する声掛けの仕方を観察した。年度初めには、学級開きの様子も見させていただいた。先生方のご指導で気になったことは積極的に質問をし、自分自身も日々の児童とのコミュニケーションを大切にすることで、児童理解に努めた。「じぶんのよいところ」が主題である道徳の授業を実践した際に、児童同士がお互いのよいところを見付け、伝え合う活動を取り入れた。児童に、自分や他の人のよいところを大切にしてほしいことを伝えることができた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学級経営において

児童一人一人のよいところや頑張りを認め、すぐに伝えることの大切さを学んだ。小さなことであっても、本人に伝えることで、自己肯定感が高まり、認めてくれる先生がいることが分かると安心することができる。また、教員が伝えるだけでなく、児童同士でよいところを見付け合い、帰りの会などで全体に伝えることをされていた。一人一人に違った個性や能力があり、互いに尊重し合うことで、安心・安全な学級がつくられていくことを学んだ。学級は担任と児童が一体となってつくり上げていくことを実感した。

年度初めには、学級開きの様子を見させていただいた。どんな学級にしたいか、どんな人になってほしいかを、学級開きの際にまずは教員から伝えることの大切さを学んだ。

イ　教員の影響力

教員の言葉遣いや態度は児童に大きな影響を与えることを学んだ。児童は教員の言動をよく見ている。学級担任から、同じ児童ばかり叱っていると、周りの児童も「その子にはきつく当たっていいんだ。」となり、その児童がいじめの対象になってしまうという話をしていただいた。全員が安心して過ごせるよう、指導した後は必ずその児童や他の児童に対してのフォローを行うべきだと学んだ。教員が児童一人一人を大切にする姿勢を示すことで、信頼関係が構築され、児童同士でもお互いを大切にし合う学級になる。どんな時であっても、心は常に児童に寄り添い、安心・安全な学級をつくっていきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育振興プランや教員として身に付けておくべき資質・能力、学級経営の方法や児童理解などについて学んだ。様々な専門分野の講師の先生方からお話を聞いたり、教員を目指す演習生同士で話し合ったりすることで、多角的な視点で物事を捉え、自分の考えを深める貴重な経験となった。「夢・未来」講座での学びを基に、今後、京都府の教員としてどのように実践するかを考えることができた。

その中でも第４回の「小学校における児童理解と学級経営」は、演習テーマに特に深く関わる内容であった。学級は、教員が一方的につくり上げることはできない。教員と児童の関わりによってつくるものであることを学んだ。学級経営を行う上で児童理解は最も重要なことであり、日々の児童とのコミュニケーションが大切である。教員として、積極的にコミュニケーションをとり、児童の言葉に耳を傾け、思いを受け止めていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 気付く力

安心・安全に過ごせる学級をつくるには、児童の小さな変化にも気付くことが大切である。そのため、児童一人一人の様子をノートにメモを取ったり、自分から積極的に児童に話しかけたりすることで、日々児童理解に努めた。毎回の演習で続けることにより、少しずつではあるが、児童の小さな変化にも気付けるようになった。例えば、いつもは掃除時間になると、すぐに掃除にとりかかるが、ある日、教室の端から端を行ったり来たりして落ち着きのない児童がいた。様子がおかしいと思い話しかけると、「しんどい」と言っていたため、保健室に連れて行き、対応することができた。日々の児童理解を大切にしていたからこそ、この児童の変化に気付くことができた。

(2) 授業力

授業を実際に行い、自分自身で振り返り、現場の先生方からアドバイスをいただくことを繰り返すことで、多様な指導法について学ぶことができた。児童から出た言葉やつぶやきを大切にし、児童主体の授業にすることを心掛けた。導入部分では、日常生活と関連付けた話をすることで、児童の関心を高めることができた。他の演習生の授業では「自分ならばどうするか」を考えながら参観した。これらの実践から、授業力が身に付いた。今後は自分が学級経営を行い、安心・安全に過ごせる学級をつくり、授業力をさらに高めていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

「教える」以外の教員の仕事もさせていただいたく中で、教員の多忙さを実感した。しかし、それ以上に児童との関わりの中で得られる学びは多く、やりがいを感じた。日々成長する児童の姿を一番近くで見ることができ、自分自身も成長できる小学校教員になりたいという気持ちがより一層強まった。児童と共に学び続け、笑顔あふれる学級、誰もが安心・安全に過ごすことのできる学級をつくる。児童一人一人を大切にし、それぞれの児童に合った指導をすることのできる教員を目指す。

(2) 今後の課題

授業力は成長した点でもあったが、課題も多く見付かった。特に時間配分が課題点である。一つ一つの活動に時間をかけすぎてしまい、一番時間をかけたい中心活動に時間をかけられないことがあった。学級経営と授業は両輪であり、児童の成長には、安心・安全な学級づくりとともに、質の高い授業をすることが必要である。課題である時間配分はもちろん、本時の目標を達成するための活動をしっかりと考え、授業力の向上に努める。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人の成長につながる学級経営」

受講生氏名：荒川　瑠璃亜

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 設定理由

教育実習や教員養成サポートセミナーなどで多くの児童と関わり、学級経営について学んできた。そこで、児童に寄り添った教育の重要性について改めて気付いた。個別最適な学びが求められる今、一人一人の成長を大切にしたいと考えている。実際に学級で個別にどのような指導や支援をされているのか学び、自身の学級経営に生かしたいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

学級の様子を観察し､気付いたことを詳細に記録し､自分なりに原因や効果を分析する。また、疑問に思ったことは担任の先生に確認する。そして、指導や支援に対する児童の反応や、その後の変化についても観察し続ける。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

３年生と４年生の学級に入り、一人一人の成長を大切に、学級経営をされているのを学んだ。児童にはどうするべきかを自分で考えさせるような声掛けをし、自立につなげられていた。児童との関係をつくるために会話を楽しんだり、一緒に遊んだりされていた。これらを意識して、休み時間や給食の時間など、授業以外でも積極的に児童と関わった。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学級経営で大切なこと

発達段階に合わせた学級経営を大切にされていた。発達段階が異なれば、関わり方も変える必要がある。学年ごとに、関係を築く方法を知ることができた。例えば３年生の学級では、活動の前に「先生からのミッション」のように、児童の意欲を高めるような遊び心のある言葉選びをされていた。学年によって興味のあるものや理解度は変わることを意識して、関わるとよいことが分かった。また、学級開きの様子を観察する中で、一つ一つの行動を丁寧にすることが大切だと学んだ。例えば、児童が友達の筆箱を落としてしまったとき、筆箱を落とされた児童が拾おうとしたところ、先生は「落とした人が拾いましょう。」と声掛けをされていた。また、ノートを忘れた児童に代わりの紙を渡すとき、「何と言いますか。」と聞いてお礼をするよう伝えていた。このように、自分がしてしまったことは自分で責任をとる、お礼をするなど、人としての振る舞いを丁寧に指導することが児童一人一人の成長につながると考えた。

イ　諦めずに向き合い続けること

教員はコミュニケーションを大切にしなければならない。学級では場面緘黙の児童と出会った。そのような児童から気持ちを聞き出すことはとても難しく、試行錯誤して関わった。毎日声をかけ、「はい」か「いいえ」で答えられる質問をすることで、児童から話しかけてくれるようになった。信頼関係を築くことはもちろん、答えやすい質問を重ねることがよいと気付いた。一人一人の成長のために、どんな児童にも諦めずに向き合い続ける。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座は、演習校でよりよい教育をするためのヒントを与えてくれるものだった。例えば、学級経営において最も懸念しているのは学級崩壊である。これらは、児童がつくりだすものだと思っていた。しかし、担任が児童に対してぶれた接し方をすることで学級崩壊に陥ることがあると知った。実際に演習校で児童と関わるとき、教員として自分の軸をもち、一貫性のある関わりを意識することで、児童にもよい変化が見られた。このように、講義での学びを演習で実践することができた。

また、他の受講生と交流する機会もあり、多角的な視点で考え、学びを深めることができた。特に、教師の視点と児童の視点からテーマについて考えて比較することで、児童にとってよりよいと考える支援と指導を明らかにした。そして、交流した話題について振り返り、演習校で実践した。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童理解を授業に活かす力

これまでは、発問に関して児童の予想外の反応にも対応することが課題であった。児童の意見が活発になる発問を工夫したが、意見が出るほど授業の内容から逸れていく場面があった。授業の目的や大切にしたいことを明確にすることで、授業の軌道修正をした。また、その学級の児童一人一人を理解することにより、つまずきを予想することができ、どのような指導や支援をするのか、具体的に準備した。学級経営と授業のつながりを意識して、児童がよりよい学びができるよう努めた。

(2) 気付く力

連日にわたり一日を通して学べたため、児童の小さな変化に気付くことができた。また、授業だけでなく、休み時間や給食の時間、宿題の様子からも見られる成長や異変に気付く努力をした。成長に関しては本人に伝え、自信につなげられるようにした。異変に関しては、その背景に問題がある可能性を考え、担任の先生に相談して、事前に防ぎ、深刻化しないようにした。このように、細やかなことに意識を向けることで、新たな気付きにつなげた。この気付く力を生かして、児童の困り感を未然に防ぎ、一人一人の成長につなげることを目指す。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

児童にとって教員の存在は大きく、人生に影響する。また、児童一人一人に個性があり、効果的な支援も様々である。具体的に実践を見て学んだ経験を生かし、児童と真剣に向き合い、それぞれのよさを最大限に伸ばす努力をする。そのために、日頃から児童をよく見て小さな変化にも気付き、褒めたり問題を未然に防いだりする。児童一人一人の成長に関わることに誇りと責任感をもって、児童と成長し続ける教員になる。

(2) 今後の課題

今後の課題は、特別な支援を要する児童への理解と指導力である。通常学級にも、特別な配慮を必要とする児童が在籍する。そのような児童に対して適切な指導や必要な支援をすることが課題として明らかになった。今後、実践を通して学んでいくため、ボランティア等に参加したい。その中で、担任がそのような児童とどのように関わっているかを観察したり、実践を聞いたりしながら学び、一人一人の理解はもちろん、児童との関係を築くことから始める。実際に担任をした時には、児童一人一人の成長につなげる学級をつくる必要があり、児童にとって適切な指導を明らかにして、実践するよう心掛ける。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「一人ひとりの自己肯定感を高める授業づくりと学級経営」

受講生氏名：田中　杏実

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

自己肯定感を高めることは、主体的に行動すること、他者を認め尊重すること、コミュニケーション能力が高まること、挑戦することなど様々なことにつながり、社会に出たときにとても大きな力になると考える。そのため私の理想とする教員像は、児童の自己肯定感を高めることができる教員である。教員になったときに小学校でどのように児童の自己肯定感を高めていくのかを研究したいと思い、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　先生が児童にどのような指導をしているのかを観察する。

イ　いろいろな先生方の授業を見て、児童が「できた」「わかった」「もっと知りたい」となるような授業はどのようなものなのかについて考える。

ウ　観察して、自己肯定感を高めることにつながると感じたものを実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマにかかわる実践内容

前期は第６学年、後期は第１学年で演習をさせていただいた。授業では、児童がたくさん意見を言える機会を作り、一人ひとりが活躍できるようにした。普段の様子をしっかりと観察したり、積極的にかかわったりすることで、児童の個性や良さに気づき、声をかけることが出来るように努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童へのほめ方の工夫

ほめ方を工夫することで効果がすごく変わるということを学んだ。ただ「すごいね」とほめるのではなく、どんなところがどのようにすごいのかというように、具体的にほめることで､児童が認めてもらえていると感じることにつながるということが分かった。また､適切なタイミングでほめることもより効果的であるということを感じた｡例えば、児童を個別にほめるのではなく、全体で共有することで、自己有用感を身に付けることや、ほかの児童にも行動を促すことができるということが分かった。

イ　一人一人が活躍できる授業

一人一人が活躍できる授業を展開することで、児童が主体的に学ぶことにつながるということを学んだ。算数の授業を参観させていただいた際に、同じ問題に対して３つの手立てを用意し、児童に自分で選択させて取り組ませるという活動をされていた。自分で出来そうなものを選択することで、学力の違いにかかわらずみんなが活躍することのできる授業になっていたように感じた。一人一人が活躍できる授業をするためには、児童の実態をしっかりと把握し、それに伴って、工夫や手立てをすることが大切であるということが分かった。

ウ　チーム学校の大切さ

演習を通して、様々な会議や打ち合わせに参加させていただく機会があり、その中でチーム学校の大切さについて学ぶことができた。立場や年齢に関わらず、すべての教職員の方々が意見を出し合い、話し合われている様子が多く見られた。そうすることで、視野が大きく広がり、より良いものに繋がったり、児童を学校全体で見守っていく体制を作ったりすることに繋がるということを感じた。また、行事などでは細かな情報共有や得意とすることを互いに分担し合うことで仕事の負担を減らし、効率よく業務を進めることが出来ているということも学んだ。そのためには、コミュニケーションをとり、教員間の信頼関係を築くことも大切であると分かった。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員としての基礎となる知識と、学び続ける事の大切さについて学ぶことが出来た。特に印象に残っている講義は、第７回の「小学校における外国語教育」の講義である。この講義を受けて、メタ認知をすることを大切にしていきたいと思った。自分自身をメタ認知することで、自分自身に足りないものや良さについて知り、自分自身をアップさせることに繋げていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童との関わり方

演習を通して、児童との関わり方が成長したと感じた。前期では、第６学年と関わった。６年生は積極的に関わってくる児童が少なかったため、自分から積極的に話しかけることや、自己開示をすることや、休み時間には一緒になって遊ぶことを大切にすることで児童との信頼関係を作ることができた。後期では、第１学年と関わった。６年生とは違い、積極的に関わってくれる児童が多く、甘えてくる児童もたくさんいた。児童と先生という関係を作るために、抱っこやおんぶを求めてくる児童に対して、「みんなの先生だよ」「お母さんやお父さんとは違うよ」というような声掛けをすることを大切にして、児童と先生としての関係づくりをすることができた。

(2) 協働する力

教師力養成講座を通して、他者と協働する力を身に付けた。授業準備の際に、指導教員の先生だけでなく、その教科が得意な先生に話を聞いたり、いろいろな先生の意見を聞いたりすることで、より良い授業を作ることができた。また、同じ養成講座生同士で仕事を分担して効率よく仕事をすることや、互いの授業を見てお互いに意見を言い合うことで成長することができ、協働する力が身に付いたと感じた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座での演習や講座を通して、教師という仕事の魅力をたくさん感じることができ、教師になりたいという思いがより強くなった。児童一人ひとりのことをよく知り、良いところをほめたり、コミュニケーションをしっかり取ったりすることで、私が行った授業で児童が自信をもって発言してくれるようになった。児童に愛をもって接し、信頼関係を築くことで、児童の自己肯定感を高めることができる教師になりたい。

(2) 今後の課題

今後の課題として、どの児童も「楽しい」「わかる」という授業を作るということがあげられる。演習での授業では、クラスの数人が授業に途中で飽きてしまったり、ほかのことをしてしまったりする様子が何度かあった。みんなが理解しやすいような発問をすることや、授業の山場をしっかりと設定しておくことを意識して授業づくりに励んでいきたい。そのために、今後は、ボランティアを通して、たくさんの先生の授業を観察したり、実践をしたりすることで授業力を高めていきたい。

第 16 期「教師力演習講座」を終えて
「児童の自己肯定感と主体性を育む授業づくり及び学級経営」

受講生氏名：中西　千笑

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定の理由

子どもの成長には、心の土台となる「自己肯定感」をしっかりと持っていることが重要であり、幸せに生きていくうえで欠かすことのできない要素である。その自己肯定感を育むためには主体性が必要であり、主体性を育むためには自己肯定感を育むことが重要であると考える。つまり、この２つはセットであり、切り離すことが出来ないものである。また、自己肯定感と主体性を育むことは子ども達の人間関係を円滑にし、人生の中で困難な状況に直面した時にも諦めないで乗り越えていくための基盤を作ることにも

なる。授業や学校生活の中で子ども達の自己肯定感と主体性を育ませたいという思いからこの研究テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業中の担任の発問や声掛け等に対する児童の反応を観察する。

イ　授業外での担任の指導や子どもとの接し方を観察する。

ウ　体験・研究授業の実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

毎日１人１回以上会話するとともに、先生に特定の児童への支援方法を共有してもらい、児童理解に努めた。また、授業中における先生方の発問や指示の仕方、生徒指導の様子、それらに対する児童の反応をメモに残した。そのうえで体験授業をさせて頂き、体験授業を通して自分の課題を見つけ、さらに先生方の授業から学ぶということを繰り返した。授業中には、できた人から丸つけを行う時に、丸をしながら一人一人に声をかけたり、解けた時に一緒に喜んだりして達成感を味わわせるようにするなど、自己肯定感を育む工夫をした。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業について

子ども達の自己肯定感を育む為には、「わかった」「やればできる」と思えるような分かりやすい授業をすることが大切であると実感した。全員にわかる授業をする為には、支援を必要とする子どもに焦点を当てて授業づくりをすることが良いと教えて頂いた。また、分かりやすい授業づくりとして、算数の割り算の授業では、ただやり方を教えて「やってみよう」とするのではなく、答えに導くための手立てを示すことが大事であると教えて頂いた。そして、子ども達が主体的に動き、それによって得た達成感はどんな体験よりも学習効果が高いと学んだ。

イ　学級経営について

実践演習前までは、教師が子どもに寄り添うことこそが大切であると考えていた。しかし、あえて教師が子ども達から一歩引いた状態で見守るという学級経営の在り方があるということを学んだ。寄り添うことのメリットは、子どもと教員の距離が近いということだ。一方で、あえて身を引くことのメリットは、子ども達同士で関係を築かせ、自分達で考えて行動する力を育むことができることで、これは主体性を育むことにつながる。この、あえて教員が身を引くというのは、高学年のクラスになるにつれて見受けられた。子ども達の発達段階や学級の実態などから両者を取り入れた学級経営を目指すことが大切であると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、講師の先生方の講義やグループ協議を通じて、様々な学びを得ることが出来た。特に印象に残っているのは、第４回「小学校における児童理解と学級経営」の講義内容である。この講義で、「学級経営をするうえでこれだけは許さないというものをブレずにもち続ける」「どのように指導したかではなく、どのように届いたかに心を配ること」という言葉を聞いて、子どもへの接し方や指導の仕方が変わった。いじめや人を馬鹿にする行為等を決して許さず、居心地の良い学級づくりを目指すとともに、子ども達の規範意識を育んでいきたいと考えた。また、指導の仕方を反省するのではなく、どのように届いたかに心を配り、真摯に子ども達と向き合っていくことを大切にしていきたいと考えた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座を通して、非常に多くのことを学ぶことが出来たが、私が特に身に付けたと考える力や成長したと考えることは二つある。

一つ目は、児童理解についての考え方である。児童理解は全ての土台となるものであり、日頃の様子を観察し、子どもの行動や発言の背景を考えて汲み取ることが大切であると学んだ。児童理解をするための手段は、毎日一人一人との会話や日記などのやり取りの中で深めることができると分かった。私は、今まで困った子ばかりに目を向けてしまっていたが、一見支援を必要としていなさそうな子ども達の声なき声にも気付いて支援できるようになった。

二つ目は、特別支援についてである。演習では、ADHD/LD、不登校、ネグレクト、発達障がい、自閉症など様々な子どもの実態を目の当たりした。私は最初、支援を必要とする子どもを目の当たりにした時、自分が持っている知識を生かして支援することができなかった。しかし、先生方から子ども一人一人に合った支援方法を教えて頂き、チーム学校で協力して支援していく中で、以前よりも動じず冷静に支援することができるようになった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

子ども達が出来なかったことが出来るようになった時の感動や子ども達の喜ぶ姿にやりがいを感じられるなど、子ども達の成長する姿を身近で感じられることは教師の魅力であると実感した。先生方の実力の凄さ・偉大さを目の当たりにし、私にはまだまだ足りていないことばかりであるが、先生方のように子ども達や保護者、先生方から信頼される教員になりたい。その為にも、教師としての覚悟と責任をもち、学び続ける姿勢を大切にしていくとともに、子ども達と一緒に教員として成長していきたい。

(2) 今後の課題

教師力養成講座では、今までボランティアや大学で学んできたことを活かして取り組むことができた。そのうえで、自分に足りない物は「瞬時の対応力」、特に「言語能力」であると感じた。瞬時の対応力は、生徒指導や授業、保護者対応など様々な場面で生かされるものであり、学校現場において本当に大切な力である。体験授業で、子どもの発言に対して瞬時に言葉が出てこなかったり、分かりやすく説明出来なかったりした為、語彙力を身に付けなければならないと痛感した。今後、色んな人と会話するようにしたり、先生方の対応を見て引き出しを増やしたりするなどして瞬時に対応する力と語彙力を育んでいきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童全員が安心できる学級づくり」

受講生氏名：濵村　奈桜子

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

児童にとって学校というものは、家庭で過ごす時間の次に長く、４月に決まった各学級の教室で学校生活の大半の時間を過ごす場所である。そのため、学級が居心地のよく安心できるものであれば、学校が楽しいと思う児童も増えると考える。

また、学級は、児童が様々なことにチャレンジし、時に失敗を経験しながらも、互いに認め合えることや褒めあうことで、自己肯定感や自己有用感を高めていくことができる場所である。そのため、児童一人一人の能力や力を引き出し、伸ばすための、学級経営はとても重要であると考えた。そこで、担任の先生方がどのような声かけや指導、かかわり方をすることで、児童との信頼関係を築き、児童全員の笑顔があふれ安心して過ごすことができる学級づくりをしているのかについて研究したいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　学級経営における先生の児童に対する声かけやかかわり方を観察する。

イ　授業内での児童に対する先生の指導やフォロー、かかわり方を観察する。

ウ　児童と積極的にかかわり、児童理解を深める。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期と後期では異なった学年で演習させていただいた。その中で、毎日児童一人一人を観察し、必ず一人一回、挨拶やちょっとした話などのコミュニケーションをとるように心がけた。そして、授業中や休み時間の担任の先生の指導方法や褒め方などを観察した。さらに、担任の先生や学年の先生方に児童の様子や気になったこと、困ったことなどを「報告・連絡・相談」することで、一人一人に寄り添いつつも成長させるためにはどのような指導や支援をしていくべきか話し合った。また、学級での児童の様子を観察することで、児童同士のかかわりをとらえ、児童理解が深められるようにした。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学級経営において

児童に対して指導することがある場合、初めから叱るのではなく、児童に対して事実確認や行動の意図など児童の思いや考えを聴くことが大切だと感じた。そのうえで、その行動や言動は本当に正しいことだったのかを考えさせることが大切であると学んだ。そして、児童が失敗してしまった場合でも、正しい方向に向かう姿勢が少しでもあった際は、その瞬間に具体的に褒めることが大切だと学んだ。その際、自分で判断できない際はクラス全体に共有し、正しいことなのか、どうすべきだったのかを考えさせることで、共に学んでいけると学んだ。

イ　授業において

「わかる授業」をすることで、児童が一人一人活躍できる場面があることや、みんなで褒め合うことで、認められていると感じ、安心できる授業になると学んだ。そして、失敗しても教師がフォローしてくれる安心感で、挑戦する意欲も高くなると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府が進める教育から様々な教科の指導方法、生徒指導など、多くの講師の先生方から、教員として必要な資質・能力、知識などを幅広く学ぶことができた。また、京都府の教員を目指す者同士として、グループワークや集団討論を通し、新たな視点や考え方を学ぶことができた。私が特に印象に残っている講座は次の二つである。

一つ目は、「小学校における外国語教育」である。この講義を通して、学級経営は空気感を作ることが大切と学んだ。講師の先生はグループ交流した際の話し合う姿や発表など少しのことでも様子や発言など具体的に褒め、そのことで私たちも楽しい気持ちや発表したいという気持ちになり、安心できる空気感がつくれているなと実感できた。具体的に褒めることはとても大切だと学んだ。

二つ目は、授業実践講座である。私は国語の授業に参加させていただき、分からないことがあった時に質問しやすい環境を作ることが大切だと学んだ。説明した後にできる子は進めて、分からない子は自由に前に出てきてもらい、質問しやすい環境でもう一度かみ砕いて説明することで、より理解が進み、授業にも参加しやすくなると学んだ。前に出る以外にも、教師が机間指導をし「何でも聞いてきて」という姿勢をみせることで、質問しやすい環境を作ることができ、分からない時があっても安心して、授業に参加することができると学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 指導について

演習前よりも、児童がとった行動にその都度、具体的に褒めることや、行動背景や意図を考えながら話を聞き、指導する力をつけることができた。また、授業や学級経営などの指導においても、常に笑顔を大切にし、時に黙って見守ることや表情で語りかけるように意識して指導することができた。さらに、指導する際の声の大小やスピード、抑揚などの大切さに気付くことができた。

(2) 気づく力

児童のことをよく観察し、気になる行動や発言などちょっとしたことにも背景や意図がないか考えながら関わることができ、演習前よりも気付く力を身に付けることができた。そして、担任の先生や学年の先生方と一緒に対応を考えていくことができた。毎日様々な行動をする児童たちに対して、児童一人一人に応じた対応をすることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、授業実践や学級経営だけでなく、児童がいない時間や長期休業中の教師の仕事にたくさん携わらせていただいた。そこで、責任感の大きさや大変さを実感するとともに、子どものことを常に考え、子どもたちを笑顔にしながら働く姿を見た。その姿を見て、とてもやりがいのある仕事だと感じ、私も子どもたちの笑顔あふれる学級をつくりたいという気持ちが強くなった。一人一人の児童に寄り添い、心の声も聞きとることができような、児童と共に成長していく教師でありたい。

(2) 今後の課題

今後の自分自身の課題は、授業力である。決まった授業を45分しっかり教えやり切らなければいけないと思いがちな部分がある。授業を進めることを考え、一定の子だけが分かる授業ではなく、時に立ち止まってやり直すということもしてみて、クラス全員が「わかった」「楽しい」と思えるような授業をしたい。そのためにも、事前の教材研究をしっかりとすることを大切にしたい。そうすることで、授業内での子どもとの信頼関係も築け、安心できる学級へ近付けることができると考えている。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「児童の気づきや学習意欲を引き出す授業づくり」

受講生氏名:大原 さくら

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) テーマ設定理由

授業は児童にとって学び多いものでなければならいない。そのため、教員の一方的な授業では、児童の学習意欲を引き出すことは難しい。今回お世話になった演習校では、先生方が児童の特性や発達段階に合わせて、様々な工夫を施した授業をしていた。また、児童同士や児童と教員との対話を多くしていた。そこで、児童の気づきを引き出すための発問や学習意欲を高めるために、具体物やタブレットを使用した「新たな発見のある授業」が大切だと考え、本演習で学びたいと思い演習テーマに設定した。

(2) 研究方法

演習学級を中心に様々な授業参観を行った。まずは、授業の展開の仕方や発問の工夫、児童への接し方を観察した。そして、その授業の中で児童の目線や発言、活動なども観察し、授業を客観的に見ていった。また、それぞれの先生方から教えて頂いた考えを深める発問や ICT の活用法、児童の特性に応じた授業の工夫を生かし、研究授業において児童の気づきや学習意欲が引き出せるように、児童との対話を意識した授業を行った。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

ア　実践内容

様々な授業から学んだことを生かし、自身の過去の経験や体験から振り返り、気づきを引き出すこと、ペア活動や文章を書くことで一方的な授業を減らし、学習意欲を引き出すという二点に重点を置き、研究授業の指導案を作成した。まず、児童の気づきを引き出すために導入で「嬉しい言葉」について考えさせた。その後、その言葉を言われた背景や気持ちについての三つの発問から気づきを引き出す計画を作成した。最後に、その経験を「どんな時」「どんな言葉」「思ったこと」の三つに分けてメモを書かせるということを行った。

イ　実践からの学び

実践からの学びは、問いかけ方の工夫である。発問の言葉を変えるだけで、児童の反応が変わることを知った。予め発問に対しての反応を考えておくと共に、授業の中で児童の気づきから追発問やイメージがしやすい問いかけをする必要がある。これらの発問をするには、普段から児童をよく観察し、児童の立場に立って客観的に教材研究をしていくことが大切だと学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

先生方の授業を参観して、児童からの発言を見逃さずに、児童の気づきを促していた。授業での発言に対して否定をせず「いい視点だね」など肯定的な声掛けをしたり、授業以外でも積極的に褒める言葉がけをしたりしていた。授業だけでなく、普段の生活の中から気づきを大切にしていくことで、児童の視野が広がり、考えも深まるということを学ぶことができた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座で、京都府の教育や現在、今後行っていこうと取り組んでいることなど、京都府の施策や理念について学びや理解が深まった。その中でも、「特別な教科 道徳」に関する講座が印象に残っている。「心を豊かに育てることで、行動、言葉、表情を変える」と

いうことを学び、道徳教育を行う上では、授業を進めていきながら教師自身も一緒になって共に考え、共に学んでいくことも必要だと学んだ。道徳科に関わらず、どの教科でも楽しいと思える授業づくりをすることで、児童が学びに面白さや楽しさを感じ、自分から新たな発見をする、気づきを広げていける授業づくりを今後もしていきたい。

4　養成講座で身につけた力と成長

(1) 身につけた力

身につけた力は、広い視野を持つという力である。講座の中で他の演習生との交流を通して、様々な意見や考えを聞くことで、広い視野や考えをもって演習校での実習を行えた。また、児童と関わっていく中で表情や言動をよく見ることで、児童の些細な変化に気づくことができた。そのため、以前よりも問題の未然防止や児童の良さや個性に気づき、視野が広がると共に親身に寄り添った指導ができるようになった。また、客観的に授業を見ることができ、より良い授業づくりに繋げることができた。

(2) 成長したこと

成長したことは、コミュニケーション力である。演習当初は、先生方や児童と上手くコミュニケーションが取れずに、距離も遠かった。しかし、演習を行う中でコミュニケーションを取らなければ、信頼関係は築けないということを学んだ。そこから、先生方には放課後に話す機会を頂き、自分から手伝えることを聞くようにした。児童とは、一日を通して学級全員に声をかけ、休み時間などでは積極的に一緒に遊ぶようになった。その結果、以前よりも積極的にコミュニケーションを取ることができるようになり、成長したと考えている。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

本講座を通して、先生方の多忙な仕事や責任感の強さを感じた。また、それ以上に先生方がきめ細やかな指導や高い洞察力を持って居心地のいい学級づくり、教育的愛情をもって日々接していることを授業や学校生活を通して肌で感じることができた。児童の成長を一緒に喜び、自分自身も日々成長し続けられる教員という職業により魅力を感じることができた。そのため、気持ちが引き締まり「必ず教員になる」という強い決意を持った。

私は、演習校で出会った先生方のような教師になるために、身につけた力を伸ばしながら、日々学び続けていきたい。

(2) 今後の課題

私の課題は、授業づくりである。演習の中で、先生方の知識の豊富さや工夫の多さに魅了された。全ての教科を教えるからこそ、幅広い知識が必要となる。日々教材研究を行い、各分野に関する知識や多様な価値観を身につけ、児童一人一人にあった支援をするために、課題としてあげた上記の課題を克服し、人間しても教員としても魅力のある人になりたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の学びたい気持ちをひきだす教師の働きかけについて」

受講生氏名：植村　莉早

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、教育実習で課題解決型の授業において児童がより主体的に学ぼうとする姿を見ることができた。児童が学びたいと思えるような授業を作るには、疑問を解決したいと思えるような授業展開や声掛けの工夫が大切だと考えた。そこで、これまでに学びきれなかった、児童の学びたい気持ちをひきだすために教師はどのような働きかけをしていくことができるのかということについて学びを深めて実践したいと思い、本演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業における担任の先生の声掛けや発問を観察する。

イ　担任の先生の働きかけによる児童の表情や反応の変化を観察する。

ウ　観察、考察したうえで授業実践をする。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第２学年、後期は第４学年の学級で演習をさせていただき、合計で10回以上の授業実践をさせていただくことができた。また、授業を参観する際には教室の前方に立ち、担任の先生の働きかけに対する児童の表情や反応に特に注目するように留意した。

授業実践においては、児童と教師の一問一答にならないように、児童の疑問や気付きの発言を拾い、全体に共有することに努めた。最初は児童の発言を受け止めるだけで広げられず、気付きの声に上手く反応することが難しかった。しかし、気付きや疑問から広げていくことができるようになり、一人の発言から「みんなはどう？」と返したり、より深く考えてほしいときに追発問をして疑問の声を捉えたりすることができた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　視覚を用いた支援や学習環境の重要性

特に、低学年の児童に支援・指導をする際、児童が机上で行う活動を黒板や大型モニターに映して一緒に行うことで、授業中に何をしたらいいのか分からず困る児童が格段に減ることを実感した。また、授業中に必要なものとそうではないものをはっきりさせ、その時に使うものだけを机上に置かせ、それ以外は使うタイミングまでしまうということを徹底することで児童が学習に向かう環境を整えることができると学んだ。

イ　児童の声を拾う大切さ

多くの先生が授業中に児童がふと発した言葉を逃さずに拾い上げ、「それってどういうこと？」と全体に投げかけたり、同じ意見の友達がいないか問いかけたりされていた。そのようにして友達の意見を全体に共有することで、児童もそのことについて考えようとする姿が見られ、「なるほど」というような声を聞くこともできた。また、授業実践をした際に授業の盛り上がりについて悩んでいたところ、一人の発言から全体に広げていくことで、より主体的に学ぶ態度をひきだすことができるのだというアドバイスをいただくことができた。これらのことから、一人の発言を拾い、全体に広げることで児童がより積極的に考え、学ぼうとするということを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、授業づくりや教員としての在り方、人権教育やICT教育について等、京都府の教員になるにあたって必要な多様な知識を得ることができた。また、教育実践演習と並行して学んだことにより、学んだ知識をすぐに実践に生かすことができたため、より学びを深めることができた。中でも、第６回の授業実践講座において、「分かる」友達の声をつなげて、「分からない」子どもが分かるようにすることや、子どもが発した言葉をそのままつなげてあげることで児童同士の理解が深まるようにすること、「ズレ」から知りたいという気持ちが生まれることを学んだ。また、子どもの姿を大切にして授業を考え、今日はこの子の発言を拾ってヒーローにしてあげよう、このように聞いたらこの子ならこう答えてくれるだろう、という気持ちをもって授業づくりに取り組むことが大切だと分かった。今後は、教員として児童理解に努め、その姿を想定し、大切にしながら児童が主体的に学ぼうとする授業を展開できるよう学びを深めていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 個に応じた支援

本演習で初めて低学年の学級を経験し、同じことへの支援であってもそこへのアプローチは児童によって様々であるということを学んだ。具体的には、連絡帳やノートを書くのが遅い児童を支援する際に、その児童がなぜ書けていないのかを考えて支援していくように心がけた。その結果として、集中できていない児童に対しては、目の前で何かを動かして視線をこちらに集中させてから書くことを促し、他のことが気になって書くという行為に向かえていない児童に対しては、「連絡帳を書いて。」という指示だけだと入らないことを実感し、今日はどの鉛筆で書こうかと興味を持たせることで、書くことに向かわせることができた。

(2) 授業力

先生方の授業を参観したり授業実践を重ねたりするうちに、授業の構成について多く学ぶことができたのはもちろん、児童の注意をひいたり、思考を深めたりする細かい声掛けのバリエーションを増やすことができた。ここぞというときには「一度しか言わないからよく聞いてね。」と前置きをしてから話し始めたり、道徳の授業において、児童の考えをもっと深めたいと思った時に、追発問をして揺さぶってみたりすることができるようになった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、授業だけでなく特に年度替わりの先生方の業務を知ることができ、「教師」という職業についてのイメージをより固めることができた。業務量の多さ等大変なこともあると痛感したが、それでもやはり、児童と関わり、授業や学校生活を通して未来を担う子どもの育成にあたる教職の魅力を改めて感じることができた。特に、工夫して支援・指導したことに対して児童が前向きに反応してくれたり、そのことによってできることが増えたりした時にはとてもやりがいを感じることができた。児童の様子に素早く気付き、個に応じて支援し安心感を与えられる教員になりたいという夢を忘れずに、今後も学びを深めていきたい。

(2) 今後の課題

今後の自身の課題は、声に抑揚をつけて話すことで、児童をより惹きつけられるような授業をすることである。そのためには、先生方の授業や学級指導においてどのようにして話に抑揚をつけられているのか今後も観察を続けるとともに、落語などを聞いて、「聞きたい」と思える話し方について学びを深めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童への対応の仕方　児童理解について」

受講生氏名：五十棲　紅葉

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私はすべての教育活動の始まりは児童理解だと考えている。児童を観察すると児童の困り感を感じることができる。児童を理解する中で、本当に必要な支援が見えてくる。

教育実習や支援員としての経験からその姿が見え始めた。そこで児童理解を踏まえたうえで、どのようにして児童に対応していくべきかについて学びたいと思い、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　配属学級における担任の先生方の児童への関わりや言葉かけの観察

イ　積極的にコミュニケーションを取り、実際に直接児童と関わる

ウ　担任をはじめとする先生方への聞き取り

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマにかかわる実践

毎回の演習で学級全員の児童と関わることを徹底した。授業中や休み時間を通して、児童の本音に向き合うために、児童理解と関係性を深めることに努めた。また担任の先生の児童一人ひとりに対する言葉かけや個別の対応を観察することやアドバイスに学び、試行錯誤しながら児童との関わりを深めた。その時の児童の様子を理解することに努め、児童の良さを伝えることや適した声掛けと対応、授業デザインや発問の工夫などを実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童のつぶやきの価値

授業中の児童のつぶやきには､学びのきっかけが詰まっていた｡つぶやきを共有して、全員で考えることで予期せぬ学びの発見場面や、内容の核心に迫るような場面を実際に体験した。この瞬間の児童の表情はとても楽しそうで、連鎖反応的に話し合いを始めていた｡普段発表しないような児童も､困り感や悩み事から始まった場面であることから、目を輝かせて授業を受けていた｡このことから､つぶやきは学びを深めること以外にも、全員が参加できる授業に近づける効果があると学んだ。

イ　距離感の調節

児童との適切な距離感について悩み続けた。距離が近くなると指示や指導が通りにくくなる。しかし距離の近さゆえ、児童は本音で話をする。授業や悩みについて詳しく知ることが出来る。距離感が近いときは児童に溶け込んでいた感覚があった。

配属学級の先生から「タイミングがあったら責任はとるから生徒指導をしてごらん」と言われ、行ったことがある。その対応を経てから学級の児童からの接し方が変わったと感じた。これまでは担任の先生に相談するような事も私に相談してくれた。このことから距離感は調節するものだと感じた。児童を理解するために距離を近づけたり、生徒指導では教師として毅然と距離をとったりする。常に距離は一定ではないことを実感した。共に楽しむことや成長させてくれる人だけを教師として認めるわけではない。私はお兄さんではなく、教師として児童と関わることの認識へ考え方を捉え直した。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

(1) ICTの活用に向けて

仲間との協議を経て、ICTを使う環境から児童も教員も「使いたくなる」環境へ変えていく必要性を考えた。目的ではなく手段として、ICTを活用していかなければならないと学んだ。「教師自身がcreativeな授業を作っていくことは最終的に児童のcreativityを育む」この考えを大切にして、様々な疑問や課題意識をもってICTの活用に向けて挑戦する重要性と可能性を学んだ。

(2) 人権教育について

人権教育はあらゆる教育活動の基盤である。しかし人権教育は知識だけではなく、知識が行動や態度に表れなければならない。人権週間だけで考えるのではなく、日々の生活や指導の中で、人権を守る意識を育んでいく必要がある。そのために私たちは、人権問題を正しく理解したり、人権意識を高めたりしていかなければならない。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童の表情の見取り

朝や授業中の児童の表情を見ながら、普段と様子が違うときには寄り添って声をかけるようにした。日頃から表情を意識することで些細な変化に気付くことが出来た。些細な変化から共に成長を喜ぶことに繋がったり、相談できない困りごとに気付くことも出来た。そして共感的に関わることを通じて、児童との信頼関係が構築されることも実感した。表情から児童を見取る力が演習で大きく成長した。

(2) 授業力

私の授業力はまだまだ足りない。沢山の授業を通して、いくつもの失敗を経験した。しかしその失敗が私の授業力向上の糧となった。最初と比べると見通しをもてたり、児童を俯瞰する余裕も生まれたと思う。児童の言葉を大切にして授業に臨み続け、つぶやきへの感覚を高めることができた。

児童の言葉を活かす授業には「児童の思考を揺らす言葉の精度」と「単元を通して目指す具体的な児童像」をもつ必要があると学んだ。

フリートークや児童に委ねる授業などを行った中で、学びがない授業は「やった感」で終わってしまうと実感した。その経験を踏まえて単元の見通しを持ちながら着実に力をつけることで、授業が円滑に進むことを実感することができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、児童の成長に携われる仕事のやりがいと責任を感じた。先生方の姿を見て、憧れの気持ちはより一層強くなり、教員になるという決意に変わった。私は児童の成長と学びに責任をもちながら、一人ひとりにとことん寄り添うことを目指す。児童が挑戦することの面白さと魅力を体感できる授業を目指し、夢や目標を語れるような魅力いっぱいの子どもたちを育てていく。困難を児童と共に乗り越えていける教員になる。

(2) 今後の課題

教員としてではなく学生として児童と関わってしまうことがあった。生徒指導では毅然とした態度で、駄目な事は駄目と言わなければならない。教員としてメリハリのある指導をすることで児童との信頼関係も深まる。授業も面白いだけで終わることがないように、着実に力を付けることが出来るようにしていく。教師として目指す理想を持ちながらも学びに責任感をもつ。ボランティアの活動を通して、教師としての責任感について考え続けたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「絵、図などを活用した視覚的な授業づくり」

受講生氏名：武末　夏野

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定の理由

演習校で初めて算数の個別指導を行った際に言葉だけの指導でうまく児童に理解させることができなかった。そこで、説明のために手書きで数図ブロックを書いてみると児童に理解させることができた。従来の言葉での説明に加えて効果的な図や絵を活用することが、より児童の深い学びや理解のしやすさにつながると考え、研究テーマに設定した。自身の課題と捉えている板書を、より見やすく分かりやすいものにしていくためにも活用できると考える。

(2) 研究方法

ア　配属学級において担任の取り組みを観察

イ　体験授業や研究授業での実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

机間指導の際に常にバインダーを持ち歩き、必要な場面で視覚的な情報を加えて指導を行う。担任の板書を毎時間メモして視覚的工夫を考察し、自身の授業実践に活用する。

(2) 演習校で学んだこと

ア　前期（１学年配属）での学び

前期では、言語能力の発達がまだ十分でない児童への指導に視覚的な情報の援助が必要不可欠であることを学んだ。自身が体験授業で行った算数では、数図ブロックを活用することで数量の認識に関する児童の理解をさらに深めることができた。また、数図ブロックを活用している様子を観察すると加減の計算で答えを求めることはできるが、計算の意味を理解できていない児童も存在することが分かり、計算能力を鍛えることだけでなく、意味を理解させる指導も行っていかなければならないと学んだ。

イ　後期（３学年配属）での学び

後期の３学年での演習では、自身が課題と捉えていた板書能力の向上に視覚的な情報が活用できると学んだ。特に道徳の授業では、場面絵の挿入や発問やキーワードになる言葉をあらかじめ準備して貼り出すこと、チョークの色を複数使用することなどを通して児童がより分かりやすい板書の方法を学ぶことができた。改善前と改善後の自身の板書を見てみるとその成長がはっきり分かるものとなった。

後期配属学級には難聴の児童が在籍しており、その児童とのコミュニケーションにはこれまで以上に視覚情報を活用した。意識するあまり、情報過多にならないように必要な情報がより伝わりやすくなるための工夫の重要性も学ぶことができた。特別支援の観点で見ても視覚的な授業づくりは有用性があると知ることができた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では毎回テーマに沿った専門的な知識を学べたことと共に、すぐに受講生同士での情報や意見のアウトプットができた。さらには翌日からの演習で学んだことを実践することで得た知識をさらに確かなものにしていくことができた。これからの教員生活もこのようなサイクルを形成して学び続ける教員であり続けたいと思うことができた。

「特別の教科道徳」の講座では、「心を変えて行動を変える道徳」と「行動を変えて心を変える生徒指導」の両輪によって児童を育成していく考え方を学ぶことができた。混同してしまいがちだった道徳と生徒指導の違いを知り、正しい道徳科授業の目標設定ができるようになった。また、「教員の言葉より友達の言葉の方が響きやすい。」という言葉がとても印象的だった。より深い学びに向けて、児童らが意見を言いやすい学級づくりをしていくことも大切であると学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1)　授業力

演習では計16回体験授業を行った。連続して授業を行うこともあり、一つの授業に対して準備できる時間は少ないこともあったが、「夢・未来」講座での学びを生かして毎授業必ずねらいを明確にして、そこに向けた授業を行うことを意識することができた。また、演習テーマの「視覚的な授業づくり」の意識でより分かりやすい授業を追求した。まだまだ、教員として満足なレベルの授業力には達していないが、多くの授業経験を積めたことで大きく成長できたと振り返る。

(2)　児童との関わり方

演習中は常に児童と関わることを意識していたため、私が教職の魅力と感じている「児童と共に成長する感覚」を味わうことができた。一人一人の児童と対話することでそれぞれの児童にあった関わり方、指導方法を考えていくことができるようになった。中間休みや昼休みだけに関わらず、授業間の５分休憩でのコミュニケーションを活用すれば一日の間で学級の全児童とコミュニケーションをとることが出来ることも分かった。しかし、今は学生という中間的立場であったことも児童との関係形成のしやすさに影響しているとも考える。これからは教員という立場で関係づくりができるように力をつけていくようにしたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1)　教職に向けた決意

教師力養成講座のすべての演習を通して、自身の教員になりたいという思いと使命感がより一層強くなった。何よりも教育者として児童と関わることに日々幸せを感じ、これから教員として生活する私の未来像がより明るく明確なものとなった。日々、研鑽を積んでいき児童と共に幸せに生きられる教員を目指したい。

(2)　今後の課題

今後の課題は全体指導と個別支援のバランスである。修了授業の事後研修でも机間指導がもう少し必要だと指導をいただいた。また、児童から集めたワークシートの振り返りを見ると、児童間で授業への理解の差が見られた。全体の授業の流れを意識するあまり個別の指導が行き届いていなかった結果であると反省する。今後は授業のクオリティを維持したまま、個別指導も十分に行える力を身に付け、学級全員が学べる授業づくりを行っていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「一人一人の個性を生かした学級づくり」

受講生氏名：楠　青空

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

児童が学校生活の中で一番多く過ごす学級は、一人一人が生き生きとした姿が見られるような環境に整えていくことが大切であると考える。また、児童の個性を教師が誘導するのではなく、自分自身が学級の中にいることの存在感を感じることや個性の良さの部分の伸長をするとともに、学級の中で輝くような姿を育成できる学級経営力を身につけたいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　児童と積極的に関わりを持つ中で､児童が持っている個性を知り､児童理解に努める。

イ　学校生活を送る中で、得意とすることや個性のよさの伸長を図る。

ウ　事細かなことのコミュニケーションをとり、信頼関係を培う。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期では１年生、後期では６年生の学級に入らせていただき、児童と多くのコミュニケーションをとることを大切にして演習を進めた。授業の支援だけでなく、行事の話や給食指導等で関わりを増やし、児童の事細かな変化を観察した。一人一人の個性を学級の中で生かせるように、学習等の活躍の場を設けることを学んだ。

自分自身では､担任の先生が実行している姿を見て､児童に関わり個性の良さを見つけ、本人がさらに「よさ」を伸ばすことのできる声かけを行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業や帰りの会について

演習を通して､一人一人の個性を存分に引き出しその個性を生かした授業にするには、児童が生き生きと輝いている姿になるような発問を行い、その個性に合った活動をして褒めて良さを伸ばすことが重要だと感じた。また、帰りの会に日直の良いところを見つけ伝える時間を設けることで、その子がもっている個性を認めることに繋がると学び、児童が自分の良さを認められるようにしていきたい。

イ　児童と関わって

多くのコミュニケーションをとることで、まずは教師が児童の個性を認め生かせる場を見つけることを探すことが大切だと学んだ。この演習を通して、児童の個性を知るとともに、個性を学級内で生かす声かけやその場面が設けられている事がわかり、自分自身でも個性の生かし方を学ぶことができた。また、教師だけが理解をするだけでなく、クラスのみんながその児童の活躍場面だと気づく学級にしていくべきであると考えた。

ウ　先生方と関わって

児童は先生の行動をよく見ているため、一つ一つの行動や指導を意味あるものにすることを学んだ。これは、二人の先生に同じようなことを聞き、授業を行うときに限らず、学校生活全てにおいて児童と関わりを持つときに気にかけることを学び、自分自身児童と関わるときに一つ一つの行動に意味があるものにしていきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育について様々な先生の講座を受けて、児童の実態を知るとともに、自分が行なっていきたい教育について深く考えることができた。講座の中で、講座生と交流をはかりながら課題について考えることで、新しい考えに触れる機会や共に深く考えることなどがあり、とても貴重な経験となった。

講座の中で特に印象に残っていることは、教育実践講座Ⅰ第４回目の「小学校における児童理解と学級経営」である。積極的にコミュニケーションをとるときに、日頃から言葉に耳を傾け、児童の思いを受け止めるようにすることでその児童の背景を知るきっかけにつながってくることである。また、学級経営は児童の実態を把握するとともにその児童の発達状況に影響を受けることを言っておられた。児童にとって学級は学校生活の中で一番多くの時間を過ごし、信頼関係が特に出来上がる場でもある。これから教師として児童理解をしていく中で、児童の思いを受け止めるコミュニケーションを行い、自分自身の成長にも繋げられるようにしていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 身に付けた力

私が教師力養成講座で身に付けた力は授業力である。今までの授業は、目標に向けて全ての児童が「できる」という目標のみを考え、自分が取り入れたい授業の展開にしてしまっていた。しかし、授業を行うにあたって全ての児童が「わかる、楽しい」と感じる授業にすることの重要性を学ぶとともに、「わかる、楽しい」となる授業を行うようになった。また、導入や展開の部分で児童の気持ちを掴む工夫を入れることで児童が興味・関心の持てる授業を行えるようになった。

(2) 成長したこと

学校生活の様々な場面の観察力である。この４ヶ月間で、児童同士との関わり、教師と児童との関わりについて観察をしてきたことで、授業と休み時間の過ごし方や様子が様々であることとその児童の特徴がわかるようになってきた。また、学校に行く機会を多くすることで児童のつまずきを予想することができてきた。この教師力養成講座によって、自分自身のこれまでの課題が少し解消したとともに新たな課題も出てきて、見つけることも大きな成長につながっていると考えている。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私は「夢・未来」講座や演習校での実践を通して、多くの児童や先生方と関わりをもって、今まで以上に京都府の教師として児童の育成に携わっていきたいと考える気持ちが大きくなった。演習校の先生方は、児童が学校にいない時間帯に教材研究や準備をし、学級経営に向けての業務を行われていて、私も先生方のようになりたいと考えている。全ての事が児童の教育に関わることを念頭に置き、信頼関係に繋がる関わりを大切にする教師になれるよう努めていきたい。

(2) 今後の課題

教師になるために、自分自身でまだ未熟で足りない部分がある。授業が学級経営に繋がっていることから、45分でわかりやすい授業を行っていきたい。その中で、一人一人の個性をもった存在や発言を生かせる学級にする事が課題である。学級の中で個性を生かすためにも、日々児童の実態を把握し、コミュニケーションを積極的に図っていきたいと考えている。また、教師力養成講座での学びを生かすとともに、自己研鑽に励み、実践していきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人が活躍できる授業について」

受講生氏名：馬場　寿理

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

学校では、授業を受ける時間がほとんどであり、授業での活動は児童に大きな影響を与えることができると考えている。そのため、「児童が活躍できる」授業を展開することにより、自己有用感から自己肯定感を得ることができると考えた。自分自身、多くの人の前で発言をすることに抵抗があった時期があった経験から、児童に協働的な活動を通して活躍し自信をつけて欲しいと考えたため、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　配属学級における担任の児童への関わり方や授業を観察する。

イ　授業内の担任の発問や児童の発言に対する反応の仕方を観察する。

ウ　授業実践を通して積極的に児童と関わり、児童理解に努める。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期演習では第３学年、後期演習では第４学年の学級に入らせていただき、学級終わりと学級始まりの児童の変化などの観察を行った。また、配属学級における授業の様子や担任と児童の関わりについての観察も行った。さらに、あらゆる場面で積極的に児童と関わり児童理解に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業について

「誰一人として取り残さない授業」を心がけることが非常に大切であることを学んだ。「取り残さない」ということを踏まえた上で、「児童一人一人が活躍できる授業」を実践することが大切である。「活躍」というのは、授業内で発言することだけでなく、協働活動において児童一人一人が自分の考えをもち他者と交流することも「活躍」だと私は考えており、配属学級の授業内で児童同士の活動が行われている様子を観察し、改めて児童一人一人が授業に参加できるように配慮することの重要性を学んだ。さらに、授業で正解とは異なった発表をした児童に対する反応に関しても発表したことやしっかり自分の考えをもって授業に参加したことに対して褒めるなど、児童の学習意欲を損なわないようにする工夫が必要であり、日々児童と関わり関係性を築くことが授業にも影響するということを感じることができた。

イ　児童との関わりについて

児童にとって担任は学校生活を過ごす中で一番長く関わる存在であり、学校での学びに大きな影響を与える存在である。そのため、できるだけ多く児童と関わることを心がけた。児童との信頼関係を築くことにより、授業が円滑に進んだり、学習意欲や自信をもたせることができたりと様々な面で影響を与えるのだということを改めて感じることができた。このことから、小さな変化に気付くことができるよう児童をよく観察し、積極的に話題を振り会話をすることが重要であると学んだ。さらに、児童との信頼関係が学級経営等にも非常に重要であることも学ぶことができた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、小学校教育に関することだけでなく教員を目指す上で知っておくべき知識や、京都府の教育に関する課題や取組について、様々な立場の先生方から貴重なお話を聞き学ぶことができた。また、他の受講生と交流し様々な考えや意見を共有することができたことにより、自分の考えが広がり新たな発見をすることもできた。

特に印象に残っている講義は、第10回「学習指導要領に対応した学習評価」の講義である。「評価が変わるということは、授業が変わるということ」ということから、「何のために学ぶのか」を実践できる授業を心がけることが大切であり、何に着目させるのかを考え意識するようになった。また、見方・考え方が働くような活動を取り入れることで児童の能力を高め成長させることができることを学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 気付く力と対応する力

日々の学校生活で児童と関わる機会が多く、今まで気付くことができなかったことに気付くことができ、自分の視野が広がったように感じる。先生方の児童への対応や反応を学ばせていただいたことにより、気付いたあとの対応も考えるようになった。授業でも児童の反応をみて臨機応変に対応することで授業の質が高まることから、気付き対応する力を大切にこれからも児童の変化に気付くことができるよう努めたい。

(2) 教員としての自覚や責任感

演習校で、先生の授業や児童と関わる以外にも、卒業式や入学式、春休みなど児童がいない場での教員の仕事について学んだ。児童が見ていない場でも、教員としての自覚をもち、常に児童のことを考える先生方を見て、自分もどのように行動すべきかを考え判断するという自覚をもつことができたように感じている。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教員という仕事のやりがいや責任感を感じることができた。先生同士が協力し合い児童たちがより良い学校生活や日々の学びを活かすことができるように努めている姿は輝いて見えた。さらに、児童たちの成長を身近で見ることができるということに魅力を感じ、教員になりたいという思いが強くなった。また今まで指導していただき、学んできたことを忘れず教員になった際に活かして児童たちの学校生活を支えていきたい。そして児童とともに、自分自身も学び続け一緒に成長できる教員を目指していく。

(2) 今後の課題

今後、生徒指導力が課題である。演習を通して児童との関係を築くことに関しては以前よりも身につけることができたと感じている。しかし、指導すべき場面ではっきりと伝えられないということがあり、まだまだ不安が残る。今まで学んだことから自分に合った指導方法をこれから身につけていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「主体的な学びを深めるための『より分かる』授業について」

受講生氏名：村山　唯菜

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

児童自身が「学びたい」「もっと知りたい」という感情をもち、学習に取り組むことが教育を行う上で最も大切なことであると考える。児童にそのような感情をもたせるためには、教師が魅力ある授業や学級全員が分かる授業を行う必要がある。授業の内容を正しく理解することで新たな疑問などをもち学習に前向きになると考え、学級の児童全員が「より分かる」授業について学びたいと感じたため、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　児童が授業の中でどのような活動を行っている時に主体的に学ぼうとしているのかの観察

イ　授業内での担任の先生による工夫や児童への声掛けなどの観察

ウ　児童の実態を把握し、体験授業や研究授業の実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習前期は第４学年、後期は第３学年に入らせていただき、中学年での授業の組み立て方や児童が興味をもてるような授業実践について観察した。また、机間指導や休み時間において積極的に児童と関わり、教材研究や授業準備をする中で児童の実態に合わせた授業をつくることができるよう努めた。そして、体験授業や研究授業では学級の児童全員が学習内容を理解できるよう模擬授業を何度も行い、授業内でできることを考え実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業づくりについて

授業を考えるにあたって何度も模擬授業を行い、適切な発問の仕方や児童の発言に対する反応、児童同士の考えをつなげるためにどのような発言をしなければいけないのかなどを考え、児童の目線で授業を考える大切さについて学び、授業に活かすことができた。また、一人ひとりの児童にあった指導ができるよう机間指導での声掛けや支援が必要な児童に対してどのような手立てが必要なのかなどについても学ぶことができた。

イ　学級経営について

学年によっても学級によっても児童の雰囲気は全く違ったものであり、２つの学級に入らせていただき担任の先生のお話を聞くことで、学級の中で一人ひとりの児童にどのような配慮や関わり方が必要であるか、学級全体としてはどのようなことに注意しなければいけなのかなど考えなければいけないことは非常に多くあるということを学んだ。

また、何か事が起こってしまう前に的確な指導をされているという点がとても印象的であった。起こってしまった後に、どうするべきだったのかを考えることも大切なことだが、行動に移す前に「今からやろうとしていることは間違っていないか」を考えさせ、先を予測して行動する力をつけさせるようにしておられた。中学年は善悪の判断を正しくできない中でもある程度の力を持っているため、何かが起こってしまってから考えさせるでは遅いということもある。そのように、児童の身体的成長と心の成長を掛け合わせた上での指導を考えることが大切であるということも学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、たくさんの先生から多方面での貴重な経験や教師を目指す上で知っておかなければいけないことなどについてのお話を聞かせていただいた。その中で、様々な物事を自分ならどう捉えどのように取り組むかなどを考え、ペアやグループで他の人と意見を交流し日々考えを深めていくことで、教育や今後の実践について考えを深めることができた。

中でも特に印象に残っているのは、第６回目の講義の「学びの連続性をつくる」という言葉である。実際に算数の授業を受けながらの講義であり、円の面積を求める際に「今までどのように考えていたか」を問われ、自然に既習の内容を振り返るよう構成されていた。授業は１時間で終えるものではなく、単元を通して児童自身に次の課題をどのようにして取り組むべきなのかを考えさせ、児童から考えを引き出すことが大切であるということを学んだ。また、授業中の発言に相槌を打っている児童にあえて「今のはどういうこと？」と問い、発言させることによって「分かったふり」を逃さず、授業に活かしていくということも学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座を通して、身に付けた力や成長したことは二つある。

一つ目は、一人ひとりを見て関わるということについてである。２つの学級で継続的に児童と関わる中で、一人ひとりの児童がどのようなことを得意としていてどのようなことを苦手としているのかを観察し、ある程度理解した上で関わりを持つことで上手くコミュニケーションをとり、授業でもその関係性を良い方向へ向かせることができたと感じている。また、担任の先生と児童の様子などについて話すことで、担任の先生から見た児童の様子なども知ることができ、私だからこそできる児童への関わり方にもつなげることができたように思う。

二つ目は、授業についてである。体験授業や研究授業を通して、児童の理解が確かなものになるよう視覚化した板書やPPTを用いたり、努力を要する児童への手立てとしてヒントカードを用いたりして児童に合った授業を考え指導を行った。授業を考える際には自分が授業を受ける立場に立ち、どのような点でつまずく可能性があるのかを考え、その点を解消できるよう先に述べたような手立てを用いる他にも分かりやすい発問を心掛けるなどして授業を構成することができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1)　教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教師になりたいという思いがより強くなった。授業や休み時間に児童と関わる中で、改めて教師という職業に就いた者しか得ることのできない達成感や喜びなど様々な感情を持つことができたと感じている。児童にとって６年間という長い時間を過ごす小学校であることを常に頭に置きながら、児童に身に付けてほしい力はどのようなものであるかを考え、自分自身も人として成長しながら教育に向き合えるよう頑張っていきたい。

(2)　今後の課題

今後の課題として、授業力の向上があげられる。中でも、児童の発言を活かして授業を進める力を向上させる必要があると考える。今は自分が作った授業の流れを児童にはめてしまっているのが現状である。児童の学びを深めるためには、児童同士の学び合いが１番であるため、今後授業を繰り返し行ったり授業を見せていただいて学んだりする中で、児童同士の発言をつなげるように力をつけていきたい。また、机間指導などで見た児童の考えを順序良く授業内で活用できるような力もつけていく必要があると考える。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「児童が発言しやすい授業づくり」

受講生氏名：梅原　彩華

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

教員養成サポートセミナーでの活動を通して発言できるということは授業づくりや学級経営において大切なことの一つであると感じたため設定した。今回設定したテーマの「発言」には理由に二つの視点がある。一つ目は発言することができる学級の環境をつくること、二つ目は発言しやすい授業をつくることである。そのために何が必要なのかを学び、また、児童が安心して学級で過ごせているのか判断する材料の一つにもなると考えこのテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　学級内の児童の関係性や、授業外での先生と児童の関わり方を観察する。

イ　児童との対話の様子とその反応を主な焦点に先生方の授業を観察し、考察する。

ウ　授業実践を行いその内容を振り返り、考察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

演習を通して発達段階の違いにも意識して観察を行った。観察をする中で気になったことや疑問に感じたことは担任の先生へ質問をし、その後自分なりに考えるといったことを心掛けて行った。また、授業実践においては児童にとってどのような発問が発言しやすいのか、そして、授業の環境や雰囲気についても観察を基に検討し実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　先生の表情と話し方について

発言しやすい環境づくりのためには学級内での関係性も大切であると感じた。その中で、教師が児童にとって安心できる存在であることは必要だと考えた。マスクを外すだけで伝わることも変わるように感じたため、表情というのも安心できる要素の一つになると考える。

イ　児童の発言に対する教師の反応とその活用

児童が発言するにあたって大切なことは安心して挑戦できることだと考えた。授業観察を通して、児童が間違えたことも教師がその考えや意見を肯定的に取り入れることで発言しやすい授業につながると感じた。また、様々な児童の発言を組み合わせて考えを深めるということも行われており、考えたことを誰が何度でも発表して良いという授業の構成も発言しやすい授業のために必要なことだと考えた。

ウ　児童実態の把握

授業実践を通して授業内での発問だけでなく、日常的に会話を通して児童と関わることも児童の発言を引き出す方法だと感じた。児童と日常的なコミュニケーションをとることは先生が「自分の意見、話を聞いてくれる。」という存在になることにつながるため、児童にとって発言しやすい環境づくりと授業づくりに必要な要素の一つになると考えた。また、低学年と高学年では児童との関わり方で気を配る視点も変わってくるため児童の実態に応じた関わり方も重要になってくると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では授業づくり、学級経営、児童理解、評価の方法など様々な知識を身に付けることができた。

特に印象に残っているのは、道徳教育の在り方である。教科としての道徳に視点を当てたとき、どうしても国語的要素が入ってしまいがちだが、講座を通して道徳の授業の構造を頭の中で少し形作ることができた。授業を通して児童・教師が自己を見つめ、学級内で生まれる多様な考えを基にこれからの自己の生き方について考えるという形が主体的・対話的で深い学びにもつながることも学んだ。

また、道徳の授業を行う際に児童に対して「間違いはないから、思ったことを自由に出し合っていいんだよ。」といった言葉がけや、発言を聞くときに近づくことで話しやすくなるといった心へのアプローチの大切さを知ることができた。そして、これは学校生活のどの場面でも活用できると感じ、「包み込まれている感覚」を児童に実感させられる一つの方法ではないかと考えた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 自ら行動する力

「夢・未来」講座や小学校の演習を通して積極的に関わる力がついたように感じる。以前は自分に自信がなく、遠慮する気持ちや相手の様子を必要以上に伺いすぎてしまう傾向にあったが教師力養成講座での活動を通して、疑問に思ったことは先生に質問できるようになり、学べることも増えたように感じる。また、先生の業務の中で自分に出来ることを自ら探すこともできるようになったことで、授業作りの工夫や学級開きで必要なことについても先生から直接聞き、実践的に学ぶことができた。

(2) 教師としての意識

教育実習とは違いより長期的に児童や先生と関わる中で教師としての児童への関わり方を深めることができた。例えば学年に応じて関わり方を変えることが必要である。高学年であれば人の気持ちを考えさせ、低学年であれば自分の行動を振り返り考えさせていた。発達段階に応じて児童との関わり方とそれぞれに必要なことを考え、意識していくことを考えるきっかけとなった。教師は教科を教えることが大切だが、それ以上に人との関わりを学ぶ時に携わる重要な立場にあるという意識がついた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座での活動を通して、教員の仕事をより間近で知ることができ今まで以上に教員になりたいという想いが強くなった。児童の成長を間近に感じることのできる楽しさや、授業の工夫によって変わる児童の反応から感じるうれしさなど、とてもやりがいのある仕事だと感じた。学んだことや経験したことを活かして児童が安心して過ごせる学校を目指し、興味を持って主体的に学びを深めることができる授業づくりを教員になった際も追及し続けたい。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、「授業力」である。授業づくりにおいて、児童の実態に応じて検討はしたものの、実際に授業を行うと発問の仕方に課題を感じたり、授業の展開以外での雰囲気づくりの難しさを感じたりなど新しい課題がたくさん見つけられた。また、授業展開を考える中で児童の実態と興味を持って学べる工夫ばかりに焦点を当ててしまい、目的から逸れかけてしまうこともあったため、実際に現場に立った際には必ず授業のゴールをイメージして作っていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「こどもの個性を活かす授業づくり」

受講生氏名：足立　玲菜

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

小学校でのボランティア活動や、教育実習でたくさんの児童と関わり、多くの授業にも参加させていただいた。これまでの経験では、学年が上がるにつれ、授業内で発言する児童に偏りがあると感じることが多かった。また、学級には、様々な児童がおり、一人一人興味関心も違うということも感じた。そこで、児童の個性をどのように活かせば、児童が主体となり、興味関心をもって学べる授業づくりができるのかと考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業中の発問や教員の行動について観察する。

イ　指導教員や担任へ質問をする。

ウ　観察や振り返りでの学びを、体験授業や研究授業の際に実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第１学年、後期は第５学年の学級に入らせていただき、計５回の授業実践をすることができた。それぞれの学級で実践されていた授業での工夫について観察し、担任の先生がされている児童の個性の活かし方について学んだ。さらに、担任の先生の授業だけでなく、演習生の授業においても、自分ならどのように授業をするかを考えるよう心掛けた。また、授業実践を通して良かった点、改善すべき点について、指導教員、担任の先生、演習生同士で振り返りを行い、そこでの学びを実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童の活躍の場をつくることについて

補助としての授業の参加や、授業実践を通して、発表することだけが児童にとっての活躍の場ではないということを学んだ。児童の中には、自分の意見を書き出すことは得意でも、発表することが苦手な子がいるなど、様々な得意、不得意をもつ児童がいる。そこで、グループやペアでの意見交流の時間をつくったり、ICT を活用し、画面共有から自分の意見を伝えられるようにしたりするなど、活躍の場をつくる方法や工夫はたくさんあると学んだ。

イ　児童の「やりたい、気になる」を活かすことについて

一人一人の個性を活かすためには、まずは「やりたい、気になる」という思いを活かすことが大切であると学んだ。また、その思いを引き出すためには児童が主体的に考えていくための手立てが必要であると学んだ。例えば、児童にとって身近に考えられる導入、わかりやすい発問、掲示物の工夫、前時に学んだことの振り返りなどである。それらから引き出した、児童の積極的な気持ちや、発言を逃さないことが個性を活かした授業づくりにも繋がると考えた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、多くの講師の方々から、これから京都府の教員になる上で必要となる知識や心得などについてご講義いただき、教員として必要な知識や考え方を学ぶことができた。また、京都府の教員を目指す仲間とともに、集団討論やグループワークなどで交流し、様々な意見に触れることで、自分自身の考え方の視野も広げることができた。

講座の中で特に印象に残っている講義は、「特別の教科　道徳」の講義である。講義の中で、「子どもは教師の言葉より子ども同士の言葉の方が響く」や「共に考え、共に学んでいく姿勢が大切」であると仰っていた。教員が道徳的価値を押し付ける形になってしまわないよう、児童自身が考え、自由な意見を出し合うことから、教員も共に道徳的価値について考える時間となるようにしたいと感じた言葉だった。また、教員が児童と共に学び続ける気持ちを大切にすることにも繋がり、とても大切な道徳教育の捉え方を学ぶことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 生徒指導力

私は児童に対して厳しい指導をすることが苦手だった。しかし、指導することで児童にどのような姿になってほしいのかという自分自身のぶれない軸をもち、指導を行うことを大切にするべきであると学び、先生方の指導の様子を観察し、自分なりに実践することで、生徒指導の基本を身に付けることができた。トラブルが起こったとき、お互いにただ謝ればいいという思考にならないよう、一人ずつ話を聞き、お互いに納得して解決することや、これからどうしていくかを一緒に考えるなどの指導も大切にしたい。また、児童の性格や様々な背景などをしっかりと考えた上での言葉選びを大切にし、指導を行っていきたい。

(2) 諦めず児童と関わり続ける力

数人の児童との関わりについて、担任の先生との話し合いや指導教員、演習生からの意見などを 積極的に取り入れ、様々な方法を試していくうちに、教室から飛び出さなくなり、授業に参加できるようになるなど、少しずつうまくいくことも増えていった。授業においても、児童との関わりにおいても、上手くいかないことの連続であったが、数回壁にぶつかることがあっても、諦めず一人一人に合った支援方法を試していくことを心掛けることができた。 児童の成長には何が必要なのかを考え、教育活動に取り組んでいくきっかけとなった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、小学校教員や京都府の教育の魅力を実感することができ、京都府の教員になりたいという思いがより強くなった。また、自分の課題点を改めて自覚するきっかけにもなった。常に児童と共に学び続ける教師として、自分自身のぶれない軸をしっかりともち、これからも現場で学び続け、たくさん経験を積んでいきたい。

(2) 今後の課題

今後の課題として、児童が深く考えられる発問づくりを意識していきたい。言葉の小さなニュアンスひとつで発問の伝わり方は変わってしまうため、授業内の言葉選びを意識して授業を行っていきたい。また、時間に余裕をもち、深めさせたい場面では、時間を多く取るよう実践していきたい。演習を通して実感した課題点を改善し、より良い授業が行えるよう日々考え、努力していく。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「誰もが楽しいと思える学級・授業づくり」

受講生氏名：谷口　翔

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教師から一方的に与える授業では、子どもは受容的になる。学ぶこと自体の楽しさや友達と交流することによって多様な考え方に出会う楽しさを子どもが実感することで、主体的・対話的で深い学びの実現につながると考えている。

誰もが楽しいと思える授業を行うためには、学級の雰囲気づくりが必要だと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　演習学級の子どもの様子や担任の先生の子どもへの声のかけ方などの観察

イ　子どもの興味・関心の引き出し方の手立てについての先生方への聞き取り

ウ　体験授業や研究授業における実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期演習では第４学年、後期演習では第６学年の学級に入らせていただき、子どもの様子や担任の先生の子どもへの声のかけ方を観察した。それぞれの学級で実践されていた授業スタイルの良さを見出し、担任の先生がされている子どもに興味を持たせる工夫を見て学んだ。さらに、自分ならばどのように授業を展開するかを考えるよう心がけ、子どもが学ぶ楽しさを実感するための工夫を担任の先生と話し合い、子どもの興味・関心を引き出すなどの工夫を取り入れ、体験授業や研究授業で実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　話し方の工夫について

先生方の授業や子どもたちの前で話す場面を観察させていただき、話し方の工夫を学んだ。私は、声が大きく子どもの耳に入りやすいことが長所であると考えていたが、声が大きければ子どもたちは先生の話を聞こうとしなくても耳に入ってくるため、声が大きければよいということではないことに気づいた。そのため、先生方のように場面に応じて声を小さくして話してみたり、一度話を止めてみたりするなど、子どもたちに話を聞きなさいと指示するのではなく、子どもたちが先生の話を聞きたくなるような話し方の工夫が必要であるとわかった。

イ　学級経営について

誰もが楽しいと思える学級をつくっていくには、変化が大切であると学んだ。

１学期は新しい環境で新鮮なことが多く楽しむことができるが、２学期、３学期になり子どもたちがその生活に慣れてくることで、一つ一つのことに対して不十分になってしまい、当たり前のことを当たり前にすることが難しくなってしまう。そのため、子どもの成長に合わせてルールや決まり、目標をグレードアップさせることで、新たなことに挑戦することができ、子どもたちが常に新鮮な気持ちで頑張っていくことができる。

また、その成長している過程を「見える化」することによって、これまでやってきたことや成長してきたことを実感することができ、それらが子どもたちの自信につながり、自己肯定感の向上にもつながってくると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育施策や各教科等の ICT を活用した授業実践について学んだことで、新たな視点を取り入れたり、理解を深めたりすることができた。その中でも、特に印象に残っているのは、第 11 回の特別支援教育での「障害のある子どもと障害のない子どもが可能な限り同じ場でともに学ぶこと（交流及び共同学習）」についてである。同じ場でともに学ぶとは、同じ場で学習しているだけでよいのではなく、それぞれの子どもに授業内容を理解し学習活動に参加している実感・達成感を持たせることが大切である。そのため、常に分かりやすく楽しい授業づくりができるよう取り組んでいきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

演習では合計５回の授業をさせていただき、授業力を高めることができた。第６学年の算数の授業では、２つの学級で授業をさせていただいた。同じ教材であっても児童の反応や答えが違うため、臨機応変に教師の手立てを変える必要があると実感した。また、教育実習の授業実践のときはとても緊張してしまい、授業を進めることで精一杯になってしまった。しかし、今回の演習では、落ち着いて授業を進めることができ、子どもとともに授業をつくっていくことができた。今後も子どもの様子をしっかりと見とりながら授業力を向上させていきたい。

(2) 教員としての自覚

児童の実態をしっかりと把握するために、時間をかけて一人一人の児童と向き合うことを通して、児童の未来に大きな影響を与える立場であることや児童の命を預かっている立場であることを、改めて強く自覚することができた。

また、自分自身の考えがぶれることのないように芯を持ち、1 年後の自分を見据え、自分ならどのようにして学級をつくっていくのかを常に意識しながら意図のある行動をとるようにした。これからもこの考えや思いを持ち続け、大切にしていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 今後の課題

授業で、子どもに伝えたい・理解してほしいという気持ちが強くなり、話しすぎてしまうことがあった。子ども主体の授業をするためには、教師の話す内容を精選し、児童同士で対話する時間をつくったり、子どもとの会話を増やし子どもの考えを広げたりしていけるようにしていきたい。この課題を忘れず、楽しい授業づくりを行えるよう励んでいきたい。

(2) 教職に向けた決意

教師力養成講座を受講することにより、子どもの成長に携わることができる仕事はとても魅力的であり、やりがいを多く感じることができ、京都府の教員になりたいという思いが一層強まった。

また、子どもたちの興味・関心を引き出すことを第一に考え、私自身が授業や学校生活を楽しみ、子どもを引き付けるような教員になることが目標である。目標実現のため、子どもたちを楽しませる引き出しをたくさん持ち、信頼関係を築いていけるように教員として子どもの前だけでなく、一つ一つの行動に責任を持っていきたい。

教師力養成講座で学ぶことができたこの期間はとても有意義なものになった。このような貴重な機会を与えてくださった教師力養成講座の講師の先生や、演習校の校長先生をはじめとするお世話になった先生方への感謝の気持ちを忘れず、教員になってからも学び続ける姿勢を大切にしていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「子どものもちあじに寄り添った学級経営」

受講生氏名：石塚　知帆

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は子どもの多様性を尊重し、一人一人を大切にすることで、安心を感じさせられる学級を作りたいと考えている。子どもは一人一人苦手なことや得意なこと、特性などがあるがそれらはすべて「もちあじ」とまとめることができる。学習面においては、学習スピードや教材の難易度、生活面においては、教員からの声掛けの方法などにおいて、子ども一人一人に適切な対応をとることで、子どもたちはのびのびと学校生活を送り、成長することができる。そこで、一人一人の子どものもちあじを理解し、それに応じた支援や指導を行いたいと考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　各学級での担任、児童との関わりや授業観察

イ　担任、指導教員をはじめとする先生方への聞き取り

ウ　体験授業や研究授業、学級活動における実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業や学級活動、休み時間などの様々な場面で、教員と子どもの関わり方、子ども同士の関わりについて観察し、積極的にコミュニケーションを取ったり、必要に応じて指導・支援を行ったりすることで、子どもの実態に直接的に触れることができた。また、放課後には担任の先生と１日のふり返りを行ったり、気になった子どもの様子や、その対応について話し合ったりすることで、子どもの理解を深めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　多様な子どもへの多様な指導と支援

教育実践演習校のスクールサポーターの先生が、「子どもの数だけ指導や支援の方法はある」とおっしゃっていた。学級活動におけるサポートの声掛け、やる気を引き出す方法、授業の進行スピードや説明の量などは、子ども一人一人によって全く異なる。どのような指導・支援が子どもに適しているかは、様々なコミュニケーション方法でアプローチを行い、自身のコミュニケーションに対する子どもの反応を確認し考察することで、分かってくるものだということを学んだ。

イ　子どもの実態に応じた授業づくり

子どもの実態に応じて、子どもの集中力を持続させる工夫を取り入れることで学びの質はより良いものになる。例えば、授業内での頑張りをはなまるの数で評価することや、授業中に気分転換をする時間をとることなどである。これらを効果的に取り入れることで、子どもの学びを刺激することができる。また、授業時間や子どもの様子を考慮して、一人で課題に向き合う授業や、体を動かす活動やグループで話し合う活動を多く取り入れた授業を組み立てる必要があることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、様々な分野の講師の方から、教員になるうえで必要な知識や技術などについて学ぶことができた。また、グループワークで、同じ京都府教員を目指す学生と話し合い、自身の体験などを踏まえた意見や考えを交流することができた。そして、多様な視点を得て、深い学びにつなげることができた。

その中でも、特に印象に残っている講義は、「授業実践講座」における「指導の個別化・学習の個性化」に関するものである。学級には、通級教室や特別支援学級に所属する子どもたちをはじめとした特別な支援が必要な子どもがいる。しかし、そもそも苦手は人それぞれであるため、学級の子ども全員に対し、多様な支援や指導が行われる必要がある。そのため、「指導の個別化・学習の個性化」の具体的な方法として、授業の説明を必要に応じて複数回行ったり、自身の興味・関心に応じ、ICTのロイロノートを使って学びを深め、共有したりするということを学んだ。これからは、ICTを効果的に利用したり、机間指導により子どもの学びの様子を的確にとらえたりすることにで、公平に学びを保障できるようにし、子どもの学びを支えていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

子どもの実態を把握して、その実態に応じた対応をとるということが、教師力養成講座で最も身に付き、成長した力である。子どもと毎日関わる中で、私の声の掛け方や指導が子どもに合わず、反抗的な反応があったり、子どもへのコミュニケーションがうまくいかずに悩んだりすることがあった。しかし、「子どもの反応は教員のコミュニケーションへの返答」というアドバイスをいただき、子どもの姿を変えるためには、まず自分の姿を変えなければならないのだということに気付いた。

そこから、子どもへ様々な関わり方を試し、ふり返り考察し、次に生かすというサイクルを繰り返すようになり、子どもの実態への対応力が身に付いた。また、担当の先生方とお話をさせていただいたり、様々な試みをすることによって、子どもへの関わり方や、学級経営の方法の引き出しも増やすことができて、教員としての意識を高めることに繋がった。

5　教職に向けた決意と今後の　課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座の中で、私は子どもに安心を感じさせるために「寄り添う」学級経営を心掛けてきた。その中で、「先生がいてくれたから楽しかった」「先生がいてくれてよかった」というような言葉を子どもたちからもらった。このことを踏まえ、私は、子どもを褒めることで子どもを育てたり、子どもの気持ちに寄り添い続けたりすることで子どもの不安を安心に変えることができるのだと確信した。子どもたちが主体的に行動することも、多様な人と繋がり新たな価値を見つけていくことも、全ては安心感が根底にある必要がある。だからこそ、私は、子どもに安心を感じさせることで成長を支える教員を目指す。

(2) 今後の課題

授業をさせていただく中で、自身の授業力の不足は大きな課題であると実感した。小学生が学校にいる時間の大半は授業の時間であるため、その授業時間は、子どもにとって楽しく、深く学び、成長できるものである必要がある。そのためには、子どもの興味・関心に応じた深い学びや、効果的にICTを使用した学び、子ども同士での対話の中で生まれる学びなどを充実させなければならない。それらを踏まえ、常により良い授業を求め、努力していく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「自分を上手く表現できない子に対する支援方法」

受講生氏名：堀池　古都美

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習や学生ボランティアにて、子どもたちと関わる中で毎日全ての児童と会話することの難しさを実感した。さらに、自分から話しかけることが得意な児童との会話が中心となり、児童との関わり方に偏りが生じてしまっていた。そこで、自分から話しかけたいけれど話しかけられない児童に対する支援方法を学びたいと思った。また、先生方にアドバイスをいただきながら、私自身が自分を上手く表現できない児童と継続的に関わることを通して学びを深めていきたいと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　児童の学校生活での過ごし方の観察

イ　当該児童の様子について、先生方への聞き取り

ウ　学校生活や研究授業、体験授業における実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

児童同士の人間関係を観察しながら、児童理解に努めた。そして、担任の先生に児童の学校生活の様子や先生方との関わり方について聞き取りを行った。その上で、一人一人の児童の実態に応じ、休み時間の会話の中で支援を行い、関係を築く方法や、授業内での発言を通してコミュニケーションを図り、支援を行っていく方法など臨機応変に対応することを心がけた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　休み時間における児童との関わり方

休み時間に１人で過ごしている児童全員が１人を好んでいるとは限らないということを学んだ。１人で過ごしている児童の中には、本当は友達と仲良く遊びたいけれど自分からは声をかけられないでいる児童もいるため、教員がその児童はどちらのタイプであるかを把握するためにも積極的に話しかけることが大切になってくると分かった。さらに、教員が他の児童と繋がりを持たせてあげることで、それをきっかけに友達と仲良く遊ぶ姿が見られたため、教員の支援の重要性を実感した。

イ　授業における児童との関わり方

自分を表現することが苦手な児童は、なかなか挙手をすることも少ないが、挙手をした際には発言する機会を設けるように意識した。そして、「この意見、どうですか」と全体に問いかけることで、自分の発言に対して反応してもらえたという実感が湧き、不安感を取り除くことができると学んだ。また、机間指導の際に、「よく考えられていますね」「とても綺麗に平仮名が書けていますね」というように声をかけることで自信がつき、挙手に繋がる様子が見受けられた。

ア・イともに共通して、支援を行う前よりも児童から積極的に話しかけてくれるようになったり、笑顔の場面がより多く見られるようになったりという変化が感じ取れた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の子どもたちと関わる中で必要な考え方や実践的な教育方法について学ばせていただいた。

特に、「京都府における人権教育」の講義が印象に残っている。「『人と人との関わり』や、『社会』の在り方によって、『人権』の在り方も変わる」という言葉から、教員がどのような人権感覚を持ち、学級経営を行うかによって児童の人権に対する考え方が変わるということを学んだ。また、「人権」はすべての人に保障されるものである反面、ずっとそこにあるものではなく、絶えず意識して守っていかなければ損なわれてしまうこともあるという言葉が人権教育について考え直すきっかけとなった。そこから、まずは教員が人権について考え、人権が侵害されている状況を許さない姿勢を示すことが大切ではないかと考えた。また、人権教育は事が起きてからでは遅く、日々の積み重ねが重要となってくる。児童に「包み込まれているという感覚」を実感してもらうことのできる学級づくり・学校づくりを目指していく。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

授業実践では、メリハリのある授業を展開していく力が身に付いた。教育実習での授業を振り返ると、45分間を一定のトーンで進めてしまうことが多くあった。その反省を生かし、教師力養成講座における授業では45分の授業を15分・15分・15分の３つに分け、「説明を聞く時間」、「考える時間」、「集中する時間」というようにそれぞれの時間にテーマを決めて授業を組み立てるように意識した。そうすることで、児童の集中力も上がり、積極的に授業に取り組む姿勢が見られた。さらに、メリハリのある授業を展開することで、授業者としても時間の配分が意識しやすく、児童の学習面の実態が把握できるようになってきた。

(2) 児童理解

児童の気持ちに寄り添えるような言葉の掛け方を身に付けた。授業中に立ち歩いている児童に対して、「座りましょう」と声をかけるのではなく、「今はどんな気分ですか」と問いかけることで、なぜ児童はこのような行動をとっているのかが見えてくることに気が付いた。表に現れている言動だけに目を向けるのではなく、心の奥底にある気持ちを引き出し、寄り添うことが大切であると分かったことで自身の成長を感じた。児童と関わる際は、児童の視点に立ち、言葉に耳を傾けられる余裕のある教員でいようと思う。

5　教職に向けた決意と今後の課題

教師力養成講座を通して、「教員」という職業が身近でより具体的な目標へと変わっていった。子どもの成長の支えになれるのは、教員の魅力の一つである。私がかけた一つの言葉で、児童の目が輝いたり、「できた」「わかった」を引き出す事ができたりする職業は他にはないと改めて実感できた４ヶ月間だった。授業をしていても、一生懸命学ぼうとする姿勢から私も子どもたちと共に成長していきたいという気持ちが芽生えたのは、教育実習よりも深く教職について学ぶ機会が得られる教師力養成講座だったからであると思った。一方、たくさんの授業を経験させていただく中で、児童の学習意欲を引き出し続けることが難しいと感じた。私の目の前にいる児童の実態を把握し、学習が生活の役に立つことを実感できる授業になるよう心がけたい。

次は私が教員として、学級担任として子どもたちの成長をより間近で支えていきたいと強く思う。今後、教員として今以上に子どもたちの成長を支援するために、導入の工夫を行い、主体的・対話的で深い学びを追求していくことを課題として学び続けていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の主体性を引き出す授業づくり」

受講生氏名：中川　敦貴

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す中で、教育実習や教員養成サポートセミナーでの授業実践を通して、児童から学びの主体性を引き出すことの難しさを実感した。この経験から、本講座を通して主に授業力の向上を念頭に置きたいと考えた。児童が主体的に学習へ向かえるようにするための担任の先生の工夫やそれに対する児童の反応の観察等を通して、私自身も実践につなげていきたいと考え、本演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　担任の先生の授業における工夫と児童の反応を見学する。

イ　担任の先生が授業づくりで意識していることを聞き取る。

ウ　見学した授業を、自分が担任であればどのような組み立てにするか考える。

エ　ねらいを持った自身の体験授業・研究授業と振り返りを通した省察を行う。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期は５年生、後期は６年生の学級で演習をさせていただいた。担任の先生による授業の見学や大切にされていることの聞き取りを通して、主体性を引き出すためにどのような工夫がなされているのか学んだ。また、担任の先生の働きかけに対する児童の反応を見るということも大切にし、自分ならどのように授業を組み立てるかといったことを考えた。その上で、体験授業や研究授業では、児童が興味や関心を持てるような学習活動の工夫や声掛けを特に意識して行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童理解・信頼関係づくりの大切さ

初めて高学年の児童と関わるという中で、教師と児童の信頼関係を作ることの難しさを身に染みて実感した。初めは距離感をつかむことに苦労したが、担任の先生の関わり方を見ながら、日々の児童の成長や変化をよく観察し、それをしっかりと伝えることを通したコミュニケーションを心掛けた。このような会話から、児童との的確な距離感を形成でき、児童からも積極的に話しにくるようになった。計６回授業をさせてもらったが、徐々に私の児童理解が深まり、児童に合った学習活動を実践できるようになった。また、児童も意見や考えを積極的に発信できるようになったと感じる。学びにつながる授業にするには、児童との信頼関係、より良い学級経営が不可欠であると学んだ。

イ　学びの主体性を引き出すための工夫

主体性を引き出すためには、児童が興味や関心を持てるような工夫が必要であると学んだ。特に、授業の導入の重要性を感じている。私自身の経験や児童にとって身近な事象などと合わせながら、児童から課題や疑問を引き出して授業を進めるということが大切であると学んだ。また、学びの主体性は、１時間の授業の中だけにとどまるわけではない。授業の終末では、学んだことを振り返る時間をとることで、学びが整理できるだけではなく、新たな課題を見出すこともできる。それを活かして、自主学習等を通して学んだことをより詳しく調べようとする児童も見られた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

第６回「夢・未来」講座における授業実践講座では、学習者として、児童の声で作る授業をテーマとした模擬授業に参加した。児童をイメージした授業づくりや、導入で児童間の意見や考えのズレから疑問につなげて課題を作り、解決するという形を心掛けることが、児童主体につながるということを学んだ。

演習生同士の協議や集団討論等を通して、講義での学びを整理するだけではなく、各演習校での実践とつなげた対話を通して、新たな発見や気づきがあった。それを活かすことで、私自身の演習において、実践の幅が広がった。教員となった際には、今以上に様々な問題や悩みが生じると思う。その時には、一人だけの力で解決しようとするのではなく、他の教職員の方々との連携を大切にする。多面的に物事を見ることを心掛け、協働的に解決へと導くという意識を持つ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業について

これまで経験した授業は、計画通りに進めようとすることに必死で、児童の反応や表情を見る余裕がなかった。授業づくりにおいても、児童の実態に合った学習活動を考えることができていなかった。今回、６回の授業実践を通して、徐々に児童と対話をするということを意識しながら、児童とともに授業を作り上げるという形ができつつあった。また、児童に対して教える内容を「どのように教えるか」を意識して、設定する学習活動にねらいを明確にした授業の実践ができるようになった。今後は、１年間を通して児童に身に付けさせたい力を明確にしたい。その上で、学級経営とも関連させながら、その力を身に付けさせることも踏まえた学習活動や声掛けについても考える。

(2) 学習支援について

特に算数において、学習に課題のある児童に対して学習支援を行った。初めは児童理解ができておらず、児童が受身に感じる支援になっていた。しかし、徐々に信頼関係が作られていく中で、児童から「何をやればいいのかわからない。」「振り返りって何を書けばいいの？」といった学習に関する質問が出るようになった。この経験を通して、児童との信頼関係作りの大切さだけではなく、学習の仕方がわからず、学びたいのに学べない児童がいるということに気づいた。学ぶことに困難を感じている児童に対して、寄り添う気持ちを念頭に置き、一人一人の学びを断たないような手立てを考えるきっかけとなった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

前期･後期と学年を持ち上がったため､中には４か月に渡って関わってきた児童もいる。そのような児童の日々の変化や成長に直接携わることができたことで、教職の魅力や楽しさを再確認した。そして教員になりたいという気持ちをより一層高めた。児童理解に向けた様々なアプローチに挑戦したが、そのほとんどがうまくいったわけではなく、試行錯誤を繰り返した実践となった。この４か月で築いた信頼関係作りへの過程や手法は、今後に活かしていきたい。

(2) 今後の課題

私の課題は､｢想定外｣に対応する力である｡授業実践でも､計画通りにいかないときに、臨機応変に進めていくということが苦手であった。また、児童の予想外な言動への対応や不適切な言動への指導については、まだ担任として実践していける自信がない。今後も学校現場では、児童と様々な場面で積極的に関わることを大切にする。さらに、専門的な知識の習得に努めることを通して、自信を持って指導ができる教員になる。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童に寄り添った授業づくりと学級経営」

受講生氏名：谷口　翔一

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

「授業づくり」と「学級経営」は、どちらも切り離して考えることができない大切な要素である。これは、教師力養成講座を受講する以前での教育実習や学生ボランティアで感じていたことだ。そこで、この演習を通して先生方がどのようにして児童と関わりながら授業づくりや学級経営を行っておられるかを観察するだけでなく、私自身が児童に寄り添い、授業づくりや学級経営について研究したいと考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　各学級での担任と児童の関わり方や授業の観察

イ　指導補助や休み時間を通した児童との関わりによる省察

ウ　授業実践による省察や実践に対する教職員からの指導

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期では高学年、後期では低学年と発達段階の異なった学年で演習に取り組んだ。学級では、担任と児童との授業の内外での関わり方の違いや指示、発問の工夫などを観察した。観察だけでなく、積極的に児童と関わることで児童理解に努めた。演習での体験授業や研究授業では、どのように工夫すれば主体的に取り組めるのか、思考を深めることができるのか等を考え、日常生活や体験と結び付けた授業づくりを心がけた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業について

授業を行ううえで、教材研究等の準備が重要だと感じた。準備をすることで教師は、余裕をもって児童を見取ることができる。一人一人の児童を見取り、適した発問や指示をすることで児童の考えがより深まりやすくなると感じられた。また、活動を取り入れることで児童が積極的に授業に参加でき、より主体的・対話的で深い学びが実践しやすくなる。そして、このような学びをさらに深めるためには、日常生活と関連づけることが大切だと学んだ。

イ　生徒指導について

演習後期は、低学年の学級で演習を行い、その際に児童間のトラブルに対する指導を経験した。そこで、児童に寄り添って両者の主張を聞き、教師は中立の立場になることの大切さを学んだ。偏った主張だけで物事を判断してしまうと児童だけでなく保護者からの信用まで失ってしまう恐れがあるとご指導いただいた。小さなトラブルを見過ごさず、一人一人の児童と真摯に向き合って、落ち着いて両者の主張を聞き、中立の立場になって指導を行うことが大切だと経験を通して学ぶことができた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、希望校種に関わらず、教員を志望するにあたって身に付けておきたい知識や教育課題、様々な教育実践について学ぶことができた。また、学びから互いの考えを共有することで、自らの学びを深めるだけでなく異なった考えを吸収することができた。

その中でも特に第13回のICTを活用した授業実践に関する講義が印象に残っている。ICTを手段としてどのように活用すればよいのか考えたことが、児童に寄り添った「分かる授業」を展開することを強く意識するきっかけとなった。授業実践において、児童が積極的に授業に参加するために、ICTを効果的に活用することを意識して臨むことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座で身に付けた力や成長したことは、大きく分けて２つあり、１つ目は、授業力である。特に教材研究ついて、これまで以上に考えて取り組むようになった。教科書や学習指導要領を研究し、児童に身に付けさせたい力は何なのか、そのためにどのような指導の工夫をすればよいのかなどを繰り返し熟考した。導入でのひきつけ方、発問の工夫、的確な指示、道徳であれば揺さぶり等を意識して教材研究に励んだ。すると、これまでは拾うことができなかった児童の表情やつぶやきが拾えるようになった。児童に寄り添って授業づくりを行うことで、「児童が生き生きと取り組む授業」を展開することができたため、授業力は向上したと考え
る。

２つ目は、児童や先生方とつながる力である。授業を考えるにあたって、児童のことを理解することは、重要なことである。そこで、休み時間等の生徒指導の時間を活用して、児童と積極的に関わることを意識して行った。児童の興味あるものを尋ねたり、一緒に遊んだりして関係性を深めることで学級の児童の理解を深めていくことができた。また、自分から見た児童の姿にとどめることなく、学級担任から見た児童の姿を知ることで多様な見方から授業づくりを行うことができた。このような点から、児童や先生方とつながる力が身に付いたと感じた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座での４カ月間の学びを通して、より一層小学校教員を志望する思いが強くなった。短い期間であったが、先生方の学び続ける姿勢を見ることができたり、講座を通して様々な知識や考え方を学んだりすることができた。そして何よりも、４カ月間での児童の成長を見ることができ、教職の良さを実感することができた。これからも児童とともに学び続けられる教員になりたいという思いを再確認することができた。

(2) 今後の課題

実践を経て痛感したことは、引き出しの少なさである。先生方の授業を拝見した際に、自分では思いつかないような指導の工夫や言葉選び等、１つのことに対するいくつもの引き出しが見られた。様々な経験や学びから得た引き出しを適切に活用することができるよう、日頃から学びの姿勢をもって自己研鑽に励む。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人の自立を促す教師の指導方法」

受講生氏名：髙橋　胡桃

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習や教員養成サポートセミナーでは、支援を要する児童への支援と授業の進め方をテーマに演習に取り組んだ。その中で支援を要する児童もそれ以外の児童も全ての児童が一体となって授業に取り組んでいることを学んだ。そこで、全児童へ対象を広げて学校教育の目標ともいえる「自立」につなげる指導方法を学び実践したいと考え、本演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　担任教諭の授業や生徒指導における言葉かけの観察

イ　担任教諭の指導の意図を中心とした質問

ウ　体験授業や研究授業における自立を促す言葉かけの実践

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

まずは児童の名前を呼び挨拶をして対話につなげたり、休み時間に遊んだりして児童理解を深めた。授業支援では児童の意志で表現できるよう言葉を引き出す言葉かけを行った。

また、前期後期ともに担当学年全ての学級で授業実践を行った。実践後すぐ振り返りを行って成果と課題を整理し、次の授業で何を改善するかを明確にして実践することを繰り返した。授業観察で学んだことを活かし、具体的な言葉で褒めることも実践した。

(2) 演習校で学んだこと

児童が自ら考えて行動するには、やりたいという気持ちや、課題をやる必要性を理解していることが土台にあることを学んだ。そこで次の視点から述べる。

ア　児童の自立を促す「言葉かけ」

児童の良い言動に加え「当たり前」ができている時にも褒めると、児童は教師が見てくれていることを感じ取って頑張る意欲につながる。また指導する場合も含めて粘り強く何度も言うことで、少しずつ意識が変わり行動へとつながる。その他、あえて言葉かけをせず沈黙をつくって、児童自身が考え気づく時間を与えることも重要である。児童の様子を理解して言葉かけを変えていくことが求められる。

イ　児童の自立を促す「授業」

学級には常に学級の小さな目標があり、それを達成するという循環を大切にしていた。具体的に、百マス計算の正解数で基準を超えたら席替えをするなどの目標を設けて、児童の頑張る意欲を引き出していた。特に中学年では６年生を送る会の後に行事がないため、目標達成の喜びを共有して頑張る意欲が継続できる環境を整えていた。

また、低・中学年の児童は教師による説明よりも実演によって、新しい発見や体験につながり、児童のやりたいという気持ちを引き出すことができた。

ウ　児童の自立を促す「行事」

６年生には、入学式や１年生を迎える会で教室への誘導など下級生への支援の機会を与えていた。上級生としての自覚を芽生えさせることができ、その後の体力測定の協働や読み聞かせ等の下級生との関わりや支援への活発化につなげていた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教師になる上で疑問や不安に感じる内容、教育時事、京都府の教育施策等、幅広い分野にわたって知識や学校現場での活用方法を身に付けることができた。

なかでも第８回「特別の教科　道徳」の講義が特に印象に残っている。道徳教育は道徳の授業だけで行うものではなく、思ったことを言い合える学級経営や１日１日の指導の積み重ねが重要であることを学んだ。児童の思いに常日頃から向き合い児童の実態を理解し、それを基にして考える授業や学級経営を大切にしていきたい。授業と学級経営は一体である意識をもって取り組む大切さを学んだ。

また講義での演習生同士の話し合い活動で、多様な考え方に触れたり様々な場面を想定した対応を考えたりして学びをさらに深めることができた。学校現場においても同僚間での話し合いの機会を大切にしていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

講義での話し合いやレポート、演習後の日誌や話し合いにおける学びを次の演習ですぐ実践する習慣を身に付けることができた。この「学びから実践へ」を今後も一体的に行う。

(1) 児童への言葉かけ

演習では児童の心に響く褒め方を身に付けることができた。演習前までは机間指導等で個々に褒めていたが、本演習では「話を聞く姿勢ができている人は目が合います」など学級全体の前で個々の良さを褒めることができた。低・中学年の場合、一部の児童の行動を褒めると、他の児童もやろうという気持ちになり行動の変化につなげることができた。「前を向きましょう」という指摘でも行動は変わるが、褒められる方がやろうという気持ちが高まりやすいことを実感し習得することができた。また教師が見てくれていることを児童が感じ取れるように、良いところを具体的に褒める力も身に付けることができた。

そして児童の思いを引き出す言葉かけの重要性にも気づき実践できるようになった。図画工作の授業で「これは何を作っているの？」や困っている児童には「どうしたの？」など児童の話を聴く言葉かけで、常に児童の思いに寄り添う姿勢を身に付けることができた。

(2) 様々な人と関わり合ってさらに学びを深める姿勢

「夢・未来」講座での演習生同士の話し合いや、授業実践前の模擬授業及び事後指導での演習生や担任教諭、指導教員、管理職の先生方から助言をいただいて学びを深める機会が非常に多かった。児童側から見た視点は授業実践と並行していると見落とす部分がまだ多くあることからとても貴重な機会であった。自身の考えと他者から見えた視点をうまく融合して新しい考えを生み出すことに喜びを感じながら行えたことが成長した点である。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教職は児童や他の教職員と学び合いながら取り組むこと、また児童のために尽力する教師のやりがいを実感し、自分も学び続ける教員でありたいという思いが強くなった。本演習では、演習のオリエンテーション時の校長先生の言葉「指導が児童にどう届いたかが重要」について担任教諭や指導教諭から助言をいただきながら考えを深めて実践した。教師になる上での基本姿勢であると実感し、児童の姿から考え続ける教員を目指す。

(2) 今後の課題

今後の課題は、学級全体を見る力である。学級経営や教科指導は常に30人程度の児童がいる中で指導する必要がある。個々の児童のつぶやきを拾いつつ学級全体で学びを深めながら進めていきたい。まずは列や班ごとに児童の様子を見て取ったりICTも活用したりしながら、段階的に少数から全体へと視野を広げて力を付けていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人が居場所を感じ、安心できる学級経営」

受講生氏名：大橋　昂河

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、児童に学校を好きになってもらいたいという思いがある。そのために、児童一人一人が居場所を感じ、安心できる学級を作りたいと考えている。児童が学級に居場所を感じ、安心できることは学習活動や学校生活における基盤となると考えたためである。

また、教育実習やサポートセミナー等で様々な背景を持つ児童と関わってきた。その際に、居場所があり安心できる学級の大切さを感じた。そのため、今回の演習では学級経営を行う際に、どのように児童と関わり、どのような工夫があるのかを具体的に学びたいと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　担任の児童への言葉かけや指導方法の観察。

イ　担任や指導教員などをはじめとする先生方への聞き取り。

ウ　体験授業や研究授業、休み時間の活動における実践と考察。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前半は４年生、後半は２年生の学級で演習に取り組んだ。担任がどのように児童と関わり、どのような指導を行っているのか観察した。授業以外にも休み時間の関わりや給食の時間の関わりなど、先生がどのような点に留意しながら児童と接しているのかを質問し学級経営について学んだ。さらに、担任の先生から児童の特性を教えていただき、それぞれの特性を持つ児童にあった接し方をすることを心がけた。

また、積極的に児童とコミュニケーションをとり児童理解に努めた。児童の努力している姿を褒めたり、休み時間に児童と一緒に遊んだりすることで信頼関係を築いた。児童が居場所を感じ安心できるためには、教師との信頼関係が重要になると考えたため、積極的にコミュニケーションをとった。

(2) 演習校で学んだこと

ア　安心して生活できる環境づくり

担任は、率先して廊下に落ちているゴミを拾ったり、トイレのスリッパを揃えたり、児童が帰った後に教室の掃除を行っておられた。些細なことだが、小さな乱れが大きな乱れとなる。児童にとって安心できる場であるために普段の生活から環境を整えておくことの重要性を学んだ。

イ　児童との信頼関係

児童は担任のことを信頼している様子だった。それは、普段から担任が積極的に児童と関わり児童の話をしっかりと受け止めて聞いているからだと感じた。信頼関係ができているからこそ、担任が児童に厳しく指導した際も、反発することなく素直に担任の指導を受けていた。児童が居場所を感じ、安心できる学級をつくるうえで、教師と児童との信頼関係は重要であると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育施策やその現状、どのような力が児童に必要なのかなど、学校現場で求められる教員の力について多面的に学ぶことができた。また、他の演習生と議論をすることで良い刺激になり、様々な考え方に触れることができ学びが多くあった。

特に、第10回の講義が印象に残った。「主体的・対話的で深い学び」に関する内容で、具体的な実践例をもとに考えることができた。このような学びを実践していくにあたり、児童が安心してクラス内で発表できる場やクラスメイトに自分の発表を聞いてもらえる環境が土台として必要であることを学んだ。自分の意見を受け止めてもらえる環境をつくることは、主体的・対話的で深い学びが実践できることと同時に、安心できる学級づくりにも関連していると感じた。自分の意見を受け入れてもらえることで、児童は自信が持てるようになる。これが学級に対する居場所感や安心につながる。このことから、授業と学級経営は密接に関連していると学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童とのコミュニケーション・褒める力

今回の演習では、児童と積極的に関わることを目標とした。積極的に話しかけてくれる児童はもちろんのこと、なかなか話しかけてこない児童にも私から話しかけるようにした。すると、何日かたつと児童が心を開いてくれるのが分かった。児童との関わりが増えるにつれて児童理解が深まり、新しい一面を知ることができた。

また、「褒める力」が身に付いた。先生方から褒めることを意識すると良いというアドバイスをいただいた。児童が努力している姿や学習の成果などを褒めることで、児童の自己肯定感を育むことができた。そのためには、日頃から児童とよく関わり、児童の様子をよく観察しておく必要があると学んだ。このように、積極的にコミュニケーションをとり児童の様子を観察する力や褒める力が身に付いた。

(2) 児童の実態にあった授業づくり

児童の実態に応じて授業をつくることを意識した。これまでの校外学習で学んだことを授業の導入に用いた。児童は興味をもって授業に取り組んでいた様子だった。また、調べた内容をまとめて班で発表する活動をこれまで熱心に取り組んでいたため、そのような活動を授業に取り入れた。

また、４年生と２年生で授業を行ったが、児童に対する話し方を工夫した。２年生に対しては、指示や話し方をより細かく丁寧に行った。このように学年や児童の学習内容に応じた授業をすることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教職のすばらしさや大変さを実感することができた。大変な部分はあるが、児童が一生懸命に取り組む姿や元気よく遊んでいる姿を見ると、教職のやりがいを感じることができる。児童に学校を好きになってもらえるように、よりよい学校生活を送ってもらえるように、日々授業力の向上や学級経営のスキルの向上に努めていく。また、児童とコミュニケーションを積極的にとり信頼関係を築いていけるようにする。

(2) 今後の課題

今後の課題は、個に応じた指導である。授業内容を理解できていない児童がいたときに、どのように対応していくかが難しいと感じた。児童一人一人が個別最適な学びを行うためにはどのように指導するのかを考えていく必要があると感じた。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童が自発的に参加する授業づくり」

受講生氏名：上治　来夢

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教員になるためには、授業づくりの上達が必須である。大学の教育実習での授業実践の中で、教員が一方的に教える授業になってしまったという経験がある。また、公立学校インターンシップで授業観察をさせて頂いた際に児童がとてもワクワクしており、「学びたい」という意欲が見られた。児童が自ら学びたいと思うことは、児童の学力向上に直結すると考えている。将来教員になった時にクラスの児童に「学ぶことが楽しい、もっと学びたい」と思ってもらいたいと思い、今回の演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　学年の全クラスで授業観察を行い、どのような発問、声掛けが効果的か学ぶ。

イ　積極的に児童と関わり、個々に合わせた指導が行えるようにする。

ウ　観察をして学んだことを元に、体験授業や研究授業の中で実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

配属学校では、第１学年と第４学年の全学級に入らせていただき、それぞれの学級の雰囲気や、児童の実態が異なることが分かった。第１学年の道徳の授業では、授業についていけないことが自発性を失ってしまう原因だと考え、挿絵を効果的に使ったり、登場人物のセリフを児童に言わせたりなどを通して、意識して物語の内容を把握させたりした。その結果、「私もやりたい」と意欲的に全員が参加できる授業を行うことができた。同じく第１学年の算数の授業では、あえて正解を言わない方がいいという先生方のアドバイスをもらい、児童に考えさせる活動を多く取り入れた。第４学年の道徳の授業では、対話型の授業を行い、児童の発言を更に深掘りしていくということを行った。すると、挙手して考えを発表する児童が増えた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　他者との交流について

自分の考えを他者に聞いてもらい、交流をし、自分とは違った価値観を取り入れることで、「こんな意見もあるのだ」と自分の考えを客観視することができ、それが学習意欲に繋がるということが分かった。しかし、ペアワークやグループワークをすることは、とても大事であるが、中には、なかなか話し合えない児童もいる。そのような児童には、教師が声を掛け、適切な支援を行うことで話し合いができていた。教師は常に児童一人一人を理解し、個に応じた指導や支援を行っていかなければならないと感じた。

イ　児童が学びやすい環境を整える

演習学級では、児童の学習の小さな壁を無くすという活動をされていた。問題に悩んでいる児童がいれば、悩んでいる原因を見つけ、対策をされていた。例えば、一度に多くの情報を処理することが苦手な児童に、算数の筆算が予め書かれているワークシートを個別に手渡されると、児童がスラスラと取り組む姿が見られた。普段から児童の様子をよく観察し、その児童の実態に合った指導をしていく必要があるとわかった。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、ICT活用や道徳教育、英語教育や京都府の教育についてなど、教育に携わる様々なことを学べた。私はその中でも英語教育について学んだ際に「思わず話したくなる発問」を実感したことが印象的である。自分の生活に関連付けたことの発問であったため、知りたいと思い、話し合いの指示の前に、つい隣同士で確認をする場面があった。その時に児童が主体的に学習を行う動機付けはこのように児童自身が知りたいと感じる事が大切なのだとわかった。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業実践において

演習校では、たくさんの授業実践の経験をさせて頂いた。１回目の授業では指導案を作成し、自信を持って教壇に立っても、「教える」ということばかりが先行してしまい、児童主体の授業を行うことが出来なかった。授業を重ねるごとに、この授業では何を教えたいのかという軸を定め、それに合わせた児童の活動内容を設定した。児童とのコミュニケーションの中で授業を進め、予想外の回答に対しても、全員への問いかけに派生させていくことで考えを深めるという授業を行うことが出来た。教室の中でついてこられない児童や集中していない児童がいないか確認しながら授業を行うことはとても難しいことではあったが、視野を広くするという力を身に付けることができた。

(2) 教員の業務について

学年の全学級で演習に取り組んだことで、先生方の授業の進め方や学級経営の仕方などに様々な特徴があることがわかった。ICT活用が教員の業務の短縮に繋がったり、教材を準備して児童が楽しく学べる環境を作ったりする、工夫をたくさん知った。その中で、自分の先入観や固定観念で物事を判断せず、多方面から考えていく必要があると感じた。時代が変化していくと共に目の前にいる児童も変化していくため、教員は絶えず学び続けていく職業であると改めて実感した。また、卒業式や始業式など節目となる行事に参加させて頂き、教員としてどのような行動をしていく必要があるのかを自分の目で見て学ぶことができた。

(3) 児童との適切な距離感について

学級経営を行う上で、児童一人一人を理解していくことが大切であると演習を通して感じた。演習をする前は、児童に嫌われることを恐れ、厳しく注意をすることができなかった。しかし、今では、児童の安全と安心を第一に考え、その場に応じたメリハリのある指導を行うことができる。また、授業以外でもその児童の得意・不得意を見つけることで、より個別最適な学びに繋げることができると学んだ。低学年と高学年では、声掛けや指導方法などにも違いがあるが、どの学年でも共通して言えることは、児童が主体となって物事を進めているということだった。児童を深く知るために教員から積極的に声掛けを行い、信頼関係の構築をしていくことが大切であると身をもって感じた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

教師力養成講座を通して、教員になりたいという思いがさらに強くなったと同時に、思いだけでは務まらないということも実感した。学級経営を行う上で大切なことや、地域や保護者との関わりで気を付けなければならないことなど、教員にとって必要な資質や能力は果てしなくある。その中でも、自分の中で一番強い思いである「子どもを第一に考える」ということを忘れずに業務をこなしていきたい。ICT活用など、進化し続けなければならないことも多いが、何事もポジティブに捉え、教員の働き方改革などに生かしていきたいと考える。そのためには、常に学びを続け、どんな変化にも柔軟に対応できる人間でありたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「授業づくりと学級経営の関連」

受講生氏名：下村　優月

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

先生は、学級で授業をすることの他に学級経営も行なっている。日々の学級経営での信頼関係の構築により、授業が活性化している。本講座では、長い期間演習が行えるため、自分の研究授業や体験授業の際にも児童との信頼関係を構築し､授業に挑みたいと考えた。そのために、先生の学級経営を観察し、それらが授業にどのように影響を及ぼしているのかを学びたいと考えた｡学級経営をどのように授業づくりに活かしているのかを学びたい。

(2) 研究方法

学級を観察し、担当学年の先生が学級経営をどのように行なっているのかを学び、授業での活用方法（児童の積極性、学ぶ態度等）についても観察を行った。また、放課後等に先生へ授業づくりで意識していることを伺い、学んだ。自分自身も授業をする学級で積極的に関わりを持ち、児童の実態を把握した上で授業づくりを行った。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

学級経営について、前期では年度末の２年生、後期では年度始めの５年生の学級に入り、担任の先生の学級経営について学んだ。演習では、学習指導だけでなく、生徒指導も行ったため、児童と密接な関わりを持つことができた。２年生では、児童が主体的に動くことができるような働きかけがされていた。例えば、ベル着を全員ができるとポイントが貯まり、目標の半分達成で宿題なし、目標達成でお楽しみ会が開催されるというものであった。このような児童にとって明確な目標が掲げられていると、児童も目標達成のために、主体的に声かけを行ったり、行動したりするようになる。このような学級経営により、低学年である２年生の学級には、主体的に行動する姿や、まとまりのある様子が見られた。児童が主体的に行動し、まとまりのある学級では、授業でも主体的に考えを発表する姿や積極的に授業に参加する姿が見られた。５年生では、授業や学校生活の学級全体でのルールがしっかりと決められており、児童はルールに沿って日々の生活を送っていた。児童は、ルールに基づいて行動することで、一人ひとりが責任を持って行動することができていた。どちらの学年でも、担任の先生の学級経営について観察を行ったり、担任の先生へのインタビューに行ったりすることで、その学級についてよく学んだ。学級経営に合った関わり方を行い、積極的に児童とコミュニケーションを取ることで、信頼関係を築くことができた。その学級に合った学級経営を行い、児童と信頼関係ができていると、授業への積極的な参加が見られることを授業実践を通して学んだ。

演習校で学んだことは、さまざまな行事の参加から学年の壁を超えた縦のつながりの重要性や広い視野を持った児童への関わりである。年度替わりのさまざまな行事や体力テストへの参加から、高学年が中学年や低学年のお手本となるような行動を取ることで相乗効果が生まれることを学んだ。体力テストでは、高学年が低学年に教えることで、高学年は自己有用感を実感できる取組となることを学んだ。

演習校では、さまざまな学年を担当するだけでなく、同じ学年の全学級（３学級）を担当した。多くの児童との関わりとなるため、広い視野を持って関わることが大事であると学んだ。また、学級の中でも広い視野を持った関わりが大事であるということも学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、各分野に特化した講義を受け、知識を定着させることだけでなく、授業への活用法について学ぶことができた。また、教育長や現場で活躍する先生方から、「教師のやりがい・使命」、京都府教育振興プランについてお話を聞き、教師という仕事について、教師としての自覚を持つことで児童にとって効果的な関わり方ができることを学んだ。私が教師の使命として学んだことは、児童生徒の求める出会いを提供することである。児童は、学校生活など日々の生活の中で、いろいろな出会いを求めている。人との出会いはもちろん、学びの出会い等も教師が出会う機会を与えることが重要である。また、児童理解と学級経営についても学び、児童理解をするためには、学級経営の充実を図ることが重要である。各分野の講義では、どのような社会背景があり、どのような指導法がそれぞれの児童に合うのかを学ぶことができた。児童に何かの力をつけさせるために、ICT教育を活用したり、授業に工夫をもたせたりすることが大事であるということを学んだ。力をつけさせるための手段として、私たち教師が学び、実践に活かしていくことが大事である。また、今の変化の激しい時代に沿った教育観や「令和の日本型学校教育」についても現状や課題とともに学ぶ機会となった。各講義では、演習生同士でテーマに沿った協議も行ったため、意見交流の中で、さまざまな教育に対する考え方を聞くことができた。自分にはなかった考え方を聞くことができ、これからの実践方法を学ぶことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座では、現在の教育課題や学校現場に合わせた指導の実践力を身に付けることができた。「夢・未来」講座では、さまざまな分野の教育課題や実践方法について学んだ。演習校での実習の中で、課題に直面した時に、講座で得た学びを活かして行動することができた。講義やグループ協議の中で、自分ならどうするかを常に考えることができていたため、それらを学校現場で発揮することができた。また、児童に合わせた授業実践力を身に付けることができた。長い期間の関わりの中で、学級の児童を理解し、それをもとに授業づくりを行った。そうすることで、授業づくりでは、学級の雰囲気や個別最適な方法に合わせて授業に工夫をもたすことができるようになった。児童の成長や理解度に合わせた授業づくりを行うことで、授業では児童の積極性や学びに向かう姿勢を感じることができた。授業実践から、児童にとって学ぶことが楽しいと思える発問の工夫や生活と結びついた内容を導入では行うことなどの重要性について学んだ。授業実践を重ねていき、前回の課題点を活かすことで、より児童に向き合った授業づくりが行えるようになった。最後に、教師力養成講座では、全体を通して人とつながる力を身につけることができた。「夢・未来」講座では、グループ協議を行う中で、京都府の教員を目指す同じ仲間としてつながることができ、さまざまな意見交流を行うことができた。また、演習校では、指導教員、担任の先生、管理職の先生方から学校や学級について多くのことを学ばせて頂いた。自分が学んだことを先生方と共有しアドバイスをしていただくことで、より具体的な活用方法を身に付けることができた。多様な人とつながる力を自分自身も身につけることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

これまでの学びや経験から、私は考えぬく力を大切にしていきたい。児童の行動や発言等に対して、「なぜ？」という自問自答を常に行っていく姿勢を大切にしたい。考えぬく力を身につけることで、児童理解が深まり、より良い児童との信頼関係が構築されていくと考える。また、自分自身でも、日々の教員生活の中で、小さなことに気づき、考えぬく姿勢を大切にしていきたい。また、変化の激しい時代にあって、自分一人で解決しようとせず、教師力養成講座で身に付けた人とつながる力を活用し、チーム学校の一員として動いていきたい。学校という場所で、児童が信頼できる存在でありたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「自己肯定感を育む指導や支援」

受講生氏名：西田　隆哉

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

現在、日本人の自己肯定感の低さが問題になっている。自己肯定感の向上は、学力向上や社会的自立に大きな影響を与える。自己肯定感を高めることはとても重要である。授業や学級経営を通して、児童の自己肯定感を育みたい。児童の自己肯定感を育む指導や支援をするためにはどうしたらよいのかを研究したいと思い、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　配属学級において、担任の先生の指導方法や児童への声掛けの工夫を観察

イ　体験授業や研究授業における実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第１学年、後期は第４学年で演習をさせていただいた。授業では、児童が楽しんで学習に取り組めるような工夫を行い、学習意欲を高められるように努めた。机間指導では、些細なことでも児童が頑張って取り組んでいることに気づき、肯定的な声掛けを行うようにした。

(2) 演習校で学んだこと

ア　一人の児童を褒めることでの相乗効果

褒められるというのは誰しもが嬉しいと思うものである。一人の児童が良い行いをした際にクラス全員の耳に届くように褒めることで､他の児童たちが｢私も褒められたい｣「〇〇さんに負けたくない」などと思い、意欲的に学習に取り組む様子が見られた。また、褒められることで自信を持ち、授業内で挙手して発言する児童が増える。教師の声掛けが児童に大きな影響を与えることを改めて実感することができ、児童に対する発言に注意する必要があると感じた。

イ　指示や説明の簡潔化

授業を行ったり授業を観察したりする中で、指示や説明の重要性に気付くことができた。指示や説明は、児童が学習内容を理解したり授業をスムーズに進めたりするために重要なことだと学んだ。しかし、ただ指示や説明をすればいいわけではない。長すぎたり多すぎたりする指示や説明だと理解するのが難しくなる。指示や説明は簡潔に分かりやすく行うことが重要であり、教師が教材研究をきちんと行い、学習内容を理解する必要があると学んだ。

ウ　児童との関係づくり

指導や支援を行う上で、児童と良い関係を築くことはとても大事なことだと学んだ。演習の１ヶ月目は上手く児童たちと関わることができず、授業や机間指導もうまく行うことができなかった。担任の先生のアドバイスをいただき、受け身になってしまっていた気持ちを改善すると児童たちと上手く関わることができ、授業でも挙手してくれる児童が増えた。児童と良い関係を築いていくためには、自分から積極的に児童たちに関わっていくことが大事だと学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教員として身に付けるべき資質・能力、現在や今後の教育課題について学ぶことができた。その中で、特に印象に残っている講義が２つある。

(1) 道徳教育について

道徳は他の教科と違う点が多々ある。道徳は数字で評価はせず、認め・励ます文章評価をするので、児童一人一人に肯定的な声掛けを行うことが大事だと学んだ。道徳は共に考え、学んでいくものなので、児童が考える時間や発言する機会をできるだけ多く取れるようにしていく。また、思ったことを自由に出し合うことのできる環境づくりをしていく。難しい題材を扱う場合、教師の説明が多く教師主体の授業になってしまいがちだが、教師と児童が共に考え、学ぶことを意識して授業づくりを行っていきたい。

(2) 特別支援教育について

特別支援教育において、「選択肢を与える」ことの重要性を学ぶことができた。障害の有無を問わず、できるだけ同じ場で共に学ぶためには、一つのやり方に縛られないことが重要だと感じた。子どもによって得意・不得意が違うのは当然であり、特別な支援を必要としている子どもだけに選択肢を与えてしまうと、特別扱いされていると捉えてしまい、自尊心を傷つけてしまう可能性がある。すべての子どもが共に学ぶために、学習の進め方を一つにせず、全員にいくつか選択肢を与えながら学習を進められるようにしていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

演習で授業を行い、少しずつだが授業力をつけることができた。授業を行うごとに事後研で出た改善点を意識しながら次の授業に臨んでいった。そうすることで、児童が「分かった」「できた」と実感できる授業に近づいていっていると感じた。また、児童の学習意欲を高めるために教具を用意することで、児童と共に楽しんで授業を行うことができ、児童主体の授業を考えることができるようになった。

(2) 児童理解

児童に対して自分から積極的に関わることができるようになった。以前は、児童の方から話しかけてくれて関係を築いていくことばかりだったが、児童から話しかけてこない場合でも自分から積極的に話しかけにいって関係を築いていくことができた。児童たちと関係が築けているからこそ、授業で積極的に発言したり、机間指導で適切な支援ができたりするのだと感じた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、改めて教員はとても魅力的な職業だと感じた。年度末作業など大変なことも経験したが、児童が楽しんで授業を受けてくれる姿を見て、やりがいを感じることができた。児童の学習意欲をいかに高められるか、楽しいと思える授業をつくれるかを考えていく。児童の成長を１番に考え、学び続ける教員になりたい。

(2) 今後の課題

今後の課題は、「授業力」である。少しずつ成長できているがまだまだ未熟だと実感している。特に時間配分に課題が残る。この授業で１番時間を使って考えさせたいところを見極め、時間配分できるようにしたい。また、個別で考える時間やグループで調べ学習をする時間をあらかじめ決めてタイマーを設定しておくことで、学習の見通しをもたせたり時間通りに授業を進められたりできるようにしていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童のつまずきから理解を深める学習指導」

受講生氏名：松原　加奈

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、誰でも苦手な教科や分野が存在するのは当然のことと考えており、京都府教員養成サポートセミナーにおいて「学習に対して苦手意識を持つ児童への学習指導」を研究テーマとして設定し研究を行った。これまでは、つまずきは無くすものであると考えていたが、この研究からつまずきから児童が学ぶことが多く、決してつまずきは無くさなければならないものではないのではないかと考えた。そのため、本研究では、児童のつまずきから教師はどのように深い学びへと繋げているのか研究したいと考え、この研究テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業観察を通して、児童のつまずきに対する教師の学習指導を観察する。

イ　体験授業や研究授業で、つまずきへの学習指導の実践と考察を行う

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第６学年、後期では第２学年の学級に入り、演習をさせていただいた。授業観察では、教師がどのように児童のつまずきを深い学びに繋げているのか観察記録をつけた。授業実践では、演習学級以外の学級でも授業させていただき、発達段階の違いによるつまずきへの指導方法や各学級の児童の実態に合わせた授業の進め方を理解し、実践するよう努めた。教科横断的な視点を取り入れることで学びの振り返りを行ったり、児童がつまずきやすい箇所を事前に予測し、実際につまずきが見られた時の指導方法を考えて深い学びに繋げられるような工夫を行ったりした。

(2) 演習校で学んだこと

ア　ペアやグループワークでの児童の学び合い

学習につまずいている児童を一斉指導のみで理解を深められるよう指導することは難しい。そのため、ペアやグループワークを効果的に取り入れることで、つまずいている児童も自分にはない新しい意見を発見することができ、またつまずいている児童を助けた児童も自分の意見を相手に説明することを通してより学習理解を深めることに繋がることを学んだ。また、自分が分からないということを分からないと言える環境づくりも大切であり、そのためにも教師は「分からないことは〇〇だけじゃないよ。」と声かけを行い、児童自身を安心させてあげることやできた時にはきちんと褒めることも大切だと学んだ。

イ　ICTの活用

道徳の授業など、今は何について考える時間なのかはっきり指示を出すことが必要である。そのために、ICTを用いて発問を可視化することで、何を聞かれているのか分からなくなるというつまずきへの対処を行うことができることを学んだ。また、自分の考えを書いたり問題を解いたりする時に、どのようなことを書くのかどのように問題を解くのか分からないというつまずきが想定されたため、児童が自力で考える時間を設けた後にヒントカードやいくつかの例を提示することで考えやすくなることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、さまざまな講師の方から講義を受け、京都府の教育や教師として必要な知識を学ぶことができた。また、違う演習校や校種で同じ夢を持つ仲間と共にペアやグループワークを行ったことで、違う意見から新しい発見をすることができ、自分の視野を広げることができたと感じる。

特に印象に残っているのは、第８回の「特別の教科　道徳」の講座である。この講座の中で「みんなの心はダイヤモンド」という言葉が強く心に残っており、学級全員で思ったことを出し合って心を心で長い期間をかけて磨いていくことで、少しずつ児童の心を育てることに繋がることを学んだ。また、正解がないからこそ、児童一人ひとりの意見を肯定的に受け止め、教材の価値に迫ったり、本当にそうなのか立ち止まって考えたりするためにも揺さぶりの発問を行うことが改めて大切だと学ぶことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

初めて児童に向けて授業実践を行った教育実習では、とても緊張してしまい、指導案通りに進めることが精一杯だった。しかし、教師力養成講座を通して児童の前に立つ機会を増やしたことによって、授業中の児童の理解度や実態に合わせて臨機応変に対応することができるようになったと感じる。また、演習学級以外の学級で授業をさせていただいたことにより、学級によって児童の実態や雰囲気、つまずく箇所が違うことを学ぶことができたため、授業構想を立てる時には、学級ごとの児童の実態を理解し、つまずきの予測をより徹底して行い、教材研究を進めていくことが大切だと学んだ。

(2) 積極性

教育実習や京都府教員養成サポートセミナーでは、なかなか思うように行動できず、より積極的に行動することを目標としていた。そのため、自分から授業する機会をより多くできるよう担任の先生に相談したり、自ら宿題の丸つけや困っている児童に積極的に机間指導で話しかけたりすることによって、結果として授業実践を７回、学級担任代行経験を16回させていただくことができた。また、宿題の丸つけなどを通して児童のつまずきを見つけることができ、どの児童がつまずいているのかに気づく力も同時に身につけることができたと感じる。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

長期間児童と関わる機会を設けることができたことにより、児童の大きな成長を間近で見ることができた。また、教師自身が自ら学び続ける姿勢を持っていることが児童にとっても大きな影響を与えることを実感することもでき、これは私が掲げている「児童と共に成長していくことができる」という理想の教師像に当てはまると感じた。そして、この児童の成長こそが教師としてのやりがいに繋がっていくことも実感することができ、より教師という仕事に魅力を感じた。児童の可能性を信じ、児童のために学び続ける教師を目指していきたい。

(2) 今後の課題

今後は、授業の最終的なゴールの姿を見越した授業づくりと指導するところと見守るところの区別をつけることを特に重視していきたい。授業や単元の終わりに児童にどのような姿になっていてほしいのかしっかりと考え、授業づくりを行っていきたい。また、児童のつまずきを全て教師が指導するのではなく、理解を深めたり、児童同士で学び合ったりする機会であることを理解し、見守りながら指導を行っていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童が主体的に学びを深められる学級経営」

受講生氏名：田中　隼平

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、これまで教育実習やボランティア等を通して多様な児童との関わりの機会をいただき、数多くの学びを得た。その中で、児童自身が学習や役割に対しての興味や関心を持ち、主体的に学びたいと思えるような学級作りをすることが重要であると考えた。

そこで、大半の時間を学級という場で過ごしていく児童に対して、担任の先生がどのような声掛けや工夫をされ、児童が主体的に学びを深めることができる学級経営をされておられるのかを学ばせていただきたいと願い、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業内や休み時間等における担任が行っておられる取組や声掛けを観察させていただき、その学びを自身も実践する。

イ　体験授業や研究授業等の授業実践や机間指導から児童の反応を観察し、考察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習では第５学年、後期の演習では第１学年の学級で演習をさせていただき、学年や児童によって掲示物に関わる工夫等の学級経営の仕方が異なることや、学級担任の児童一人ひとりの状態に合わせた関わり方について観察し､実践を通して学びを深め続けた。

主に授業実践や休み時間を通して、積極的に児童と関わる中で主体性を大切にする環境づくりを心がけた。その際、「本当に今の声掛けで児童が主体的になったのか。」を考察し実践することで、児童自身が思考を働かせ、次からは自ら行動に移すことができるような関わりを心がけた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業について

学級担任は分からない児童に合わせて授業を展開しておられた。具体的には、個人活動からペア学習を通して、全体へと共有するという流れで授業を展開しておられた。ペアやグループ学習等の児童同士が対話する時間を確保することで、児童の中にある不安な気持ちを解消させ、自分の考えを発言したくなる姿が見られた。このような授業展開の工夫が主体的な学びへと繋がっていくと学んだ。

また、授業を考える際、児童の実態を把握した上で、その授業のゴールとなる姿を見通すことが大切であると学んだ。

イ　学級づくりについて

児童の状況に沿って学級内の掲示物を工夫することが大事になる。その日に授業内での活動(図画工作や生活、係活動等)を可能な限り、すぐに掲示しておられた。翌朝、掲示物を見て喜ぶ児童の姿から、教師のそのような工夫や努力が児童の学習意欲を向上させ、主体性を引き出していると学んだ。

また、朝学活や休み時間等に自分達で調べたものを発表したり、プリント類を綴じたりする等、児童自身が自ら行動できるよう促しておられた。この促す場面を見極めることこそが児童の主体性を深める教師の重要な行動だと思う。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座での講義や講演を通して、京都府が求めている教員としての必要な資質・能力について学ぶことができた。その中で、特に自身が学びを大きく深めた講座は２つある。

(1) 道徳教育について

「心のはたらき」を育成する道徳教育では、学校生活の中でも児童一人ひとりの心の変化を言葉や行動、表情から読み取る必要があると学んだ。特に、授業づくりでは中心となる発問を設定し、道徳的価値を深められるように追質問や全体で考える時間を設け、児童の思考を揺さぶる大切さを学んだ。このような授業を目指すために、考えを発言できる雰囲気を作り、児童とのやり取りを大切にした道徳教育を行っていけるようにしたい。

(2) ICTを活用した授業実践について

「〇〇のためにICTを活用する」という言葉が特に印象に残っている。ICTを目的として活用するのではなく、一つのツールとして活用することが大切であると学んだ。また、授行だけではなく、授業以外での活用を行うことで、様々な場面から児童の学習を支援することができると学んだ。児童の多様性を大切にするためにも、ICTの活用方法を自ら調べ、児童の個別最適な学びを実現できる教師を目指したい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

授業実践では、前期・後期合わせ６回授業をさせていただき、教師の発問に対する児童の反応への追質問やそれを学級全体で共有していく声掛け等、授業を行う際の基本的な技術を身に付けることができたと考えている。また、同じ授業を他の学級でさせていただき、学級ごとに異なる児童の反応から何が必要か、どのような発問が良いか等、教材研究の大切さを実感した。その際、活動内容を目的として捉えるのではなく、手段として取り入れるように展開していくことが重要になると学んだ。

(2) 見守る力(児童理解)

演習を通して、児童一人ひとりに同じ対応をすることだけが良いとは限らないことを実感した。同じ対応をするべき場面と児童一人ひとりの状況に合わせた対応をする必要がある場面とをきちんと見極める必要があると学んだ。この学びから、実際に児童と関わる際、児童の声のトーンや話すスピード、表情から見守るべきか支援が必要であるかを読み取ることを心がけた。児童の成長が見られた際はすぐに褒めることで、児童との信頼関係を築き、児童理解に繋げることができたと考えている。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

年度末や年度始めの児童が登校していない時期での仕事も経験させていただき、教師が行うべき業務が大量にある中、児童の純粋な笑顔やその成長を一番近くで感じることができる教師という職種にやりがいを感じ、より一層教師になりたいという思いが強くなった。謙虚な姿勢を忘れず、常に学び続ける姿勢を大事にし、自己研鑽に励んでいきたい。

(2) 今後の課題

演習を通して、積極性や時間配分、目標を見通した授業計画等、自身が今後、研鑽を続けるべき点は山積みであることも自覚した。しかしながら、講座で学ばせていただいた「授業力」と「見守る力(児童理解)」を活かして、児童が毎日笑顔で登校する姿を一番近くで見守り、自身の課題点を少しずつ改善していき、主体的に学びを深められる学級づくりに努めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童が深く考える学級、授業づくりについて」

受講生氏名：相良果歩

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

教育実習を終えて、私は児童の発言によって作られる授業の難しさを学んだ。児童の発言によって作られる授業とは、児童全員が深く考え、言葉にしなければ成立しないと感じた。よって、演習では児童が深く考えることができるように発問の工夫の仕方や児童同士の活動の取り入れ方、深く考え共有することができる学級づくりを研究したいと考え、テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業内での発問の仕方やグループワークの取り入れ方を観察する。

イ　児童が深く考えることができる発問やそのために効果的な学習活動を取り入れた授業実践を行う。

ウ　授業実践を振り返り、考察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第３学年、後期は第５学年で演習を行った。先生方の授業中の発問の仕方や活動に入るための導入、児童同士の活動を入れるタイミングなどを見て学んだ。授業観察で学んだことを生かして、児童が深く考えることができるように発問の仕方を工夫したり、自ら考えようとすることができるような動機付けを意識したりして、授業実践を行った。また、普段の会話などから児童との関係性を作り、その関係性を授業に活かすことができるように意識した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　発問の工夫とそれに連なる追究の発問

先生方の授業を観察させていただき、発問の工夫を学んだ。授業の課題として、児童にとって身近なものを例に挙げ、課題に取り入れることで、興味を掻き立て、知りたいと思える授業になることが分かった。また、考えさせたい発問だけで終わるのではなく、児童の発言や小さなつぶやきに追究の発問をすることで、児童の考えをさらに深めていくことが分かった。さらに、追究の発問は発言をした児童だけではなく、学級の児童全員の考えを深め、さらに広げることができると学んだ。

イ　児童の実態の把握

前期の第３学年の授業実践では、２つの学級で同じ道徳の授業を行った。この経験を通して、学級の雰囲気や児童の実態によって、同じ発問でもまったく違う反応や、考え方が出てくることが分かった。自分のみで考えるほうが深く考えることができる学級であるのか、児童同士で話し合いながらのほうが深く考えることができる学級であるのかは、学級の雰囲気や児童の実態によって大きく変わった。これらの違いは、活動を行うタイミングや発問方法、授業の入り方など授業計画に大きくかかわるということが分かった。よって、学級や児童の実態を把握して、それに最適な学習方法をとる必要があることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育現場で活躍しておられる先生方や、教育委員会の方々の講義を聞き、いろいろな視点から教育について学ぶことができた。さらに、自分とは違う校種の教員を目指す演習生とも交流することで、同じ校種の演習生と話している時にはなかった新たな視点の意見も、交流することができた。「夢・未来」講座で学んだことをすぐに演習で実行に移すことで、さらなる効果を感じ取ることができた。演習校で起こったことを実際の例にして「夢・未来」講座の内容について考えることでさらに深く考えることができた。その体験から、校種に関わらず、交流することの大切さも学んだ。

この講座を通して、教師が学び続けることの大切さを再確認することができた。実際に講座の講師をされた先生方が学び続けている姿を示されていた。教師の仕事に少しでも関係があり、子どもたちのためになる資格を取得したり、教育に関わられている方々とコミュニケーションをとり、新たな考えを取り入れたりすることの大切さを学んだ。私も子どもたちのことを考え、新たな考えや知識を取り入れ、行動するなどの努力をし続け、力を付けていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

私が教師力養成講座で身に付き、成長した力は大きく二つある。

一つ目は、教師に最も大切な授業力である。たくさんの先生方の授業や、「夢・未来」講座でも授業を作るための術を学んだ。学級の児童の実態からどのような指導方法が適切であるかを考え、授業を工夫して作り、実践することができた。さらに、今回の演習で本格的には初めて ICT を取り入れた授業を行ったことで、ICT を使う場面の選択も児童の実態とともに考える必要があることも知った。これらの経験は、教師として最も大切な授業力を大きく伸ばすことができた。

二つ目は積極的な姿勢である。演習が始まるにあたって、自ら動き、自ら学ぶことを意識して演習を始めた。しかし、始まった直後は、どのように自分から動くことが正しいのかがわからなり、質問をしたりする中で、意識することなく自ら動くことができた。また、学習指導案や授業、児童に関することについて質問することで、自ら学ぶ姿勢も成長させることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

実習中には演習校の先生方が、常に児童のためになることを考えておられる姿を見せていただいた。さらに、演習をさせていただいた約４ヶ月間でも、多くの児童の成長を見つけることができた。これらのことから、児童の成長を第一に考える教師になり、児童の成長を最も近い場所で感じることができる教師という立場に立ちたいという気持ちを再確認することができた。私自身が目指す教師像に近づくことができるように、教師力養成講座で学んだことを活かし、教師として、成長し続けたい。

(2) 今後の課題

今後の課題は、児童との適切な距離を保つことある。演習中に児童と仲良くなることに意識を置きすぎたことで、教師と児童の距離を適切に保つことができず、児童と友達のような距離感になってしまった。このような距離感になってしまうと、指示を出す時に、上手く伝わらなくなってしまう場面があった。しかし、児童と距離が近く、すぐに仲良くなるという点においては、良い点であるとも考える。このことから今後は、自分に合った児童との距離感を作り出すことができるように努めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「“わかる授業”づくり～ユニバーサルデザインの視点から～」

受講生氏名：金尾　敢巳

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

児童にとって“わかる授業”を展開していくことで、教師と児童とのよりよい信頼関係を築けるのだと考える。その信頼から、学習への主体性や意欲が生まれると思う。そこで、“わかる授業”を実践するために、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを研究したいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　先生方の発問や言葉かけ、板書、教室の環境整備等の工夫を観察する。

イ　授業実践の中で、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを行う。

ウ　自身の実践内容を振り返り、考察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第５学年、後期は第４学年で演習を行った。各学年の先生方が行われている授業や教室環境を観察し、児童を誰一人取り残さないようにするための工夫を学んだ。授業観察で学んだことを活かし、自身の授業で児童に見通しを持たせたり、対話的な活動をさせたりするような授業実践を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業における共有化・視覚化・焦点化

先生方の授業を参観させていただく中で、意見交流から学級全体の「共有化」を図ることで、児童が自然と友達の意見に耳を傾けることができると学んだ。そして、自分の意見と友達の意見を比較することで、学習内容の理解を深めることができるのだと学んだ。また、ICTを活用して、児童一人一人が意見を交流したり、先生が児童の考えを紹介したりすることで、多様な共有化が生まれるのだとわかった。

授業実践では、言葉や文字だけでは伝わりづらい内容を、具体物を使って「視覚化」することで、児童にとって分かりやすい授業づくりができた。授業の導入には、本時の学習の流れを板書して矢印で示すことで、授業の進行度合いが可視化できると気づいた。そして、児童一人一人が授業の見通しを持つことで、授業に対する不安をなくすことやテンポの良い授業展開をすることにつながると学んだ。

また、授業計画の段階で、授業のねらいや活動を絞って、「焦点化」することで、集中して学習に取り組み、目標を持って授業に臨めるのだと学んだ。

イ　教室環境の工夫

演習を行う中で、児童が「わかった」と感じる授業をするためには、児童が集中して学習に取り組める環境づくりが不可欠であると実感した。

黒板周りに様々な掲示物を張ると、刺激になって学習の集中を妨げてしまうことを学んだ。そこで、授業で使わない掲示物のある箇所には、カーテンを覆うような配慮をすることが、授業に集中するためには効果的だと気づいた。

教室の整理整頓では、それぞれの机の位置を決めるための目印を床につけておき、机をきれいに並べることで、整った環境で集中して学習ができるのだと学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、道徳教育や学級経営、児童理解などの京都府の教員に必要な様々な資質・能力について学ぶことができた。また、校種を超えてたくさんの講座生と意見交流を行う中で、新たな価値を見出すことができ、考えの幅を広げることができた。

特に印象に残っているのは、「道徳教育」についての講義である。道徳は、心を勉強する時間であり、児童の道徳性を養うように進めていくことを学んだ。道徳教育を進めるためには、外面（行動）と内面（心）の区別を付けることが必要である。そして、生徒指導と道徳教育の両面から道徳性を養うことが重要だとわかり、実践していきたいと考える。例えば、生徒指導の面では、廊下を走るなどのルールを破る行動をしている児童には、行動そのものを指導し道徳性を養うようにする。道徳教育の面では、「特別の教科　道徳」の時間を要として学校生活を通し元となる「心」を育て、道徳性を養うことが大切であると知った。実際に演習校での先生方の指導を参観し、道徳教育の重要性を実感することができ、これから実践していきたいと考えた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1)　気づき、対応する力

演習を行う中で、児童の些細な変化にも気づき、対応する力を身に付けることができた。普段から児童が「見てくれている」と感じられるように、それぞれの児童が持つ良さや特性を把握し、気づいた変化を踏まえて話しかけるように努めた。

また、朝の会では健康観察を通して、その日の児童の様子を把握することが大切だと学んだ。その中で、児童を取り巻く状況によって、日々変わる児童の気持ちに共感しながら、臨機応変な対応ができたことも成長した点だと考えている。

(2)　授業力

たくさんの先生方の授業参観や計８回の授業実践を通して、授業力を伸ばすことができた。初めは、児童の授業中の理解度や表情を把握する余裕がなく、指導案通りに進めることばかり考えてしまっていた。しかし、事後研修で先生方からアドバイスを頂き、机間指導を中心として児童一人一人の授業進度やつまずきを把握することが大切であると学んだ。そして、授業実践をする中で、児童と共に成長することの楽しさを実感したことも成長した点であると考える。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1)　教職に向けた決意

教師力養成講座での活動から、京都府の教育の魅力をたくさん感じることができた。その中でも、実際の教育現場で、温かみのある指導をしておられた先生方のように、児童のことを第一に考える指導をこれから心がけていきたい。そのためにも、児童の些細な変化や良さに気づく力を養いながら、学び続けていきたいと考えている。そして、これから社会の担い手となる京都府の子どもたちに、たくさんの経験を味わわせ、温かみのある指導ができる教員を目指していきたい。

(2)　今後の課題

今後の課題としては、授業の質を高めることである。児童一人一人が授業の中で“楽しい”や“わかった”などと感じられる授業づくりをすることが、児童とのより良い信頼関係や学級経営にも繋がる。そこで、学習でのゴールや活動に見通しを持たせることを大切にしながら、児童の実態に応じた授業構成ができるよう学び続けていく。そのために、様々な児童の実態を把握することや充実した教材研究ができるように、自己研鑽に励んでいきたいと考えている。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の声が生きる授業づくり」

受講生氏名：太田　遥香

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、教師が学びを提示するのではなく児童が学びを作り上げていくことが必要であると考える。しかし、以前教育実習で授業を行った際、知識を一方的に伝えるだけの授業になってしまった。そこで、教師が学ばせたいことを一方的に伝えるのではなく、児童の声が反映されるような授業づくりの工夫を知ったり考えたりしたいと思い、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業見学を通して、授業展開や発問方法を学ぶ。

イ　体験授業や研究授業の中で、児童の声が反映される活動を取り入れる。

ウ　自身の実践を振り返り、考察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

授業の中で児童の言葉をどのように反映しておられるかに着目しながら、先生方の授業を見学した。特に、めあてを児童と作る際は、教師がどのように児童の発言を拾うのか、学びのねらいに迫るためにどのような切り返しをするのかについて着目した。そして、学んだことを自身の授業でも取り入れて実践することで、児童の意見を授業に反映することを意識した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童の意見を授業に生かす工夫

授業見学と、実践を通して２つの工夫を学んだ。

１つ目は「児童と共にめあてを考える」という工夫である。私は、児童と学びを作り上げるためには､児童自身が何を学ぶかを主体的に考える必要があると考えた｡そこで、めあてを考える活動を授業に取り入れた。しかし、めあてが曖昧であったため、ねらいに迫りきることができなかった。その後の事後研でご指導いただいたことから、児童と共にめあてを考えるには、児童の言葉を生かしつつも、あらかじめ押さえる点を持っておくことが必要であると学んだ。

２つ目は「考え方を児童の言葉で名づける」という工夫である。まとめて整理する際に、それぞれの考え方に名前をつけさせることで、自分達の学びとして主体的に捉えることができたと感じた。また、分類して考え方を比較することで、特徴を捉えることができ、理解も深まった。

イ　児童の意見を引き出すための働きかけ

児童の声を生かすためには、児童が意見を出しやすいことが大切である。そこで、道徳の授業では、児童が意見を出しやすいような働きかけを意識した。具体的には、発問をしてから間を取ることを実践した。そうすることで、多くの児童が自分の中で考えを持って授業に臨むことができたと推測できる。また、児童の発言の際は、児童の方をしっかり見て相槌を打つことで、安心して発言ができると考えた。このことから、教師の立ち振る舞いや言葉選びで、児童が意見を出しやすくなることがわかった。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

近年の教育に求められていることや、京都府が教育に対してどのような取組を行っているのかなどを具体的に学ぶことができた。特に印象的だったことが２つある。

１つ目は「主体的・対話的で深い学びのための授業実践」である。この講義では、授業を受けることで主体的・対話的で深い学びを体験できた。この経験から、ただ知識を暗記するのではなく、体験的に学ぶことで印象に残り、更に学びたいという意欲が湧くと考えた。

２つ目は「ICTを活用した授業実践について」である。この講義では、ICTの活用で表現の幅が広がることを事例と共に学んだ。表現方法を選択できることは、児童にとって主体的な学びとなり、児童の個性を尊重することにもつながるといえる。また、教師側の視点として、ICT活用が目的となってはいけないことを学んだ。今後は、ICTを取り入れる意義を見い出した上で活用していく。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

たくさんの先生方の授業や指導の姿を見ることで、自分の授業づくりの引き出しを増やすことができた。特に、机間指導において成長を感じている。個別学習では、児童の意見を把握することを意識した。座席表をもち、メモをしながら机間指導を行った。それを活用して意図的な指名を行い、幅広い意見を全体で共有することができた。また、机間指導の際に児童の考えに線を引くことで、「先生に見てもらえた。」と実感させ、自信を持たせた。この結果、挙手する児童を増やすことができ、多くの意見を聴くことができた。机間指導はつまずいている児童を見つけて支援するだけでなく、その後の授業を意図的に作るための効果もあるとわかった。

(2) コミュニケーション力

演習校では、先生方と積極的にコミュニケーションを図ることができた。放課後の教室整備の時に、授業のことや児童のことを伺うなどした。そうすることで、授業見学だけでは気づけなかった授業の工夫や指導観などを知ることができた。帰る際には、お礼の言葉に今日の学びを付け加えて伝えるなど、少しプラスして話すことでより良い関係を築くことができると学んだ。チーム学校において、教師間の繋がりは必要不可欠である。そのため、人間関係を築く力は更に磨いていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、現場における教師の仕事を間近で見学し体験することで、自分が教師になる姿を具体的に想像することができ、覚悟が芽生えた。また、児童に「来年先生になったら私の担任になってね。」といった言葉をかけてもらったことから、教師になりたいという思いが更に高まった。今後は、未来を創っていく子ども達のために、向上心を持ち続けて努力していく。

(2) 今後の課題

課題は、授業力である。児童にとって学校生活のほとんどが授業である。児童に授業が楽しくて、待ち遠しいものと思ってもらえるように努力をしていく。具体的には、活動を児童が興味深いものにしたり、授業の中で「できる。」を実感することで自己肯定感を高めたりすることなどを意識したい。また、今の私はあせりが児童に伝わってしまったり、上手く児童の意見を板書にまとめることができなかったりなどの課題がたくさんある。一つ一つ改善していくことで、児童が主体的に楽しく学べるような授業づくりをしていきたいと考えている。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「対話的な学びを通して深める授業づくり」

受講生氏名：西本　れんげ

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」に関わり、対話的な学びを通して児童の考えがどのように深まるのかを研究したいと考え、このテーマを設定した。対話的な学びには、教師との対話、児童同士の対話、自己との対話があると考え、それぞれの対話を促進できる授業づくりを目指した。

(2) 研究方法

ア　授業内の児童同士の対話、教師との対話、自己との対話を観察する。

イ　体験授業、研究授業において、対話的な学びを通して深める授業を実践する。

ウ　授業実践を振り返り、考察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第３学年、後期は第１学年で演習を行った。授業実践では、グループワークやペアワークを通して児童同士が対話し、学びの内容を深める授業づくりを意識した。また、個々の児童の発言を教師が全体に問い返すことで、学級全体で対話する授業を実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学習意欲を高める対話

授業を見学させていただき、児童同士の対話を通して児童の意欲を高められることを学んだ。例えば、第３学年の算数の授業ではそろばんを習っている児童が前に出てそろばんの説明をした。その結果、他の児童がその児童に質問したり、自分でもやってみようとしたりする姿が見られた。教師の説明だけでなく、児童同士の対話が学習内容への意欲を高めるのだと考えた。

また、児童が個別に自分の考えを整理するための時間がなければ、児童同士の対話は難しいということを教えていただいた。児童同士の対話の学習効果を高めるために、自己との対話という視点を大切にしたいと考える。

イ　共感的な対話

道徳の授業見学や研修を通して、教師の共感が児童の本音を引き出すことを知った。そこで、道徳の授業実践において、児童の考えに共感する対話を意識した。その結果、正直な気持ちを言い合う児童が増え、多くの児童が当事者意識を持って自分の行動を振り返ることができていた。対話は、教師の共感的な態度によって充実させることができることを学んだ。

ウ　児童の実態に合わせた対話の工夫

第１学年での授業実践では、児童同士が言葉で対話を行うのは難しさがあると判断した。そのため、ジェスチャーも使って意見を伝えたり、相手の意見に一言で反応したりといった、対話の方法を工夫した。ただ会話をさせるだけでなく、児童同士で良かったところをより多く見つけさせるなど、友達とともに授業に参加している意識を持たせることが大切であることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、演習での学びと照らし合わせ、学級経営や授業づくり、児童理解について学ぶことができた。特に印象に残っている講義は、児童の声を生かす授業を目指した「授業実践講座」である。その中で最も大切だと考えたのは、教師が発言内容を厳選することだ。教師の説明を最低限に抑え、児童の発言をもとに全体への発問を行うことで、児童が主体的に考えを深められることが分かった。また、児童に考え方を解説させることで他の児童の関心を高め、解説した児童の自己肯定感も高められるということを学んだ。児童が授業をどのように感じるかということを常に意識し､児童の声を生かす授業づくりを行いたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

授業見学を通し、授業の基本は環境整備であることを意識するようになった。授業内容に入る前に不要な教材を片付け、準備物を揃えさせたことで、落ち着いた授業を行うことができた。

また、授業中の指示や説明、発言を簡潔にすることができた。指示は「～しましょう」、説明は「～します」を語尾につけることで、児童に伝えたい内容を明確化した。発問は言い換えず、決めていた言葉通りに発問することで、児童に何を考えてほしいのかが伝わりやすいようにした。

(2) 児童理解

演習では、授業以外での児童との関わりを大切にし、生活面における児童理解を行うことができた。授業内でのみ関わっていた時は、どの児童をどのように補助すべきか判断するのが難しかった。そこで、授業外にも児童と目線を合わせて話すことで交流を深め、児童の変化に気づくことができるようになった。

また、宿題の丸つけや前時の授業見学から、学習面における児童の苦手を個別に把握した。学習における児童理解は、授業中の机間指導に生かすことができた。

(3) コミュニケーション力

演習では、先生方と積極的にコミュニケーションが取れるようになった。用事があるときだけでなく、児童の様子や授業の疑問点などを担任の先生と話すようにした。自分から話しかけることで先生の児童観や授業の工夫を教えていただくことができ、児童理解や授業づくりに役立てられた。

また、職員室で電話対応を行わせていただいたことで、学校外の人との関わり方を学んだ。今後も自分が学校を代表しているという自覚を持ち、丁寧な対応を心がけたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、常に児童の目線でわかりやすい授業デザインを工夫し続けていく面白さを感じた。また、先生方の児童の成長を願う想いを知ったことで、同じ教員として共に児童の成長を支えたいという気持ちが強くなった。自身も教員間の連携を大切にし、児童の成長を支えられる教員になりたいと考える。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、児童に指示をすべき場面と、考えさせる場面を見極める判断力を身につけたい。これまでの授業や生活指導では、指示を中心に行っていた。しかし、児童が主体的に行動するためには、何をすべきか自分で考えさせることが重要である。

また、児童への肯定的な声かけを積極的に行うようにしていきたい。ボランティアを通して児童の成長に気づき、具体的に褒めることを実践していく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の興味を引きつける授業づくり」

受講生氏名：杉島　信吏

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

児童の興味を引きつけることは、授業を行うにあたり学習の質を高める重要な要素の一つである。文部科学省では、「主体的・対話的で深い学び」が掲げられており、児童が自ら学習に取り組むためには、教材や内容に興味・関心を持っていることが重要である。そこで、具体的にどのような手立てを行うことで児童の興味を引きつけることができるのかについて研究したいと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　先生方の授業から、児童の興味を引きつける工夫について学ぶ。

イ　児童の興味を引きつけるための工夫を考え、実践する。

ウ　授業実践を振り返り、考察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

先生方の授業を観察し、児童の興味を引きつける工夫について学んだ。また、先生方に児童の興味を引きつける工夫について質問を行い、考えを深めた。これをもとに児童の興味を引きつけるための工夫を自身なりに考え、授業実践を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア　日常生活と関連させた導入

先生方の授業を参観させていただき、児童の日常生活に関連した話を導入ですることが、興味を引きつける手立てとして効果的であることが分かった。身近な出来事を取り上げることは、児童にとって親しみやすく、興味を持って学習に入ることができると学んだ。

自身の実践でも日常生活と関連させた導入を行った。その際、導入の話題となる行動を事前に児童へ印象づけるようにした。その結果、児童が学習に興味を持った。児童に教師が意図したことを印象づけることは、日常であったことに自ら気づいたと感じさせ、学習への興味を引きつけることができる。

イ　イメージを持たせるための工夫

児童の興味を引きつけるには、具体的なイメージを持たせることが大切であると分かった。先生方は、児童に馴染みのない内容は動画を視聴させたり、児童の身近なことに置き換えたりすることで、児童の理解を深め興味を引きつける工夫を行っておられた。

自身の社会科の授業実践では、役割演技を取り入れることで児童の興味を引きつけることができた。役割演技を行うまでは、積極的でない児童もいたが、行ったことで発言する児童も増え理解も深まった。

このことから児童の興味を引きつけるための工夫を行うことは、児童の積極的参加を促すことにつながると考えられる。しかし、児童の興味を引きつけるための工夫が目的とならないように、留意しなければならないことも学んだ。こちらが用意した活動を行うためにその他の時間がおろそかになってはいけない。全体を通して活動を有効に活かせているのか考え、授業づくりを行うことが重要である。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、実践的な視点から教育について学べたことで、自身の教育観がより具体的になった。「一人ひとりの子どもを主語にする学校をつくる」の講演会では、教育現場において重要視される個別最適な学びや協働的な学びにも懸念点があることを学んだ。個別最適な学びは孤立するという側面があり、協働的な学びは同調圧力という問題が存在する。この問題を解決するには、二つの学びを独立して考えるのではなく一体的に行うことを重視していく必要がある。そのためには、学習形態を児童自ら選ばせるという方法で、自身で進めたい場合は個別学習を行い、知りたいことや共有したいことがあればクラスメイトと話し合うというものだった。児童の主体性を尊重して学習を行うことで、それぞれのデメリットをカバーすることができると分かった。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

多くの授業経験から自身の授業力を伸ばすことができた。特に児童にとって分かりやすい板書のレイアウトができるようになった。黒板の文字の大きさについては、これまで大きければいいという考えを持っていた。しかし、学年によって適した文字の大きさにすることは、黒板に書ける情報量を調節できることや学習内容が分かりやすくなる等のメリットがあった。また色の組み合わせによっても見やすさが違った。組み合わせを工夫することで強調したいことを伝わりやすくできた。このように児童の目線に立って板書を考えることで分かりやすい板書のレイアウトができるようになった。

(2) コミュニケーション力

様々な場面で積極的にコミュニケーションを取ることができるようになった。これまで疑問点や気づきを先生方に聞けないこともあった。しかし、先生方に話しかけることで、児童との関わり方や授業で意識しておられることについて学ぶことができた。

学校では、問題事象等が起こった場合チームで対応する。その際に教師間でコミュニケーションをとることで解決を図っていた。また、保護者との連携を取る上でもコミュニケーションは重要だった。先生方は、連絡帳や電話連絡を通し、問題があった時だけでなく頑張ったことやできたことなど児童の様子を伝えておられた。このようにコミュニケーションの重要性を理解したことで、積極的にコミュニケーションをとるようになり、より多くの学びを得ることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

４か月間の演習を通して教師のやりがいについて自身の考えを持つことができた。１つの学級に長く入るという経験がこれまでなかったが、演習では児童の成長過程を長い期間で見ることができた。その様子を見ていると教師が児童を導くということがどれほど素晴らしいことであるかを実感した。自身も児童を導き成長させられるようになろうと決意した。

(2) 今後の課題

今後の課題は、教師としての児童との距離感を掴むということである。これまでは、学生としての距離感で児童と接してしまうことが多かった。しかし、これから教員として関わる際に、距離感が近すぎると指導を行う上で不都合が生じる可能性がある。そうならないために、教師として児童との距離感を意識し、関わり方を考えていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の主体的な活動を導く授業づくり」

受講生氏名：石野　夏実

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

変化の激しいこの時代では、「主体的・対話的で深い学び」を通して、様々な事象に対して主体的に考える力を養うことが求められている。教員として授業を実践するにあたり児童の意欲を引き出せるような働きかけが必要不可欠であると考える。そこで、児童が主体的に学習したり、考えたりする活動を導くには、教師がどのように働きかければ良いかをより深く研究したいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法について

ア　担任の先生の発問の仕方、発言へのフィードバックを観察する。

イ　ICT の活用や、視覚的な資料を使用した授業を実践する。

ウ　授業実践を振り返り、成果や課題について考察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業実践するにあたっては、積極的に視覚的支援を行うことを意識した。児童が興味を持って学習に取り組むことができる工夫は何かを常に考え、教材研究を進めた。また、担任の先生の授業を観察させていただくことから、普段の授業でどのような声掛けや授業づくりをされているのかを学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童の主体性を引き出すための工夫について

児童が、授業において「もっと学んでみたい」「もっと知りたい」と思えるよう様々な工夫を考え、実践することができた。第１学年の算数においては、視覚的支援となるように、イラストやフラッシュカードを使用した。それによって、児童の中でイメージがより浮かびやすく、「わかる」授業を実践することができたと感じる。また、身近な生活場面に結びつけて考えられるような声掛けをすることを通して、主体的に学習に取り組む態度をより育めたのではないかと考える。第３学年で行った研究授業の国語では、パワーポイントを用いてクイズをしたり漢字の由来について説明したりした。視覚的に捉えやすい教材を入れることで、授業全体を通して主体的に授業に参加できていたと感じる。これらの経験から、児童の主体性を導くためには教材研究が欠かせないことはもちろん、児童の興味・関心を引き出すにはどうすればよいかを常に意識することが大切だと学んだ。

イ　児童全員が授業に参加できる手立てについて

教室には、様々な実態を持つ児童がいる。誰一人置いていかない、全員が理解できる授業を目指して日々取り組んでおられる担任の先生の姿を見て、教師としてそのような環境づくりをしていくことの大切さを実感した。具体的には、スモールステップを手立てとして授業を行うことが効果的であった。新しいことを学ぶ時には、特にそれを重視することが大切である。そうすることで、全員が同じスピードでねらいに到達することができ、全体で「できた」という思いを共有する授業の実現が可能になると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員をする上で身につけておくべき知識や、これからの時代の教育に携わるものとして身につけておくべき資質・能力について学ぶことができた。その中でも、「小学校における外国語教育」についての講義が特に印象深く、そこでは「休み時間の姿を再現する」という授業スタイルを紹介しておられた。これは、英語でのコミュニケーションを促進するために非常に効果的であり、実現するための教室環境や教材の工夫などは、自分が外国語教育をする際に積極的に取り入れたいと感じられるものだった。また、外国語授業に初めて触れる児童に対して、「勝負の導入」をすることで、心をつかみ、児童を英語好きにさせるというお話も印象的だった。そのための手立てとして、イラストを使用したクイズをしたり、身近で英語が使われている例を出したりすることを示しておられた。教員として、これらを活かして児童を英語好きにしていきたい。近年さらに重要視されている外国語教育について詳しく知ることができ、これから積極的に活かそうという思いが強くなった。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童の実態に合わせた授業力

養成講座では、同じ内容の授業を２回させていただいた。１回目に上手くいかなかったときは、周りの先生方や実習生からアドバイスをもらい、２回目に活かすことができた。また、学級によって実態も違っているため、それも加味して授業を組み立てることを意識した。児童の実態に合わせて視覚的支援を取り入れたり、ワークシートを作ったりすることを通して、児童の実態に基づいて授業をする力を身につけることができた。「自分にはできない」と諦めてしまう児童が出ないよう、細心の注意を払いながら授業づくりをする意識を、この演習を通して育むことができた。

(2) 児童理解力

児童と関わる上で、自ら積極的にコミュニケーションを取ることの大切さを改めて感じた。また、講義で学級経営には児童理解が欠かせず、すべての基本となることを学び、実際に演習を通してそれを実感することができた。朝の挨拶や休み時間の遊び、給食時間から掃除時間に至るまで、全ての時間が児童理解をする上で必要不可欠なものとなる。そして、児童一人一人の顔と名前を覚えることが、信頼関係構築の手助けとなることも学んだ。児童が学校でどのように過ごし、何を考えているのかを常に把握することの難しさを感じると同時に、児童理解のための努力は今後も欠かさないようにしたいと考える。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、授業をする上での自分の課題に気づくことができた。児童と関わりながら演習を重ねるにつれ、改めて教師になりたいという思いが強くなった。また、１日の終わりに担任の先生とお話をさせていただくことを通して、教員をする上で大切なことや、普段から意識するべきことに関して学びを深めることができた。教員としてこれからも学び続ける姿勢を忘れずにいたい。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、時間配分についてである。普段の生活においても、効率的に時間を使い、余裕を持って業務を遂行する大切さを感じた。また、授業においても、開始時刻や終了時刻を守ることは、学校生活のメリハリをつけることにもつながると考える。時間配分は児童の集中力にも関わるものであるので、よく計画し、守っていくべきだと考える。授業をバランスよく行うために、これからも十分配慮していきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童理解と個に応じた指導」

受講生氏名：渡邉　楓華

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私がこのテーマを設定した理由は、児童一人一人を理解した上で、個に応じた指導をしていきたいからである。私は、児童が安心して学校に行くことができるような環境を作っていきたいと考えている。そのため、児童のことを理解していかなければならない。児童のことを理解するように関わっていけば、信頼関係が生まれ、児童も安心して学校に行くことができる。児童理解をし、児童一人一人をしっかりと見て授業をすることで個に応じた指導ができ、授業の質が高まると考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　児童とのコミュニケーションをすることでの児童理解

イ　授業内での子どもへの学習サポート

ウ　教師の児童に対しての指導方法

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

演習前期では、第３学年に入らせて頂き、演習後期では、そのまま持ち上がりで第４学年に入らせて頂いた。最初の方から積極的に児童に話しかけ、距離を縮め、児童理解していた。どのように話しかると信頼関係が生まれるのかを考えながら接するようにした。そのようにして学級の児童を知り、児童を理解した上で担任の先生を見ることで個に応じた指導に着目し、研究に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童理解について

児童を理解するためには、まず自分から声をかけていくことの大事さが分かった。話しかけることで児童も私自身のことを知りたいと思えるようになり関係を築いていくことができ、跳び箱が苦手な児童に対して、指導をした。指導をして、その児童は跳び箱を跳ぶことができた。挑んだ児童は、喜び、私のことを信用してくれるようになった。教師として信頼されるためには、そのように適切な指導で児童の可能性を伸ばしていくことが大事であることが分かった。

イ　個に応じた指導について

児童理解を深めていくことで、支援が必要な場面を見分けられることが分かった。しかし、支援をするだけではなく、支援を控えてその児童が１人で頑張るように見守ることもあった。個に応じた指導は、支援だけではなく、その児童にとって頑張らせたいところでは敢えて何もせず見守ることも必要であることを学んだ。また、一斉授業の際に授業についていけてない児童がいたら、その児童を発表させていた。学級の友達と一緒にまなばせるような指導もあることを学んだ。そのように児童一人一人を見て、児童の理解を深めることで授業の時にその児童に目を向けてあげられることができるということが分かった。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、様々な先生方に講義して頂いた。また養成講座生同士で、意見交流する機会を頂いたため、より深い学びにつながることが出来た。特に印象に残っている講義は、第13回の「ICTを活用した授業実践」である。昨今の教育現場には様々な特性を持つ児童がいる。そのような子どもたちに合わせて、教育していく必要がある。ICTは、そのような多様な児童に有効な手段となる。より柔軟に今後、必要とされる能力として、問題解決能力や的確な予想、革新性などの力が求められている。そのため、GIGA端末を積極的に活用し、リテラシーを高めていくことが大切であることがわかった。著作権などにも気をつけながら授業に使っていきたい。また、学習問題を効果的に、提示したり、他者と話し合い学びを深めるために使ったりし、児童の学びを広げることが大切だと感じた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童との関わり方

児童との関わり方について学ぶことができた。友達のような関わりをするのではなく、その児童の気持ちに合わせつつ､程よい距離感で接することの大事さが身についた｡また、児童と関わる際は、自分の話をしていくことで、児童からも心を開いてくれるようになることがわかった。児童の個性を知ることで、授業も大きく変えられる。児童を深く知るには、授業の基盤を作っていく上でも大切であるため、意識して関係づくりをすることが大切だと感じた。

(2) 授業力

成長したこととしては、授業である。まだまだ不足な点はあるが、前の時間の授業の改善点を考えながらすることで､だんだんとより良い授業を展開していけたと思う｡最初は、時間配分がうまくできず、授業の中心に焦点を当てられなかった。しかし、授業の中心に時間を割くことを決めて行うことを最後にはできたことが成長したことだと考える。まだまだ､課題点はあるが､この養成講座を通して授業力は､大きく成長できたことだと思う。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私が様々な児童と関わり、児童を成長させていくことで、児童自身が将来幸福な人生を作り出せるような人になって欲しいと強く思う。私が教職を歩んでいく中で、児童たちの将来に影響を受けることを考え、教師という自覚を常に持っていく。また、私自身も共に児童たちと成長して、授業力だけではなく児童からも学んでいきたい。私は児童たちが小学校生活を楽しみ、学び、成長できるような環境を作っていきたい。

(2) 今後の課題

児童が成長するためには、授業力を磨いていかなければならない。授業力をつけるために、今後も教職員の方から学び、学級の児童たちの実態に合った授業を作っていきたい。実践的な授業力をつけるために、まず児童のぼそっと言った発言も聞き逃さないような力をつけていきたい。このつぶやきを聞くことができると授業がより良いものになるからである。また、児童たちを理解することも大事である。児童を理解し、信頼関係を築くために、児童が何を考え行動するのかについてこれからも学んでいきたい。また、支援が必要な児童に対して、同じような支援をするのではなく、その児童にあった支援を考え、実行できるような児童に寄り添うことのできるような教員になりたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童理解と個に応じた指導」

受講生氏名：平岡　桜夏

1　演習テーマ設定理由および研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

小学生は学校にいるほとんどの時間を学級で過ごす。児童にとって学級が一つの社会であり学び育っていく大切な場所である。そのため教員は児童にとって安心で安全な学級にする必要がある。そこで児童にとって居心地の良い学級にするためには教員と児童一人ひとりとの信頼関係が必要不可欠であると考える。そこで教員は児童とどのようにコミュニケーションを図り信頼関係を獲得し、学級経営につなげているのか学びたいと考え、私は「児童一人ひとりとの信頼関係」をテーマにした。

(2) 研究方法

ア　授業中における教員と児童の関わり方や声掛けの仕方
イ　授業外での児童との関わり方
ウ　児童とのコミュニケーションの図り方や児童理解の仕方
エ　年度の変わり目の教員の学級運営の仕方

2　演習テーマに関わる実践内容及び学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習前期では２年生、後期では３年生と４ヶ月の間同じ学年で実習を行った。そこで授業中だけでなく休み時間や給食、掃除の時間など１日の全ての時間を児童と一緒に過ごした。その中で児童を観察し、積極的にコミュニケーションを図り児童理解に努めた。また学級担任の年度の変わり目での学級経営の行い方や授業の行い方や教材教具の工夫、児童の発言を授業にどのように取り入れていくのか、など様々なことについて学ぶことができ、自分の授業や児童との接し方に取り入れるよう実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学級経営について

児童との信頼関係を構築するためには学級経営の要である４月の学級開きが大切になってくる。私が入らせていただいた学級では、担任が児童を指導するときのボーダーラインや基準を示すことや、クラスでのルール作り、一人一役などを決めるところから取り組んでいた。このように児童との信頼関係を構築するためにまず行うことを整理し、集団としての大切さを児童と共に確認し、またコミュニケーションを図りながら学級経営をスタートさせることが大切であることが学べた。

イ　授業での児童との接し方について

授業が充実し、児童にとって意味のある授業になるためには児童の意見をうまく吸い上げ授業に取り入れていくことが一番大切だと考える。しかし教師と児童との間に信頼関係がないと児童が持っている良い意見や考えを口に出さない。そこで児童が進んで発表できるよう発問を工夫したい。また児童が発表する際は他の児童の手を止めさせて、発表する児童の方を向くといったルールや拍手をするなどのルールを決め、互いに学び合い認め合う雰囲気を作ることが大切であると感じた。また机間指導の際に一人ひとりの児童に声をかけ、褒めることによって児童の自己肯定感も向上し積極的に授業に参加してくれると学べた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では京都府の教育施策や児童に身につけさせる能力について学ぶことができた。多様な子ども達が一つの教室にいる中で紙だけで授業を行うのは児童にとって知、徳、体を一体的に育むことは難しい。そこで ICT の活用を行いロイロノートや、動画撮影など日常的に ICT を活用し、子ども達にとって ICT を一つの文房具にすることが大切だと学べた。

次に各教科の授業の行い方や学級経営について教員の方々から学ぶことができた。教科によって教え方や授業の進め方は違うが授業は子どもたちの意見がないと成り立たない。児童の意見を授業に取り入れることが大切である。また教科横断的に授業を行うことも大切であることがわかった。そして児童とのコミュニケーションを図り、一人ひとりしっかり観察しながら学級経営を行うことで児童も発言しやすくなるため学級経営は最も大切であると学べた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業での教材研究

私は教育実践演習で数回授業を行った。児童にとってわかりやすく、かつ児童が主体的な取り組みになるよう教材研究に努めた。そして何回も授業の回数を重ねていくことで児童にあうよう教材の工夫を行った。そうすることで児童から「わかった！」という意見が多く見られるようになった。担当の教員からも子ども達に意見を出させてそれを取り入れるのが上手くなっていると言ってもらえ成長が実感できた。授業を行う上で児童に意見を出させ、その意見を授業に取り入れていくことが大切だと学べた。

(2) 学級内での児童とのコミュニケーション

私は同じ学級で子ども達に積極的に関わり、長い時間を過ごすことで児童理解をし、関係を深めていった。このように自分の強みを活かし児童とたくさんコミュニケーションをこれからも取っていくことで児童にとって居心地の良い学級づくりに励んでいきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

「夢・未来」講座で多くの教員の方々から話を聞き、教員は本当に大変で未来のある子ども達の大切な６年間を預かる大切な仕事だと感じた。そして小学校の現場で児童とコミュニケーションをとり関わる中で、本当にやりがいのある仕事だと感じた。そのことから児童にとって安心で安全な学級経営ができるよう、そして学ぶことの素晴らしさを理解させられるよう、児童一人ひとりとの信頼関係が築ける教員になりたいと決意した。

(2) 今後の課題

課題として授業力が挙げられる。児童の意見を聞き入れ授業に取り入れることはできるようになったが、他の教員の授業を見ている中でまだまだ自分自身の授業と他の教員の授業にはすごく大きな差があり、児童の理解度の差があると考える。また授業は、１日に６時間行わなければならない。そのことからこれからも多くの教員の授業を参観し、話を聞きながら良いところを自分のものにできるよう、そして自分の理想の授業が作れるようになりたい。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「児童の多様性を認める力を育むための学級づくり」

受講生氏名：中園　みお

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

現代の日本ではグローバル化が進み、より一層「共に生きる社会」の実現が求められている。この「共に生きる社会」である共生社会を実現するために、これからを生きる子どもたちが「多様性を認め合う力」を身に付けることが必要になると考える。学校が「多様性を認め合う力」を児童に身に付けさせることで、将来共生社会に貢献する児童を育むことができると考える。そこで、小学校でのどのような学級づくりをすることで児童にお互いを受け入れ、認め合う力を育むことができるのか疑問に思いこのテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　学級担任の先生が児童にどのような指導や関り方をしているのかを観察する

イ　学年会などの参加や、学級担任への聞き取り

ウ　普段の学校生活の中での児童の人間関係や児童の行動を観察する

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

私が今回の演習で実践をした一つにクラス全体を巻き込んだ授業づくりがある。多様性を認め合える学級づくりのために、授業内でお互いの意見を受け入れるということが重要であると考える。体験授業をさせていただいた低学年の場合、指導者が中心となって授業での意見を広げ、友達が意見を言ったときにはどのような反応をすればよいのかを理解させることで、発表した児童も自分の意見を受け入れてくれる安心感が生まれることを実感した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　担任の指導について

４月に２年生のとあるクラスで国語のテスト返しがあった。そのテストを返す前に学級担任が児童に自分のテストの点数との向き合い方について指導をされていた。その内容が「点数に良い悪いはない。もし間違えがあれば、その間違えの分、賢くなれる。」という指導であった。これは児童に自分のテストの点数を受け入れ、失敗は悪いものではないという、自分の点数とどのように向き合うとよいのかという指導であった。このような指導をすることで、失敗は悪くないという児童の考え方が生まれ、学級全体がお互いの失敗を認め合えるようになるのではないかと考える。このような授業の中での一つ一つの指導が学級づくりであることに気付き、児童にとって学級を心の居場所にする大切な要素の一つであることを学んだ。

イ　学級経営について

私が１年生のクラスに入らせてもらったときに、学級担任が授業中に友達の意見に対して、全員が反応することを大事にしており、非常に雰囲気の良い授業であった。多様性を認めるとは障害をもつ人、外国の人だけではなく、異なる考えをもつ人を受け入れるということでもあると考えるので、このような授業づくりは児童が多様性を認め合う力を育てるための重要なものであると実感した。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座を通して学んだことは、授業づくりの工夫についてである。大学では学ぶことができないような授業づくりの工夫を現役の小学校の教員などから教わることができ、「夢・未来」講座は私にとって、とても貴重な時間となった。

その中でも特に印象的だったのは「小学校における外国語教育」で学んだ、能動的な児童を育むことについてである。能動的な児童を育むことにより、授業にクラス全員が積極的に参加できるような授業ができる。対話を大切にした授業づくりのために児童同士の対話を鍛えるという取り組みについても学んだ。特に私が学んだ中で大切だと思ったことは教師が児童を褒めてあげるということである。能動的な児童を育むために、教師が児童の意見を認め、褒めるということは児童にとって、安心できる教室にもなる。児童の発言に対して返す言葉が大事であり、自分自身が教師になった際に意識していきたいと思えるようになった。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

いかに児童にその授業に興味を持ってもらうかは導入で決まるということを「夢・未来」講座で学び、導入が大切であるということに気付いた。そこで、私は演習で実際に授業を行う際に導入に特に力を入れた。「どのようにしたら児童に興味をもってもらえるか」を考え、写真やパワーポイント等を用いて、児童がその授業に対して「面白そう」と思える導入づくりを心掛けた。

導入はその授業が児童に興味をもってもらうきっかけになる。さらに、その授業の雰囲気をつくるものでもあるのだと実践演習を通して気づくことができた。実際に、国語の漢字の授業で漢字クイズを導入で取り入れてみた。その際に児童はクイズに楽しそうに参加をしており、授業の雰囲気がとても良いことを実感した。そして、自分自身も児童が楽しそうにクイズをする姿をみて安心し、楽しく授業ができた。このように、導入は授業に興味をもってもらうだけではなく、授業の雰囲気づくりにもなるのだと学んだ。

(2) 児童理解

演習校にて指導教員の先生から児童理解について学ぶ機会があった。その際に「褒め方」と「叱り方」について学んだ。この学びを活かし実践することができたのは「褒め方」についてである。日頃から児童の努力や態度、小さなできごとを褒めるということは児童と教師の良い関係づくりに繋がるのだと気づき、また実践してみて実感することができた。児童とすれ違った時などに一声かけて褒めるだけでも児童にとってはとても嬉しいことで、自信にも繋がると考える。教師になってからもこの褒めることを大切にして、児童との良い関係を築いていきたい。

5　教師に向けた決意と今後の課題

(1) 教師に向けた決意

私は将来、児童にとって楽しい授業をしていきたい。そのためには、まず教師が児童を理解し、そのクラスに合った授業づくりが必要である。また、研究授業など授業改善に力を入れ、自分自身の授業力を磨き続けていく教師になりたい。

(2) 今後の課題

私の一番の課題は児童との関わり方にある。実際に授業中に落ち着きがない児童の対応に困った時があった。適切な対応をするために、日頃からのコミュニケーションや保護者との連携を大切にし、児童理解をしていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「学級経営における教師の役割」

受講生氏名：宇古　和矢

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、３回生の９月の教育実習で児童への生活指導での伝え方に悩み、実習期間内でどのように伝えることが効果的なのかについて私自身の考えを持つことができなかった。児童が意欲的に学習に取り組んだり、お互いに注意し合ったりすることは学級経営と深く関わっていると考える。教師力養成講座を受講するにあたり、指導について私自身の考えを持ち、児童と多くの時間を共にする学級を経営していく教師の役割を学びたいと思い、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　担任と児童との関わり方の観察

イ　児童同士の関わり方の観察

ウ　担任への聞き取り

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は５年生、後期は６年生の学級で演習を行った。その中で、授業や休み時間で担任の先生方はどのように児童と関わられているかを観察した。また、児童間の関わりの観察や、私が児童と関わる中で気になったことを聞き取り、担任の先生方の大切にされていることを学んだ。観察や聞き取りを通して、「自分ならどのように声をかけるか」といった自分なりの視点を持ったうえで児童と関わり、演習に取り組んだ。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童と共に取り組む

教師と児童が同じ目標を持ったうえで学級会や行事に取り組むことの大切さを学ぶことができた。児童に任せる場面と一緒に取り組む場面を使い分けることで、児童は責任感や楽しさを感じながら取り組んでいた。学級会では、議題が提示されると主体的に児童が司会、書記を担当し、時間内に何を話し合うのかを考え、進行していた。また、担任の先生方と取り組んでいる時の児童の様子は普段より明るく元気なものであった。演習させていただいた学級は高学年であったが、全て児童に委ねるのではなく、教師も一緒になって取り組むことで、児童が安心して生活することができる学級づくりに繋がることを学んだ。

イ　児童を評価する

後期に演習させていただいた学級では、「付箋プロジェクト」が行われており、児童が頑張っている様子や、良いところを付箋に書いて渡すことでその場で児童を評価されていた。その場で評価することで、評価された児童は他のことにも一生懸命取り組み、周りの児童も頑張るといった相乗効果が生まれていた。児童がすぐに取り組むことができるものを、学級のプロジェクトとして取り組むことで、楽しみながら同じ目標に向かい協力して取り組めていたと考える。教師から指導されて行動するのではなく、ゲーム的要素も取り入れて楽しみながらできることを増やしていく方法もあることを学んだ。児童を評価するためには、児童が何をしているかを日々見取ることが必要であると感じた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、講義を聞き、グループ協議をすることによって、１つのテーマに対し様々なものの見方・考え方があることを知った。より視野を広げることが必要だと感じた。教師として求められている力は何かといったことや、今取り組めることは何かといったことを多くの講義で学ぶことができたが、特に印象に残っているのは、第４回の児童理解と学級経営についての講義である。児童にとって学級は助け合うことができる１つのチームであり、学級経営の充実を図ることが児童理解に繋がることを学んだ。グループワークでは、「どのような学級にしたいか」を話し合った。人それぞれに学級経営で大切にしたい軸があることに気づいた。その中でも、児童の背景を知ることや、軸をぶらさないことが共通していたため、正解の対応はないが、児童のことを考えて軸のぶれない学級経営をしていく必要があると感じた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童との関わり方

演習では、積極的に話しかけ、児童と関わっていくことを意識した。話しかけることを繰り返すことで、児童の変化に気づくことができた。児童によって、教師にどのように関わってほしいかという望みは違うが、話す時はその児童を笑顔にしようと意識して関わった。演習初日と最終日を比較して、前半は自分から話しかけることが多かったが、後半は児童から話しかけてくれる場面が増え、短い期間の中で児童との距離を縮めることができた。児童と関わる中で変化に気づく力を身に付けることができた。

(2) 児童を評価する

教師力養成講座を受講する前に、教員養成サポートセミナーを受講しており、その際、テスト前に勉強している児童のどこを褒めてあげると良いのか悩んでいた。しかし、４ヶ月の演習を通して、児童の様子を継続的に観察する中で、どのように児童が成長しているのかを知ることができた。児童を褒める際は、これまでとの比較が大切であると感じ、その小さな変化に気づくことが必要であると感じた。褒めることで、児童が自信をもって積極的に物事に取り組もうとする姿を見て、褒めることの大切を学んだ。児童の褒め方を自分なりにつかんで実践できたので、今後はさらに磨いていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、４ヶ月間継続して児童と関わることができたが、これからも児童と関わり続けていきたいと強く思った。春休み期間など教職の忙しい部分を経験できたことも良い学びとなった。また、児童の成長に触れることができ、教職の魅力を改めて感じることができた。教師力養成講座での出会いや学びを忘れず、児童が安心し、学校に来たいと思える学級経営ができる教師を目指したい。

(2) 今後の課題

今後の課題は、授業力の向上である。授業をさせていただいた学級は、担任の先生方がこれまでに積み上げてこられたものがあったため、児童に支えられて授業が成り立ったのだと感じた。これから授業づくりを行っていく際には、時間配分を意識し、児童から授業の問いを引き出すことのできる授業を目指したい。また、私自身の武器が声であることを教えていただいたので、その武器を活かして一回で児童全員が理解できる指示を出せるように、簡潔にわかりやすい言葉で伝えることを意識したい。授業で児童が意欲的に取り組むには、学級経営が密接に関係していることを感じたので、授業力の向上だけでなく、学級経営にも重点を置き、どちらも共に伸ばしていくことができるよう学び続けていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の将来を見据えた学級経営」

受講生氏名：福井　健人

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 研究テーマ設定理由

小学校では、担任が１年間を通して子どもと関わる時間が長く、長期的な視点で児童をどのように成長させていくべきかということを考えられる。担任の日頃の指導や声かけについての意図を知り、自分が担任となった時に発達段階や児童の成長した姿を意識した学級経営を行いたいと考えている。教師力養成講座では、年度末と年度始めの貴重な期間を経験することができる。そのため、担任としての締めくくりの仕方や新しい学級でどのような思いをもって学級経営を行っているのかを学びたいと思い、この研究テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　担任から児童への日常的な指導と声かけについての観察

イ　児童の学級担任への思いの変化や目指す子どもの姿についての聴き取り

ウ　学年に応じた学級経営への意識と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期では４年生、後期では５年生で演習を行い、中学年と高学年で担任による学級経営を観察した。特に４年生の担任からはこれまでの児童の様子を聞き、高学年としての目指している姿について聞き取りも行った。５年生での演習でも、学年開きに参加して学年全体として取り組む目標を確認して演習に取り組んだ。

(2) 演習校で学んだこと

ア　周りを見て行動することを意識させる

中学年と高学年では「周りを見て行動すること」を大切に指導していきたいと感じた。児童も日頃の担任の先生からの指導を受けて教師からの指示を待つのではなく、状況を見ながら児童同士で注意をし合って行動しているのが印象的だった。児童の登下校での姿や学級での姿を例にして取り上げて、その姿を見た地域の方や低学年がどう思うかを考えさせることで自分の行動が与える影響について深く考えるように指導を行った。そのため、状況を見て何を求められているのかを考えたり、友だちの表情やしぐさから気持ちを読み取ったりして自分の行動や周りの注意などを一人一人が考えながら誰もが嫌な思いをしないような雰囲気が作られていると感じた。

イ　授業で雰囲気を作る

生活面での指導だけでなく、授業で雰囲気を作ることも意識したいと考えている。授業での展開を工夫し、児童が意見を交流しやすくする必要があると感じた。時間を設定した分かりやすい指示を出したり、「できた」ことに対しては褒めることを意識したりすることで、児童が考えて行動することを促していく。

様々な学級を見させてもらい、担任が与える学級への影響は大きいと感じた。だからこそ、１日の大半を占める授業時間の雰囲気を大切にしていく。主体的に学ぶためにも、児童の意見に耳を傾け、「解けるかもしれない」「やってみたい」という思いを引き出して意欲的に学びに向かえるようにしたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教師として知っておくべきことや学級経営や授業で意識すべきことなど幅広く学ぶことができた。特に第８回の「特別の教科　道徳」についての講座は印象に残っている。講座を受けるまでは、多様な意見を引き出すことや教師からの教え込みにならないようにすることが困難だと感じていた。しかし、講座で初対面の人でも意見を伝えやすい雰囲気を作り、多様な考えが引き出される授業を見て、私もこんな授業を行いたいと感じた。導入での発問による「言いやすい雰囲気作り」や、教師が児童に寄り添って「心を見ようとする工夫」などは、他教科でも大切にすべきだと思った。授業でも児童の声に耳を傾け、児童と教師が共に考え、共に探す姿勢を大事にするとともに児童の気づきをもとに内容を深められるような授業を目指していく。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業実践力

授業をすることで45分間という時間の中で児童が何を学んだか明確にできるように、ねらいに沿った展開を意識できるようになった。多くの先生方や演習生にも授業を見てもらうことで、単元でのゴールの姿をイメージできるような導入や展開の工夫、児童の実態に合わせた指導など自分では気づかなかった視点でのアドバイスを頂いた。今後の授業で実践したいという思いも生まれた。他にも児童に大切なことを伝える時の声に抑揚をつけたり、学ぶ楽しさを引き出す展開を工夫したりするなど、改善すべき点に気付くこともできた。これらの気づきから、私自身の力を伸ばすために授業改善に取り組み続けていきたい。

(2) コミュニケーション力

教師力養成講座が始まった時と比べると、児童や先生方と積極的にコミュニケーションをとれるようになったと感じる。児童とは授業中は全体を見渡し、困っている児童に気づき話しかけることを心掛け、休み時間には児童の輪の中に入って遊ぶことで信頼関係を築くことを意識した。先生方とは、目指す子ども像やこれまでの成長について情報を共有することで児童への理解を深めながら指導することができた。授業や指導のことで悩んでいることも周りの人に相談することで、解決することもあった。今後も学級担任だからと一人で悩まずに、教員間での報告、連絡、相談を行うことで児童との信頼関係について学んでいく。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

児童と関わる中で「分かりやすかった」「できた」と喜ぶ姿や、担任から１年間で児童が成長した姿を聞いて教師としてのやりがいや魅力を感じ、より一層、教師になりたいという思いが高まった。加えて、授業や子どもとの関わりで未熟だと思う点にも気づくこともできた。その点を少しでも改善できるように、これからも学校現場での人とのつながりや指導法について学び続けていきたい。

(2) 今後の課題

授業実践力については学んだことは多かったが、今後の課題もたくさん見つかったと感じている。特に「学ぶ楽しさを感じられる授業」を目指していきたい。教科書の内容をどのように伝えるかによって児童の「分かった」という楽しさの実感は大きく変化してくると思う。引き付ける導入や児童の声や気づきを拾って進めていく授業展開など、学習意欲を高められるような工夫を行う。学級の雰囲気づくりやICTの効果的な活用、抑揚をつけて話すことなど授業に影響することは数多く考えられる。それら一つ一つに気を付け、児童の「わかる」喜びを積み重ねて、主体的に学びに向かえるような授業にしていく。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「児童が主体的に学習するための授業づくり」

受講生氏名：福原　向葵

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習で実際に授業を行ってみて、指導書や参考書を見ながらただそれに従って授業をするだけでは、児童が主体的に学び考える力は育まれにくいと感じた。目の前の児童に目を向け、児童理解を行い、興味や関心の高まる授業づくりを行うことが、児童が主体的に学習することにつながると考える。演習を通して、学級や児童の事態に即した、児童が主体的に学習するための授業づくりが、実際どのように行われているのか知り、今後どのように授業を作っていけばよいのか研究したいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　先生方の授業で行われている主体性を引き出すための工夫を学び、それに対する児童の反応の観察をする。

イ　児童が主体的に学習するための工夫を考え、授業実践する。

ウ　実践内容の振り返りと考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習テーマに関わる活動としては、授業観察と児童の様子や反応の観察、授業実践を主に行った。授業観察では、担任の言葉がけや発問、授業内での取組を学んだ。また、放課後には担任の先生から、授業の内容や取り組ませた活動の目的や意図について話を聞くようにした。

児童の様子や反応については、児童がどのようなことに興味や関心を示すのかに注目しながら観察した。担任の発問や指示の言葉がけの仕方の違いによる反応の変化や、どのような授業の取組であれば、積極的に参加するのかなどを注意してみるようにした。観察を通して学んだ内容を踏まえて、授業を実践するようにした。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童理解に基づいた授業づくり

主体的に学習するための授業をつくるには、児童理解が重要であると学んだ。担任は、児童が興味や関心のあることと授業内容を関連付けるようにしたり、グループワークやタブレットの使用などその学級の児童が得意とする学習活動を積極的に取り入れたりしていた。担当学級は ICT を使用する力に長け、グループでの話し合い活動も積極的に行う児童が多くいたため、担任が与えたテーマに基づいてタブレットを使用しながら班ごとで調べて発表するというような学習を行っていた。児童らは自分たちで課題を設定し、それぞれが分かりやすいと思う方法で調べた内容をまとめるなどして、主体的に学習に取り組む姿がみられた。これらの授業の様子から、児童理解で得た情報を授業に活かすことが、学習意欲の向上につながり、その結果主体的に学習できる授業になると学んだ。

イ　授業中の言葉がけや発問

授業中の担任の発言や発問の仕方も重要であると学んだ。担当学級の担任は、あえて間違えた発言をすることで児童に考えさせるきっかけを与えたり、厳選した発問で児童の思考をサポートしたりするなど、児童が「知りたい、考えたい、話し合いたい」と思えるような発言や発問をしていた。これを実践するには、事前に授業の流れに伴って、児童がどのように思考し、どのような反応や発言をするのかを十分に考えておく必要があり、事前の準備が重要であると教えていただいた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座ではICT教育や、人権教育、学習評価、令和の日本型教育等の様々な分野について学ぶだけでなく、京都府の教育についても学び理解を深めることができた。「夢・未来」講座の中で特に印象に残っているのは、新しい時代の教育の在り方等についての講座である。現在の京都府の教育の現状は、基礎・基本が定着している一方で学ぶ楽しさ、学ぶ意義を実感できていない児童生徒が一定数いることが課題である。この課題を知った時、将来教師を目指す者としてこの課題に向き合わなければならないと感じた。この課題を解決するためには「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりが必要である。個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、一人一人の意欲を高める学びや授業の提供と児童生徒の協働した学び合いや多様な他者と協働した学びを実現し、学ぶ意義を感じさせ学び続ける力を身に付けさせることが大切であると学んだ。

「夢・未来」講座で様々な分野について学んだが、どれも教師に必要な知識や能力である。教師は様々な分野についての知識や能力が求められる職であるからこそ、学び続け成長し続ける姿勢が大切であると学ぶことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

４か月間の教師力養成講座を受講して、これまで以上に学校現場への理解を深め、教師になるための力を身に付けることができたと感じている。演習では、多くの児童や先生と関わりながら日々の活動を共に行い、授業をするという経験ができた。この経験を通して、授業をする際の視野の広がりや臨機応変さなどの、授業力における成長を感じている。何度も授業をすることで、徐々に心に余裕が生まれ、児童の様子を見ながらそれにあわせた授業の進め方ができるようになった。教師からの一方的な授業ではなく、児童と共に思考し、お互いがコミュニケーションを図りながら、自分たちで問題解決を図ろうとする双方向型の授業を行うことで、児童がより主体的に学ぶようになると気付くことができた。

他にも、児童に寄り添う力を身に付けることができたと感じている。演習中は児童への理解を深めるために、児童の様子を観察したり、学習のサポートを積極的に行ったりするようにした。児童が困っている際には、課題について共に考えることで、児童の成長を身近に感じることができた。また、褒めるなどの肯定的な言葉がけも積極的に行うようにし、児童が学習に対して否定的にならないように気をつけた。この活動を通して、児童一人ひとりに寄り添うことが相互的な信頼関係の構築に繋がっていくのだと気付くことができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教職についての理解をさらに深めることができた。演習では、多くの児童と関わりながら、様々な場面で児童の成長を見ることができた。これらの経験を経て、これまで以上に教師になる意思が強くなった。

将来、児童一人一人が安心して学校に来ることができる学級を作り、児童が楽しみながら主体的に学習できる授業が行える教師になりたい。そのためにも特に「気付く力」と「伸ばす力」を養い、児童一人ひとりに寄り添える力を身に付けなければならない。教師になって目指す教育を実践するという強い意志をもって、より良い教育が行えるように今後も学び続ける姿勢を大切にしていきたい。

(2) 今後の課題

今回の教師力養成講座を通して授業力の成長を感じたが、反対に多くの課題にも気付くことができた。特に一番の課題だと感じることは、授業に波をつくることである。授業中の話し方にあまり抑揚が無く、単調になりがちなことが課題であると感じている。話し方が単調であることで、児童の集中や授業への興味や関心が、時間が進むにつれて薄まっていることに気が付いた。児童が注目するような話し方や間の取り方、授業内の活動の工夫を考え、今後改善できるようにしたい。

第 16 期　「教師力養成講座」を終えて
「児童理解を深めるための、学年に応じた関わり」

受講生氏名：馬渕　莉奈

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

小学校の特徴の一つとして、学年ごとの発達段階の違いが大きいという点がある。そのため、どの学年の児童に対しても同じように対応するのではなく、それぞれの学年に応じた関わりが大切だと考える。また、児童理解を深めるためにも、発達段階や学年ごとの特徴を知ることが大切であると考える。実際の教育現場で、それぞれの学年によって、先生方がどのように児童と関わり、授業や学級経営をされているのかを学び、児童理解に繋げたいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　異なる学年の担任による児童への指導や児童との関わり方を観察する。

イ　異なる学年の担任による授業づくりや学級経営の違いを観察する。

ウ　多くの児童と関わり、それぞれの児童との良い関わり方を探る。

2　演習テーマに関わる実践演習内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践演習内容

前期は２年生、後期は５年生の学級に入らせていただき、異なる学年の授業や学級活動を観察した。その中で、担任の先生は授業や学級経営で、どのような工夫をされているのかを考えながら演習に取り組んだ。また、担任の先生としっかりコミュニケーションを取り、児童への指導において大切にされていることを聞くことができた。

児童との関わりでは、担当学級の児童の名前を早く覚え、声をかけたり、登下校時や休み時間に他学年の児童とも関わったりと、とにかくたくさんの児童と積極的に関わる中で、児童のことを理解し、それぞれに応じた関わりができるよう意識した。

(2) 演習校で学んだこと

２年生の授業では、児童の考えから展開が進められていたり、低学年だからこそ国語では物語の登場人物になりきる活動があったりと、児童の理解が深まる授業になっていた。日頃から授業でも学級活動でも、児童が自分たちの考えを発表したり、自分たちで物事を進めたりする場が多く作られていて、低学年にも関わらず、常に自分たちで考え、進めていくことに慣れていることに驚いた。日頃の授業や学級経営の大切さ、そして担任の力の重要性がわかった。また、担任の先生は、児童を特別扱いしないことを大切にしているとおっしゃっていた。児童は自分が特別扱いされていると感じたら余計に嫌になる場合もある。例えば、すぐに集中が切れたり、暴れたりしてしまう児童に対して、その子に焦点を当てるのではなく、周りの児童と同じように注意をしたり、先に別の児童に支援に行ってからその児童の支援をしたりと、児童自身に気付かせることを大切にしておられ、大きな学びとなった。

５年生の授業では、算数の授業で出てきた答えを全て取り上げ、児童が意見を言い合い、正しい答えを導き出しているのが印象的だった。間違った答えも取り上げることは、日頃の指導がしっかりできていないと難しいと思うので、学級経営が様々な活動に繋がっていると感じた。また、担任の先生は児童のいらない発言や、休み時間の揉め事などに対して、きっちり丁寧に指導していた。日頃から小さいことでも見逃さない、細やかな指導が大切だと学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、多くの先生方の講義を受け、教育に関するあらゆる分野の内容を学ぶことができた。様々な講義を受け、授業をする際も、道徳教育や人権教育などをする際も、日頃の学級づくりやクラスの雰囲気が繋がってくることを知り、学級経営の大切さを学んだ。「夢・未来」講座の中で特に印象に残っているのは、「授業実践講座」である。実際に講師の先生の授業や講義を受け、児童の言葉を大切にし、児童の言葉を繋げて授業をつくることの重要性を学んだ。

また、「夢・未来」講座を通して、養成講座生と交流し、自分にはない視点に出会えたり、考えが深まったりした。そして、交流する中で、同じ教師を志す仲間として高め合うことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

私が教師力養成講座で身に付けた力や成長したことは主に二つある。

一つ目は、授業力である。私は教師力養成講座の演習で、初めて小学生に対して授業をした。授業の進め方や発問の仕方など課題はあったが、実際に児童の前に立って授業をしたことは私にとって大きな経験になった。また、先生方の授業を見学し、児童の発言や考えを大切にした授業や、児童の主体性を引き出す授業を見ることができ、今後の授業づくりに活かしていこうと思った。

二つ目は、気付く力である。学級に入り、児童の支援をする中で、困っている児童に気付き、段々と児童それぞれの支援の仕方や関わり方がわかるようになった。また、私が授業を行った際、ある児童がぼそっと言ったことを拾ったり、支援が必要な児童に素早く机間指導をしたりすることができた。広い視野で児童の変化に気付き、誰一人取り残さない授業や学級経営を行っていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教師に向けた決意

教師力養成講座を通して、先生方の授業づくりや学級経営において大切なことを学ぶことができ、自分が教師になった際に実践したいと強く思った。そしてなにより、演習校で児童と関わる中で、素直で可愛い姿や楽しそうに活動する姿をたくさん見ることができ、教員になりたいという気持ちが強くなった。

また、「夢・未来」オープン講座での教育長の講話を聴き、教師としての「幸せ」の素晴らしさを再確認できた。なぜ教師になりたいのか、どんな教師になりたいのかをしっかり自分の中で持っておき、教師という仕事に「幸せ」を感じられる教師になりたい。

(2) 今後の課題

私の今後の課題は二つあると考える。

一つ目は、その場の児童の考えに沿って、児童の言葉から授業を展開することである。私が授業をした際、児童の予想外の発言に対して戸惑ってしまったり、うまく児童の言葉を繋げて授業を展開することができなかったりした。今後は、児童の言葉を大切にし、児童の言葉を繋げて授業が展開できるように力を付けていきたい。

二つ目は、指導力である。５年生に体育の授業をした際、騒がしくなってしまい、説明や指示がすぐに通らなかった。活動的になると、騒がしくなってしまうので、話を聞かせる場面では、しっかり指導し、活動についての説明に加え、活動が終わった後どうするかという、次の姿まで示すと良いということを学んだ。教師として「聞かせる技術」を身に付け、児童に合った細かい丁寧な指導ができるようにしたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童理解に基づいた学級経営」

受講生氏名：辻本　帆花

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、教員養成サポートセミナーで教員の考えや思いがどのような学級経営につながるのかについての研究を行っていた。その研究を通して、教員の児童への具体的な未来像が学級経営に深く関係していることを知ったと同時に、教員の独りよがりな学級経営にならないためには、「子どもたちの思い」を中心とした児童理解が必要不可欠であることを学んだ。この学びを、より具体的に自身の実践に生かしていけるような力に変えていくために、演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　担当学級での個別の関わり合いと全体の関わりを意識した授業観察

イ　授業者としての児童理解をふまえた授業実践

ウ　学級での一人一人の児童との関わり

エ　先生方と考えを共有する機会

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 授業中に児童を「見る」ということについて

授業を行った中で、児童全体を見ることができていないことが分かった。児童一人一人に個別の指導を行うこともちろん大切だが、授業の中で児童全員を把握することの大切さに改めて気づかされた。具体的には、見ることに関して大きく２つのことについて学んだ。まず１つ目は、それぞれの児童には活動の差があることに気づいた。授業中に落ち着いて児童を見ることを意識すると指示に気づいていなかったり、板書することに必死で授業内容を理解できず授業から離脱してしまっていたりしていることに気づくことができるようになってきた。そこから、全員が一度で理解できるような短い指示や発問や、聞かせることを意識した指示や発問をすることの難しさを身にしみて感じた。２つ目は、指示と評価の一体化である。指示をしてそのまま活動に入ることが多々あったが、指示したことに対して児童を評価すると、学習規律にも良い影響があることを学んだ。指示を出して終わりではなく、児童をよく見て、素早く動けている児童を取り上げて、全体の中で評価をすることで、ほかの児童の意欲も高まり、全員の意識をそろえることができることを学んだ。

(2) 児童のできることを生かして伸ばす

児童の中には得意不得意が明確に分かれている児童もいる。担当学年にうまく話すことができない児童がいた。私だったら、児童の負担や心労、ほかの児童の影響なども考え「聞いているだけでいいよ」と言ってしまうと考えていた。しかし、担任の先生は、その児童ができる範囲で自分の思いを表現させることを指導しておられた。その児童はロイロノートやメモ機能、ジェスチャーを使って、ほかの児童とコミュニケーションを取っていた。その後、担任の先生とこの出来事についてお話しする機会があった際に「児童を見守るだけではなく、できることを生かして伸ばしていく指導を心掛けている」ということを教えてもらい、私自身非常に感銘を受けた。私も児童の可能性を信じ、できないことを見るのではなく、できることを伸ばしていく指導を意識していきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育や外国語、道徳、などの教科指導、学級経営などの幅広い分野からたくさんの先生方に学ばせてもらった。その中で、印象に残っていることは、「学習指導要領に対応した学習評価」の講座である。指導と評価を一体として取り組むことで、児童の活躍できる場を増やし、「何のために学ぶのか」を子どもたちと理解していくことが重要であると学んだ。また、その際に実践例も併せて知ることで、自分の中でどこか他人事として捉えていた指導要領を、自分の経験や演習での出来事と結び付けながら、捉えなおすことができた。中でも一番心に響いたのは、「子どもたちは分かってくれる、背負い込まずに頑張り続ける」という言葉である。授業は決して教員一人でつくるものではなく、子どもたちと一緒になってつくりあげるものである、と気づくことができた。一人で背負いこみ、不安になって授業するのではなく、子どもたちを信じ、自分を信じることで、授業の捉え方が大きく変わった。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) つながる力

演習校では、積極的に児童と関わることを意識して取り組んできた。改めて一人一人の児童と向き合い、関係を築いていく難しさを実感した。また、給食や休み時間などの授業外での交流や、授業内での児童との関わりなどから、信頼関係を築けているなと感じることが多々あり、教師としてのやりがいを感じることができた。また、授業づくりや児童の対応で困ったことの相談、日々の学校生活を過ごす時間を通して、先生方ともつながりが生まれた。実際に働いてみてのアドバイスや、学生の時間にすべきことなど、幅広く教えていただいたことは、これからの教員生活に生かしていきたいと考えている。

(2) 受け入れていく力

演習校での自分自身の成長ももちろん貴重であるが、養成講座生同士の学び合いの中で生まれるお互いの成長も強く感じた。今まで所属大学内での交流のみしか経験していなかった私にとって、それぞれ違う場所で学んできた講座生同士の関わりから新たな視点に気づかされることが多くあった。自分が当たり前だと思っていたものが、実は問題点を孕んでいたり、今まで見たことがない授業の構成であったりと、新たな発見が毎日あり、刺激された期間であった。また、「夢・未来」講座で取り入れられていたグループ協議やペア活動で、さまざまな学校の演習生と意見を交流することで、新しい視点が生まれ、それを自分の中で受け入れていく時間になったと感じている。教員になっても、ほかの学校の先生や同僚と関わる機会は必ずある。その際に教師力養成講座でのつながりも大切にしながら、新たな考えを受け入れ、自身の成長につなげていく。

5　教職に向けた決意と今後の課題

短い期間だったが、教師力養成講座を通して濃い経験をし、教員になりたいという思いがより一層強くなった。実際の教育現場に行き、自分から関わり、学んでいく中で、日々変化していく子どもたちにどう対応していけばいいのか、全員が理解して参加できる授業をするにはどうすればいいのかなど、壁にぶつかってしまうこともあった。しかし、何よりもやりがいを多く感じた４か月だった。子どもたちが変わっていく瞬間を間近で見届けていきたいという強い想いを胸に、常に子どものことを考え、行動していく教員になりたい。

また、今後の課題として、自らの指導の中にメリハリをつけることを意識して子どもたちと接していきたい。教員としての自覚をさらに持ち、「先生らしい振る舞い」を意識して、これからも取り組んでいきたい。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて

「児童が意欲的に学習に取り組むための授業の工夫」

受講生氏名：村山　果奈

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1)　演習テーマ設定理由

私は、児童が勉強を楽しいと思えるような授業をする教師になりたいと考えている。そのためには、児童が自発的にもっと知りたい、学びたいと思えるような授業の工夫を行う必要がある。そのような児童の好奇心をくすぐる授業とは、どのような授業なのかについて現場で研究したいと思い、この演習テーマを設定した。

(2)　研究方法

ア　担当の先生の授業を観察する中で、実践されている指導の工夫を見つけ、学ぶ。

イ　学んだ指導の工夫を自らの授業実践で取り入れる。また、自分なりに工夫を考え実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1)　演習テーマに関わる実践内容

前期の演習では 4 年生、後期の演習では 6 年生の学級で演習をさせていただいた。担当の先生の授業を観察する中で、どのような場面でどのような声かけを行っているかということや、どのように授業構成が組まれていて、そこにはどんな工夫があるのかということに注目した。放課後などに、その声かけや授業展開の工夫についての意図などを先生に教えていただき、学びを深めた。また、授業実践を行う時には、子どもが意欲的に考えたくなるような発問や活動内容を考え、実践を行った。

(2)　演習校で学んだこと

ア　導入で児童の心をつかむ

導入において、本時の学習で達成したい目標である「めあて」が子どもたちの中から自然に出てくるように活動を設定することが大切だと担当の先生に教えていただき、授業実践では、そのような導入を意識して行った。「めあて」を教師から提示する形ではなく、児童自身から引き出すことによって、その後の活動の際に、児童の意欲がとても高まっている姿を見ることができた。また、子ども達自身が何を学ぶ授業なのかについてより焦点を当てて学習することができていた。「もっと知りたい」や、「どういうことなんだろう」といったような児童の考える力をくすぐり、「めあて」を児童から引き出すことができる導入は、その授業内容について児童の心をつかむことにつながっていた。その結果「児童が意欲的に学習に取り組む」ことができると学んだ。

イ　児童の意欲を引き出す発問の工夫

担当の先生の授業を観察する中で、児童の意欲を引き出すためには、「分かる！」という自己効力感を児童に持たせた上で、もっとその先を知りたい、考えてみたいという気持ちにさせるような発問を行うことが有効であることを学んだ。そのような意欲をもたせるための過程で、児童の対話がたくさん生まれるような発問を行い、児童主体で授業が進んでいくことが重要であると分かった。

ウ　遊びの中に学びを含ませる

授業実践でゲーム要素を取り入れた授業を行ったのだが、児童がとても楽しみながら学びに向かうことができていた。児童が遊びのように楽しんでできる活動は、自然に意欲的に取り組むことができることが分かった。遊びの活動を通してしっかりと学力つけるためには、教師がどれだけ遊びの中に学びを取り入れる工夫を施せるかが重要になると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教育の各分野についての課題点、今後求められる教育などについて学んだ。様々な校種の先生方や専門の先生方からの学びと併せて、受講生同士でのグループワーク、質疑応答の時間を通してたくさんの考え方に触れ、自分では気付かなかった視点に気付くことで視野が広がった。

特に印象に残っている講義が二つある。一つ目は、「学習指導要領に対応した学習評価」についてである。評価の変更に応じて授業も変わっていくべきであり、学びの質の向上を図っていかなければならないと学んだ。質を向上させるための方法として、児童が教材に学ぶ意義を見いだせるようにすることを学んだ。今後授業を行う時に、児童が意義を見いだせるような学習となっているか意識したい。

二つ目は、「教員を目指すみなさんへのメッセージ」である。私は、これまで未熟である自分が来年から教壇に立つことに不安を感じていた。しかし、講義の中で「未熟さに気づくことは変われるきっかけであり、怖がることではない」とおっしゃっており、少し前向きになれた。お話にあった、“小さな感動に目を向ける感覚を持つこと”を忘れず、着実に歩みを進めていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1)　教員の仕事

4か月という長期間、現場で演習させてもらう中で、授業についてだけでなく、教員同士の関わりや連携されているところなど、教員の仕事の表には見えていない部分や学校の全体像について以前よりも知ることができた。児童が学校に来ない春休み期間も演習させていただき、教室のワックスがけや教科書の準備、机の高さ変えなどの業務も経験させていただいた。

教員の様々な業務があるからこそ、児童は快適に学校生活を送ることができるのだと知った。

(2)　児童との信頼関係が築かれるとき

演習の中で、児童と関われば関わるほど、信頼関係を築くことができるということを実感した。机間指導の時や休み時間に、授業で躓いていた児童に付き添って教えたり、リコーダーの練習を一緒に頑張ったり、一緒に遊んだりなど少しでも関わった児童とはとても距離が縮まった。また 関わる回数や時間が増えれば増えるほど、児童との関係は深まった。学級担任などのように長期間関わる中でしか信頼関係は築くことはできないと思っていたが、この経験を通して自分の見方が変わった。教員になった時、授業以外での何気ない関わりも、児童との距離を縮めるためのチャンスとして大切にしなければならないと強く感じた。

(3)　教員同士の協働性がもたらすもの

演習生同士で情報共有をし合ったり、悩みを話し合い助け合ったりすることで、前を向けたことがたくさんあり、横のつながりの中で得られるものは大きいということを実感した。授業実践をお互いに見合ったり、授業後の事後研究会で意見を出し合ったりした際も、同じ一つの授業でも様々な視点から学ぶことができ、協働性の大切さを身に染みて感じることができた。教育実習で実習生が自分一人だった時と比べ、同じ立場である演習生同士で切磋琢磨し、それにより演習がよりよいものとなっていたことから、横のつながりの中で頼ったり助け合ったりしながらお互いを高め合うことの大切さについて改めて気付かされた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

授業を行っている時に、教科書や授業メモ、黒板を見ながら話してしまう場面が多かったため、児童にしっかり伝わっているかその都度児童と目を合わせて確認し、児童の反応や様子をしっかり見ながら授業を行えるよう訓練していきたい。

また、授業プランを考える中で、児童目線で活動を考えたつもりでも、実際に授業をしてみるとまだまだ児童の目線に寄り添えていないことに気付いた。常に、本当に児童目線になっているかということを自らに問いかけて行動していかなければならない。児童と関わる経験を積み重ね、児童の目線に立った教育が行える教員になりたい。

教師力養成講座の経験を通して、教育について、より現場に即して考えることができるようになった。教員になった時には、この経験を活かし現場の即戦力となれるよう努めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒一人一人を大切にした授業と学級づくり」

受講生氏名：樋口　航生

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、学校インターンシップや「はんなり」教員養成プログラムなどで、授業見学や机間指導、ホームルーム活動に参加した。この活動から、生徒が安心して学校生活を過ごすためには、生徒一人一人が「大切」にされていると実感できることが重要と考えた。生徒が「大切」にされていると実感するためには、生徒の変化や成長に気づき、認めてあげることが重要と考える。そのためには、「授業」や「学級づくり」の中でどのような取組や工夫が行われているのかを、この教育実践演習を通して学びたいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　演習学級や授業の中での、先生方の生徒に対する声かけや関わり方を観察する。
イ　生徒と積極的に関わり、生徒の変化や成長を「気づき、認める」ことを実践する。
ウ　体験授業や研究授業での実践と考察を行う。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

生徒の変化や成長を「気づき、認める」ために、教育実践演習の約四か月という長期的な期間を活かして、授業内、部活動、時には生徒と学年の企画などを協働するなど、積極的に生徒と関わることを心がけた。また、体験授業や研究授業を通して、生徒一人一人の考えや発言を大切にして授業を展開していくことを心がけて演習を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア　生徒を「大切」にした授業

生徒を「大切」にした授業とは、生徒の考えや発言が大切にされている授業である。ただ、教師が提示した課題に取り組むのではなく、生徒の発言から「なぜそう考えたのか」と考えを深める発問を行うことで、生徒主体の深い学びが実現できると学んだ。

また、机間指導などで学習が進んでいない生徒に対する支援を行い、誰一人取りこぼさない授業を展開していくことも、生徒を「大切」にした授業と学んだ。なぜならば、指導教員の授業では個人ワークやグループの時に、学習が進んでいない生徒の支援を積極的に行うことで、その生徒は一時間の授業内容をしっかりと学習できていたからだ。

イ　生徒を「大切」にした学級

生徒一人一人が安心して学校生活をおくることができる学級は、担任や他者から「大切」にされることである。担任が、生徒一人一人を「大切」にするために工夫していた点は、朝学活の時間で普段と様子が違う生徒に対して、丁寧にかつ迅速に声掛けをしていた点である。このように、生徒一人一人の変化を見逃さないことが重要と学んだ。

また、終学活では班で一日の良かった点や改善点を学級全体で共有していた。このように、他者から良かった点が認められることで、生徒は安心感や学級が自己の居場所と実感できると学べた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府で展開されている教育を中心に、教員に求められる資質・能力を他の講座生と協働しながら学ぶことができた。その中でも印象に残っていることが二つある。

一つ目は、生徒指導の意義についてである。生徒指導とは、「悪い行いをした生徒」を正すイメージであったが、生徒が起こした事象のみを指導するのではなく、そのような事象を起こしてしまった生徒の背景や内面に迫っていくことが重要と学んだ。

二つ目は、「主体的で対話的な深い学び」の実現を目指した授業実践例である。私は、主体的とは「生徒が意欲的に取り組むこと」と安易に認識していたが、講義を通して、「問い」を自ら立てた上で、その「問い」に対する解決に向けた過程で自己に育まれた力を認識して、次の新たな学びへと向かっていく事が「主体的な学び」だと学ぶことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座では、専門的な講座や教育現場で実習を行うことを通して、より実践的に学ぶことができた。この経験を通して、私が成長した点は二つある。

一つ目は、生徒との対話を通して授業を創りだすことである。私自身、授業で大切なことは、教師が分かりやすく生徒に知識を伝えることだと考えていた。しかし、実習校での授業見学から、生徒との対話を通して学びを深めていく事が大切と学んだ。生徒との対話を通して学びを深めるとは、複数の生徒の考えを教師がファシリテートすることと考える。ファシリテートを行うことで、生徒は自己に無かった考えが形成され、深い学びを実現することができる。私はこの点に留意して、体験授業や研究授業で生徒の意見に対して、考えを深める発問や生徒同士の意見をファシリテートすることができた。

二つ目は、生徒一人一人に合った支援をすることだ。机間指導や体験授業、研究授業を通して、生徒の学習の進め方は多様であると学んだ。この学びから、その生徒にあった支援の方法を心がけた。また、学習が進んでいない生徒の支援のみに留まるのではなく、学習が進んでいる生徒に対しても、良い点を認めてあげられた。これにより、学習が進んでいる生徒も「自分を見てくれている」と実感して、自己肯定感が育まれ、次の学びに繋がると考える。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私は、長期的な実習を通して、教師とは生徒の成長を間近で実感できる魅力的な仕事だと痛感した。私は同じ学年に四か月間、関わることができたため、授業内外で生徒の学習の成長をより実感できた。このように、生徒の成長に貢献できる教員になりたいと強く実感した。

(2) 今後の課題

私の今後の課題は授業力である。具体的には、生徒の考えを深める発問を熟考することと、自己の専門性の向上である。生徒に発問を行う際には、簡潔で明確な発問を心がける。不明確だと、生徒がどのような活動や学習を行えばよいかわからないからだ。

また、教材研究を徹底するとともに、授業後のＰＤＣＡサイクルを常に心がける。このようにして、生徒にとって理解しやすく、楽しい授業を展開できる教員を目指す。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒にわかる喜びを感じさせる授業づくり」

受講生氏名：西村　奏

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) テーマ設定理由

大学の講義や学校ボランティアを通して、生徒一人一人に特性があり、支援を必要とする生徒が在籍していると学んだ。また、授業内容がわからず、学びに向かえない生徒がいると実感した。このことから、生徒の学びに向かう態度を育成するためには、わかりやすい授業による成功体験の蓄積が必要であると考えた。生徒にわかる喜びを感じさせるために、現場の先生方がどのような授業づくりをしているのか学びたいと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　指導者の授業を見学し、工夫を知る

イ　授業時の生徒の反応や取り組み方を観察し、生徒一人一人の特性を掴む

ウ　先生方と生徒の関わり合いから知り得たポイントを基に、生徒と関わり理解に努める

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

学級の実態に合わせて、先生方がどのように授業をされているかを観察した。授業方法の工夫や生徒との掛け合いについて、気になったことは積極的に質問するようにした。また､授業中の机間指導だけでなく､授業時間外でも生徒一人一人と積極的に関わることで、生徒の実態や学級の雰囲気を掴むことに努めた。どのような授業が生徒にとって分かりやすく、興味関心を高めるのかについて、先生方の授業を見学する中で学ぶことができた。体験・研究授業を行う際には、生徒の立場に立った分かりやすい発問を意識した。また、興味関心を高めるための導入づくりを工夫した。ICTの活用では、ICTを活用することが目的ではなく、生徒の学習の補助にすることを目的として資料作りに努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　机間指導の重要性

授業の一斉指導で重要な点をおさえられる生徒と、そうでない生徒がいる。そうでない生徒は、話を聞いていないのではなく理解できなかった生徒である。そのような生徒への補助は、机間指導時にするとよいと学んだ。また、生徒への投げかけ方の重要性についても学んだ｡国語の授業で問題がわからず困っている生徒にヒントを与えたものの、生徒に伝わらず理解を促すことができなかった。次に先生から与えられたヒントは、生徒のつまずきに即しており、その生徒は問題を解決することができた。このことから、生徒の立場に立ってわかりやすい投げかけ方を意識しなければならないと学んだ。

イ　生徒指導

生徒にわかる喜びを感じさせる授業を行うために、生徒との良好な関係性は必要不可欠である。そこで、先生方と生徒との交流を観察し、些細な変化に気付くことが重要であると学んだ。例えば、先生方は生徒の些細な気持ちの変化を汲み取り、その時々の生徒の感情に寄り添っていた。ただ寄り添うだけではなく、注意すべきことはわかりやすく伝えていた。そうすることで、生徒が先生に包み込まれているという感覚を抱き、信頼関係を築くことができると学んだ。そして、その信頼関係が土台となって、生徒が学びやすい環境を作ることができると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員としての基礎知識を固めるだけでなく、京都府の教育の特色や取り組みについての理解を深めることができた。学校現場では、得た学びを意識して授業を見学したり生徒と接したりすることで、新たな気付きを得ることができた。

最も印象に残っている講義は、「第４回　中学校における生徒理解と学級経営」である。生徒を理解する要素の一つに、教室の環境を整えることが挙げられる。例えば、教室の後ろの棚に生徒のカバンや教科書などが乱雑に置かれている場合と、一切物を置いていない場合とでは、学級の雰囲気に違いがみられる。整った環境は学習の取り組みやすさに繋がり、生徒の学力を向上させるきっかけになる。また、掲示物を豊かにすると良いと学んだ。例えば、学年別で生徒同士の思いやりで嬉しかったことを付箋にまとめ、期間内に集まった思いやりの付箋の数を競う企画を開催する。生徒同士の思いやりを、付箋という目に見える形に表現することで、学級や学年の雰囲気をよりよいものにすることができると学んだ。

生徒一人一人の実態を掴むことはもちろん、学級や学年の環境改善に努めることが土台となって、生徒一人一人の個性や能力を最大限に発揮することができると学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 身に付けた力

本講座において実際に授業をさせていただき、生徒とともに授業を作りあげることの難しさと面白さを感じた。生徒とともに授業を作りあげるとは、生徒一人一人の意見を引き出し、授業の展開に繋げていくことであると考える。そのために、目を合わせて語りかけることを意識した。すると、生徒の表情から面白いという感情や分からないという感情を感じ取ることができ、その後の授業展開に活かすことができた。このことから、生徒の発言に対する切り返しや授業への繋げ方を身に付けることができた。

(2) 成長したこと

本講座を通して、教員としての自覚が更に強固なものとなった。授業を通して生徒と接することで、教えを説く責任の重大さと、教えることによる生徒からの信頼度の高まりを実感した。後期の実習では、生徒たちから「また戻ってきてね」や「絶対先生になってね」などの温かい言葉をもらった。この出来事から、これまで生徒を理解して気持ちや行動を受け止めるよう意識したことが、生徒との信頼関係に繋がったのだと実感した。生徒のわからない気持ちに寄り添い、わかる喜びを感じさせる授業ができる教員になれるよう努める。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座では、教員としてのやりがいや難しさなど様々なことを実感した。その中でも、生徒の成長を見届けることができる教師という職業のすばらしさを再認識することができた。また、教師力養成講座の事務局の方や演習校の先生方の手厚い支援をいただけたことや、教師力養成講座の16期生の仲間たちとともに学びを深められたことに感謝する。多くの方々からいただいた優しさを、京都府の未来を担う子どもたちへの教育をもって繋げていきたい。

(2) 今後の課題

演習を通して、これまで考えていたものよりも綿密な計画が求められると学んだ。その中には、あらゆる生徒に伝わるわかりやすい発問や、引き出しを増やすための徹底した教材研究がある。今後は、計画の重要性を意識しながらボランティア活動等で生徒と接する経験を積極的に積んでいく。生徒の興味関心を高める楽しくてわかりやすい授業づくりを通して、生徒にわかる喜びを感じさせる教員を目指す。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「学習や活動に対する主体的姿勢を育む支援方法」

受講生氏名：永田　翔大

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私がこのテーマを設定した理由は、生徒の主体的姿勢を育むための支援方法や取り組みを学びたいと考えたからである。生徒たちの前で授業をする機会が今までなく、「教師力養成講座」における「教育実践演習」が初めてだったので、先生方から学んだことを取り入れながら、自分ができるものを工夫し実践することを目標とした。

(2)研究方法

ア 授業内での担当の先生の生徒への接し方を観察する。

イ 担当の先生をはじめとする先生方へ聞き取りをする。

ウ 授業外での生徒との関わりおよび体験授業、研究授業における実践と考察をする。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期、後期ともに一年生に入らせていただき、それぞれの学級で実践されていた授業スタイルを見て、担当の先生がどのように主体的姿勢を育むための支援方法や取り組みを工夫されているのかを学んだ。さらに、自分が授業をするならば、どのように行うかを考えるように心掛けた。そして、体験授業や研究授業では、学習や活動に対する主体的姿勢を育むために、机間指導の際、グループワークにおける交流が進んでないグループやわからない子への支援を実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　生徒の学習や活動に対する主体的姿勢を育むための支援の工夫

担当の先生の授業を参観させていただく中で、生徒の学習や活動に対する主体的姿勢を育むための支援の工夫として二つのことを学んだ。

一つ目は、生徒の疑問から授業を展開しているということだ。生徒たちの「知りたい」や「考えたい」という気持ちを引き出すような発問として、教材や資料をもとに授業の内容を考えることがとても大切であることを学んだ。

二つ目は、生徒の発言に対する教師の反応を充実させるということだ。生徒の発言に対して肯定的な反応をしたり、生徒の考えを引き出すために「なぜそう考えたのか」といった切り返しをする。そうすることで、生徒たちが自信をもって発表することにつながるだけでなく、さらに深く思考することにもつながっていた。

イ　生徒の実態に合わせた授業づくり

授業づくりをする際には、生徒の実態に合わせた発問やグループワークを取り入れたり、生徒が見やすくわかりやすい授業プリントを作ることが大切であると学んだ。

積極的ではあるが発言してくれる子に偏りがあるという生徒の実態に合わせて、グループワークを取り入れることで、他の人の意見を聞く機会を設けていた。

また授業スライドでは、資料や写真は大きくしたり、文字と写真を分けて視覚的に見やすくしたりするなどの工夫がみられた。

このように、生徒の実態に合わせることで、より充実した活動となり、生徒たちの学習意欲の向上につながることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座を通じて、講師の方々からこれから教員になる上で必要な知識や大切なことを学び、身に付けていくことができた。講座全体を通して、生徒たちのために教師自身が学び続ける必要があり、激しく変化し続ける社会を生き抜くために、主体的に学び考え、多様な人々と協力して何かを生み出してく力が必要であることを学んだ。講座でたくさんのことを学んだように、教員になっても常に学び続ける姿勢を持ち続け、変化を前向きに捉えていきたい。

また、講座での集団討論を通じて、色々な人の考え方や見方があることを改めて実感することができた。教員になった時には、多面的視点から物事を捉え、教職員の方々と話し合い、課題を解決していきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

「教師力養成講座」における「教育実践演習」での授業実践では、とても緊張してしまい、生徒の前で話すことが精一杯であった。しかし、授業を複数回させていただいたことにより、授業中に生徒の様子を徐々に見ることができるようになった。そうすることで、生徒の理解度に合わせた授業や生徒の特性に合わせた机間指導ができた。

また授業の構成を考える際には、ねらいを明確にすること、そのねらいを達成できるような授業展開を考えることが徐々にできるようになった。生徒たちに主体的に学ぶ姿勢をもたせるために、教材研究に励み、考えさせる授業を作っていきたい。

(2) 生徒理解

「教師力養成講座」における「教育実践演習」では、生徒理解の難しさに直面した。生徒たちの気持ちを汲み取って、コミュニケーションすることと授業を展開することの難しさを実感し、まずは生徒のことをよく観察することから始めた。具体的には、授業と授業の間やお昼休みに積極的に話したり、授業観察の中で、困っている子への机間指導をしたりした。そうすることで生徒との信頼関係が構築され、授業で積極的に参加してくれる子が多くなったり、授業内での対話が増えたりした。

今後も生徒のことを知ること、気づくことを意識しながら、臨機応変に生徒の実態に対応していきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

教師力養成講座を受講することにより、生徒の成長に携わることができたり、学校業務に携わることができたりした。そして、教員という職業の魅力を実感することができ、以前よりもさらに教職に就きたいという思いが強くなった。しかしながら、課題点もたくさん見つかった。その中でも特に、教材研究をしっかりしなければならないと分かった。授業の内容に深みをもたせることで、生徒たちの深い学習につなげたり、教員として身に付けておく必要がある専門的な知識を学び続けたりすることが大事だと感じた。

教師力養成講座で学ぶことができたこと、教育実践演習で経験できたことはとても有意義なものであった。有意義であった時間を今後に生かしながら、学び続け、成長し続ける教員となりたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「学習指導の中で展開される生徒指導」

受講生氏名：公文代　一希

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

大学での学びや、ボランティア、教育実習を通して、小学校教育の流れを汲んだ教育を中学校でも一貫して行うことの大切さに気付いた。サポートセミナーでは、小学校で演習を行った。小学校では教科の時間に教科の力以前の児童の資質能力を指導する場面が多く見られた。教科担任制ではない小学校だからこそ顕著に行われる教科指導と生徒指導の一体化を前にして、教科担任制だからこそ、中学校でも教科を通して生徒の社会性や人間性を養うことが求められると思い、テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　現場を観察し、教員の実践を学ぶ

実際に、現場の先生方が教科の中で生徒のどんな力を育てようとしているのか、先生方とコミュニケーションを取りながら学ばせていただいた。また、授業中の生徒の様子から、どんな力をどのようにして育てるのがよいか考えた。

イ　授業実践の中で、生徒指導の視点を取り入れる

生徒の社会的資質能力をどう育てるかという視点を持ち授業を作った。教科の目標とは別に､活動や授業に対してどんな態度で挑み､どんな力を育んでほしいのかを設定し、そこに向けてどういった支援が必要かを考えた。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 社会的資質能力を育てる前提に必要な教員の仕事

現場の先生方や授業を見る中で気付いたことは、何を育てるにしても、まず初めに生徒一人ひとりをよく見取り、学級全体、学年全体の状況を把握する生徒理解が欠かせないということだ。実際に現場の先生方は、生徒のことをよく見ている。担任のクラスかどうかは関係なく、一人ひとりの強みや発達段階、課題を把握し、全体の方針となる目標を考えたうえで、そこに向けて必要な指導や支援に頭を悩ませていた。生徒をよく見て、理解することは教員にとって基礎中の基礎ではあるが、だからこそ、あらゆる教育活動の土台になってくるのだと改めて実感することができた。

(2) 子どもの学ぶ権利に向き合う環境づくりという視点

生徒理解の大切さを再確認した私は､より広い意味での生徒指導像を持つようになった。それは､生徒の学ぶ環境を整備することである。生徒指導の目的の1つを、学習集団の形成とするならば、いつでも、誰とでも、どんな状況でも学ぼうとする態度を育てていくことも必要であろう。だが、それと同時に全ての生徒が学びに全力で取り組める環境を整備していくことも教員の仕事ではないだろうか。私が授業を行った際、活動のためにグループを組ませた。休んでいる生徒もいるため、編成は私が決めた。話し合いに参加していない生徒に声をかけながら、無事終わらせることができた。その後、担任に「あの子はこっちのグループに入れてあげた方が集中できたかもね」と言われ、はっとした。集中して授業を聞けと生徒に責任を押し付けるのではなく、生徒が心置きなく授業に参加できるよう、教員に出来ることは全てやるということも、生徒指導提要に書かれている「安心安全な風土の醸成」につながる。子どもの学びを奪わない授業を設計することの大切さを知った。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

(1) 教育理念実現に向け教員に求められる資質能力

「夢・未来」講座では、教員に求められる資質能力を分野ごとに学び、考えを深めた。どの分野も大学で学んできたはずだが、現場を知っている先生方の言葉は、具体的な子どもの様子や、京都府の教育が抱える課題をイメージすることができ、実践の難しさや苦労も感じながらその必要性を学ぶことができた。また、集団討論も含め、多くの場面で他の講座生と意見を交流する場面もあり、１年後、教壇に立つことを目指す同じステージにいる仲間と、教育について話をすることで、新しい価値観に触れ、自分自身の教員像を磨くことができた。

(2) 理論を実践する教員が持つ教育への想い

講義を受ける中で、印象に残っているのは多くの先生方が「子どものために何かをしてあげたい」という思いを持って日々の教育活動を実践しているということだ。ICTを駆使したり、特別支援の視点を持ったり、生徒指導とは何か考えたりするのもすべては、子どもが成長するために出来ることは何かと考えた先にある。ただ、知識を蓄えていくのではなく、それを子どものために使うことに意味があると心に留め、挑戦し、実践していく。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 人とのつながり

教師力養成講座を通して、多くの先生方や、共に教員を目指す仲間に出会えた。これまでの私は、どちらかと言えば一人で黙々と課題に向き合うことが多かった。ところが、演習校の先生方は密に連携を取り、チームとして動くことでよりよい教育を行おうとしていた。私も早いうちから輪の中に入れてもらい、チーム力の大切さを強く感じた。それぞれが自分の役割を探し、動いていく先生方につられ、私自身も何ができるか考え行動できるようになった。何かあれば他の先生に相談し、助言を仰ぐこともできた。それは、講座生同士の場面でも発揮され、深い学びに繋がった。ここで出会った仲間を大切にし、互いに高め合うと共に、チームの一員として動ける教員になっていきたい。

(2) 生徒の学ぶ権利に向き合う態度

生徒指導に着目してきた中で、生徒の学ぶ権利に向き合う大切さを知った。多くの生徒が学びたい、成長したいと感じている。そう信じて、誰もが学ぶ意義を感じながら、授業に参加し、活躍できるよう、自分にできることを全てしてあげられる教員になりたい。私はまだまだ未熟だが、生徒の学ぶ環境を整えるという形で生徒の学ぶ権利に向き合い、授業で勝負していくんだという想いを持ち、温めることができたのは成長できた部分だと感じている。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

２月から５月という年度が替わる貴重な時期に、教員の一人として現場に関わることで、自分が教員となった際の１年後のイメージを膨らませることができた。たったの４ヶ月ではあったが、教職の大変さと面白さを多く感じることができ、早く教員になりたいという思いが強くなった。生徒にとって一番よい教育を実践できるよう今後も学んでいく。

(2) 今後の課題

毎授業で勝負できる教員になりたいと思ったからには、教科の専門性や授業を改善するICTの活用力、ユニバーサルデザイン等の知識を磨いていかなければならない。まだまだ自分の理想とは程遠いが、学生という身分を利用し、理論を学びながら現場に足を運び、どんな実践ができるか今後も学びを深め、イメージを膨らましていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒が自分事として捉えることができる授業」

受講生氏名：西山　将真

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

第一に、社会科は暗記を目的にする生徒が多い傾向にあるからである。第二に、京都府の教育の現状として、「(基礎・基本の定着の一方)学ぶ楽しさ、学ぶ意義を実感できるような児童生徒の育成に課題」があるとされているからである。

これまで学生ボランティアなどで携わった生徒から、「社会科は覚えないといけないから苦手」や「一問一答さえすればよい」という暗記が前提の発言を多く耳にした。

以上から暗記を目的とした、学ぶ意義や楽しさを実感できていない生徒の現状に課題意識を持ち、演習テーマとして生徒が自分事として捉えることができる授業を掲げた。

(2) 研究方法

ア　過去と現在のつながりを実感させること

授業を担当する歴史的分野について、「昔と現在は関係がない」という意見を耳にすることが多かった。そのため、過去と現在のつながりを実感させる授業構成にすることで、自分事として捉えることができる授業を目指した。

イ　因果関係を踏まえて内容を学ばせること

歴史的事象とその名称をそれぞれ暗記するだけでは、当時の状況を正確に理解することはできず、学ぶ実感には至らない。ゆえに、生徒の主体性を担保しながら、単元、節、章につながりを持たせる授業構成とすることで、学ぶ意義の実感を目指した。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 社会科における自分事として捉えることと学ぶ意義の相関

明治の文化が流行した背景を、SNSの流行のメカニズムとの関連づけや当時の人物の現在も残る身近な功績と関連づけながら扱った。担当学年の社会科の授業ではメモ欄が設けられており、生徒は内容を整理し、メモ欄に書き綴った後に「今につながる」などの、説明にない自らの表現を付け加えていた。活動や課題を行うとしても欠かすことのできない説明の部分は、生徒の視点から興味・関心を引き出すことで主体的な学び、学ぶ意義につながると実感した。

(2) 道徳においても自分事として捉えることが重要だということ

担任の先生の道徳の授業を参観する中で、タブレットを活用して授業の主題に関する経験をしたことがあるかを尋ねていた。これにより、短時間で学級全体の意見を共有すると同時に、今回の問題は身近に起こり得ることだという実感につなげていた。道徳的価値基準を身につけるだけではなく、より深い学びにするために、自分事として捉えさせる授業を行う。

(3) 因果関係を踏まえることを通して、見通す力の育成を行うこと

演習期間中に歴史観について担任の先生と討論させていただいた。この討論の中で「伏線」の話題になった。今後の歴史的事象を踏まえた授業構成とすることで、生徒の「この前の出来事が重要なのか、つながるのか」と実感させているとのことだった。この討論を通して、歴史に関しては、全く同じ出来事は起こらないが、因果関係を踏まえて先を見通すことで、現代の諸問題へと活用できると実感させ、学ぶ意義につなげることが重要だと理解した。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教育現場などで多くの経験を積んで来られた先生方から、学級経営、生徒理解、教員としての資質能力などの実践に基づく知識を学ぶことができた。また、グループ討議では、毎回、演習校や教科の異なる講座生と意見交流を行うことで、今後、同世代として京都府で教育を行う仲間とつながると同時に、幅広い視野を持つことができた。

私が「夢・未来」講座で特に印象に残ったのは、教育実践講座Ⅲの「中学校における生徒指導事例と対応」である。生徒指導とは生徒が起こした事象について迫るのではなく、家庭環境や本人の特徴といった内面に迫り、対応する必要があると学んだ。また、性的マイノリティについて、「少数派だから守る必要があるのか。少ないからではなく、該当する人々にとっては自分自身のことを普通だと思っており、その点で他の人とは変わらない」という言葉で自分の未熟さに気づかされた。多様性を認め、その人々の権利を守るという視点は重要であるが、心のどこかで多数派だから少数派を守る必要があるという意識があったと振り返る。今後も急速な社会の変化に伴い、価値観の変化は起こり得るため、常に自分の道徳観や考えを見つめ直し、学び続けていく。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 他者とのつながりを大切にすること

教師は生徒と日常的に関わり、生徒指導を行うことが重要だと第７回講座や演習から学んだ。また、保護者とは同じ方向を向き、生徒の成長に共に携わることが重要だと、第７回、第12回講座や演習を通して実感した。

また、教師は表向きの仕事だけでなく、事務作業や整備などの裏での仕事が多く存在する職業である。このため、いかなる場面においても、教師間で連携し、円滑に業務をこなすことや情報共有を行い、協働的に生徒指導を行うことが重要だと学ぶことができた。今回の養成講座を通して、様々な人と関わり、学びに繋げることができた。このつながる力を大切にして、教員になった際に他者と絶えず関わり、より良い教育活動を行う教師となりたい。

(2) 生徒の実態を掴むこと

私は教師力養成講座以前に学生ボランティア、学習支援員、部活動指導員などで演習校とは異なる学校で現場に携わってきた。今回の講座おいても、学年、学級を問わず多くの生徒と関わり、演習を行った。この経験を通して、学校が変われば生徒の様子も大きく異なることもあり、学校内においても様々な生徒がいることを実感し、改めて画一化された教育方法などはなく、生徒一人ひとりの実態に応じた教育が重要だと感じた。教員になった際にも、その場で関わる生徒一人ひとりを見て、学校の実情、生徒の実態に応じた教育を行っていく。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座では、実践に基づく知識や現場での経験を得るだけでなく、教職への思いを強めることができた。授業などの表向きの業務と共に、校務分掌や事務作業などをこなす必要のある大変な職種だと実感した。しかし、同時に、生徒の成長を身近に感じ、一年目から先輩の先生方と同じ土俵で働くことができる、やりがいのある職種だと感じた。生徒に寄り添い、成長することができる教員を目指し、講座修了後も経験や努力を積み重ねていく。

(2) 今後の課題

今後の課題は、より授業力を向上させることである。同じ内容の授業を複数学級で行う際に、同じ授業を行うことを意識したとしても、浸透具合や反応が異なることがあった。授業の反省の中で、授業は水物だと教えていただいたが、今後教師となる上で成功と失敗の幅を小さくし、「プロ」の教師となるため、教材研究や現場での経験を積み重ねていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒との関係を向上させるための教員として
コミュニケーションのあり方について」

受講生氏名：松浦　裕樹

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

中学校生活の三年間とは、体だけでなく心の発達が著しい期間である。また「人として生きる力」が大きく成長する期間でもあると考える。生徒にこのような力を育てるにあたって、多くの人と関わる中で、生徒のアイデンティティを確立するように支援することが重要であると考える。そのためにも、教員として生徒一人一人との信頼関係を高め、生徒の成長をサポートする、生徒ともに教員としても成長する必要性があると考え、今回の研究テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業内において、教員の生徒への声かけや接し方などを観察する。
イ　休み時間における生徒と教員の関わり方を観察する。
ウ　観察で気付いたことや考えたことを学校生活全般で実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期後期と違う学年で演習させていただいた。多くの生徒と関わる機会があり、その中で、前期では、年度末ということもあり学級環境が整っている中で、新たな教員として生徒との信頼関係を構築するために、また次の学年に向けた心の成長に寄り添うことができるようなコミュニケーションを心がけ行った。後期では、新たな年度ということもあり、クラスの雰囲気や環境などが整っていない中で､生徒とともに学級づくりを行えるように、また少ない演習期間の中で信頼関係を深めていけるようなコミュニケーションを意識して行った。

(2) 演習校で学んだこと

生徒との信頼関係を構築するにあたって、特に大切にすべきと学んだ点が二つある。

まず一つ目に、生徒の良いところを伝えることである。数学の授業において、問題に一生懸命取り組み答えを導こうとする姿勢であったり、部活動の指導においては、仲間と協力し目標に向かってひたむきに頑張っている姿など、一人一人の生徒の頑張りや姿勢などを認め伝えることで、生徒自身の自己肯定感を高めることができると考える。どんなに小さなことでも生徒にポジティブな気持ちになってもらえるようなコミュニケーションを行うことで、信頼関係を構築することができると学ぶことができた。

二つ目に、教員としての前に人として生徒と向き合うことである。私自身がどういった人であるのかを生徒に伝え感じてもらうことで、信頼関係が築かれていくと感じた。生徒の前で、着飾ることなく自然な自分を見せることで、自然に生徒が気持ちや考えを伝えてくれるようになった。生徒も一人の人であるからこそ、人としての信頼関係を築けるようなコミュニケーションを行うことが大切であると学ぶことができた。

このような二点を大切にしながら、生徒一人一人に合ったコミュニケーションの取り方を意識して、教員として人として、生徒と向き合い信頼関係を深めていくことを大切にしていきたいと考える。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教育課題や生徒の実態などをもとに、教職員としてどのように対応すべきなのかや京都府の教育方針などを、多くの専門家や教職員の方々に講義していただき学ぶことができた。また講座の中で、他の受講生とグループワークを行う中で、自分では思いつかない、新たな考えや価値観などに触れることができ、それらを通して視野を広げることができ、また自身の考えを深く広いものにすることができた。

その中でも特に、「中学校における生徒理解と学級経営」では、私自身が教員として大切にしていきたいことや研究テーマと繋がっており、講義を通して大切にしていきたいことや専門性を深めるためにどのようにすればよいかについて考えることができた。学級経営において、普段の学校生活を通して「人として生きる力」を高めることができる機会であるため、教員として生徒が成長できるような手立てを行うことの大切さを、改めて学ぶことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1)　生徒を理解する・気付く力

授業中や普段の学校生活から、生徒一人一人と積極的にコミュニケーションを取る中で、生徒を理解する力と小さな変化に気付く力を身につけることができた。これらの力は、教員として生徒を育てる立場としてとても重要な力であるが、学生の間では、あまり身につけられない力であると考えていた。しかし、演習において生徒と多くの時間をともにする機会を通して、一人一人接し方は違うが、私自身と生徒の信頼関係を大切にしていくことが重要であると考える。また多くの先生方からの具体的なアドバイスや方法を教えていただき、実践する中で身につけることができた。

(2)　探究心

成長したこととして、学んだことや自分を生かせることを教育実践へと結びつけることの重要性を改めて実感した。自分のスタイルを確立するのではなく、日々探求し続け改善し向上していくという考えを学ぶことができた。それらを通して、各学級に応じた教育方法を考え、柔軟に対応できる力も身につけることができた。授業などにおいて、全ての生徒が全ての時間、しっかりと理解することは難しいと考えるが、生徒とともに考え生徒を認め伝える活動を通して、教員としての自覚が芽生え、責任感を持って仕事することができたことは、貴重な経験となった。これらの経験の中で、未熟な部分を見つめ直すことができ、それらを改善することができるよう、探究心を忘れずにいたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1)　教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、全ての教職員が持っている生徒を育むという大きな責任の中で、生徒とともに育つ楽しさや新たな刺激を受ける日々を経験することができ、また教職員ならではのやりがいを感じることができたことにより、教員としてのより具体的なイメージとこのような教員になりたいという夢を持つことができた。生徒を主語として何事も考えるようにし、私自身も生徒とともに成長し、生徒の自己肯定感を高められるよう、そして、生徒の「人として生きる力」を高められる教員になりたい。

(2)　今後の課題

今後の課題として、授業力の向上とICTの活用である。授業力の向上に関しては、生徒に何を学ばせたいのか、何を身につけて欲しいのかを第一に考え、生徒が意欲的に取り組むことができるような授業を行いたい。ICTの活用に関しては、生徒目線で「〜するためにICTを使う」といった視点を持ち、積極的に活用して、これからの社会を担う生徒を育てていけるようにしていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒のみとりと発問の工夫について」

受講生氏名：黒田　義一

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、教育実習、学生ボランティアなど実際に学校現場で演習をさせて頂いたときに、あらゆる教育活動は生徒理解をもとに行われていることに気付き、生徒理解の重要性を感じた。これまで生徒を観察し関わりながら、なんとなく生徒を理解した気になっているのではないかという疑問を契機として、具体的にどのような視点で生徒を見取っていけばよいのかということと、特に授業において生徒の実態に合わせて行われる発問の工夫について学び、自分の中でその方法を確立したいという思いからこの演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　視点を定めて生徒の学校生活の様子を観察する。自分の生徒理解と他の人の生徒理解を比較し、見取りの視点を明らかにする。

イ　授業内で生徒理解に応じてどのような発問がされているかクラスや学年で比較する。

ウ　自身の生徒理解に基づいて、生徒の反応を予想し授業での実践を行う。

エ　授業を振り返って、生徒理解を実態と比較し、働きかけが適切であったかを検討する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習は第一学年、後期の演習は第二学年で演習を行わせて頂いた。また、理科の授業については、全学年通して他の先生の授業も見させて頂いた。まず、学年やクラスに同様な特徴があるのかということを観察や先生方から教えていただき知った。そして、配属クラスについては特に、どの生徒がどのような特性を持っているのか個々にも注目して演習を行った。その上で、先生方が授業においてどのような発問の工夫をされているのかを中心に、生徒の実態に合わせて、授業展開、働きかけ、支援をどう工夫されているのかということについても学ばせて頂いた。以上の実践を基にして、後半の演習では、そこで学んだことを活かし、実際の生徒に合わせて発問を工夫して授業の実践を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア　情報の共有

常に、教員同士で沢山の情報共有がされていた。それは一人ひとりの生徒について授業で見せた生徒の姿や日常生活の何気ない様子でもあったりした。些細なことに思えるようなことから様々な視点で生徒を見取ることが全体での生徒理解につながると学んだ。四月の学校が始まる前後では沢山の学年会議、職員会議などがあって、その中でも生徒の情報共有がされていてどのように支援をしてくかの方向性が定められていた。みんなが生徒に対して同じ情報を共有しているだけでなく、その生徒に必要な力を身に付けていくための支援の方向性を同じにしていくことがチーム学校として重要であると感じた。

イ　教師の働きかけ生徒の実態

同じ授業の内容、教科であってもクラス、学年が異なれば、教員の支援の仕方や授業の展開が異なっていた。その生徒にとって何が大切かを考えて行われている働きかけであると同時に、何を教えるのかの前に、誰にどう教えるかが重要であることを示しているように感じ、生徒理解と、生徒に合わせた授業の大切さについて学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

様々な講義、講座の中、そのたびグループやペアで話し合ったり、同じ受講生の意見や質問を聞いたりすることでより学びを深めることができた。その中でも特に、自分の中で気づきと学びが大きかったと感じた一人ひとりの子どもを主語にすることと学習指導要領に対応した評価について述べる。

一人ひとりの子どもを主語にすることは目指すべきであることは講義を受ける前からも考えていたことであった。しかし、これまでの教育の理論や指導法について学ぶに従って、理論的にこうすればよいはずだ、このような働きかけで生徒の発達を促そう、これを使って興味を持たせようという考えが先行し、主語が教師になっていたことに気付いた。そして、この考え方は一般に効果的な学びや授業展開であっても実際の生徒にあった学びになっているかという視点に至りがたいと気づいた。常に教師としてどんな働きかけをしてくべきかを考えながらも、それを誰に教えるのかという視点を忘れずに教育活動に取り組んでいくことが重要であると学んだ。

もう一つが学習指導要領に対応した評価についてである。この講義において、まず、学習面では一定の水準を確保できているが、学ぶ意味を実感できていない生徒が多いという現状を知った。その中で、主体的に学習に取り組む態度を評価する意味に気付いた。この観点を評価していきながら、教科としての魅力や学ぶ意味を感じられるようにすることが今の生徒にとって重要であると学んだ。それと同時にその評価の難しさも感じた。評価の観点から逆算して授業を考えていくことも一つの手段であることを学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 生徒の見取りの視点

様々な授業での生徒の様子、グループでの役割、学校生活での姿を観察し、関わっていく中で、一人ひとりの生徒がどのようなことが得意で苦手としているのかなど個性や特性が見えてきた。関わる時間の長さが生徒理解につながっただけでなく、一人の生徒に対してどのような視点で見ているかを先生方に教えてもらったり、実習生同士で共有したりする中で分かってきたからである。

(2) 生徒の反応を予想した授業づくり

生徒理解を基にして、授業においてどのような生徒の反応があるかを予想し、発問を工夫し授業を考えることができた。実際の授業においての生徒の反応と予想を比較し、今までの自分の生徒への理解を改めることができ、生徒の予想が教師の働きかけや授業の展開によって変わり得ることに気付いた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、自身の教員を志す思いが増すとともに自分が教員として働く際の姿が明確になったと思う。今まで、現場の先生方のやり方や考え方を知識として得ることが多かった。ここでの経験で、自分ならこの生徒にどう関わるかと自分事として考えれるようになってきた今、これまでの実習生としてではなく、教員として、一人ひとりの生徒を理解しどのように関わっていくかを考え、実践していける教員を目指したい。

(2) 今後の課題

私の今後の課題は、自分の軸を定め、自分の育てたい生徒像、なりたい教師像を確立することである。演習を重ね学ぶほど、大切なことが自分の中で沢山出来てきた。その中でも自分は何を最も大事にして生徒を育てていくのかという核になる部分を見出し、それ軸として努力し、学び続けるような教員となりたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒の気付きや、意欲を活かす授業づくり」

受講生氏名：上村　ちひろ

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

生徒の些細な「気付き」「意欲」には、その後の学習を支えたり、授業の質を高めたりする多くの創造的な要素がある。その些細な「気付き」「意欲」を教師自身が受け止め、認め、向き合うことによって、生徒の学びに主体性が生まれ、生徒自身の思いや願いを実現するための学びに結びつくものと考える。生徒の些細な「気付き」「意欲」に支えられた対話をする機会を増やすことによって、生徒の能力を引き出す授業の実現につながると考えたため、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　配属された学級での担任の先生の生徒への接し方を観察

イ　生徒理解のための生徒の様子の観察

ウ　生徒と授業や休み時間を通してできる限り多く関わり、一人一人の特性を把握した上での授業実践

エ　気づきや思いを自由に表現できる授業づくりの実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

まず、日々の授業見学や机間指導、授業実践に力を入れた。日々の授業見学の中で、教師と生徒の会話などの観察を行い、気づいたことはすぐに書き留めていくことを心掛けた。また、休み時間なども積極的に関わり、生徒理解に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

生徒の「気付き」「発見」を見取るためには、教師の日頃の生徒との関わりと教材研究が大きく左右することを学んだ。日々の生活、授業を通して、個々の魅力を引き出すために次の２点を大切にすべきだと学んだ。

１点目は、生徒達の反応への切り返し方である。生徒は、発問に対して様々な反応を示す。中には、予想していなかった反応もあるが、そこで大切になるのは、教師が想定していた流れに生徒をのせるのではなく、生徒の反応を束ねて、最終的なゴールを目指すことである。そのためには、生徒の反応をより多く想定し、それぞれに対する切り返し方を検討しておくことが重要であるということを学んだ。

２点目は、授業の構成の面である。その授業の単元の目的を達成するためには、「振り返りで生徒にどのような内容を書かせたいか」をまず想定したうえで、そのまとめから逆算的に授業を構成し、目的に応じた活動を取り入れることが重要であると学んだ。また、逆算的に授業を構成することで発問も明確になり、学びの道筋を作りやすくなると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

私は、夢・未来講座で、京都府の教育を担う上で欠かせない知識や資質・能力、これからの教育について学ぶことができた。さらに、同じ志を持つ仲間と意見を交流することで、自分が持ち合わせていなかった新たな視点や考えを持つことができた。特に印象に残っているのは、第７回の「中学校における生徒指導事例と対応」である。生徒指導では、状況に応じた指導が大切であると理解していたが、新たな生徒指導とは生徒の自己肯定感や、自己指導能力を養う機会であるということも理解することができた。問題行動が解決して終わりではなく、指導を通して生徒がこれから自分の力で前向きに進んでいけるように指導したい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業実践力

教師力養成講座全体を通して、ICTを活用した授業を自分自身が初めて経験し、実践する力が身に付いた。これまでは、ICTを活用した授業と言われていながらもなかなか具体的に想像し、実践に向けての手立てを考える機会が少なかった。しかし今回、自分自身がICTを活用した授業をすることで、便利さを実感する一方、難しさも痛感した。同時に、ICTの活用をさらに身近に感じることができた。

(2) 生徒理解

教師力養成講座生として最初の頃は、コミュニケーションの難しさが一番大変であった。中盤になると、授業を進めることのほか、学習に支援が必要な生徒への声掛けなど、広い視野で学級全体を見ることに難しさを感じた。その中で、なかなか全体に目を配っているようで配れていなかった自分に気付き、机間指導を多く行うことや、生徒とたくさん関わることを心掛け、呼びかけや発問の工夫等ができるようになった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

私はまず教員になるうえで大切なことは逆算する力であると考える。生徒達に中学校の三年間でどのような力を持って卒業してほしいのか逆算する力が必要であると考えた。そのために、私が生徒達にどのようなことを伝えたいのかを深く考える必要がある。

生徒達は一人一人違い、尊い存在であるので、その生徒達を成長させるためには教員である自分自身も様々な経験をし、多くの引き出しを持っておく必要があると感じた。私は今の学校現場において、生徒達が正解主義や、同調圧力があるように感じた。やはり、自分も正解を求めすぎて、周りに合わせてしまいたくなる気持ちがある。しかし、生徒達の一人一人の個性を大切にするためには、様々なことに挑戦させ、探究させていく必要があると考える。生徒達に教員が敷いたレールを歩かせるのではなく、自分で自分に合った学習を生徒達自身が発見していく必要があると感じている。また主体的に学び続けなければならないのは生徒達だけではない。教員も目まぐるしく変わる教育業界を前向きにとらえ、その変化に対応して、生徒達に最適な学びの場を提供していける教員を目指していきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒全員が参加する授業づくり」

受講生氏名：佐々木　菜月

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私がこの演習テーマを設定した理由は、生徒が授業へ意欲的に参加するにはどういった授業づくりが必要なのか考えて、今後の活動に活かしたいと思ったからである。私が教員養成サポートセミナーを受講していた時、教室の後ろ側の生徒たちが授業を聞いていないことに気がついた。どうしたらこの生徒たちは意欲的に授業に参加することができるのかと疑問に思った。教師力養成講座では、生徒目線に立って授業作りについて学び、教員目線で実際に授業をし、教員となったときに即戦力として働きたいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業観察

演習校での授業観察では、導入・めあての設定・発問の工夫・指示の仕方・机間指導・授業のまとめかたを観察する。

イ　体験授業と研究授業

体験授業と研究授業を経験する中で、生徒がどのような態度・意欲で授業に参加しているかを観察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

私は、教科を問わず演習校の先生方の授業を積極的に見学し、導入・めあての設定・発問の工夫・指示の仕方・机間指導・授業のまとめ方を観察した。さらに、私が授業観察をする際には、授業中の生徒の様子を観察することを心掛け、演習テーマを意識した授業観察を行っていた。そして、演習校の先生方が授業をする上で心掛けられていることを質問したり、私自身が疑問に思ったことは積極的に先生方に質問するようにしたりした。

また、授業観察で学んだことを活かして、演習テーマを意識しながら、体験授業に臨んだ。体験授業を行う前は、演習生同士で模擬授業を行い、より良い授業へとつながるように協議した。そして、模擬授業と体験授業の反省から、より生徒が意欲的に参加できる授業にするには授業をどのように改善したら良いか考察し、研究授業に臨んだ。

(2) 演習校で学んだこと

演習校で演習する前までの私は、生徒全員が参加する授業の基盤としてわかりやすい授業が一番大切だと思っていた。しかし、演習校の先生方の授業を観察したり、先生に質問したり、生徒たちに授業の感想を聞いたりすることで、必ずしも教員の教えるスキルが生徒の興味関心に影響する訳ではないと考えた。生徒が授業に興味を持つのは、生徒たちの興味がある事柄や生徒の身近な事柄を取り扱って、教員がより生徒の興味を惹きつけるように、対話的な活動をしているときであることだと気がついた。また、生徒の活動する場があればあるほど、生徒は授業に対して意欲的になり、生徒の考えが深まる授業になっているように感じた。

つまり、生徒の日常と授業を結びつけて生徒に興味を持たせ、生徒が活躍する場を作ることが「生徒全員が参加する授業づくり」の基盤となることがわかった。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、主に京都府の教育の在り方と令和の日本型学校教育について学んだ。この講座での学びは、教員になる上で必要な知識や基盤であり、教員となったときに必ず活きる学びであった。第２回目の講座では、第２期京都府教育振興プランで京都府が目指している教育の在り方について学んだ。そこでは、主に京都府の教育の基本理念の目指す人間像と、はぐくみたい力、教育に関わるすべての者が大切にしたい想いについて学び、演習校での実践や教員となったときの実践にどう活かしていくのか、講座を通して考えた。

また、第２期京都府教育振興プランだけでなく、他にも生徒理解と学級経営の方法や、授業実践、生徒指導、特別の教科　道徳、人権問題、学習評価、特別支援教育について幅広い京都府の教育内容について学んだ。

そして、私がこの講座を受けて、特に印象に残っている講座は、第８回目の「特別の教科道徳」である。その講座では、講師の方に対話的な学びを意識した授業実践をして頂いた。講師の方が演習生の意見をたくさん引き出して授業を進めていく姿を通して、私たち演習生にはまだまだ学ばなければいけないことがたくさんあり、講師の方から授業力や実践方法などたくさんの学びを頂いた。今は全力で自身の能力を伸ばしていくことが大切であると感じた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1)　生徒理解

私は、褒めると生徒が喜び、成長すると思っていたため、授業観察の際にひたすら生徒を褒めて生徒の学習支援を行おうとしていた。しかし、素直な生徒は褒められたことへの安心感から次の目標を失っている様子が見られ、褒めるだけで活気づき成長する生徒と安心して自分の成長を止めてしまう生徒がいることがわかった。個々に合った指導を経験して、生徒を導く力を微力ながらに身につけることができた。

(2)　与えられる側から与える側へ意識の変化

演習が始まった頃、私は学生気分が十分に抜けておらず、積極的な行動ができないでいた。最初の方は生徒たちも私に興味を持って話かけてくるが、時間の経過とともに私への興味関心は薄れていき、私は生徒との距離感に悩むことになった。そんなとき、指導教員から積極的にこちらからアプローチをする必要があると助言を頂き、与えられる立場ではなく与える立場にいることを自覚し、自ら行動するようにした。それから、慣れないことをして失敗をすることもあったが、演習の最終日までこの意識のまま活動し続けることができたことはきっと私の成長に繋がっているだろう。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1)　教職に向けた決意

私は、教師力養成講座での「夢・未来」講座と演習校での実践的な活動を通して、教育の素晴らしさと進化し続ける教育の在り方に心を動かされた。子どもたちの成長を見守り、支えていく仕事はとてもやりがいのあるものであり、進化し続ける教育は未来が明るく感じられるものであった。個に応じた指導と協働的な学びを充実させ、未来を担う子どもたちを支えられる教員になれるように、今後も努力していきたいと思う。

(2)　今後の課題

教師力養成講座で学んだことをこれからどのように活かすかということが私の課題である。教師力養成講座に関わって頂いた方々に精一杯の恩を返すことができるよう自分の目指す理想の教員になり、教育に携わっていきたいと思う。今の自分に満足することなく挑戦し続け、より多くの知恵や経験を得るために、チャレンジし、学び続ける姿勢を維持していきたいと思う。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒が主体的・対話的に考える授業と学級経営の行い方」

受講生氏名：納谷　駿輔

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

近年ではAIやICTなどの発達により、人間が仕事に必要な力として挙げられるようになったのが、問題発見力や革新性などであり、知識をしっかり習得するだけでは社会では必要とされなくなった。これによって、教員が一方的に教えるだけでは深い学びにならないので、生徒が自分自身で考え、気付きを促していく授業づくりが必要となってくる。学級運営についても、生徒たちが自分たちでより良いクラスを作っていき、教員はそれをサポートしていくことが重要だと思う。これを実現するために、どのように学級経営をしていたのか知りたいと感じた。

(2) 研究方法

授業中や休み時間など、様々な場面で教員の方々の動きや発言に注目して行う。英語だけでなく様々な教科の授業を拝見させていただき、気付きを促すために「どのような工夫やアクティビティーを行っているのか観察を行う。英語という教科は得意と苦手がはっきりする教科であるので、苦手な生徒に対してどのようなアプローチをしているのか、観察し話を聞かせてもらう。また、学級運営については朝学活や昼食指導、掃除など様々な学級活動の中で教員がどのような工夫をしているのか、そして自分が担任ならどのようなアプローチをするのか考えながら観察を行う。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業を行う中で、どのような言語活動を行って、その活動によって生徒にどのような力をつけてほしいのかを常に考えながら授業を行った。

どのような言語活動が効果的であるのかを考えるために、朝学活や、終学活、休み時間など、生徒たちの普段の様子を観察したうえで判断した。

演習中では、多くの英語の先生の授業を見学し、自分の授業に取り入れようとした。また他教科の授業を見学する中で、他教科では生徒たちにどのような発問の仕方をして、生徒たちに発言させているか確認した。

演習校には、様々な環境で生活している生徒や、様々な悩みを抱えた生徒がおり、その生徒たちを取りこぼすことなく、授業に参加していけるような工夫を考えた。

(2) 演習校で学んだこと

授業内の工夫について

全く同じ発問でも学級によって反応が異なるということを知り、１クラスごとのそれぞれの特徴をつかみ、それを考えたうえで授業を作っていかなければならないこと。

授業内の規律については、特に入ってきたばかりの１年生は授業でやってはいけないことを明確に示したうえで、授業をやっていくことの重要性を学んだ。

研究授業では行った言語活動を生徒が楽しみながらやってくれたことはよかったが、説明に苦労したので、短く簡潔に説明をする術を身に付けていきたい。

学級経営については生徒が一人一役係を持つことの重要性を学んだ。役目を果たすために生徒それぞれが声掛けをしていたので､それが生徒の主体性につながっていると感じた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では京都府教育委員会がどのような方針で教育を行っているのか、教員としてどのような力を持つことが求められているのかを学ぶことができた。特に私は、ICTについて多くの不安があり、どのようにして使っていけば効果的に使えるのかわかっていなかったので、どのように使えば主体的に生徒が学ぶことができるのか理解することができた。

新型コロナウイルスの流行や、ICT機器の発達によって、当たり前のことだったことが当たり前じゃなくなってしまったこの変化が激しい時代において、生徒が今後身に付けていく力は大きく変わっていっていることを実感した。そして私はこの変化を前向きにとらえて、授業においても生徒指導においても変化をつけていかないといけないということを学んだ。教員として私は常に学びを止めることなく、正解ではなく多くの人が納得することができる納得解を見つけていける教員になれるようにする。

最後の講座でICTについての講義があったが、そこで印象的だったことはタブレット端末を能動的に、積極的に使っていくことで、クリエイティブな授業を実施することができ、生徒たちに独創性をつけることができるということである。今後社会に必要な力としては知識の習得だけではなく、問題発見能力や革新性が求められている。このような力をつけていくための一つのツールとしてタブレット端末はとても効果的であると感じることができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座が、学生ボランティアを除いて、生徒と深くかかわる初めての現場だったので、とても緊張し苦労した。実際に生徒の前で授業を行っていく中で、多くの課題を見つけることができた。自分が思う最も大きな課題は一つ一つのアクティビティーに目的意識を持てていなかったことである。生徒たちにどのような力をつけさせるためにその活動をするのか、細かいところまで詰めることができずに、ただやっているだけになった活動もあった。今後は単元ごとにしっかり目標を立てて逆算して、授業計画を練っていく必要があることを学ぶことができた。

私は教員として以前に一人の社会人として成長していく必要があると感じた。演習中でも先生方への報告・連絡・相談が遅れてしまったり、パソコンをうまく使いこなすことができずに、何度も指導してもらったり、授業の中での言葉遣いなど、社会人として、当たり前なことの指摘もしていただいた。何事においても、常に生徒たちの手本であるのが教員であるし、今すぐに日常生活から見直し、手本になれるような教員になれるように努力していきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

まずは、京都府「教師力養成講座」を通じて、教員になりたいという思いがより強くなった。特に学校演習を通じて、多くの子どもたちと関わり、同じ時間を過ごしていく中で、苦労することも多かったが、それ以上に楽しみややりがいを感じることができた。私は教員として学び続けることが大切だということを学んだので常に向上心を持ち、何事にも、積極的に挑戦し、常に変化を前向きにとらえ、新たな価値を作り出せるような教員になれるよう今後も努力を重ねていく。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、授業力の向上である。今回の演習では何度も授業をさせてもらった。その授業の中で、まだまだ、効果的な発問はできなかったので、教員になってからも、生徒が主体的・対話的に授業に取り組めるようにするにはどうすればいいのか、考え続けていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「授業理論から実践へ」

受講生氏名：西村　将太

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

ア　大学で学ぶ授業理論や授業法がどのように取り入れられているのか

教員になるために大学の授業で、多様な授業理論を学んでいる。また、授業法の授業では実際に模擬授業を行ったり、授業計画を作成したりしている。しかしこれは大学の中での学びである。そのため実際に学校現場で生徒へ向けてどのような授業が行われているのかを知りたいと思い、このテーマを設定した。

イ　教員になった際に理想を追い求めすぎて生徒の実態と乖離しないために

実際に教員として生徒へ授業を行う場合は、自分が実践したい授業と生徒の実態とをうまく擦り合わせなければ、教員のための授業になってしまう。そうならないためにもその時々で変化する生徒の様子を汲み取り授業をする必要がある。そのために生徒の実態に則した適切な授業づくりを学びたいと思い、このテーマを設定した。

(2) 演習テーマの研究方法

ア　授業見学

授業見学では自分の専門教科に限らず様々な教科の授業を見学させていただく。見学の中で授業の方法や生徒の様子を観察する。

イ　演習校の先生方への質問

見学後に授業に関して気になった点や疑問点を質問し、先生方が意識されていることを教えていただく。そのことから自らがどのような授業をつくっていくかにつなげる。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

私が行った実践内容は、簡易的な知識基盤型ジグソー法の授業である。担当した授業は日本史探究、単元は「古墳とヤマト政権」である。

具体的には授業範囲の内容に関して本時の問いを用意し、仮説が立てられるように知識を講義する。そして仮説を立て、それを授業時間でより形作るための資史料読解にグループで取り組む。この際生徒を分け、各グループの担当資史料を決めておく。その後グループを再編し、各自が取り組んだ資史料を生徒が他の生徒に教える活動をする。お互いの資史料に関して理解を深めた上で、本時の問いに対して答えを考えるという内容である。

(2) 実践に対しての分析・考察・学んだこと

この実践では日本史の授業で資史料に触れ、問題を解くという活動から、それを他者に伝え合う対話的な活動ができた。そして歴史に対して生徒同士で考えを深められたため、多くの生徒が学習指導案のおおむね満足とされる回答を示せていた。

しかし、この実践ではグループワークを授業の主としていたため、各グループによって進度の差が現れていた。これが拡大すると授業で扱うべき知識、理解に大きな差が出るため、生徒たちをいかにフォローするかが今後の課題として挙げられる。

これらのことから日常における生徒の様子だけでなく、その日その時間の授業における生徒の実態に合わせた授業をしていくことの大切さを今回の実践で学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では講座ごとに道徳教育や人権教育、学習評価など様々な分野を京都府の取り組みを含めて専門的に学ぶことができた。この学びは大学にいるだけでは知り得ない、教員としての自分を見据えた学びだったと思う。この学びを将来、京都府の教員として理解し、実践していくために活かしていきたい。

また特に、複数の講座で登場し非常に印象に残った言葉が「令和の日本型教育」である。「夢・未来」講座では具体的に、この「令和の日本型教育」について様々な角度から学んだ。

まず、目標として全ての子どもたちの可能性を引き出す、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現がある。そしてこの文言の要素である「個別最適な学び」が「孤立した学び」にならないように、ICTをツールとして子どもたちのために活用しながら「協働的な学び」と一体的に充実させることが必要だと学んだ。

これらの学びから私は、教員として個と集団の二者択一な教育を提供するのではなく、学校という空間で両者の良いところを掛け合わせた教育が求められていると考える。またその中でICTを目的ではなく手段として活用し、子どもたちの成長に繋がる教育を「夢・未来」講座での学びを活かして実践したい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 身に付けた力

教師力養成講座を受講したことによって、私は生徒たちと関係をつくり、彼らを理解していく力が身に付いた。それは「夢・未来」講座で理論的なことを学び、演習校でそれを実践する経験ができたからだ。理論を知っていてもそれを実践することができないと自分の力にはならない。生徒に対して全員に同じ対応をするのではなく、その時や個人に合った対応が求められる。その点で教師力養成講座では、生徒との関係を作るための試行錯誤をすることができた。このことが生徒を理解する力を身に付けることにつながった。

(2) 成長したこと

教師力養成講座を通して、適切にかつ迅速に業務を遂行する力を向上させることができた。それは各分掌のお手伝いや学校行事において教員としての対応をしたことにある。これは私がこれまで活動したティーチングアシスタントなどでは経験できなかった教員としての業務である。また、それらの業務や授業づくりが重なる際にも優先度と自分の能力を身計って、正確にするべきことを実行する経験が自分の力を向上させることにつながった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

教師力養成講座を通して、実際の学校現場で生徒たちや先生方と関わること、教員の仕事に携わり実際に自分で授業を行う経験を得た。この経験から実際に自分が教員になった際の現実味のあるイメージを持つことができた。このイメージを持つことは教員になるために、これからの残された大学生の期間を有意義に使うことにつながる。具体的には働くための準備や教師力養成講座で発見できた課題を乗り越えるために残りの時間を有効活用して、来年の４月から教員として活躍していきたい。

またこれから私が取り組むべき課題は生徒の姿を想定した授業づくりである。今回の演習で行った授業実践では、同じ学年や同じ授業内容でもその講座や個人によって生徒たちは全く異なる取り組みや反応をすることを実感した。だからこそ教材研究や授業づくりの段階でいかに生徒目線になれるかが重要だと思う。

このことから、教員になる前にも教材研究や授業準備を入念に行っていく。そして教員になった際にはそれらを活かしながら、その時の生徒に即した柔軟な授業を作っていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「社会的な見方・考え方を育てる授業づくり」

受講生氏名：村野　侑香

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

学習指導要領の改訂や必要な方策について中教審答申では、「『社会的な見方・考え方』は、社会的事象等を見たり考えたりする際の視点や方法であり、時間空間、相互関係などの視点に着目して、事実等に関する知識を習得し、それらを比較、関連付けなどして考察・構想し、特色や意味、理論などの概念等に関する知識を身に付けるために必要となるものである。」と示されている。

この中教審答申をうけて、地歴公民科の授業を通じて社会的な見方・考え方を育てることはより一層求められるようになっていると考えたため、私はこのテーマに設定した。

(2) 研究方法

地歴公民科の学習には、知識を覚えることが前提にあるため点と点を覚えるだけの暗記科目になりがちである。しかし、歴史的事象を捉える際に位置や空間的な広がり、事象や人々の相互関係、時期や時間の経過などに着目させる問いや説明を行うことで社会的な見方・考え方を働かせ、育てることができると考えそれを達成できる授業とはどのようなものなのかを考えた。

具体的には、演習校の先生方の授業見学からアイデアをいただいたり、社会的な見方・考え方を働かせる授業の実践例を調べたりし、演習テーマに沿った授業が作れるよう研究した。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

体験授業では「田沼時代」、研究授業では「寛政の改革～鎖国の動揺」の範囲で授業をさせていただいた。私はその中で「事象や人々との相互関係への着目」「時期や時間の経過への着目」の二つに重点を置いた授業づくりを行った。

具体的には、江戸時代がどのような考え方や価値観によって成り立っていたのか、田沼意次と松平定信が行った政策はどのような背景のもとで行われどのような結果を生み、様々な立場の人に対してそれぞれどのような影響を与えたのかを生徒自身に考えさせた。

(2) 演習校で学んだこと

私が演習テーマに関わる実践を通じて演習校で学んだことは、生徒に対して問いを投げかける際の言葉選びが、生徒の理解を深めたりや思考を広がらせたりすることに大きく関わってくるということである。

例えば、「この資料を読んでわかったことを書いてみよう」という言い方をすると、一見生徒から広く意見を募れるような気がするが、実際は資料のどこに着目すればいいのか生徒は分からず、浅い内容しか読み取ることが出来ない。また、「当時の世の中ではどのようなことが起きていたか」という問いかけも、着目すべきポイントが提示されていないため生徒にとっては考えづらく答えづらい問いになっている。

このように、生徒が社会的な見方・考え方を働かせるための授業の前提には、社会的な見方・考え方を働かせることが出来る問いがあり、さらにそこには社会的な見方・考え方を働かせることができる問いかけ方があるということを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

私が「夢・未来」講座で学んだことは数え切れないほどあるが、その中でも特に子どもに対する教員の姿勢の部分で大きな学びを得たと感じている。

教員は子どものことをよく見て気づき、そしてその気づきをもとにそれぞれの子どもを尊重する対応に努めることで、子どもの自己有用感や自己肯定感、自己効力感を育てることにつながるのだと学んだ。

また、常日頃から子どもを見ること、つまり関わり続けることによって信頼関係が築かれ、その信頼関係があるからこそ効果的な生徒指導や進路指導、教科指導を行うことが出来るということも大きな学びであった。

この学びから、教員が受け身の状態では子どもを見ることも気づくことも何もすることはできないが、教員側から積極的に働きかけ、いつも見ている・見守っているということを態度でも示していかなければならないという思いが生まれた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

私が教師力養成講座を通じて得たことは三つある。

一つ目は、様々な人と関わりつながる力である。演習校の先生方との縦のつながりや、受講生同士の横のつながりを築くことが出来た。演習を始めたばかりのころは、悩んだり困ったりしたことがあっても一人で抱え込んでしまうことが多かったが、一人で抱え込んでいても解決にはつながらないとわかり、行き詰ったときは積極的に先生方から助言をいただいたりして、自分では気づかなかった視点や課題に気づくことが出来た。また、受講生同士で支え合ったり互いにアドバイスし合ったり、同じ目標に向かって一緒に頑張る仲間としてともに成長したと感じる。

二つ目は、限られた時間の中でやるべきことを丁寧かつ迅速に行う力である。毎週水曜日に「夢・未来」講座を受け、期限内にレポートを提出したり、日々の演習によって時間がない中でも体験授業や研究授業の準備を早く丁寧に行ったりなど、スケジュール管理能力や事務処理能力が、教師力養成講座に参加する前と比べて伸びたのではないかと思う。

三つ目は、失敗を恐れず挑戦する気持ちである。演習で初めて本当の生徒の前で授業をしたり実際にSHRを行わせていただいたが、最初は失敗するのが怖くて「やりたくない」という気持ちが非常に強かったが、回数を重ねるごとに「初めてだから失敗して当たり前」「次をもっと良くするためにはどこを改善すればいいか」と失敗を恐れずむしろ前向きにとらえられるようになり、「もっと実践を積みたい」という気持ちに切り替わっていった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

私は教師力養成講座を通じてリアルな学校現場の様子や京都府の先生方の教育に対する熱い思いに触れたことで、より一層教師という職に大きな魅力を感じ、改めて「京都府で教師になりたい」と強く思えた。

演習を振り返ると、今の自分の実力で出来る限りのことはし尽くしたと思えているが、一方で「自分の実力はまだこんなものか」と気付かされ、多くの課題を見つけることが出来た。

特に、生徒への伝え方の部分や積極的な関わりには大きく課題が残っていると感じる。生徒にとってわかりやすく、意識に入りやすい伝え方、授業中の話し方や表情、授業構成の工夫・改善、生徒に対して自分からもっと積極的に歩み寄る勇気が今の自分には特に欠けているため、まずはこれらの課題を克服するにはどうすればよいかを考え、そしてそれを実践できる場に積極的に身を置くことで、教師にとって必要なスキルを一つ一つ磨いていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」

受講生氏名：瀧　愛佑美

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私はこれまで大学や教員養成サポートセミナー等を通して主体的・対話的で深い学びの必要性や重要性について学んだ。そこで実際に主体的・対話的で深い学びを実現する上でどのような工夫が必要か、どのような支援や指導が必要かについて演習校でたくさんの先生の授業を観察する機会、そして自らが授業実践を行う機会を活かして学びたいと考えた。よってこのテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　生徒の主体性を引き出す工夫、生徒の学びを深める発問・指示を観察する。

イ　「主体的・対話的で深い学び」を意識して授業を実践し、省察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

まず演習校の教員の授業において生徒の主体性を引き出す工夫という視点をもって観察した。具体的にはどのように授業の導入を行い、学習への主体性を引き出しているのかについて教員の動き、そして生徒の反応をよく観察した。また教員と生徒との対話や、ペアワーク・グループワークでの生徒同士の活動にも注目するとともに、生徒の学びを深める教員の発問・指示について観察した。

そして授業実践において導入では生徒に「なぜ」と問いかける、授業の目標を明確化して見通しを持たせる等、生徒の主体性を引き出せるよう工夫した。また授業内でグループワークを設けることにより他者と教え合って理解を深めたり、新たな見方・考え方に気づきそれぞれの考えを深めたりできるよう工夫した。

(2) 演習校で学んだこと

私が演習校で学んだことは２つある。まず１つ目は、生徒の実態に合わせた指導の工夫である。具体的に英文を音読する活動では、生徒のレベルやこれまでの活動を踏まえて、どのような方法で行うのが最も効果的かについて入念に考えられていた。また、何度も音読することで生徒が飽きないようにレベルアップする構成にしたり、ゲーム性を持たせたりと生徒の主体性を引き出す工夫がなされていた。このように生徒の実態に即した指導の背景には、深い生徒理解と明確な指導の意図があると学ぶことができた。

加えて実際に授業をして、様々な習熟度の生徒に対して指導することの難しさを実感した。生徒との対話の中でスムーズにやり取りが進むと、どうしても英語が苦手な生徒や理解できていない子に対しての配慮が足りないまま進めてしまうことがあった。そのため、広い視野と想像力をもって、様々な生徒のレベルや実態に即すよう指導を工夫することが重要であると学ぶことができた。

２つ目は生徒の学びを深める発問や指示である。特に英文法の授業では、「なぜその答えになるか」と生徒に発問することで生徒の興味を引き出すとともに、深い理解へとつながるように工夫されていた。このような生徒の学びを深める指示や発問が、主体的・対話的で深い学びを実現する上で非常に重要だと学ぶことができた。この他にも生徒の主体性を引き出す、学びを深める教員の工夫についてたくさん学ぶことができたため、この学びをしっかりと今後の学びや教員生活に活かしていきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座ではそれぞれの分野に精通した方々にご講演いただき、学級経営や学習評価、人権教育など様々なことについて学ぶことができた。中でも最も印象的であったのは学級経営と授業実践講座である。

学級経営においては、生徒とのコミュニケーションの重要性を学ぶことができた。学級は生徒にとっての居場所の1つであり、授業や行事など様々な学びの基盤となる。このように学級は全ての教育活動につながる大切な場所である。そこで学級を生徒にとってより良い集団、学びの場とするために、そしてそれぞれの生徒に合った指導や支援をするために生徒と密にコミュニケーションをとり、生徒理解を深めることが非常に重要であると学ぶことができた。

また教育実践講座では実際に模擬授業をしていただき、主体的・対話的で深い学びを意識した授業実践に向けて大きな学びを得ることができた。具体的に授業の組み立て方や生徒への発問、指示の工夫、All Englishの授業の指導意図やその効果について学ぶことができた。

この講義を通して私の中で主体的・対話的で深い学びを実現する授業のイメージが構築されるとともにその授業の実践に向けて刺激を受けることができたため、非常に印象に残っている。

このように「夢・未来」講座を通して教員になる上で必要な資質能力を身に付けることができた。この学びをしっかりと次の学びに活かしていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座で身に付けた力はつながる力である。日々の演習の中で様々な教員の方々や生徒と関わる機会がたくさんあった。その１つ１つの関わりの中で教員の方々と信頼関係を築き、校務分掌の仕事などお手伝いさせていただけることが増えたり、生徒とも積極的に関わることで生徒理解に努めることができた。また「夢・未来」講座においても集団討論や講義でのグループワーク・ペアワークにより、同じ校種や教科の人々だけではなく他校種や他教科の人々とも意見を交流しつながることができた。その中で校種や教科が異なるからこそ見えてくるそれぞれの特性もあり、より自分の志望する校種・教科の理解を深めることができた。

そして教師力養成講座を通して成長したことは授業力である。具体的に授業実践では、講座で学んだこと・実践したいと書き留めていたことを振り返るとともに、日々授業を観察する中で気づいたことや学んだことを参考に授業を準備して構成した。そして指導教員と話し合ったり、アドバイスを受け指導案を何度も練り直したりして授業を実践した。その後は事後指導を受けて授業を省察し、見つかった課題を改善するなど授業力向上に努めることができた。

このように教師力養成講座を通して様々な人とつながり、学びを深めることにより授業力や教員に必要な資質能力を身に付けることができ、私にとって非常に深い学びとなった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

教師力養成講座を通して様々なことを学び、経験することができた。授業を実践する中で自分の課題や授業実践の難しさに直面した場面もあった。しかしそれらと向き合い、改善に向けて努力を重ねることで生徒に「分かりやすかった」「〇〇について理解が深まった」と言ってもらえる授業を実践することができた。その際に教師の魅力を感じ、教員として生徒とともに学び続け、成長し続ける教員でありたいと考えた。そのためこれからも教員として必要な資質能力を身に付けるために日々学び続けたい。

今後の課題としては英語が苦手な生徒への対応や生徒へのフィードバックである。30－40人の生徒に授業を行う際、その習熟度は様々である。そのため授業の中で幅広い習熟度の生徒に対応できるようにレベルに応じた指示を行うなど支援や指導を工夫したい。また生徒の正答や誤答に対して英語で褒める表現、励ます表現をたくさん学ぶことで、生徒が互いに間違いを認め合ったうえで共に学び合える環境づくりに努めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「ＩＣＴ教材を活かした授業実践」

受講生氏名：佐々木　凜

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

「Society5.0」の時代が到来し、急速に変化し続ける現代において、日常生活の様々な場面で生徒はICT（情報通信技術）を用いることが当たり前となっている。学校現場においてもそのような社会の変革にあわせて、「誰一人取り残すことのない」ICT環境の充実が求められている。京都府の「教育環境日本一プロジェクト」においても、ICTの積極的な活用が共通アプローチとして掲げられている。

また、ICT教材を活かした授業は私自身が学生であったときに十分に経験していない授業形式でもあるため、学校現場における実践を通して学びを深めたいと考えた。

(2) 研究方法

研究方法として、まずは先生方の授業を参観し、ICT教材が「主体的・対話的で深い学び」を目指してどのように利活用されているのかを、助言をいただきながら研究した。

また、体験授業や研究授業を通して実際に「ICT教材を活かした授業実践」を行った。授業後は生徒からフィードバックをもらったり、先生方にご講評をいただいたりすることで自身の実践を振り返り、注意点や改善点を検討した。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業参観では生徒が一人一台タブレットを所有しているという環境下において、それがどのように活用されているのか、学ぶことができた。最も効果的だと感じた授業実践はタブレットの「クラウド」を活用した実践である。生徒一人一人が自分の考えをスライドで表現したものをスクリーンに一斉に映し出すことができるようになり、瞬時に多くの他者の考えに触れ、生徒同士の考えを比較できるようになったことは、授業内の学びを深める上で非常に大きな役割を果たしていると感じた。生徒も他の生徒の考えを自由に、何度でも見ることができ、ICT教材が「協同的な学び」の促進につながっているということを実感した。また、授業実践ではパワーポイントを用いた授業を行った。授業後に行ったアンケートからは「文字が大きく、見やすい」「イラストや図があってわかりやすい」などの意見が寄せられた。国語科においても、言葉や物語のもつイメージを視覚的教材も用いながら生徒に捉えさせることで、わかりやすく伝えることができるということを学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

演習校では年度替わりの貴重な時期に演習をさせていただき、特別な場面における生徒の様子や先生方の動きについて学ぶことができた。特に分掌の仕事は自分が学生であったときには見えていなかった先生方の部分であり、一つの行事を成功させるためには入念な準備や教員同士がきちんと情報共有をしてチームとして動いていくことが必要だと学んだ。また、卒業式や入学式、年度初めのHRでは先生方が生徒に「語る」場面を見ることができた。普段の授業や学校生活においてもそのような場面があり、それぞれの先生が大切にされていること、生徒に伝えたいとされていることに触れ、自身の教育観を深めることができた。教員として語れること、伝えられることを積み上げていくことが大切だと学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

全13回の「夢・未来」講座を通して、令和の日本型学校教育、生徒理解、特別の教科「道徳」の指導法、特別支援教育など様々な視点から教育を捉え、学びを深めることができた。各講義では、スペシャリストの先生方にご指導いただきながら、講座生同士でグループワークを行い、意見を交流し合うことで新たな考えに出会うことができた。

特に、自身の演習テーマに関連して「ICT教材を活用した授業実践」の講義では、これからの学校現場に必要不可欠な「ICT教材」について見識を深めることができた。「ICT教材」は生徒の学びを広げたり、教員の働き方改革に貢献したりと多くの可能性を秘めたツールであるが、注意しなければならないこともある。それは「ICT教材」を用いることが目的になってしまうことである。あくまでも「生徒が進んで追究するために」「俯瞰して学びを捉えるために」「学習問題を効果的につくるために」など、何のために「ICT教材」を用いるのかという目的を明確にした上で活用することが求められる。「ICT教材」が生徒の「個別最適な学び」や「協同的な学び」を後押しするという効果を発揮できるように、教員は「どのように使うか」「何のために使うか」といった点を日々問い続けながら活用していかなければならないということを学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座を終えて、夢である「教師」という仕事に関しての捉え方が、受講前と比べて遥かに広がった。人を教え、導くとはどのようなことなのか、実習校での先生方からのご指導や、生徒との関わり、同じ養成講座生との関わりのなかから、様々な教育に対する考え方に触れ、自己の教育観を深めることができた。

特に、実習校での授業実践を通して「生徒の学びを後押しする」感覚や「生徒に自分の思いが伝わる」感覚を得ることができた点が、自分の成長につながったと実感している。例えば、グループワークの机間指導をしているとき、悩んでいる生徒たちに声がけをしたことがあった。そのとき、自分の声がけによって生徒が何かに気づいたような様子を見せ、停滞していた話し合いが再び動き出した。生徒に自分の伝えたいことが伝わった喜びと、生徒の学びを促進させるような声がけができたという実感を得ることができた。生徒の思考を促したり、考えを引き出したりすることが「学びの伴走者」としての教師にとって重要なことだと学んだ。「授業」は教員の仕事の「要」の部分であり、これからも実習で発見できた自分の強みや改善点を活かして、生徒にとってよりよい授業を目指したい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

「教師力養成講座」を通して、実際に現場で働く先生方や京都府の教育に携わる先生方のお話を聴き、教職の魅力を改めて実感し、京都府の教員として「未来の社会を創る生徒の力になりたい」という気持ちがより一層高まった。教師力養成講座の終盤では、教員自身が学びの「感動」を忘れないことの大切さをご教示いただいた。生徒の学びを支えるために、まずは自らが専門科目にとどまらず、多様な学びに対しての「感動」を見出し、その喜びや楽しさを享受して生徒に伝えていけるよう、これからも研鑽に努める。

(2) 今後の課題

授業力と生徒の関わり方が今後の課題である。授業では生徒への発問を一回で終わらせるのではなく、追発問をしたり、広げたりできるようになりたい。また、生徒との関わりでは一部の生徒だけでなく、広い視野をもってクラス全体や学級全体の生徒とまんべんなく関わっていけるよう、幅広い生徒へのアプローチを心がけていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「画像・動画等の資料を用いた生徒の興味を惹き出す授業作り」

受講生氏名：平岡　慎也

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

現在の教育環境は、GIGAスクール構想により一人一台の端末が導入されている。このようなICT機器が身近にある生徒が、機器を道具として情報収集やデータ分析を行い課題解決を図る「情報活用能力」を身に付けていくことを教育課程全体で目指していくことが大事である。

そんな中、今回演習の主軸とした「視覚的な資料を用いた授業」は、生徒の関心を引きつけるだけでなく、視覚的な情報を通じて情報の理解や批判的思考力の育成に寄与することにもつながると考える。また、視覚的な資料を提示することで、単元の導入部での生徒の学習に対する関心を持たせることや主体的な疑問を抱かせることで学習効果を高めることも期待できる。このような状況を踏まえ、今回のテーマを設定した。

(2) 研究方法

研究方法として、地歴公民科だけでなく、さまざまな教科の先生方の授業を参観し、ICTの活用実践例を学び、ICTを活用する注意点やアドバイスをいただいた。また実際にICTを活用する場面を組み込んだ授業実践を行った。生徒の反応やパフォーマンスを観察したり、参観に来ていただいた先生方からアドバイスやフィードバックをいただいたりすることで、授業での有効性を吟味・改善を重ねつつ、研究を進めた。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業参観を通して画像や動画などの視覚的な資料がどのように活用されているかを学んだ。先生方の資料選定・提示の方法、生徒の反応などを観察し、効果的な活用のポイントを把握した。特に歴史の授業では、先生方は授業の中で、導入部のタイミングで資料を提示し、生徒と共にその内容についてディスカッションしたり、また、生徒はグループ活動やプレゼンテーションを行ったりしていた。さらに、教科書や資料集に掲載されているものとは別の資料を提示することで、生徒の思考活動を促し深めていくことに繋げていた。その資料は教材資源やインターネット上のデータベースから取得されており、先生方は適切な資料を選ぶために時間をかけて準備されていたことが印象的であった。授業後に教材・資料の活用について質問したところ、動画教材であれば３分以内に収めることや画像であっても白黒とカラーによって伝わり方が変わるといったアドバイスなど自分の授業に活かす貴重なご意見をいただいた。

(2) 演習校で学んだこと

生徒が自分で学習を組み立てていく際には、教員が授業におけるルールや活動に対する指示をあらかじめ組み立てておき、生徒が混乱するのを避けることの大切さを学んだ。生徒の自主性を重んじるがあまり、指示があいまいになってしまったことがあった。そのため授業の始めに学習目標や活動の手順を明確にし、どのように進めていくかを生徒に理解させる必要があると感じた。また、質問や疑問が生じた場合には、適切な支援ができるようにしていくことも重要である。特にグループ活動では、役割分担や課題の明確化を行い効果的な学習環境を整備していくことが大切であることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座を通して、近年の教育の動向や専門的な知見を踏まえた京都府の教育について学ぶことができた。特に第４回の「高等学校における生徒理解とホームルーム経営」では、誰一人取り残さないホームルームに向けた、先生の具体的な実践例を知ることができ、理論と実践について照らし合わせて自分事として考えることができた。また、「夢・未来」講座で参考にしたい、取り入れてみたいと思ったことを、すぐに演習校での実習の中で意識することができるといった「昨日の学びを明日につなげることができる」という点が効果的であった。また学校や校種の垣根を越えて演習内容や学びを共有し合い、多面的・多角的な視点で自身の教育実践を見つめることができた。同じ志を持つ仲間と協議する中で自分にはなかったアイデアや新たな視点を持つことができた。私は教員として理論と実践の往還を意識しつつ、他者の意見を謙虚に聞いて自分自身に生かして教育活動に取り組んでいきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 学習者を中心とした指導へのシフト

ICTを活用し、復習動画を作成することや課題配信を行うことで、生徒が自ら学ぼうとする姿勢や自主的に課題に取り組む姿勢が見られた。また画像や動画といった資料を効果的に使用するために、生徒が見たことのない資料や多様な教材から選定していくことや、授業の中で掲示するタイミングに関して念入りに計画したことで、活発なグループ活動やディスカッションを生み出すことができた。

(2) 業務に対する明確なイメージ

年度替わりの会議や各行事における業務を経験したことで、自身の知識を実践活動につなげる力を少しずつ身に付けることができたと考える。各分掌についての理解を深め、学年団での生徒情報の共有といった多様な業務と連携の仕方を知り、教員として実際に働く際の姿をより明確にイメージすることができた。この経験から、日頃からのきめ細やかな情報共有の大切さを学んだ。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、実際の業務を体験したことで生徒からは見ることができないことや教育実習で見えた姿とは異なった教員の業務を知り、その多様さと幅広さを痛感した。一方で、先生方が生徒の成長のために全力で教科やホームルームと向き合い業務に取り組まれている姿も拝見し、生徒に寄り添い、共に未来を創り上げていく教職の素晴らしさについて再認識することができた。

私も生徒の成長を一番近くで見守り、学校に関わる全ての方々と協力しながら生徒を育んでいくために、さらに学びを深め、崇高なる使命と責任を自覚し、何事にも全力で取り組んでいきたい。

(2) 今後の課題

生徒がそれぞれの目標を達成するために、個々のニーズに応えることが重要な使命であると考えた。生徒一人ひとりの学習スタイルや能力、興味・関心の違いを考慮し、個別の支援に関する手立てを準備していくことを心がけたい。また、教員は信頼される人間であることも大切である。生徒の手本となる存在として必要な基礎的素養は、今後も高め続けていきたい。この演習を通して得た学びで完結させず、今後も継続し、力量を高められるよう努めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「授業及び学校生活における環境づくり」

受講生氏名：畠中　凜太郎

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

このテーマを設定した理由は二つある。一つ目は、生徒が学校や授業に行きやすいと感じるために、どのような工夫が必要なのかということである。生徒は、各家庭以外では、ほとんどの時間を学校で過ごしている。特にホームルームに関しては、帰ってくる場所とも捉えることができる。学校生活に居場所を作る上で、ホームルームの環境が大きく関係していると思い、学校生活における環境づくりを取り上げた。

二つ目は、授業内での学習をよりわかりやすくするためには、どのような工夫をすればよいかを調べるためだ。特に数学は多くの生徒が苦手としている。それを打開するために、先生の動きや授業内での工夫に着目した。

(2) 研究方法

学校生活の居場所づくりについては、ＳＨＲや部活動のような授業外において先生と生徒とのかかわりを観察する。また、私もそれらの活動に参加し、生徒の視点に立って何が必要かを考え、行動する。そして、生徒の反応を観察し、環境を整えることで変化があったかを判断する。

授業内での学習に関しては、まず複数の数学科の先生の授業を見学し、それぞれの特徴を捉える。その時、机間巡視を行い、生徒の理解度や学習意欲も観察する。そして、見学で学んだことを体験授業等に取り入れて生徒の反応や理解度を見ることで、その工夫が学習をよりわかりやすくするものであったかを判断する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 学校生活の環境づくりについて

私は、ＳＨＲや清掃、部活動において、実際に生徒と共に活動することで生徒の目線に立って考えることができた。ＳＨＲや清掃では、生徒が自分から進んで行う場面が多いが、時には先生方がきちんと指導する必要がある場面も見られた。自分の生活場所となる学校を、自分で管理して過ごすということを、生徒に理解させる必要がある。演習校では、自己管理ができる環境として、タブレットやロイロノートの活用がよく見られた。部活動では３年生が主体となって活動することが多く見られた。また、部活動のはじめや終わりの集合やミーティングでは、先生方がまとめをすることが多く見られた。これらのことから、生徒には機会や手段を与えて、その他に必要な情報や物等は生徒自身が自分で手に入れるよう指導されていた。そして、困ったことがあれば、いつでもサポートに入れる状況を作っておくことが重要だとわかった。

(2) 授業の環境づくりについて

演習校では、タブレットを用いて黒板に投影することができるプロジェクタや電子黒板が使用されていた。それを活用して教科書を映し出し、練習問題を解説したり内容を進めたりしていた。そうすることで、生徒全員が同じところを見ることができ、どこをやっているかがわかりやすくなると考えられる。私も、体験授業と研究授業にて使用したが、書き込みもできるのでポイントをまとめる時等に便利だ。しかし、生徒の座る位置や光の反射によって見づらくなる場合があるため、使い方や見やすさには十分配慮しなければならないことも分かった。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座を受講して学んだことは、教育には多くの方々や様々な機関が関係しており、その繋がりが今の児童・生徒たちを育てているということだ。私は、講師の小学校の先生や京都府教育庁の方の講演を聞くことで、京都府が一丸となって児童・生徒たちを育てていることを実感できた。

これらの組織が混ざり合うことで、次の二点が教育や教師に良い影響を与えると考えられる。一つは、繋がりができるということだ。京都府の教員に必要な５つの力のうちの一つである、つながる力は、「夢・未来」講座で大きく育まれると私は感じている。校種も大学も異なる人と共に、共通の課題について学び合うことで、将来の仕事に対するモチベーションアップや、支え合いにつながっていることを実感した。

二つ目は、知識を確かなものにできるということだ。ある程度のことは自分で調べて手に入れられるが､実際に取り組んでおられる方からお話を聞くことに比べると説得力が異なる。また、自分で調べてみたが理解があまりできなかった内容も、この講座を受けることでしっかりとした知識として定着した。

上記のように、多くの機関の方々による講演によって力や知識が得られ、教師になった際には講座での学びを活かした教育をしていきたい。

4　教師力養成講座で身につけた力や成長したこと

教師力養成講座で身についたことは主に二つある。一つ目は、演習に行くことで演習校の生徒や先生方とコミュニケーションをとり、実際に先生として動くことで、学校での先生の働き方を経験することができた。教務部の仕事や担任としての動き方、年度替わりの動きなど、教育実習では身に付けられなかったことが多くあった。また、生徒の立場に立って考えたり、体験授業のように先生として教えたりすることもあった。こういった働き方を、身をもって先に経験できることで､教員になったときに即戦力になることができると考えている。

二つ目は、講座や演習等を通して多くの人とつながることができたことだ。開講式で講師の先生がおっしゃっていたが、今のつながりが今後の生活にも役立つと感じる。実際、この教師力養成講座でわからないことや不安なことがあったとき、同じ演習校の人や講座で同じグループになった人に相談していた。また、お互いの近況を報告することで、他の学校や校種ではどのような取り組みがされているのかを知る機会にもなった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

私は、数学嫌いの生徒を減らせる教師を目指している。その解決策の一つとして、授業の環境づくりが重要だと考えている。今回の教師力養成講座を受講して、３年間を通した数学のつながりや専門的な多くの知識を身に付ける機会を得た。「夢・未来」講座では、授業やクラス運営、ＩＣＴの活用に関することなど様々なことを学んだ。

教師力養成講座を受講することで、多くの知識を得ながら、それを実践してみることができた。私が教師になった際には、このような知識を得ることと、それをもとに新たに実践することを繰り返し、より良い教育を目指したい。

私は、人とコミュニケーションを図ることが課題と認識している。多様な人とコミュニケーションを図りたい。そうすることで、数学嫌いについてもより深く理解でき、授業やクラス運営等についても対策や良い工夫を多く見い出せると思う。

教師力養成講座では、受講生同士が繋がり、様々なことに挑戦する中で、互いを伸ばし合うことができると感じた。今後もこの繋がりを大切にしたい。また、教職に向けて多くの人と繋がりつつ、様々なことに挑戦し、互いに伸ばし合えるように努めていきたいと思う。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒の主体的な発言が生かされ、『発表力』が身につく授業づくり」

受講生氏名：徳山　晴香

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

先生方が生徒の発言を受け止め汲み取ってくれるため、演習校の生徒は授業をしている中で授業者に自分の考えをぶつけてくれる。しかし、意見を示してくれるものの「つぶやき」にとどまってしまうことが多い。つぶやきでとどまることなく、自分の意見を相手に対して発表し、文章化して伝えるための力を身につけてほしいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　演習校の先生が生徒の発言をどのように授業に取り入れているのか、どのような言葉を投げかけることで生徒が考えを巡らせ自分の意見を言おうとするようになるのかを観察する。

イ　講義型だけではなく他の生徒と交流する機会を設ける。意見交流の場を設定する。パワーポイントなどを用いながら視覚的にも工夫し、生徒がワークに取り組めるよう調整する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業ではペアワークや音読活動を取り入れ、生徒同士が言葉にして意見を伝える機会を多く取り入れるように工夫した。他者との交流だけではなく、生徒自身が考えを深めて文章化する活動も取り入れ、思考の整理ができる時間も設けた。その際、「文章化する時のコツ」を配布し、ワーク後に発表する際自身の意見が伝わりやすくなるコツを掴んでもらえるようにした。体験授業の際には授業後アンケートを取り、授業改善に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

演習校で学んだことは２つある。

１つ目は、「具体的に話す」ということの大切さである。中でも特に、指示を細かく具体的に出すことや指示を出すタイミングの難しさを感じた。ただ「話し合ってください」と漠然と指示されるだけでは困惑する生徒も一定数存在し、後方の席の生徒に指示が伝わりきらず、何をすればいいかわからなくなっている生徒もいた。ペアワークであれば、まずどちらの人から話し始めるのかということから明確にし、「前半の人と内容が重ならないようにしよう」など「話し合う」とは何なのかがわかるように具体的に指示を出すと、やるべきことがわからず雑談をすることも減ったように思う。

２つ目は、言葉で生徒の視線を誘導することの大切さである。教師・黒板・プリント・教科書・ノートなど、授業中に目を向けないといけないものは多い。ただ「前を向いて」というよりも、「ワークが終わった人は体を黒板の方に向けてね」「シャーペンを置いて合図してね」「顔だけこちらに向けてね」など、今どこを見ればいいのかを逐一なぞっていくことで授業中の雰囲気づくりがしやすくなるように感じた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「第２期京都府教育振興プラン」を通して、京都府の教育の方向性について学ぶことができた。また、現在の教育活動の中で推進されていることや成果と課題、これから教員になる私たちに求められている力を整理することもできた。特にオープン講座のテーマである「令和の日本型学校教育」や「個別最適な学び」に関しては、大枠は理解しているつもりではあったが、いざ問われると答え方に困ってしまうものだった。これからの教育を考える上で知識として押さえておきたい用語や学習について、講座を通して考えを深めることができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

「夢・未来」講座では、自分の意見を発信する力を身につけた。個人で考える時間も担保されているが、グループワークの形態が多かったため、自分の意見を素早くまとめつつ意見を伝える力が求められた。意見は持っていながらも人前で話すことに苦手意識を感じていたが、意見を発信するという場数を踏んでいくことで、初対面の講座生とも話し合いを円滑に進められるようになった。また、この力を身につけたことで、自分の意見に対して他の講座生からも意見を頂くことができ、自らの考えをブラッシュアップすることにもつながった。

「教育実践演習」では、生徒にどのような力を身につけさせたいかを軸にして、授業を構成する力が身についた。実際に生徒を目の前にして、まずは演習校の生徒にはどのような特徴があるのか、どのようなものに興味があるのかといった実態を知る必要があると考え、生徒との会話を重ねた。授業中の活動でどういった点を工夫しているのかは先生方にお聞きした。生徒や先生方との関わりを通して、「この学年が終わる頃にどういった姿になってほしいか」を考え、それを基に授業構成を考えるようになった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

長期にわたって学校現場で演習を行ったことで、生徒や先生方と多く関わることができた。演習を通して、先生方は普段の些細な会話や授業中でのやり取りから、生徒の考え方や傾向など多くのことに気づいているということを知った。私も演習校の先生方のように「気づき」の力を身につけ、生徒の良いところを見つけて言葉にして伝えることで、生徒に自分自身の良さに気づかせ、子どもの挑戦を後押しできる教師になりたいと強く感じた。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、「授業の濃淡をハッキリさせること」と「目線を意識すること」が挙げられる。

「生徒が自分の意見を持ち、文章化できるようにする」という本時の目標を掲げていたが、本文理解にかなりの時間を割いてしまった。生徒自身が考える活動になるべく多くの時間を割きたいのであれば、知識・技能の要素は教師側から与えてしまい、事実理解を素早く教師主導で行う必要があると感じた。本文理解とグループワーク等で生徒が意見を深める場面を区別し、メリハリのある授業を展開できるように努めていく。

緊張していたこともあり、研究授業の際に生徒の方をあまり見ることができていないという指摘をいただいた。指導計画の内容を頭に入れて、「板書をする時間」と「生徒の方を見て話す時間」を区別し、話をする時は生徒の顔を見てしっかり話すという基本的なことが抜け落ちないようにしたい。誰に向けて授業をしているのかということを忘れず、生徒のことを「見ているつもり」にならないように自らの目線を意識していく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒の自己肯定感を高める授業づくり」

受講生氏名：松山　綾花

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) テーマ設定の理由

「第２期 京都府教育振興プラン」の内「教育に関わるすべてのものが大切にしたい想い」の項目において、児童・生徒の「自己肯定感」が育まれることが挙げられている。私も、予測困難な社会を生きる生徒にとって自己肯定感を持つことが大切だと考えている。学校生活の中でも、特に授業を通して生徒の自己肯定感をはぐくむにはどうすればよいのかについて、深く関心を持ったためテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　先生方の実践を学ぶ

「生徒の自己肯定感を高めるには」について、様々な教科の先生方にお話を伺ったり、授業を見学したりし、実際に取り組まれている方法を学んだ。

イ　体験授業・研究授業における実践

アの内容を基に、授業づくりを行った。また、授業後に先生方から頂いたフィードバックや、授業中の生徒の様子、感想を基に授業の振り返りを行った。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

まずは、授業中どのように生徒の自己肯定感を高めることができるのかについて、先生方とお話しをした。加えて、授業見学を通して授業内における先生方の工夫を参考とした。

以上のことから、授業において①「生徒の『できた』体験を増やす」②「多様な意見が受け入れられる」③「生徒との対話を基に授業を展開する」ことが、生徒の自己肯定感を支える具体的な方法であると学んだ。

このことを踏まえ、①②③を実践する授業を計画した。まず、①に関しては導入で正解が一つにならないものを発問したり、前半に教科書を読解しプリントを埋める作業、後半に資料を読解する作業というようにスモールステップを踏んだりすることを意識した。次に、②に関しては授業中の発問は、仮説やオープンクエスチョンなど答えが一つに定まらない問が含まれるようにした。そして、ペアワークでの意見交流のような自分の意見を相手に伝え、相手の意見を聞く機会を作るようにした。最後に、③に関しては、授業中に生徒が発した意見を拾い、授業がクラス全体のものになるように意識した。

(2) 演習校で学んだこと

授業において、生徒とどう向き合うのかについて学んだ。例えば、勉強ができないことを恥ずかしいでごまかしてしまわないように、授業で活躍できる場を工夫する。「できる」体験を増やそうとする先生は一年間を見通して学習のステップを考え、生徒同士が教え合う授業体系を確立されていた。そのために、活動前には話す内容などを丁寧に確認することも「できない」を減らす工夫であった。また、安心感のある授業を重視する先生は、生徒の意見から授業をつくること、多様な意見が受け入れられる空間にすることを心掛けられていた。

このように、授業は教師の独りよがりにならないこと、そして、生徒の反応に敏感になることが、生徒の自己肯定感を高めるうえで必要不可欠なことであると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、講師の方々から貴重なお話を聞くことができた。これらの講義を通して、今の教員に求められている知識・資質・能力、教育課題の本質を学ぶことができた。

特に、第九回の「京都府における人権教育」が印象に残っている。人権教育では、自他の大切さを認め、実践行動に移すことが目標とされてる。そして、人権教育は生徒が日々安全安心に学校生活を送り、自己肯定感を高めるための土台となると学んだ。学校生活の中で人権感覚の高揚を促すために、生徒にとって自分事になることを地理歴史・公民科の授業でも意識したい。また、生徒が安心安全に通える学校・学級・授業がなければ、生徒の自己肯定感は育まれないことを再確認したとともに、正しいことを正しく伝えることを厳守しなければならないと強く胸に刻んだ。

加えて、講座の中で行われたディスカッションは私の中で大きな学びとなった。特に校種や科目の違う受講生の意見を聞くことが、授業づくりや生徒との関り方において新たな発見につながった。講座を通して、様々な人と対話をすることの大切さを再確認した。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座を通して、周りとつながろうとする力が成長したと実感している。講座を受ける前は、同じ大学で教職を目指す友達と交流することが多かった。しかし、演習校の先生方、生徒、校種や科目の異なる受講者、講師の方々、アドバイザーの先生方など、これまで関わることのできなかった方々と話せる機会を頂き、学ぶために話に行こうという意欲がより一層強くなった。様々な立場の方と交流することで、視野が広がるだけでなく、理想の教師像を深めることができたと感じている。

また、実際に生徒の前で授業をさせて頂けたことは本当に大きな学びとなった。これまでは、大学の講義で授業をする経験しかなかったため、不安を感じていた。しかし、先生方の授業を見学したことや実際に生徒の反応を見ながら授業をしたことで、授業の中でどんな力を生徒に身につけさせたいのか、プリントはどのように工夫するべきかを特に学ぶことができた。また、実際にロイロノートを使わせていただけたことで、授業のめあてを達成するためにICTはどのように活用できるかなど、これまでよりも具体的に考えることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を受講して、私の中で教師になりたいという思いはより一層強くなった。演習中、先生方が生徒に対して自分で考えることや自律することの大切さを伝えられていたことから、高校卒業後の将来のことを見据えて日頃から指導されていることを強く感じた。また、その場面をみて、自分ならこのタイミングでどのように声をかけるのかを考えている自分に気が付き、教師を志望する気持ちが強くなったと実感した。生徒にとって安心で安全な学校にすること、そして自身の言動が生徒に及ぼす影響の大きさに責任を持ちながら、変化の激しい時代と向き合う生徒に寄り添う教師になるために、これからも学び続ける。

(2) 今後の課題

課題は二つある。一つは授業のデザイン力である。教材研究はできていても、授業を組み立てることに時間がかかる。様々な実践例を学び、授業スタイルを深めていきたい。

二つ目は、授業中に生徒と関わることである。意識はしていても、実践では十分にできなかった。私の独りよがりにならないように、あらかじめ生徒から出る意見を予想し、追発問を用意しておいたり、多様な考え方が認められることを必ず生徒に伝えたりすることで、生徒と対話をしながら授業を展開できるように努めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒が前向きに授業に取り組む工夫と学級経営」

受講生氏名：井上　萌

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) テーマ設定の理由

公立学校インターンシップにて、教員の温かい支援により学校が生徒たちの居場所となっていることを実感した。しかし、自己肯定感が低いため授業や学級活動に真っ直ぐ打ち込めていない生徒に多く出会った。そこで生徒が前向きに授業に取り組むために教員がどのような支援をされているのか、どういった工夫ができるのかについて学びたいと感じ、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

英語科や英語科以外の授業を参観し、どのような工夫をされているのか観察し、アドバイスをいただいた。また、実際に授業を実践することやショートホームルーム・ロングホームルームを運営させていただくことで、授業外と授業内の両者で生徒との交流を行い、生徒について理解を深めた上で演習を行なった。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

ア　生徒が前向きに授業に取り組む工夫

授業参観を通して、教員は共通して生徒に「こうあってほしい」という明確なビジョンを持って授業をされていることを実感した。ある授業では「教える」経験をしてほしいとの思いから、ジグソー法を活用した授業が構成されていたり、使うことのできる知識を身につけさせるために「書くこと」に重点を置いた授業をされていたりした。目的を持って活動を選択する必要があると強く感じた。

上記のことを踏まえ、授業実践では、「聞くこと」を目的とした授業づくりに挑戦した。「聞くこと」に関しては生徒自身が成長を感じる事が難しく、モチベーションを保つ事が困難である。そのため、授業の始めと終わりの自己評価を通して少しでも成長を実感できるように促した。また、目的意識を持って取り組めるよう、目的を示すことを意識して実践した。

イ　学級経営に関すること

学級経営については、挨拶や普段のコミュニケーションを通して関係性を築くことはもちろんのこと、クラスで過ごす時間が生徒に大切なものであると強く実感した。教員との関係だけでなく、生徒同士の関係も深められるよう有意義な時間の使い方が必要だと学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

授業実践では目標を持って授業を行うことだけでなく、授業内での生徒の視線を誘導することの大切さを学んだ。全体指導の際に生徒の理解度を測るときにも有効であると教えていただいた。また、教員同士の連携を密に行うことで、一人ひとりに合った指導が実現できると改めて実感した。生徒の些細な変化・成長・困りを担任や教科担当の教員が共有することで、限られた時間の中で生徒理解を深められていた。対生徒だけでなく、教員間のコミュニケーションも重要だと学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員となる上で必要な知識や実際の実践方法を学ぶ事ができた。また、大学や校種を超えて講座生と交流することで、新たな価値観に出会い、自身の考え方を広げることが出来たと感じた。特に印象に残った講義が二つある。

一つ目は、「高等学校における生徒理解とホームルーム経営」である。高等学校における生徒理解とホームルーム経営において重要なことは、教員が「目の前の生徒をどうしたいのか」という視点に基づいて一貫した軸を持つことだと学んだ。軸を決定し、それに向かう目標を具体的にすることで日々の中で生徒が成長を実感することができると感じた。また、教員自身が楽しむことの重要性を実感した。

二つ目は、「授業実践講座」である。オールイングリッシュの授業に対する考え方が大きく変化した。意味を持たない日本語による支援は、支援ではなく生徒の英語を使用する機会を奪っていることになる。ジェスチャーやICT機器を活用した視覚的な支援の他に、英語を「使う」授業の空気作りが重要だと強く実感した。生徒にとって本当に価値のある授業について改めて考える機会となった。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

特別講師による授業実践の参観、実際に授業を行い、生徒に身に付けて欲しい力や目標を意識した授業づくりの大切さを学んだ。また、学習指導要領の改訂に伴い、授業も変化していることを実感した。授業の在り方が異なっても、「指示の明確さ」や「視線の誘導」等、変わらず大切にしなくてはならないことについても考慮することができた。

(2) 教員としての自覚

教員として生徒と密にコミュニケーションを取ることの大切さを実感した。生徒と関わる時間が限られている中で、信頼関係を築いていくために「挨拶をすること」「名前を呼んで、しっかり目を見て会話すること」は欠かせない。また、生徒の抱える課題が多様化する中で、１人では解決できないことが多くあることを知った。チーム学校として連携が必要になることを改めて実感した。実際に職員室では、教員間のコミュニケーションが充実していた。私自身もチーム学校の一員として行動する意識を身に付けた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、実際に生徒と関わることや熱い思いを持って教職に就かれている教員の話を聞き、より一層京都府の教員になりたいという思いが強まった。また、教員の仕事が授業だけでなく、生徒の学校生活の全体を支える仕事であることを改めて感じ、生徒一人一人と向き合うことのできる教員になりたいと感じた。生徒の幸せを願い、寄り添える教員であるために、新しい教育や教科の専門性、自身の人間性についても絶えず成長していけるよう努めたい。自身の目指す教員像に近づけるよう、教師力養成講座での学びを活かすと共に、常に学び続ける姿勢を持ち続ける所存である。

(2) 今後の課題

今後の課題は、「授業力」をさらに高めることである。生徒のための授業の実現のために生徒の実態を把握する目を養うことはもちろんのこと、生徒の学びがより深いものとなるようにICTの活用方法や、授業内での様々なコミュニケーション活動を知り、授業に活かせるようにする。生徒に身につけさせたい力を第一に考え、目の前の生徒にあった授業方法を選択できるよう常に学び続けたい。そうすることで生徒一人一人が「できた」「成長した」と感じることができ、生徒の自己肯定感を高めることのできる授業づくりを目指す。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「ICTと板書を活かしたユニバーサルデザイン授業」

受講生氏名：山本　七海

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

今日、学校現場における教育活動は、個別最適な学びを目指し、学習の個性化や指導の個別化が求められている。同様に、生徒の特性や志向も大きく変容してきているなか、特別な配慮を要する生徒への支援に合理的配慮の概念を基盤とした授業が注目を浴びている。特に学業面においては、一斉授業に困難が見受けられた場合に単に生徒個人の学習課題としてひとくくりにすることは早計であり、それぞれに適した指導方法を探究、開発していくことが重要である。

以上の背景から、本レポートでは、学習に対するあらゆる困難性に鑑みて、内容理解の観点と、複数人活動の優位性の観点から、一人も取りこぼさない授業づくりを目標に研究を実施した。

(2) 研究方法

【PPT スライド】新出単語の意味を確認するため、授業内で用いるスライドに、
⑴ イラスト⑵ 品詞⑶ アクセント⑷ 派生語を加え、⑸ 色分けの工夫を行う。

【GIGA 端末】ロイロノートを使用し、文法項目や日本語訳について埋めるワークシートを授業内課題として設けた。評価の対象であることを全体に告知し、意義を感じながら活動させた。デジタル教科書での学習は自己裁量として定める。

【板書】授業開始時に”Today’s goal”を明示し、３点から４点 CAN-DO リストを設定する。

【授業展開および学習形態】授業開始時必ず５分から８分程度の Warm-Up を導入として取り入れる。さらに、人前で発表することに緊張したり、恥ずかしがったりすることで十分な学習効果が期待できないという事態を打開すべく、ペアもしくはグループでの活動も設ける。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

生徒の語彙定着を図る際、PPTのアニメーション機能が有効であることを学んだ。ペアの形態で、ランダムに動く単語の意味を競いながら確認することができるので、生徒はゲーム感覚で単語を覚えたり、思い出したりすることが可能になる。また、CAN-DOリストをあらかじめ提示しておくことで、本時の取り組みが可視化され、進度のばらつきを防げていた。今後は指導言の改善を図り、めあてと手立てを意識した授業を展開していきたい。

(2) 演習校で学んだこと

「分掌は学年のため。学年は生徒のため。」という指針のもと、実際の校務分掌に携わらせていただいたことで、教職員の連携によって生徒一人ひとりの学びが保障されていることを学んだ。演習校は学習のつまずきを抱える生徒が少なくなかったが、粘り強く熱心に指導にあたる先生方の姿を拝見し、まさしく教育振興プランに述べられている通りの「生徒への信頼と期待」を垣間見ることができた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

私が「夢・未来」講座で学んだことは、「京都府の教育理念」と「教科教育の可能性」という２点である。京都府は、生徒が学校や地域・家庭から受ける信頼や期待、愛情を「包み込まれているという感覚」としている。そして、この感覚を礎に生徒の自己肯定感を育もうとするという教育目標がある。この教育目標のもとで、私のなかで特に印象に残った講座は、「第９回　京都府における人権教育」である。

本講座では、人権教育は、特別活動や総合的な探究の時間等だけで行われるべき教育でなく、各教科科目が独自の視点から取り組んでいくべき教育であるということを学んだ。人権意識の欠如は、ひいてはいじめやハラスメント、差別や教育・経済格差などを引き起こしかねず、教育に携わる者も常に人権感覚を改めていく努力が必要だと考える。

また、人権教育を含め、道徳教育や環境教育、防災教育などに関しても、教科独自の展開を図っていくことが重要である。例えば英語科であれば、黒人差別の歴史やサンゴの死滅問題、プラスチック製品と生態系の危機などが取り扱うことが可能である。こうしたテーマを教材に、生徒たちの考えを深化させ、社会をより発展させていける力を育んでいきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

私が教師力養成講座を通して身に付けた力や成長したことを２点に分けて述べる。

まず１点目は、教材研究に割く時間と労力についてである。生徒に身につけてほしい力から取り組みを逆算し、様々な言語材料と活動を取り入れたいという意欲から、当初は教材に何度も目を通し、ワークシートや授業スライドの充実に必要以上の時間を費やしていた。しかし、「『教科書を学ぶ』のではなく『教科書で学ぶ』」という言葉があるように、生徒の実態や定着度によって指導方法と内容は大きく変わることを知り、教材研究では、しっかりと基盤を固めてから発展を図るように工夫ができるようになった。

次に２点目は、生徒との関わり方である。これまでもボランティア等で生徒と関わる機会は多くあったものの、本講座で初めて教員として生徒と関わったことで、「声かけ」の大切さを実感することができた。廊下での挨拶を含め、授業開始前に教科書を出していることや、机間巡視の際に綺麗に板書を取れていることを褒め続けると、ときに明るい表情を見せてくれたり、悩みを打ち明けたりしてくれることがあった。今後も、生徒の些細な変化や努力にいち早く気づき、見守られている安心感を大切にして、指導にあたりたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

実際に生徒と関わる機会を得て、「生徒に寄り添う教師」になりたいという気持ちが強くなった。その理由は、様々な困難や課題、つまずきを抱える生徒との出会いに他ならない。演習校では、生徒の挑戦や成長は、学校という安心できる居場所でこそ期待できるものだと学んだ。これまで携わっていただいた教職員の方々の教育愛を受け継ぎ、未来を担う次世代の子どもたちを自己実現に導いていきたい。

(2) 今後の課題

演習を通し、依然として残った最大の課題は授業力である。生徒に身に付けさせたい力を想定してから授業を組み立てていくという工程は順当に踏めるようになったものの、活動を重視するあまり、一時間の学習内容が疎かになってしまったという場面があった。また、発問・説明・指示にメリハリをつけ、生徒の理解度に鑑みた授業を安定して展開できる力が重要だと感じた。課題を克服するため、今後も引き続き、実践指導の場に参加し、授業計画と指導言の向上に励んでいく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「主体的・対話的な授業づくり」

受講生氏名：竹畑　柊汰

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

高等学校では、令和４年度から新学習指導要領が導入され、「主体的・対話的で深い学び」の実現が目指されている。私自身、３回生で行った教育実習では、自分が受けてきた授業スタイル（教師が一方的に話をする授業）からの脱却を意識して、話の途中で生徒への問いかけを挟む授業を実践した。その結果、授業の中で生徒たちに主体的に考えさせる機会を作り出すことには成功したが、部分的なものに留まってしまい、対話的な授業とまではいかなかった。そこで、演習を通し、深い学びにつながる「主体的・対話的な授業」がどのようなものなのかを学び、実践していきたいと思い、このテーマを設定した。

(2)　研究方法

ア　授業展開や発問に注目し、様々な先生方の授業を見学する。

イ　気になった展開や発問については、どのような意図があるのか質問する。

ウ　実際に授業を行い､生徒の反応や参観してくださった先生方のアドバイスを基に研究し、改善に努める。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1)　演習テーマに関わる実践内容

ア　授業見学をして学んだこと

授業全体を通して、生徒たちの「考える」という活動が止まらず、継続されるようなものになっているということを学んだ。教師と生徒の一対一のやり取りが行われるような発問ばかりでは、他の生徒たちは聞いているだけになってしまう。そのため、適宜ペアワークやグループワーク、全体への問いかけなどで生徒同士の対話的な場面を設け、考えたことの共有を行っていた｡これによって､生徒全員が授業の始まりから終わりまで､｢考える｣ことを止めず、高い意識を持って主体的に学ぶことができていると考える。

イ　授業実践で学んだこと

授業実践を通して、本文の内容理解に終始した活動にならないようにする重要性を学んだ。本文の内容理解をさせることを意識し過ぎた結果、発問や対話的な場面を作りだすことはできたが、効果的だと感じられる場面が少なかった。また、発問に対して求めていたものとは別の解答が返って来た時に、強引に正解に誘導してしまった。このことから、生徒の実態に応じたレベルの発問や活動をすることで、「知識・技能」だけではなく、「思考力・判断力・表現力」も育まれると学んだ。また、発問の答えをすぐに教えるのではなく、生徒の疑問や間違いを掘り下げていくことで、新たな発見や深い学びに繋がっていくと考える。以上のことを今後の授業で実践していきたい。

(2)　演習校で学んだこと

演習の中で、授業や行事の際に、生徒たちが主体となって活発に取り組んでいるクラスの様子を見ていて、そのような良い雰囲気を作りだすには、教師による実態把握と生徒理解が重要であると改めて学んだ。実態把握や生徒理解をしっかりと行うことができれば、生徒に対して効果的な授業展開を考えることができ、生徒との信頼関係を築いていく大きなきっかけにもなると考える。

また、演習校では、生徒たちがグループごとにテーマを立て、長い期間をかけて研究し、発表する取組の一部を見学させていただいた。コロナ禍の限られた活動の中で、生徒たちが主体的に深い学びへ繋げていた。学校の特色を活かした取組を学ぶことができたので、今後の実践に活かしていきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、学校現場で問題となっていることや京都府の教育について、様々なお話を聞き、学ぶことができた。

特に印象に残っているのは、第４回講座の「高等学校における生徒理解とホームルーム経営」である。ホームルームは、生徒の「日常的な居場所」であり、繋がりを絶やさないことが大切であると学んだ。ホームルーム経営を上手くできれば、教員の生徒に対しての理解だけではなく、生徒同士の理解も深まり、全員が積極的に授業に参加しやすい雰囲気が作りだされると考えた。

また、全ての講座に共通することだが、お話してくださっている先生方から「学び続ける姿勢」を学んだ。変化が急速な世の中で、どれだけ立派な教員になっても日々、探求心を持って、新しいことを吸収しようとすることが自身の成長だけではなく、生徒たちの成長にも繋がると考えた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

「夢・未来」講座では、様々な講師の先生方からお話を聞いたり、なかなか関わることのない他校種の演習生たちと交流することで、これまで自分にはなかった考えや価値観に触れることができ、教員として生徒と関わったり、授業をするうえでの視野が広がった。

また、教育実践演習では、年度末と年度初めということもあり、授業以外にも校務分掌や卒業式、入学者説明会の準備などの活動も経験させていただいた。その中で、一つ一つの業務に多くの先生方が関わっており、しっかりと連携をとって行われていることや教員側にならないと見えてこない生徒への配慮が施され、「チーム学校」として動いていることを感じた。このことから、授業以外の仕事でも、生徒たちのより良い学校生活ために高い意識を持って取り組めるようになった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

今後の課題として、授業力が挙げられる。体験授業や研究授業では、指導案通りに進むことを意識し過ぎて、臨機応変な対応を取ることができなかった。教材研究の段階で、適切な見通しを立てて計画するだけではなく、計画通りにいかなかった時に冷静な見通しを立てて、生徒のためになる判断を下せる力も付けていく必要があると考える。

また、高校生の時にお世話になった先生方が、とても気にかけてくださり、度々、話しかけてくださることがあった。これによって、立場が変わった今でも「包み込まれている感覚」を感じながら演習期間を過ごすことができた。改めて振り返ると、高校生の時に自分自身で選んだ道が間違いではなかったと確信できる期間だった。私をここまで成長させてくださった先生方や京都府の教育に恩返しできるように一層、努力し、生徒とともに、成長し続ける教員になりたいと思う。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「主体的・対話的で深い学びを得られる言語活動」

受講生氏名：城元　裕生也

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

令和４年度より実施された高等学校における新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が推進されている。教員養成サポートセミナーにおいて、専門である国語科を見学させていただき、「何を学ぶか」だけでなく、「何ができるようになるか」という目的の授業展開の工夫を学んだ。そのことから、学ぶ意義を明確にし、授業の展開を工夫していく必要があると考えた。そこで、教育実践演習を通して、どのように国語科における言語活動で「主体的・対話的で深い学び」を得られるのかを学び、実践していきたいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業見学によって授業展開の意図を学ぶ

国語科の授業見学をさせていただき、先生方独自の授業展開の意図や、そのための工夫を学んだ。

イ　体験・研究授業において学んだことを実践する

授業見学で得た学びや、先生方からいただいたアドバイスを活用し、実践した。また、授業後にいただいた先生方の所見や、提出されたワークシートを基に、授業の反省と改善策を考えた。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

授業見学では、発問の仕方に注視していた。ある先生の授業では、１つ発問を考えるために、クラス全体を巻き込みながら様々な角度からの追発問を行い、最終的にはその発問に対する答えを導き出していた。このように、生徒が主体的に考えられる事象に置き換えて、多くの生徒に発問していくことで、普通に発問するよりも深く疑問に対する学びを得られ、クラス全体で対話できることを学んだ。

この学びを踏まえて、評論の授業を行う際には、「論とその例を指摘する」という課題に対し、個人で考えつつ、ペアワークで意見交流させ、クラス全体に向けて発言させる際は、その理由も追発問で答えさせるようにした。そうして、その課題が本教材を読み解くために必要であることを理解させ、授業における学ぶ意義を見出させるようにした。また、課題解決のためにヒントをワークシートに明記し、生徒が考察しやすい手立てを行うことで、生徒の主体的な学びを促すようにした。

(2) 演習校で学んだこと

演習校において年度初めから、ホームルーム経営は第２学年、授業実践は第１学年を担当させていただいた。第２学年は、年度初めであっても、生徒同士の交流が盛んであり、教師との関係もある程度築いているため、授業においてもスムーズに意見交流ができていた。一方、第１学年は入学したばかりであり、学校独自の学習の仕方や生徒同士の交流を推進していた。このことから、授業における主体性や対話は、生徒同士や教師との信頼関係に影響されるものであり、信頼関係の構築と学習の見通しを持たせることが主体的・対話的で深い学びの前提として必要であるということを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

この講座を通して、現職教員や京都府教育委員会の方々から、京都府独自の教育や、令和の日本型学校教育、児童・生徒理解といった現場における教育実践の理論について学んだ。その中でも特に私が印象に残ったのは、学習指導要領に対応した学習評価である。

学習指導要領の改訂において、生徒が学ぶ意義を見つけるために、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「何ができるようになるか」を前提に授業づくりを行うことによって社会に開かれた教育課程の実現を推進している。このことから、私はより良い授業づくりを行うためには、学びの目標から設定し、そこに至るための授業における展開を工夫し、その展開に生徒に興味・関心を持たせる導入を考えるというように、逆算的に行うことが効果的であると考えた。また、その指導を行うに際して、生徒の学習活動に見合った公正な評価を設定する必要がある。それは授業後に限らず、授業内の生徒の発言などに対しても、正誤に関係なく、自身の意見を表現したことに対して称賛することが、生徒の主体的な学びの意識を促すということも学んだ。このことから、生徒が自分の考えを表現することを恐れないクラスの雰囲気を常日頃から構築していく必要があると考えた。

以上の講座を通して得た学びは、私が教育実践を行うための基盤として活用していく。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

私はこの教師力養成講座を通して、授業を行う際の発声や板書づくりといった基本的な授業実践力を身に付けることができた。最初の体験授業では、それまで授業を行ったことがなかったため、ただ範読や板書を行うだけで、生徒目線で考えることができなかった。その反省や先生方からの助言を基に、生徒が聞きやすい早さでの範読、現代文と古文における文字の大きさや色の使い分けを工夫することができた。この経験は現在の教育実習においても、生徒やクラスのニーズに合わせて、臨機応変に授業を展開していくことに生かしている。

また、演習校はもちろん、京都府教育委員会の先生方や講座生との交流により、教員間でのコミュニティを大きく広げられたことは、私の教員としての資質・能力の向上において重要な経験であった。演習校の先生方には、教科指導における専門的なアドバイスをいただき、教務部などの校務分掌の事務をお手伝いさせていただいた際には、教員それぞれに業務についてご指導いただいた。また、夢・未来講座の後、個人的に先生方に質問させていただき、講座における自分の考察を確かめることができた。そして、他校種の講座生と意見交流したことで、生徒の発達段階による必要な手立てを知り、生徒理解の幅が大きく広がった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

演習校において、初めて授業実践をさせていただき、どんな授業も生徒目線で取り組むことが必要であると学んだ。この時に、生徒のために頑張りたいという気持ちが自分の中にあることを実感した。内容が理解できない生徒にはどんな手立てを行うべきかと考え続け、その研究は生徒の主体的な学びを促す教育実践に繋がると思う。今後も、生徒の思いを読み取り、それに応じた手立てを行えるように、授業及び生徒理解の研究を続けていく。

(2) 今後の課題

私の今後の課題は、授業において生徒の視点を持つことである。今回の演習では、生徒が発問意図を理解できる問いかけや、板書の見やすさ、ノートの取り方など、生徒目線に立って説明することが適切にできなかった。また、生徒の視点を知るには、学校生活において、生徒一人一人との信頼関係を築き、クラス全体が学習意欲を保てる雰囲気作りが必要であると学んだ。今後の教育実践において、生徒が分かりやすい授業の手立て、学びたいと思える環境作りを、生徒の実態把握に努めつつ研究していく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生きる力」を育む授業づくり

受講生氏名：山田　涼太郎

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

地歴公民科で取り扱う内容は、現代社会がこれまでに歩んできた道のりと抱えている課題をそれぞれの角度から学び考察する事ができる。私はこの教科の教員を目指すにあたって一問一答形式の詰め込み型の学びではなく、生徒の主体性を促し学習指導要領にも設定されている「基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、さまざまな問題に積極的に対応し、解決する力」を身につける事ができる授業をしたいと考えた。

また、地歴公民科目は多角的な思考や規範的な思考を養うことにとても向いていると考える。多角的な思考や規範的思考はこれからの社会を生きる力としても重要なため、私は演習テーマとして「生きる力」を育む授業づくりを設定した。

(2) 研究方法

地歴公民科の先生方の授業見学を行いどのような授業展開や方法があるのかを学んだ。また、それぞれの授業で配布されている授業プリントにも注目することでどのような狙いがあるのかを考え、授業後に先生方から色々なお話を聞かせていただいた。

「生きる力」をつけるためにはどのような授業を行えばいいかという質問も数人の先生にさせていただくことでより研究テーマを深められるよう心がけた。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

授業を行うまでに何人かの先生の全く同じ範囲の授業見学を行わせていただいたり、色々な科目の授業見学を行った。その他にも「生きる力」ということをテーマに考えた時に地歴公民科目で特に養える規範的思考力や多角的な思考力をつけるために、授業ではできるだけ生徒自身で考える時間を多く設けた。

また、発問が浅いと一問一答のようになってしまうのでできるだけ授業の中で一本の筋に沿うような発問を心がけた。

(2) 演習校で学んだこと

演習校の生徒は真面目な子が多く、ペアワークなどにも熱心に取り組んでくれるような生徒が大多数だった。しかし、生徒が自分自身で考える力を持ち自分の意見を人に伝える力を持っていても、授業する側が適切な発問や授業を展開しなければ生徒の成長や学習を妨げてしまうことを学んだ。

また、学級運営や学校行事の部分などでは授業以外の教師の仕事の大切さと多さを学ぶ事ができたと思う。学級運営では、日ごろからの生徒との人間関係の構築の難しさや重要さを学ぶ事ができた。コミュニケーション力も生きるうえでとても重要なことであるからこそ学級運営などでも生徒の「生きる力」を育むことができると学んだ。

三回の授業体験ではそれぞれ違う科目での授業を行わせていただいたことで、同じ教科であってもそれぞれの科目でアプローチが変化すること、できる事に差が出てくることも体験できたので、演習校で学んだことをこれからの教育実習などで反映していきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座を通して、京都府の教育やICT教育・教育問題など色々なことを学び、色々な校種の人と交流したことで自分の中の考えの幅が広がり深まったと感じた。

京都府が特に力を入れている人権教育の回では、自分自身が受けてきた京都府の人権教育と照らし合わせながら、自分がこれから人権教育を行なっていく側の立場になっていくということを改めて認識することで、言葉や行動により責任や誠意を持つ事ができた。この回では、人権教育は授業だけでなく日々の生活から行う必要があるということを学び普段から意識させる事の重要性を学んだ。

他にもいじめや特別支援・道徳教育や教育長のお話など、色々な角度から京都府の教育や現在の教育課題・教育意識について学ぶ事ができたと感じている。現場でも「夢・未来」講座で学んだことを土台として、より良い教師になれるよう色々なことに気を使いながら気張っていきたいと思う。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

私は教師力養成講座を通してたくさんの力を付けることができたと感じている。特に授業に関しては、授業づくりや教材研究、授業の実践力など演習に行くまでは50分の授業を一回も経験したことがないところからのスタートだったが初歩的な力を身につけ回数を重ねるごとに少しずつ成長することができたと感じている。教材研究などの授業準備の部分は演習校での先生方の様子を見ていると、常に時間に追われているような場面が多々あったので今回少しでも効率よく授業の範囲の要点を抑えることや中学まで同じ範囲をどう学んできているかを確認する事の重要性を学べたことで授業準備の力は授業実践の部分の中でも大きく成長できた事だと感じている。

また、学級経営の部分でも最初の方はSHRを行っても事務連絡や、プリント配布を行って終わってしまっていた。しかし、徐々に生徒に対しての声かけなども行うようにできたことが成長した部分だと感じている。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私は教師力養成講座で学んだことを活かし、生徒や周りとの対話と傾聴を怠らない教師を目指したい。また、教師として一番大切な指導力や確かな授業力を持った教師になるために常に色々なことを学び成長し続ける事のできる教師を目指したいと思う。

(2) 今後の課題

今後の課題はたくさんあるが、特に授業力の向上である。体験授業や研究授業で指摘されたのだが、授業内での発問をより明確にすることで生徒が今、何を考えなければいけない状況かを理解できるような授業づくりや、パワーポイントと板書をどのように使い分けるのか、例を提示するときに生徒のレベルにあった例を提示することができているのかなど色々な課題を解決して授業力の向上に努めたい。

また、指導案も最後まで納得のいくような指導案を作ることができなかったので授業を見ていない人でも、どんな授業が行われたかを想像できるような指導案を作れるよう努力したいと思う。

学級経営の部分では、自分から積極的に生徒に声かけを行うことで生徒にとって話しやすい状況を作ることも課題だと考える。

以上から、伴走者としての教師が求められている中で全て重要なことだと思うのでしっかりと改善し向上できるよう努めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「一人一人の長所を伸ばす支援方法」

受講生氏名：立川　紗良

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

生徒と関わる上で、生徒理解は重要であり、生徒を理解した上で支援やかかわりをしていくことが大事であると考える。その際に、その子の長所を伸ばせる働きかけをして、その生徒の長所をより伸ばすことのできる支援をしたいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

一人一人の生徒の良さやもっている力はどのようなものか、その生徒の得意なことを見つけることを意識して関わる。また、指導者がどのような支援をすることで生徒の良さを伸ばしているかに着目して観察し、支援方法の意図やどのようなところを意識されているかを考察したり直接お話を聞いたりしながら実際に、意図のある関わりを行う中で長所を伸ばす支援について考える。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は、高等部の企業就労を目指すコースの３年生を担当し「保健体育」でバスケットボールの授業を行った。女子に焦点をあてたルールを設定することやチームで話し合う場を設けた。その工夫により、チーム全体を見ることが得意な生徒や女子の生徒が輝く場面が増えた。保健体育の授業など得意不得意が分かれることが多い授業でも全員が楽しみ活躍できる設定をすることが大事になることを学んだ。

後期は、医療的ケアを行う生徒を含む重度重複障害のある生徒が在籍する高等部２年生を担当した。「生活単元学習」でルールを守ってゲームに参加したり数に親しんだりすることをねらいとして、お玉リレーに取り組んだ。その際に生徒自身がお玉を持てるようにお玉の持ち手を太くしたり底に滑り止めをつけたりする工夫をした。生徒の力でボールを運ぶことができる支援の工夫をすることが生徒の自信にもつながることを学んだ。またその生徒に合った支援をすることの大切さや身体介助の際に生徒が力を発揮できる支持部分や方法を理解しておくことの大切さも学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

演習を通して、生徒理解をすることの大事さを改めて実感した。そして、生徒の行動を意味付けすることの大切さも学んだ。生徒の少しの動きを指導者が意味付けすることにより「この先生は私の思っていることを分かってくれている」と感じ、信頼関係も生まれることを学んだ。そして生徒は目線の動きや手の動き、発声などのたくさんの表出をしていることを知り、その反応を見逃すことなく言語化することが大切になることを学んだ。また、一人一人の実態を理解し、課題を明らかにした上で、その子のできる力を伸ばすための個に応じた具体的な支援方法や支援のタイミング等を指導者間で共通理解することの重要性を学んだ。生徒に合わせた目標を設定し、目標に向けての支援の方法やどこを支援するかなどを指導者で統一することが大切になることを２つのクラスを通してより理解した。また、日常生活の指導では待つことの重要性も学んだ。生徒の表出を待ち、その生徒の意思を大事にすることにより思いが伝わり実現できた経験を重ね、それが自ら表現する意欲を高めることにつながると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「特別な教科　道徳」講座の中で、意見を言いやすい空間にするということが印象に残っている。黒板の前にずっと先生がいると話しづらい空間になってしまう。先生が生徒の横に立ち、生徒に問いかけ、話を聞くことにより発言しやすい空間になるということを学んだ。また、意見を言ってほしい生徒には先に声をかけることも大事になることも学んだ。先に言っておくことにより、その生徒も心の準備ができ、発表する生徒も見通しをもてると考える。

校種別の講座で学んだ、医療的ケアの必要な生徒と関わる上で、「待つ」ということが大事になるということを、演習を通してより実感した。重度重複障害のある生徒は、選択することや考えることに時間がかかることが多い。その際に生徒の反応が出るまで待つことにより、その生徒の気持ちを言語化できると考える。従って、生徒の反応をじっくり待つということも生徒と関わる上でも大切になると考える。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 何事も前向きにやってみるということ

以前までは自信のないことに対して、避けることが多かった。しかし、演習では、先生に「やってみる？」と聞かれたことは進んで挑戦することを心がけた。朝の会や終わりの会の指導、重度重複障害のある生徒の身体介助や給食介助をさせていただいた。実際に行ってみて初めてわかることや感じることもあり、挑戦したことで多くの学びが得られた。また、「夢・未来」講座では、初めての人と話をする機会が多く、グループワークの際積極的に話をしたり、挙手をしてみんなの前で発表したりすることも頑張った。そのような経験から、失敗を恐れずに挑戦する意識が高まったと考える。また、やってみることから学ぶことも多く、挑戦してみるという選択をできたことは成長につながったと思う。

(2) 学び続けるということ

生徒に関わる情報の中で、これまで知らなかった障害名や病名を知り、生徒のことを理解するために障害や病気のことについて学ぶ機会をもつことができた。また、生徒の関わりや支援方法に正解はなく、いろいろな方法を試行錯誤する中で最適な方法を見つけていくことを学んだ。一人一人の生徒のことを理解し、指導支援する中で学び続けていく必要性を実感することができた。「夢・未来」講座では、知らなかったこともたくさんあり、学ぶことばかりだった。今後はICTの効率的な活用方法なども学び、知識を増やしていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、生徒や先生方と関わり、より一層、京都府の教員になりたい気持ちが高まった。実際に生徒と関わる中で、生徒を理解して、その生徒の力を出せるような支援方法を考えて実践していきたいと考えるようになった。また、指導者がチームとして生徒の情報を共有し支援方法を考えるためにたくさん話し合うことで、一人一人の良さを伸ばすことができると学んだので、多くの先生とコミュニケーションをとりチームとして一緒に指導できるような教員を目指したい。

(2) 今後の課題

授業の中で生徒のことをよく見て、具体的にほめることが課題である。ほめる言葉のレパートリーが少なかったため、どのように言うと伝わりやすいかを考える場面がたくさんあった。生徒が「先生は見てくれている」と感じ、意欲を高められる褒め方ができるようになりたいと考える。また、答えやすい質問や言葉かけをすることも意識したい。生徒にとって分かりやすい言葉を選んで説明したり答えやすい言葉を選んで提示したりすることで、生徒が学習内容を理解し主体的に学習を進めることができるようにしたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「集団の中で個性を発揮しつつ、人と協力して生きる力を育む支援」

受講生氏名：廣田　湖都

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

時代の流れに沿って教育の形が変化する中、文化の違いや障害による特性などから、集団の中でみんなが同じ授業を受けるという教育の形では、十分な教育を受けられない子どもたちが増加してきている。このことから、子どもたちひとりひとりのニーズに合わせてありのままの姿や個性を伸ばし、そこから集団生活につなげる力を育む教育が必要であり、そのためには、具体的にどのようにしていくべきなのかを考えるため、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　先生方の子どもたちへの接し方や、意識されていることから見える子どもたちの様子を観察し、工夫されていることについて学ぶ。

イ　「体験授業」「研究授業」を通して、教材研究を深め、指導教員の方や担任の先生に授業実践に対するアドバイスをいただき、よりよい授業づくりについて探求する。

ウ　子どもたちと積極的に関わり、障害による特性や強みを探りながら、それぞれの実態に合わせた授業を計画・実行し、個性を発揮できる授業づくりについて考える。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は、中学部２年生３名を対象に、「バンドを組もう」という単元の授業を行った。バンドを通して音楽の楽しさに触れるだけではなく、楽器や曲をきめる過程で、自分の意見を発言することや協力することなどを目標として取り組んだ。

後期は、中学部２年生６名を対象に、「マスクケースを作ろう」という単元の授業を行った。様々な道具を使って正確に作成すること、好きなものを選んで装飾すること、考えを文字に現すことを目標にして取り組んだ。

(2) 演習校で学んだこと

授業実践をする中で、指導者の準備次第で生徒が見せる姿が大きく変わり、その生徒の姿から授業改善をすることで指導者も大きく成長でき、またそれを指導に活かすことで生徒の成長にもつながると感じた。教育は、生徒と指導者との間でやり取りをすることで成り立つものであり、指導者が一方的になれば成立しないことに改めて気づくことができた。

また、授業を準備する中で、担任の先生方がたくさん助けてくださった。その中で、担任の先生方との関係を築くことができ、それが授業内での連携につながることが分かった。些細なことでも共有し合い、日々コミュニケーションをとること、お互いを信頼し頼ることがよりよい連携につながっていくと感じた。

この他に、学びに対する意欲的な姿を引き出すためには、日々の学級経営や環境が大きくかかわってくることも学んだ。楽しむ時は生徒と一緒に楽しみ、指導する時は中途半端にせずきちんと指導する、時には生徒の様子やペースを確認し生徒を尊重して関わっていく。このような指導者と生徒の関係から学級経営が成り立ち、よりよい授業づくりにつながるのだと感じた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座を通して学んだことは、京都府の教員に求められる資質・能力や、京都府が掲げる教育観についてである。京都府の教員を目指すうえで、京都府がどのような教育を目指しどのような教員を求めているのかについて詳しく学ぶことができた。

「夢・未来」講座を通して印象に残っているのは、第10回目の「学習指導要領に対応した学習評価」という講義である。評価に対して、記録に残すものであるというイメージが強かったが、この講義を通して、評価というものは指導と一体化して存在するもので、評価から指導に活かしたり、評価するための指導を用意したりすることであると学ぶことができた。また、ゴールにある子どもの姿を明確にし、そこからそのゴールのための目的を見つけていくことが、評価のための指導につながるということも学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業実践力

教師力養成講座の演習を通して、「体験授業」「研究授業」をさせていただく中で、生徒がより分かりやすいような情報の精選、よりよい授業の仕方を身に着けることができたと感じる。

情報量が増えることによる生徒への負担や、話し方伝え方発問の仕方による生徒の姿の違いを実践から学ぶことができた。説明は端的に伝えることをあらかじめまとめておくことで生徒の理解を促しやすく、授業の目的を明確に持つことでぶれない授業ができることを学んだ。

(2) 児童生徒理解

児童生徒を理解しようとする際に、より共感的に理解しようとする態度をもつことができるようになったと感じる。

障害による特性から、気になる行動や理解することが難しいことがあると、「やめさせるためには」「変えるためには」と考えがちであったが、そうでなく、その行動に対して共感的に理解しようとし、「なぜそうするのか」「どのようなときにそうなるのか」などのように生徒を理解していく必要があることを学んだ。生徒と関係を築く際にも、生徒のことをできるだけ尊重し、時には待つことも必要であると学んだ。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教師という職により魅力を感じ、早く教師になって生徒と共に過ごしたいという気持ちがより強くなった。演習を通してたくさん指導してくださった指導教員の方や、担任の先生方、また、一緒に過ごした生徒たちのためにも、教員になってたくさんの経験を積み、集団の中で個性を発揮しつつ人と協力できる授業づくりをしたいと考える。

(2) 今後の課題

障害のある生徒と関わる中で、指導者の準備や引き出し次第で、生徒から引き出せる姿も変わってくると強く感じたため、今後もボランティアを通してたくさんの子どもたちと関わり経験や引き出しを増やしていきたい。

また、教師力養成講座を通して関わってくださった教員の方との縁を大切にしながら、実践に対するアドバイスなどをもらうなどして力を高めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童生徒一人一人が主体的に取り組むことができる授業づくりと支援のあり方」

受講生氏名：岡田　紗香

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1)　演習テーマ設定の理由

様々な実態の子ども達がいる中で、教員は全体に対して授業をしなければならない。これまでの学校ボランティアでは、児童の個性や強みを活かしながら授業が展開され、一人一人が主体的に取り組む姿を見てきた。主体的に取り組むことができる授業づくりと支援の大切さを改めて感じた一方で､実際に中心指導者として授業を経験したことがないため、その難しさについて身をもって学ぶことができなかった。そのため、この教育実践演習では、一人一人が主体的に取り組むことができる授業づくりをどのように作っているのかについて実践しながら研究したいと考えた。また、長期間の関わりを経験する中で、児童の実態を把握しながら、それに応じた教員の対応や支援のあり方を学びたいと思い、このテーマを設定した。

(2)　研究方法

ア　子ども達と積極的に関わり、実態について考察する

イ　授業参観において、先生方の授業内における工夫を学ぶ

ウ　児童の主体性を引き出すことができる授業の実施

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1)　演習テーマに関わる実践内容

前期は小学部２年生、後期は小学部６年生の学級で演習を行った。様々な特性や個性をもった児童に対して、担任の先生方がどのように関わられているか、授業ではどのようなことを大切にしながら進められているかを観察した。そして､「この児童はどのようなことが得意であるか」「どのような支援が必要であるか」など、自分なりの視点を持って授業を観察した。体験授業、研究授業では、子ども達の力や個性に合わせながら、選択をしやすいように選択肢カードや、意志を表示しやすいような振り返りシートを作成し、クラス内の児童全員が主体的に取り組めるような工夫をして授業実践を行った。

(2)　演習校で学んだこと

演習全体を通して、学んだこと、感じたことは２つある。

１つ目は､教員はパフォーマーであるということだ｡より良い授業を考えて指導したり、視覚支援を行ったりすることはもちろん重要であるが、それだけでなく、子ども達の注目を集めて提示し、興味をもって活動への意欲が高まるように進めることが中心指導者には求められる。先生方はそのための方法をそれぞれで持っておられ、授業を参観する中で、学んだテクニックを自分の実践に活かしていくことができた。

２つ目は、子ども達の成長の姿が、教員という職業の魅力であるということだ。授業を進めていく中で、一つ一つの活動、一つ一つの場面において、子ども達は多くを学び、たくさんのことを感じていると実感した。

学級全体や児童一人一人の実態を細かく把握し、子ども達の「できた」を引き出す授業づくりが重要であると学んだ。授業づくりの難しさを感じると共に、他の先生方と話し合うことで多くを得られるということや、児童の生き生きした表情を見た時の嬉しさ、喜びを実感することができた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、現職の先生方や管理職の先生、教育委員会や文部科学省での勤務経験がある講師の先生方といった、様々な立場の方からお話を伺った。現場の状況だけでなく、子ども達が今直面している課題や、京都府で教員になる上で、求められている資質・能力、これから培っていかなければならない能力など、幅広い学びを得ることができた。

その中でも一番印象に残っているのは、「特別の教科　道徳」の講義である。児童生徒の数が限られた教室内では、日々過ごしている生活が道徳教育にあたるのではないかと感じた。演習の中でも、相手の気持ちを読み取ることが苦手な子どもが、クラスの友達に対しては、自分の気持ちにどこかで折り合いをつけて一緒に過ごしている姿が見られた。また、子どもたち自身で考え、失敗をしながら学ぶ場面も見られ、日常生活の中で道徳を学び、日々成長し続けているのだと改めて実感した。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1)　教員としての自覚や責任感

長期間の演習を通して、子ども達と直接関わる中で、教員になる自覚と責任をこれまで以上に感じることができた。学生であっても「先生」と呼ばれる以上、行動や発言に注意を払いながら接する意識をもつことができた。また、授業についても、たくさんの先生方とお話しさせて頂き、自分なりの指導方法を見つけるために試行錯誤を重ねた。授業を模索する中で、より具体的に、より児童のことを考えながら授業づくりを進めていくことができた。常に子ども達のことを考えている時間が、教員という仕事の魅力であると感じ、教員になるという自覚や責任感を持つことができた。

(2)　観察力や気づく力

演習日は、できるだけ児童の変化や成長に気づけるよう、児童の様子を細かく観察することを心がけた。活動に取り組む姿や友達関係にも目を向け、頑張った姿だけでなく失敗してしまった姿があっても、積極的に言葉を掛け、褒めることを意識した。多くの言葉をかけていくことで、児童は「見てくれている」という気持ちをもち、その後児童から関わりを求めてくるなど、信頼関係を結ぶきっかけにもなった。また授業参観では、たくさんの指導方法の工夫に気づくことができるようになった。演習前期では気づかなかった視覚支援の提示の仕方やテクニックなど、後期には多くの工夫に気づくことができるようになった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1)　教職に向けた決意

教師力養成講座の演習を通して、教員の多忙さや責任を実感した。しかし、先生方一人一人が、子どものことを第一に考え指導されている姿や、授業での子ども達の成長など多くの面で感動し、教員という仕事の魅力をより一層感じることができた。今後も、子どものことを一番に考え、常に児童と共に成長し続ける教員になりたいと強く思う。

(2)　今後の課題

多くの課題がある中で、特に授業準備に力を注ぎたいと考える。授業を考え、どれだけ一人一人に合わせた手立てを悩んだとしても、具体的な授業の進め方や話し方、使う言葉などを厳選しておくことの必要性を強く感じた。また、子どもの発言や考えを予測し、言動に対してどのように対応するかも具体的に想定できるようになりたい。そのためには、計画的に授業を考えるだけでなく、先生方と話し合うことで子どもの姿を多面的に捉えながら、より具体的な手立てを考えて授業づくりをしていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「個々の個性を生かした「生きる力」を育む授業づくり」

受講生氏名：平井　泉

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

新学習指導要領では「生きる力」を育むことが求められている。「生きる力」とは、学校で学んだことや身に付けた力が学校生活のみに留まらず、社会で生きていくときにも役立つ力だと考える。障害の有無に関わらず、全ての子どもに個性やできることがあり、それを活かした「生きる力」を育む授業をしたいと考えた。また、子どもたちが「自分にもできることがある」という自信を持つことができれば、自己肯定感を高めることにもつながると考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

まず、児童の長所やできることは何か、という視点を持ち、それぞれにどのような個性があるかを考えながら児童生徒理解に努める。また、先生方に児童の実態や、課題を設定した理由、それぞれの授業を通して目指す姿について質問する。以上を通して個性を生かす手立てにはどのようなものがあるかについて知り、自己の実践の中で生かしていく。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前半は小学部４年生の学級で、「遊びの指導」の体験授業及び研究授業を行った。授業では、数の理解を深めつつ、学級全員で遊ぶことを目指し、双六を行った。友達と活動する意識がもちにくい児童が好きな「数」を題材にすることで、全員で一緒に活動し子ども同士がやり取りをする場面を作ることができた。ルールを説明するときには実演があれば指示を理解できるという実態に応じ、良い例と悪い例の見本を示した。そうすることで児童が理解し自ら活動に向かうことができ、褒められる場面も増え、自信をもつことにも繋がった。

後半は小学部２・３年生の重度重複障害のある児童が在籍する学級で、「遊びの指導」の体験授業を行い、「ぬたくり」で制作活動に取り組んだ。絵の具の感触を楽しむことができる実態から自由に手で絵の具を触ったり、画用紙に着色したりしながら「母の日のプレゼント」を作った。持っている力を存分に生かして活動する経験を重ねることができた。

(2) 演習校で学んだこと

学んだことは２点ある。１点目は、学校で行う全ての活動一つ一つが「生きる力」を育むことに繋がっていることだ。例えば、着替えや食事、トイレ、字を読むこと、ルールを守ること、あいさつ、自分の気持ちを伝えることや人と関わることなどだ。また、見通しを持てば落ち着いて活動できる子どもに対して、初めての人と出会う前には顔写真を提示しておくといったように、子どもが得意なことや個性を生かせるように、個々に応じた手立てを考えて支援を行うことで、「生きる力」につなげていけるということを学んだ。

２点目は言葉掛けの大切さだ。子どもたちの障害の程度によって、言葉掛けに対する反応は様々だ。しかし、どの子どもたちも教員が自分にどのような言葉掛けをしているのかをよく見ていた。そのため、言葉掛けは行動を正確に意味づけた上で、その子どもに分かる言葉を使って丁寧に伝えていくことが大切であり、またその積み重ねが信頼関係を築くことに繋がっていることも学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

学んだことは２点ある。１点目は、京都府が目指す教育の在り方について学んだ。今まで、「包み込まれているという感覚」を養うことを重視してきたが、それを基盤に「新しい価値を生み出す」人間像を目指すことを理解することができた。講座のテーマは「人権教育」や「学習評価」、「特別支援教育」など様々であったが、どのテーマを学ぶときも、京都府の教育理念と結び付けて考えることができた。

２点目は、人とつながることの大切さを学んだ。開講式での「出会いを大切にしてください。」という言葉が印象に残っている。そのため、演習で出会う先生方や子どもたち、また講座でディスカッションをした受講生と関わる際にもこのことを心に留めながら活動した。これにより、学びを充実させることができ、京都府の教員に求められる「つながる力」を養うことができたと考える。今後は「つながる力」を基盤に他の４つの力も伸ばしていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1)　「夢・未来」講座での学びと演習での実践の一体化

「夢・未来」講座では学んだことを知識として蓄えられた。また、講座の内容と演習で経験したことと照らし合わせ、具体的なイメージを持ち、学びと実践を一体化させる力が身についた。講座を聞くだけで終わるのではなく、演習に生かすこと、また演習で経験したことに意味付けすることで、学びを深めることができた。

(2)　一人ひとりに適した関わりをすること

積極的に子どもと関わって関係を深め、適した言葉掛けや支援を模索し、実践に移すことができた。演習では初めてのことが多く、児童の対応に困る場面も多くあった。また教材研究において、どうすればより実態に即した授業ができるか悩むこともあった。また、全員に当てはまる支援方法はなく、必要な支援は一人ひとり異なる。支援を考える上で、先生方の言葉掛けの仕方を分析したり、アドバイスを頂いたりしたことを基に試行錯誤しながら実践に生かしていくことができた。児童生徒の行動を見取り、意味付けしながら適した関わりや支援を考えていく必要性を改めて感じることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1)　教職に向けた決意

教員間の連携を密にして、チームティーチングを生かした授業ができる教員になりたい。チームとして複数の教員で児童生徒を指導しているからこそ、授業づくりが豊かになり、個性を生かした授業づくりを行えると考える。そのために心掛けたいことは２点ある。１点目は、自分一人の考えだけではなく、いろいろな先生の意見を取り入れて考えることだ。２点目は、授業では連携を密にしてスムーズに授業を進められるよう、事前の打ち合わせを十分にしたり、子どもの姿に応じて臨機応変に対応したりできるようになりたい。そして、これらを通して、児童生徒の個々の個性を引き出せる教員になりたいと考える。

(2)　今後の課題

授業の準備を万全にして臨むことだ。そのために実践したいことは２点ある、１点目は、授業のイメージを膨らませ、あらゆる場面を想像し、必要なものを揃えることだ。２点目は、他の先生方と相談して準備に不備がないか確認することを行いたい。これらを心掛けて事前準備を充実させていれば、授業が滞りなく進められるだけでなく、児童生徒一人ひとりと丁寧にやり取りをすることや、反応や言動に注目する余裕ができる。また、次回の授業に向けて改善点を考えることにもつながると考える。これらの２点を心掛けて授業を行い、子どもたちのできることを増やせるように努力したい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「子どもの主体性を引き出す工夫」

受講生氏名：辻村　日和

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私がこの演習テーマを設定した理由は、児童生徒が「楽しい」「もっとしたい」と主体的に活動に取り組める授業を行いたいと考えたからである。児童生徒ひとりひとり興味・関心や感じ方も異なるが、どのような工夫を行えば様々な活動に挑戦しようとする児童生徒の主体性を引き出せるのか学びたいため、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　先生方が授業の際に、児童生徒とどのような関わり方をしているのか見て学ぶ。

イ　日常生活の関わりをとおして児童生徒のできること、分かり方、興味・関心のある事柄などを把握し、児童生徒理解を深めると共に、先生方にも尋ねてさらに理解を深める。

ウ　授業実践後に振り返りを行い、先生方からアドバイスをいただいて次の授業実践までに、指導方法、教材等の準備物、個々の支援の工夫などを考える。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容及び学んだこと

前期は、中学部２学年の生活単元学習の授業を行った。この授業は、コロナ禍で他学年との交流学習の機会が少なかった生徒達が「卒業生を送る会」という行事に向けて、３年生を意識して、３年生のために様々な活動に取り組むことを目標とする授業だった。発表場面で必要な装飾品の制作では、「何を作れば３年生が喜んでくれるのか」生徒とやり取りをしたうえで決定し、「ミッション」形式で制作時に必要な材料を集める活動を行った。「ミッション」では生徒の興味・関心が高く、これまでの授業で経験したことのあるICTを用いることで活動への意欲を高め、生徒が自分から活動に取り組む姿を引き出すことができた。活動順は、イラストと顔写真を用いた視覚支援を準備することで、何をどの順番でするのか分かって、主体的に活動に取り組むことができていた。授業を繰り返す度に、主体性を引き出すには、適切な視覚支援を準備することが大切だと気付いた。

後期は、小学部の肢体不自由児クラスの遊びの指導で「おはなしあそび」の授業を行った。繰り返しのセリフがあり次の展開に期待感を持ちやすい絵本を選び、児童個々とやりとりができる授業を行った。絵本の読み聞かせでは、興味を持ちやすいように抑揚をつけて読み、やりとりの場面では具体物を用いた。児童自身が身体に意識を向けられるように、身体を動かすやりとり遊びをとおして、児童の身体の状態を把握したうえで、できる動きを見つけ授業に取り入れていくことの大切さを学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

演習をとおして児童生徒の「わかり方を理解すること」「できること、苦手なことを丁寧に把握すること」の必要性を学んだ。子どもひとりひとりの実態を教員が把握していないと、子どもが力を発揮しにくい授業となってしまう。しかし児童生徒ひとりひとりの実態把握を丁寧にしておくと、学習場面で子どもが「わかる、できる活動」を準備しておくことができ、「できた」活動を積み重ねることで期待感を高めて安心して授業に参加でき、それが主体性を引き出し、積極的に活動に向かう姿勢を引き出すことができると気付いた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では児童生徒理解の必要性、教育現場で必要な知識、児童生徒との関わり方を学んだ。

第４回の教育実践講座Ｉの「特別支援学校における児童生徒理解」の講義が特に印象的であり、特別支援学校の教員になるにあたって意識していきたい内容を学ぶことができた。講義では児童生徒を理解するのは「気付き」から始まるということを学んだ。児童生徒の学習場面や行動を観察し、課題に「気付く」ことが児童生徒の支援方法や目標を立てることに繋がる。今後も教育現場で児童生徒と関わる際には、児童生徒の日々の姿をたくさん関わりながらよく見て、知ることで児童生徒理解が深まるように努めていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童生徒との関わり方・対応力

児童生徒は障害の特性や状態、わかり方等ひとりひとり異なっている。そのため関わり方や対応方法もひとりひとり異なっている。同じ授業、活動に取り組むにあたっても、個に合わせた準備物や視覚支援などの工夫を行い、児童生徒の「できること」を把握したうえで授業実践をすることの大切さを学んだ。演習中に子どもそれぞれのわかり方に気付くためには、日常的に児童生徒とコミュニケーションをとることが大切だった。ひとりひとりにあった言葉を選んで、言葉掛けをすることで、やりとりが成り立つと実感することができた。

(2) 教材研究の大切さ

授業実践をするにあたって、児童生徒がどのような工夫を用いると楽しく取り組めるのか、主体性を引き出すことができるのか、どのような教材を使用することでねらいを達成できるのかなどたくさん悩んだ。インターネットで情報を集めたり、実際にお店に行き授業で使えそうなものはないか探してみたり、授業で取り組む前に自分で実際に制作してみるなど、授業を実践するにあたっての教材研究の大切さと大変さを学ぶことができた。例えば制作活動において、この子は道具の操作に難しさがあるため事前に必要な支援、工夫を準備しておく、この子には見通しが持てるツールを作成しておく等、活動の展開場面ひとつひとつで児童生徒の姿を想定しながら様々な教材を準備した。授業実践の際、このような教材研究が役に立ち、児童生徒も活発に授業に取り組むことができたので、教材研究の重要性を実感することができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座をとおして、児童生徒と関わることの楽しさをより感じることができ、教員になりたいという気持ちが強くなった。児童生徒から学ぶことが非常に多くあり、実際に教員になった際も学び続けることの大切さを意識していきたい。児童生徒と共に、日々学び続け成長できる教員になりたい。

(2) 今後の課題

今後の課題として、児童生徒ひとりひとりに適したねらいや目標を立てられるように、児童生徒の「できること、難しいこと」を明確に分かるように関わっていきたい。また児童生徒のできることが広がるような教材を考えることが今の私の課題であると考える。そのため、たくさんの先生方の授業を見学し、自分の中の引き出しを増やしていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童生徒理解を基盤とした授業づくり」

受講生氏名：岡本　眞里奈

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

授業づくりにおいては、児童生徒理解が基盤になると考える。様々な特性を持つ児童生徒をどのようにして理解して、どのように指導目標をたて、どのような学習内容を考え、どうやって評価するのか、教育現場での演習をとおして学びたい。様々な場面で実際に関わりながら児童生徒理解を深め、個に合わせたコミュニケーション方法や適切な支援のあり方を身に付けたいと考え、この演習テーマを選んだ。

(2) 研究方法

ア　先生方と児童生徒のコミュニケーション場面を観察する。

イ　実際に児童生徒に関わる。

ウ　先生方から児童生徒の情報を聞く。

エ　連絡帳から児童生徒の家庭での様子を知る。

オ　個別の指導計画や教育支援計画、発達検査記録等から児童生徒の基本的な情報を把握する。

カ　研究授業を行い、個に合わせた支援や手立てについて考える。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は、小学部高学年の学級で日常生活の指導や遊びの指導の体験授業や研究授業を行った。日常生活の指導は、毎朝実施する「からだづくり」の中心指導を行った。活動に取り組む中で、児童の様子を見て、少し難しい内容を取り入れたり、児童によってお手本の示し方を変えたりする等の工夫を行った。遊びの指導では「鬼ごっこ」に取り組んだ。説明場面では視覚支援を用いて短く簡潔に伝えることや、自分自身が本気で鬼から逃げたりかくれたりして児童達の気持ちを高めたり、個々のねらいに沿った言葉掛けを意識して実践した。

後期は、中学部３年生の学級で特別活動の体験授業を行った。その授業では、「教えて！みんなのこと」というテーマで、生徒や教師についての情報を生徒から教えてもらう活動を行った。学習活動はクイズ、写真を集めるミッション、集めた写真から該当者を当てるクイズ、という流れで実施した。生徒達個々に異なる、聞いて理解する力、読んで理解する力に合わせて、漢字、仮名、イラスト、写真を用いた教材を準備した。

(2) 演習校で学んだこと

演習をとおして、児童生徒の行動の背景を知る必要があることを学んだ。授業中に走って教室を出たり、最後まで活動に向かえなかったり、突然友だちに手がでる等の場面で、今まで私は「なんでこんなことをするのか」と困った気持ちになっていた。しかし、本当に困っているのは児童生徒だということに気づいた。このような行動の背景には、「何をするのか分からない」「自分にはできない」といった活動に対する不安な気持ちや、特性等々様々な要因があると学んだ。児童生徒が安心して学校生活を送り、学習活動で力を発揮できるようにするために、児童生徒の興味関心、得意なこと、苦手なこと、支援があればできること等々を丁寧に知っていく「実態把握」がとても大切であり、実態把握が適切にできていれば、児童生徒に合った支援・手立て、授業づくりが実現することを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

教師の心構えとして大切にしたいことを二つ学んだ。

一つ目は、「気づく力」だ。これは、京都府が大切にしている５つの力の内の１つである。この「気づく力」があるからこそ、児童生徒の可能性を「伸ばす力」に繋がっていると学んだ。児童生徒の些細な変化に気づくためにも、児童生徒と日々関わり、児童生徒理解に努めたい。

二つ目は、一人一人の違いを認めることだ。それは、能力や性格、見た目、夢、目標等、すべてに当てはまると考える。私は特に、「ずっと同じ道でなくてもいい。先を見据えて色んな選択をして大丈夫。」という言葉が印象に残っている。周りと同じでないことが、恥ずかしいことではないと希望をくれた言葉だった。自分のやりたいことや、夢を応援して背中を押してあげられる教師でありたいと思った。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座で身に付けた力は、児童生徒に分かりやすく伝える力だ。例えば、児童生徒が席から離れたときに、言葉だけで促すのではなく、座る席を視覚的に示すことで、伝わりやすくなることに気づいた。また児童生徒に質問する際に「どうだった？」等、抽象的に聞くのではなく、選択肢を提示したり、具体物や写真を用いたりして、児童生徒が「今何を聞かれて」「何を答えるのか」分かるように質問する力を身に付けた。このように教師力養成講座をとおして、児童生徒理解が深まり、伝え方が変わった。

次に、授業を行ったことで成長した点は、授業中の児童生徒とのやりとりだ。研究授業では、質問に対して積極的に発言する児童とばかりやりとりを広げた。自ら発言することが難しい児童の中には問いかけると発言できる児童もいたが、特定の児童とのやりとりから全体に広げるには至らなかった。そこで次に行った体験授業では、全員とやりとりをすることを意識した。すると全員とやり取りができ、児童生徒が発言する機会を均等に作ることができた。これからも授業の中で、児童生徒ひとりひとりとコミュニケーションをとることを大切にしていきたい。

また教材づくりの大切な視点も学び、自分の成長に繋がった。その視点は２つある。１つ目は、児童生徒の経験が広がりことばの育ちにもつながるような魅力的な物を教材として準備することの大切さだ。２つ目は、児童生徒個々の力に合わせた教材を準備することの大切さだ。教材を児童生徒が実際に使う場面を想定し、使用してみて改善を重ねる等の教材研究も大切だと分かった。これらの視点を大事にして今後も教材づくりに臨みたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1)　教職に向けた決意

私は、児童生徒の可能性を引き出すことができる教師になりたい。児童生徒の持つ力は教師の指導の工夫によってより発揮され伸ばせることを、教師力養成講座をとおして学ぶことができた。実践したいことが２つある。1つ目は、児童生徒の良いところを活かして「できる」経験を増やすことだ。児童生徒の「できる」を見つけるためには、実態把握が必要である。日々の児童生徒との関わりを大切にしていきたい。２つ目は、児童生徒の頑張った部分や頑張ろうとしている姿を認めて褒めることだ。「自己肯定感」を育みながら、児童生徒の可能性を引き出すことができる教師になりたい。

(2)　今後の課題

私の今後の課題は、「段取りの力」を上げることだ。今回は授業づくりだけに集中して準備を行うことができたが、教師になると、授業づくりだけではなく様々な業務を平行してすすめなければならない。優先順位を考えながら仕事に取り組めるようになりたい。

第 16 期「夢・未来」講座各回の感想

本資料は、「夢・未来」講座ごとに、学んだ点や感想等を受講者に求め、毎回 10 名前後をとりまとめ、受講者に配付したものです。目的は、記載された受講の視点や講座の振り返りを演習校での教育実践演習に生かすことです。

第１回〔２月１日（水）〕開講式

講座内容：①主催者挨拶・説示　　②講演「先輩修了生からのエール」

○　今回の開講式で学んだなかで、以下の二つの視点から実践演習に取り組み、教員としての実践に生かしていきたい。

まず一つ目は、積極的な行動をすることである。木上教育次長や谷井先生、谷アドバイザーの話を聞いて、自分から学ぶ姿勢の重要性が大切だと気付かされた。先生方が仰っていたように、年度末と新学期を継続的に見ることができたり、各分野のエキスパートの方々の講演を受ける事ができたりするこの貴重な機会に、積極的に参加することでより深い学びを実現したいと考えている。

そして二つ目は、周囲の学生とのつながりを大切にするということである。私は、演習校のメンバーに知り合いがいないこともあり、今回の出会いを大切に学生同士協力して学んでいきたいと考えている。また、夢・未来講座では毎回の講義後には個人的なまとめとポートフォリオを行い、学んだことをどう教育現場で実践されているのかという視点をもって学び、実践演習での学びにつなげたい。

以上の二つの視点から、今後の教師力養成講座に取り組んでいく。谷井先生のような、児童一人一人に寄り添い信頼関係を構築できる教員になるために、積極的に、周囲と協力して学び、しんどい時に頼れるような仲間との人間関係を築きながら学んでいきたいと考える。

○　今回の講座では、教員としての実践に活かす意識で演習に取り組むことを学んだ。そのためには、「先生」としての自覚を持ち、児童へ真摯に対応するようにしたい。教師力養成講座では、積極的に学ぶ姿勢と、教職員や他の実習生とつながる意識を持って取り組んでいきたい。

積極的に学ぶ意識として、夢・未来講座は「受ける」姿勢ではなく、「考える」姿勢で取り組む。講義には必ず意見や質問を持ち、実際の場面を自分の視点から想像し考えるようにする。質問することでより深い講師の考えを学ぶだけでなく、自分の考えを持つことで実践する機会を得やすくなる。学びを実践につなぎ、演習に活かしたい。また演習では、自ら関わる中で児童のことを知り、児童との信頼関係を築けるよう努力する。休み時間や机間指導の中で、児童個人、または児童集団と積極的に関わり、それぞれの児童の良いところや努力、成長に注目し、児童の見立てをもつ。それを活かして授業実践できるようにする。

教職員や他の演習生とつながる意識として、報告・連絡・相談を大切にする。特に個人指導や授業の実践の後は必ず行う。報告や連絡は自身の信頼に関わるとともに、演習生同士では学びの共有につながる。複数人で演習に臨む教師力養成講座の特徴を活かし、学びや考えを深めていきたい。また相談は、自身の行動や態度を振り返り改善することにつなげるとともに、自分にはなかった考えを得る。先生方や第三者の意見をもらう機会を積極的に持ちたい。どんなことにも一生懸命に取り組み、教員を目指すものとしてより学びのある演習としていきたい。

○　教師にとって必要不可欠である「信頼の獲得」に生かしていきたい。特に児童生徒、保護者、教師陣から信頼を獲得するために以下の内容を実践していきたい。

児童生徒から信頼を獲得するために、児童生徒一人一人をよく観察することを行っていきたい。今後の演習や教員になった際、児童生徒とその周りの状況をよく観察し、目の前の児童生徒に対する理解を深めていきたい。観察とそれによる児童生徒への理解の向上は、谷井先生のように教育相談が楽しみと思ってもらえるような安心と信頼のある教員になるために必要なことであると考える。

保護者の方から信頼を獲得するために、こまめな連絡を大切にしていきたい。私が考える保護者への連絡は、何か問題があった時にするものであったが、それだけでなく、児童生徒の成長や褒めたい

ことを保護者の方にお伝えすることで、この先生なら安心して任せられると思ってもらえるような信頼感を獲得したい。

教師から信頼を獲得するために、一生懸命かつ謙虚に学び動くことをしていきたい。木上教育次長や谷井先生からもあった通り、一生懸命かつ謙虚に学ぶ姿勢は誰かが見ているし、そういった人は助けたくなるものである。小さい雑務をもきちんとこなし、積極的に教師の方々とコミュニケーションをとり自分から学びを吸収していく姿勢を大切にしていくことで、自ずと信頼の獲得はついてくるだろう。

○　私がこの講座に応募した理由の一つは、貴重な経験を積むことが出来るからでした。今回の開校式でも、そのことがどれだけ有意義なのかが分かりました。せっかくの機会を無駄にしないよう、「学生だから、初めてだから」という言い訳をするのではなく、初めての経験や挑戦を学生のうちに経験しておけると考え、自分から仕事や問いを見つけ、学びを深めていけるよう、周囲にその熱が伝わり応援してもらえるような積極的な態度を前面に出して動いていきます。

お話の中にもあったように教育現場に入り、生徒の前に立つということは、いつでもどこでも教員としての振る舞いが求められます。実習を経て慣れてきた部分があるからこそ、教員の当たり前なルールを再確認し、十分すぎるほど意識していきます。また、これまでの実習から、生徒との関係づくりがまずは大事だと学んできました。生徒を理解し、生徒に理解してもらうことで初めて、授業や指導の具体的な課題や、教員のやりがいが見えてくると思います。１日目から生徒や先生方と積極的に関わり、話を聞き、こちらからも話をすることでつながりを広げながら、人として、教員として幅と深みのある人間になっていきます。

○　闇雲に演習に取り組むのではなく、「どんな教師になりたいのか」など、目標を掲げながら取り組むことで、養成講座での学びをさらに深いものにしていきたい。今日の講義の中では、谷井先生のように、授業改善に前向きに取り組む、生徒の相談に真摯に対応したりなど、生徒にとってよいを追求し生徒との時間を大切にする教師になりたいなと思った。

「教師というのは、生徒の一生にかかわる仕事である」、演習校の生徒にとっては実習生であっても先生に部類される。特に、教師の言葉は良くも悪くも生徒の心に影響を強く与えると危機感を抱いている。そのため、生徒と向き合うときに使う言葉や表情に細心の注意を払う。谷井先生がとても言葉遣いが丁寧であり、感動したため、谷井先生のような言葉遣いができるように意識していきたい。

実習中は受動的に取り組むのではなく、学んだことを活用して試行錯誤を何度も何度も行なったり、質問をさせていただいたりするような能動的な姿勢で取り組む。

考えを深め、悩みを一人で抱え込まないためにも、同じ実習校のメンバーや、それ以外の養成講座の仲間との会話を積極的に行いたい。多様な考え方に触れる機会にもなると思うので、ぜひ積極的に声をかけていきたいと思う。

○　この開講式を通して私は二つのことを学んだ。一つ目は教員を目指す者であるという自覚を持ち、自分は児童生徒に影響を与える存在であるという意識を常に持って臨むことだ。二つ目は演習などにおいてはどんな児童・生徒を育てたいか、ということや自分ならどう支援するか、という実践を意識して観察に臨むことだ。

講座や演習を有意義なものにするため、漠然と取り組むのではなく目的を持って臨む姿勢を身につけたいと考えた。具体的に、講座では学んだことを短く説明できるようにするため、キーワードでメモを取ることを心がける。なぜなら説明することでより内容が定着し、説得力のある説明の仕方を身につけられるからだ。また、このことは児童・生徒に物事を説明するときも、端的に分かりやすく説明することに役立つと考える。また、演習では、研究授業や教員になった時のことを意識し、支援に注目する。この教師力養成講座を通して児童・生徒が、自分らしさを発揮しつつ自立して生きることができるよう支援していく教員になることを目指す。

第２回〔２月 12 日（日）〕オープン講座（オンライン）
講座内容 ： ①講義「教師のやりがい・使命」
②講演「第２期京都府教育振興プラン」

○　小学校で演習を行う中で、外に遊びに行くよりもタブレットを見つめている児童が多いと感じていた。学校という場が子どもたちにとって新鮮な出会いの場となるように、子どもたちに不足している経験や感動を与えられる指導を行いたいと考える。また、大人の言葉によって作られる潜在意識によって子どもの思考が決まることを学び、教師の一言が子どもの自己肯定感に影響を与えることを自覚しなければならないと感じた。子どもに限らず、叱られた言葉はどれだけの褒め言葉よりも、強く印象に残ると聞いたことがある。何かができたことを褒めるだけでなく、ただ居るだけで存在を認められているかのような声かけを行うことも実践していきたい。

京都府が同和対策にいち早く取り組んでいたことを知り、京都府の教育が人権教育を基盤とし、現在では「包み込まれている感覚」として示していることとのつながりが見えた。現在行っている小学校演習では、教科担任制や ICT 教育が進められていることを実感している。最も子どもに近い教師としてプランをよく理解し、京都府の教員である自覚を持って指導を行いたい。そのために、プランの背景にある京都府の子どもの実態を知っておくことが重要だと考える。

○　活かしていきたいことが大きく分けて３つある。

１つ目は、「笑顔を意識すること」である。講義から、笑顔は伝染しやすく、学級の雰囲気に影響することを知った。教師が不機嫌そうにしていると教室が暗い空気になることは、私自身が経験したことがある。児童の笑顔が多いという学級の空気作りは、学級運営において土台となる。演習中において、必死になって笑顔がなくならないように意識したい。少なくとも、児童と話すときの第一印象は笑顔だと思われるようにしたい。

２つ目は国の教育施策に関心を持つことである。京都府の教育プランを主に見ているが、根本は国の教育施策である。なぜ、このプランがあるのかを理解しておくことで、本質的な理解になると考える。

３つ目は学び続ける教師でありたいということである。講義で、教師は本を読む必要があると学んだ。子どもは好奇心の塊である。この好奇心に答えていくには常にアップデートしていかなくてはいけない。アップデートの方法は沢山あるが、最も取り組みやすいのが本を読むことであると考えた。知識を得ることにはどん欲に、幅広い本を読んでいる教師になりたい。今すぐからできることとしては読書の習慣をつけることである。

○　子どもの自己肯定感をはぐくむために包み込まれているという感覚を大切にしていきたいと思います。そのために教員としてできることは子どもの可能性に蓋をせず、子どもに寄り添うことだと思います。子どもが何かをしたいという気持ちを大切にして、それを実現するために教員ができることを全力でしていきたいです。また、いつもと違う小さな変化から子どもの SOS に気づいて早期発見早期解決をしていきたいです。子どもの SOS は子どもを良く知っているよく見ることで気づけることがあります。自分だけではわからないこともあるため同じ学年の先生、保護者の方と情報を共有し、多様な面から子どもを見守ることで包み込まれているという感覚を感じるようにしていきたいです。

○　私は、今回の学びを京都府が掲げる教育の推進、教師力の向上に活かしてきたいと考える。まず、京都府の教育の特徴として、同和加配、第一期振興プランの背景などから人権教育に重点が置かれていること、歴史的建造物、文化が根付いている強みがあることを改めて実感した。私は、学校教育が持つ公教育の役割の推進に尽力することを目標として掲げているため、承認することを通して生徒自身が他者へ承認できることを促すことや、LGBTQ や同和問題に関する教育などに力を入れ、生徒の人権に関する意識を高め、誰も排斥されることなく学校に通い、学ぶことができる環境づくりに努めていきたいと思う。また、社会科の教員としては、歴史的要素が根付いていることを活かし、先人が受け継いだ財産を次の世代に引き継ぐ力を身につけさせていきたいと思う。

○　本講座での学びを踏まえ、今後の演習や実践に活かしたいことは二点ある。

まず、一点目は、存在承認を満たせる声がけをする。私は、教員としての働きのうち、セーフティーネットという役割に大きな意義を考えている。そして、京都府が目指す教育環境のなかでも、生徒の成長や自己実現に携わる者全員が一丸となって、生徒の「包み込まれているという感覚」を育もうとする点に強く共感している。前者の教育的意義と後者の目標を軸に、生徒一人一人の存在を受け入れ、認め、包み込むことが出来るように、日頃から声がけに努め、信頼関係の構築に励む。

次に、二点目は、振興プランの方策の視点から授業案と学習機会の保障について考える。本振興プランは、校外の専門的人材に協力を仰ぎ、物的資本を活用することで、より生徒が学びに集中できる環境を目指している。このねらいを踏まえ、演習では教員の方々がどのような視座に立ち、どのような方法で ICT を活用しているのかという点を積極的に学ぶ。

以上の二点が、今後の演習や実践に際する私の活かし方である。演習では誠実な態度を徹底しつつ、積極的に業務に携わることで、知識や技術、教育者としての志を吸収していきたい。

○　今回の講義では、久保先生から教師のやりがいや使命について学び、また「第２期京都府教育振興プラン」がどのようにして考えられ、作られたのかについて学んだ。

講義を通して、京都府の教育が目指す「包み込まれている感覚」がどのようにして生まれたのか、また久保先生のお話から具体的に「包み込まれている感覚」を養うにはどうすればよいかということが分かった。まず「包み込まれている感覚」とは、京都府が重視している人権教育から生まれたものである。そして、多様性の理解を基盤としながら子どもに必要な承認欲求を満たし、社会に新しい価値を生み出せるような人間像を目指すものである。これは久保先生のお話で言えば、教師の使命の一つである、子どもの「自信を育てる」ということである。「自信を育てる」とは、児童が「先生は自分の良いところを認めてくれている」と感じられるような言葉がけや関わりを目指すことである。このことを受けて、私は教育現場において、児童の短所を改善するよりも児童が成功体験を積める授業を行い、長所を伸ばす教育を実践したいと考えた。

第３回〔２月 18 日（土）〕特別講座
京都教育大学教職キャリア高度化センター主催　「学び続ける教員へのメッセージ」講演会
これからの教育（令和の日本型学校教育）と教師に求められる資質・能力
「一人ひとりの子どもを主語にする学校をつくる」

○　私が今回の講義で印象に残っているのは「常にゴールを意識する」「子どもにとって意味があるもの」という言葉である。
　学校とは、子どもを育てる場所であり、学校のあらゆる物・事は本来、全て子どものためにあるものである。決まりは、子どもを守るためにあるはずなのに、今となっては、子どもを縛ったり、大人にとって都合よく動かしたりするためにあるのではと感じることがある。また、実習演習でも、最初は子どものことで悩み、その解決策として考えた方法が、いつしか「自分がしたいこと」になっていて、ゴールにしている子どもの姿とその方法に因果関係があるのか考えることもあった。教師として、方法に捕らわれ、目的を見失わないように、自分の価値の押し付けにならないように、常にゴールを意識し、それが子どものためになっているのかと度々振り返って確認する必要があると感じた。
　私は、熱中すると「あれもこれも」となって、浮かんだアイデアを端から試していこうとなってしまうところがある。でもそれは自分本位で、「子どものため」からは少しずつ離れていくのかもしれない。自分のアイデアが出た時にも、「この方法を取る目的はなに？」と自分と対話しながら、また、その方法を試したときに子どもから帰ってきたリアクションを見ながら、一歩一歩着実に子どものための教育をしていきたい。

○　学習の個性化において現在不十分であるとされた「課題の設定」について、児童が行う機会を設けるために小学生の段階では、まず教師が授業のめあてにしたい言葉が児童から自然とでるような発問及び疑問を生み出す導入にすることを心がけるとともに、演習校での体験授業や研究授業において早速実践していきたい。
　演習において体験授業や研究授業の構想を練る段階に入ったが、ただわかりやすく指導するだけではなく、身の回りの生活と結び付けて指導する等、生きていくうえで必要な力を身に付けていくなど将来を意識した視点をもって指導する。
　自己決定する力を育むにおいて、ただ注意するだけの指導ではなく、次に同じ場面があったらどうするべきか児童自身が判断できるようにする指導を心掛けて実践していきたい。そういった点で、教師は直接的な指導に加え児童に考えさせるなどの場をつくる（機会をつくる）ことも大切に考えながら指導に組み込んでいきたい。

○　本講義では、学習指導要領などの視点から教育についてのお話を聞いた。まずは、キャリア教育について述べていく。キャリア教育については、明確なビジョンを持って行っていく必要があると感じた。将来の生活をよりよくするためにどのような力がいるかというものになるがこれは、特別な事だけではなく生活面の力も非常に重要だと思う。これは、年齢を重ねれば身につくというものではない。だからこそ、学級での行動も、ただ過ごすのではなく、キャリア教育を見据えて担任が指導していく必要があると考える。
　個別最適な学びと協働的な学びのそれぞれについて理解して指導することも重要だと思った。これらは、独立して考えるのではなく一体的に行うことを重要視していきたい。学習の中で個別の活動を行う際には、そこに没頭するのではなく周りと相談できるような雰囲気づくりをしていく。協働的な学びについては、空気を読むということが足かせになっているように感じる。実際に演習に行っていると休み時間遊んでいる時でも「空気読もうや」という発言を耳にする。同調圧力をなくすということは、難しいことであるが素直に思いを打ち明けやすい環境づくりが必要になってくると思う。
　担任が意識的に目的をもって学習活動に取り組むことが必要であることが分かった。

○　私はまず教員になるうえで大切なことは逆算する力であると考える。子どもたちに中学校の間の三年間でどのようなことを伝えたいのか、どのような力を持って卒業してほしいのか逆算する力が必要であると考えた。

子どもたちは一人一人違って尊い存在であるのでその子たちを成長させるためには教員である自分も様々な経験をして多くの引き出しを持っておく必要があると思った。私は学校現場においても正解主義や、同調圧力があるように教育実践演習で学校現場に入った時にも感じている。

やはり、自分も正解を求めすぎて、周りに合わせてしまいたくなる気持ちがある。だが、子どもたちに学習の個性化を促していくためには様々なことに挑戦させて探究させていく必要がある。子どもたちに教員が敷いたレールを歩かせるのではなく、自分で自分に合った学習を子どもたち自身が発見していく必要があることを学ぶことができた。また主体的に学び続けなければならないのは子どもたちだけではない。教員も目まぐるしく変わる教育業界を前向きにとらえ、その変化に対応して、子どもたちに最適な学びの場を提供していける教員を目指す。

○　「協働的な学びの実現」は、グループでの活動で問いを立て、みんなで一緒に考えていく様子をイメージしていたが、荒瀬先生が話された、同調圧力を生み出し、みんなが仲良くやっているわけではなく、だれか無理をしているかもしれないという視点も併せ持ち、集団の中で個が埋没してしまわないように意識していく。

反対に、個別最適な学びを実現しようとする際に、孤立した学びや分断に陥らないようにするために、学習の個性化や指導の個別化をそれぞれどういうことなのかを理解する。そして、生徒自身にとって意味のある事になるよう、教師が担うべき役割、また教師が手出しすべきでない部分を吟味したうえで行動していきたい。

『教師が子供の進路や将来などを「決めてあげる」のではなく、生徒に「決めさせる」ために何をするか』というお話が最も印象的であった。この話を受けて、生徒にとってより良い道を選んで生徒に提示してあげるのではなく、まずは生徒がいろんな道を見つけられ、その中から様々な要素を受けて判断・決定することが出来る環境や、普段の学習の中で自ら決定して判断・選択をする機会を積極的に設けていこうと決めた。それが、教師が担っている役割であると考えている。

○　個別最適な学びの具体的な内容である「指導の個別化」「学習の個性化」は、授業を作る上で、とても必要な要素であると考える。そのため、授業づくりをしていく中でも、生かしていきたい。

「指導の個別化」では、児童生徒一人一人に合った、教材や指導の工夫をしていきたい。例えば、自閉症の児童生徒がいれば、その子も授業に参加できるように、その子の特性を活用した遊びを取り入れたい。

「学習の個性化」では、小学生や小学部に在籍している児童には授業として「探究」することは少ないと考える。しかし、それに繋がる力を小学校の段階で身に付けていく必要がある。そのため、単元ごとに授業を進めるときに、そのねらいを大切にして、そのねらいが達成できるために、目標設定ができるようにしていきたい。

そして、荒瀬先生の「その先に何かやりたいことがあれば、自分のしたいことがあれば、ずっと同じ職でなくてもいい」という言葉がとても心に響いた。これは、自分の人生観が変わる言葉だった。自分が何をしたいのか、選ぶ「自己決定力」と、「選ぶ幅」を広げるためにも、学びは必要なのだと改めて感じた。

第４回〔２月 22 日（水）〕教育実践講座Ⅰ
講座内容：講義「小学校における児童理解と学級経営」
講義「中学校における生徒理解と学級経営」
講義「高等学校におけると生徒理解とホームルーム経営」
講義「特別支援学校における児童生徒理解」

○　本日の講演で、確かな児童の理解は、学級経営を行う上で最も重要であることや、積極的にコミュニケーションをとることの大切さを学んだ。私は、これらの学びを以下の二つの視点から今後の演習や教員としての実践に活かしていきたい。

一つ目は、児童や先生同士のつながりである。学級は担任だけではつくりあげることはできない。担任と児童でつくりあげていくものである。そのためには、児童一人一人のことをよく見て、児童の言葉に耳を傾け、思いを受け止めていくことが大切であると学んだ。児童のことを理解するには、観察をするだけでなく、実際に児童の気持ちを聞くことが必要であると考える。それゆえ、演習を通して、児童に対して積極的にコミュニケーションをとり、一人一人の児童のことをより多くより詳しく知っていきたい。また、児童理解には先生同士のコミュニケーションも必要不可欠であると感じた。今回、ペアワークやグループワークをしてみて、自分では思いつかなかった学級経営の方法や児童の背景の考え方を知ることができた。このような意見交流、情報共有は学校現場においても大切である。他の先生方から見たその児童の様子を聞くことで、より深く一人一人の児童について知ることにもつながると考える。

二つ目は、保護者とのつながりである。家での様子は学校での様子と異なる児童も多い。言い換えれば、家庭環境が学校での過ごし方に関係している可能性は高いということになる。そのため、家での様子を保護者に聞くことで、その児童の背景を探る一つの手段にもなると考える。また、音読カードのサインのところや連絡帳などにメッセージを書いて、その児童のよいところや学校での頑張りを保護者に伝えることもしていきたい。自分の子どものことを知ろうとしてくれているなと保護者が感じることは良い関係性になると考える。これは児童理解にも必ずつながるため、保護者とのコミュニケーションも大切にしていきたい。

○　現在演習校で小学校２年生を主に担当させていただいており、児童の様子がいつもと違うときに「どうしたの？」と声をかけてもなかなか答えが出てこない場面がよくあるので、今回の講義で学ぶことができたように、気持ちの選択肢を出して一緒に児童の気持ちを整理しながら聞き出すことや、気持ちを言語化することを決して強制せずに、落ち着いてから聞くという対応をとっていこうと思った。これからは、様子が違うことに気が付いているということを児童に伝えつつ、その気持ちを聞き出すタイミングを上手に見計らうことができるように、演習中も意識していこうと思う。

児童を理解するには、児童のことをよく知ろうとするだけではなく、その保護者との連携を大切にすることが大切だということから、来年から実際に教員となった時に、小さなことからコツコツと保護者との関係を築くことで児童を深く理解することに努めたいと思った。また、児童に何か不安なことが生じたときに、担任と保護者が各々点で対応するよりも、その二者が繋がって線になって児童を受け止めてあげられるように、連絡帳などに小さな成長をコメントしてみたりして、保護者とつながり続けることを大切にできる教員になりたいと感じた。

○　私は今回の講義から、学校生活や社会生活の中で関わる全ての人との“つながり”を深めていきたい。子どもはもちろん保護者や教員、地域とのつながりを深めていくことは、よりよい学級経営を行っていく上でとても重要なことである。児童理解のためにも、人とのつながりを大切にし、演習や教員としての実践で以下の２点に取り組んでこうと考えている。

１つ目に、児童一人一人の実態を把握するための関わり合いである。日頃からのきめ細かい観察を基本として、面接などの適切な方法を用いて、一人一人の児童を客観的かつ総合的に認識し実態を把握しようと考える。そこから児童との信頼関係を築き、児童同士の人間関係を育てることでよりよい

学級経営にもつながるのだと考えている。その上で、保護者や他教員との関わりの中で児童一人一人の背景を把握することも大切である。

２つ目に、教員として質の高い専門性を高めるためにつながりを深めることである。教員の方とのコミュニケーションを直接行い、吸収しながら学ぶよう取り組んでいく。

子どもたちの主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりをするためにも、このような取り組みを行い、様々な経験を積みながら教員としての資質を高めていきたいと考えている。

○　教員はいつでも生徒に期待しながら、接していく必要があると感じた。これはいつの時代になっても人として根源的に持っている感情であると考えると、そこを一つの軸として置いておきたいと思った。

これは、生徒が何をするにしても意欲があるからと捉えるよりは、どの生徒もその根源的な意欲を発揮したり、表に出したりしていけるような環境や学びの場所をつくっていくという意識を持つという意味で考えて、それぞれの生徒に対して具体的にどのような支援がいいのかという視点を大切にしていきたい。

学習指導と生徒指導の一体化の観点からも、教員が生徒一人一人と関わっていく中でそもそも生徒理解が一番大事であるから、生徒と関わるどの場面にも関わらず、生徒を見取ることのできる機会を逃さない意識をもちたいと思った。具体的には、日常の中で当たり前に感じているような生徒の反応や事象に疑問をもち、その根元にあるものは何かを深く考えることで、生徒の理解を深め、その中での気づきを共有しながらそれを信頼関係につなげていきたい。

○　加納先生のお話を聞いて HR 経営は、「共に作り上げる」ことが大切であると受け取った。教員は、学校による学級経営計画に則りながら目の前の生徒をどのようにしていきたいか、どんな力をつけさせたいかということを考え、一年間かけて大切なことを伝えていく。この中でどんなことをルールとして徹底させたり工夫した実践を行ったりしていくのかについては、教員それぞれの色が出るものだと考える。自分が理想とする共に作り上げる HR のために行いたいことは２点ある。

１点目が役割分担と責任感である。加納先生は清掃を重要なものとして徹底するよう指導されていた。ここから実践するにあたり自分たちの役割が明確となり責任を感じられるよう HR における係活動は、よく選定する。仕事量は均等であり生徒自身にも活動の成果が還元されるようにしていく。こうすることで生徒が HR に対しての帰属意識を持つことができ、また自分たちで作っていく意識を持たせることができると考える。

２点目が重要性を話すということである。仕事が割り振られ、行わないといけない「義務」のような形では円滑に回っていかない。そのため「なぜその仕事をするのか」、「なぜこの時間が大切なのか」について年度当初に伝えることで生徒らが実感を持って仕事に励むことができると考える。

自分はどんな生徒を育て、そのためにどんな具体策を打ち出すかといったこれらのことは、今からよく考えながら学校現場での実践を参考に突き詰めていきたい。

○　今回の講座で、二つのことを今後の演習や教員として実践に活かしていきたいと考えた。一つ目は「子どもの日々の姿」を見ることである。児童生徒の基本的生活習慣はどこまで分かっているのか、コミュニケーションでも聞くことができるのか、話すことができるのかなど一人一人実態が変わってくる。一人一人をよく観察して、その子自身の分かり方を分かるようにしていきたい。また児童生徒を観察することによって何に興味関心があるのかが分かり、授業作りにつながるとともにアセスメントを基盤とした支援を行っていくことができる。二つ目は「気になる行動を大切に捉える」ことである。児童生徒の行動には一つ一つ意味があり、その行動の原因・要因を教員が理解できるようになることで児童生徒の支援や指導に繋がる。ただ単にできない、分からないではなくなぜ分からないのか、どのようにしたら分かるようになるのかと学習面だけでなく生活面でも工夫を取り入れていかなければならない。いつも授業中にこのような行動をとるから困るのではなく、なぜこのような行動をとるのか、どのようにしたら授業に工夫を持つのかと日々実践をして考えていかなければならない。この二つのことを意識して演習に取り組んでいきたい。

第５回　集団討論　　〔２月 27 日（月）28 日（火）３月１日（水）２日（木）３日（金）３月　６日（月）７日（火）８日（水）９日（木）〕

講座内容：教育観・教師像等の交流

○　集団討論を終えて、限られた時間の中で自分の考えを伝え、他の人の意見を聞き、さらに深めていくことの難しさを感じた。しかし、養成講座や演習校で得た気づきや学びを共有できたことで学びを深めることができたという実感が持てた。

第１テーマでは、子どもとの信頼関係づくりについて話し合い、児童・生徒理解に努めることの重要性を再確認できた。今後の演習では、子ども一人一人の言動や表情をよく観察し、会話や適切な距離感を意識したい。さらに信頼関係を築くために先生方が子どもや保護者、教職員間でどのような取組を行っているかを学び取りたい。

第２テーマでは自己肯定感を高めるかについて自らが自己肯定感を持って、子どもと接していきたい。京都府の掲げる教育理念について再確認することができたので、自己肯定感を土台に三つの力を養い、よりよい社会と幸福な人生を創り出せる人を育成するため自己研鑽に努めたい。

○　今回の討論を通して、京都府教育振興プランの具体的な内容を、自身の演習校での経験や実践から理解を深めることができた。包み込まれているという感覚を土台に、児童が新たな学びの一歩を踏み出せるよう、自身の経験や実践がどの力に関連付けられるのかを意識し、今後の演習に生かしていきたい。

３つの力を育むことは、社会に出てからも必要とされる力でもあり、私たちにも必要な力である。また、３つの力を相互に関連付けができるような指導を目指したい。そのために学級経営など、演習校での日々の経験や実践、先生方の取組を吸収したいと思う。この教師力養成講座を通して、３つの力も育んでいきたいと思う。

演習では、３つの力を育むために学校がされている取組や担任の先生方の取組の意図をつかみ、吸収したいと思う。３つの力がどのように関連していくのか児童の実態に即して、今後学んでいきたい。演習テーマの主体的に学習に取り組むための発問・導入がどのように３つの力に影響していくのかを学び、実践に活かしていきたいと思う。

○　今回の集団討論では、討論の内容や話題の方向性を客観的に見ることの大切さと、育てたい３つの力は相互に関係し合うことを学んだ。

その上で私は客観的に物事を見られるようにしたいと思った。これから何度も話し合いや私が授業をする場面がある。その際にねらいを明確にし、そのねらいに沿った議論ができるようにするために客観的な視点を養う。ねらいやテーマから外れそうになっていたら、自分から修正できるようにし、今何が話し合うべきことなのかを考えるようにしていく。

そしてはぐくみたい３つの力は、目指す人間像を実現するために、相互につながっていることが分かった。その中でも一人一人を取りこぼさず、見捨てないという意識を子どもに感じ取ってもらい、包み込まれているという感覚を大切にしていく。自己肯定感や包み込まれているという感覚ははぐくみたい人間像の基盤である。そのため、児童と積極的にコミュニケーションをとり、児童からこの先生は本当に自分のことを思ってくれていると思ってもらえるようにしていく。

○　今回の集団討論では、京都府の教育の基本理念をしっかり理解した上で、児童理解をすすめる必要があると考えた。主体的に学び考える力や多様な人とつながる力、新たな価値を生み出す力は前提に包み込まれているという感覚がなければならないものであると感じた。よって、今後の演習では、児童とのコミュニケーションから児童自身を読み取り（理解し）たい。例えば、休み時間の児童達と遊ぶことや授業中の机間指導から、今どのようなものを求めているのか、どのようなことに興味があるのかを知ることによって、児童の理解を深めていこうと考える。包み込まれている感覚は先生のみから児童へと与えられるものというわけではなく、児童同士や地域の方々からも与えることができるものである。よって、教師力養成講座生として演習させていただいている私も児童に包み込まれている感覚を与えることができる立場にある。児童達に影響を与えることができる距離に自身がいることを自覚し、今後の演習に挑みたい。

　児童理解は、授業や学級活動など全ての時間にすすめることができるものである。そのため、全ての時間に児童を理解することに努めたいと考える。

○　今回の集団討論は、これまでに自分自身が経験してきたことを言語化する良い機会でした。学校での気づきはメモに残すようにしてきたが、気づきを他者と共有することはありませんでした。そのため、最初は省察ができず、メンバーと話を交えることも難しかったです。しかし、テーマに適した考え方や話し方を教えていただいたことで、共同省察やテーマの意図を読み取ることができるようになった。共同省察によって自分一人では得られなかった多角的、多面的なものの見方を養うことができた。京都府の教育理念の内容理解が進み、学習指導要領の意図も組み込まれていることを知ることもできた。今後の演習では学校での気づきを理念と結びつけてより深い理解となるよう努力したい。

○　二つのテーマで話し合ったことを通して、養成講座での経験をその都度整理しながらまとめ、京都府の教育の基本理念を意識しながら生徒とコミュニケーションを図っていきたい。

　講座や演習で得られた経験は多いものの、振り返りを行わなければやりっぱなしになってしまう。京都府の教育の概念図を三次元で捉えると円錐形となり、全てがつながっているということに改めて気づかされた。自分が講座で得られた発見や演習で見た現場の先生の取組が基本理念にどのように関連しているかを考え、自分が何を軸にして子どもと向き合うかを考えていきたい。

○　今回の集団討論で、話し方を学び、話し合うことで考え方が広がった。まず、話し方については、指導担当の先生と話す際に生かしていきたい。私は話の要点がまとまらないままに話すことが多かったので、相手の意図を理解し、要点をまとめて話すことを心がけたい。次に子ども同士で認め合うことを取り入れた授業づくりを行う。特別支援学校で先生と子どもとの間で認め合うことは、実感していたが、子ども同士の認め合う取組を聞かれてその答えがなかったことに気がついた。先生と子どもとのやりとりだけでなく、子ども同士が認め合う活動を取り入れたい。そして、京都府の教育理念について理解が深まったので、講義や演習がどのようにつながっているかの視点を持ち、自己肯定感を育てることがどのような子どもの育成につながっているかを学んでいきたい。

第６回〔３月３日（金）〕教育実践講座Ⅱ
講座内容：講義・模擬授業「授業実践講座」（小学校国語　算数
中学校高等学校　国語　社会・地歴公民　数学・理科　外国語　特別支援学校）

○　授業を実践する中で、自分の軸をもつことを今後意識したいと思った。堀川先生が今回の授業のテーマとして「子どもの声でつくる」を軸にしておられたように、何か一つ自分の中で大切にしたいことをもっておくことは、めあての決定や活動の選択で必ず役に立つ。
　また、めあてを決める時には、児童にとって大切になってくる気づきや発見の機会を奪わないめあてを考える必要があると感じた。よく、「10 をつくって計算しよう」などというめあてがあるが、これでは 10 をつくる、という児童自身の発見の機会がなくなってしまう。今後、授業を実践するためには児童が主体的に学べるようなめあてをつくるようにしたい。
　そのためにも、まずは児童の声を聞くことを大切にしたい。教員が指導案の作成時に、ある程度のめあてを考えることは必要になってくるが、授業の中で児童から出た疑問をめあてにする余裕をつくっていきたい。「～しよう」と呼びかける文末のめあてではなく、「～する」というようにあくまでも児童が主語になっているめあてが理想だと思う。さらに、めあてはその授業の見通しや身につけたい力を示すものでもあるため、パワーポイントを使う授業であってもめあては板書にし、常に児童の目に止まる場所に書いておく必要があるだろう。そうすることで、授業の中で、児童は何をするべきなのか、目的意識をもって活動に参加することに繋がっていくだろう。
　最後に、私は 45 分の授業の中で児童を主役にできる授業を目指したいと思った。児童にとってはかけがえのない１時間の授業である。そのため、授業の１回１回を大切にし、児童にとってこの１時間の授業を受けたことでなにか一つでもできるようになったことが生まれるよう、“児童を主体にした授業づくり”を学び続けていきたいと考えている。

○　模擬授業を踏まえて指導していただいたため、「個別最適な学び」「主体的・対話的で深い学び」、「協働的な学び」と３つの学びについて、自分の中で具体性が増し関連付けて考えられるようになった。
　特に印象的だったのが、全体に向けて軽く説明し、できる児童には自分で学習させ、できない児童には前に来るよう呼びかけ、再度詳しく説明する事で一人一人の学習進度に合わせた学習を行っていた事である。その後もわからない人は手を挙げたり、個別に指導したりする事で、一人一人が置いていかれない授業を展開していた。これが個別最適な学びであると理解した。個別最適な学びについては、授業でどのように展開すると良いのか、具体的な方策がわからなかった点があるので、とても参考になった。
　また、一人一人が内容を理解した上で、ロイロノートを使用して自分の考えを書き、全体で共有する事で、他者と意見交換しやすく、新しい発見に気づきながら子供達は学びを深めていけると思った。
　今回の学びから、演習で授業を考える際には、３つの学びを実現できるよう今日学んだ事を参考にして取り入れたい。日頃から演習で授業を参観する際に、自分が教員であればどのように展開するか、３つの学びに焦点を当てながら考え、方策を増やしていけるよう努めていこうと思った。また、ICT の活用の仕方に関しても、ICT を使用する事で児童の考え方を全体に共有でき、自分で興味のある意見の所まで聞きに行ったり、グループを作ったりして、様々な形で興味や関心を深めながら授業をできると思った。ICT を使用しながら授業を展開できるよう、今日の学びを活かしていきたいと考える。

○　今日の学習を踏まえ、一つ一つの授業で目標をもつことを、今後意識して実践していく。毎日５、６時間、週５日授業を行う教員はすべての授業で十分な準備を行うことは現実的に不可能であるという話を演習校でも耳にした。それでも、最低限この授業で教えたいのは何なのか、身につけさせたい力は何なのかをしっかりと授業前に確認してその目標にあった授業を行うことを今後の私の実践テーマに設定する。私は先週の道徳の体験授業で授業の終末段階が上手くいかなかった。この講義を受けた今、その失敗の原因は授業の目標を意識しておらず、道徳ではなく指導になってしまっていた点であると理解できた。失敗から学んで目的意識を持った授業計画と目標を達成するためのまとめを設定

していきたい。
　また、個別指導での援助や助言が主体的な学習の妨げになっていないのかという不安をもっていた私の質問にはその授業の目標がどこなのか再確認し、どこまで援助してどこを自分で考えさせるかは目標に沿って定めればよいという教えをいただいた。遅れを取り戻させようと焦って援助しすぎることも、児童にゆだねすぎて学びに追いつけないこともどちらも避けねばならないということだった。このように個別の指導の観点で見ても、目標をしっかり持った授業を行うことは重要であった。明日の演習からどんどん活用していく。また、正しい目標を設定できるように学習指導要領を再度読み込むことも怠らずに行っていく。

○　私は今回の講義で、特に子どもの声を大切にして授業が作られることと、授業の組み立て方について学んだ。
　１つ目については、子どものつぶやきを拾い、わからない子どもが自分でわかるようになる楽しさを味わうことができる大切さを学んだ。私は、わからない子どもがわからないと意思表示できるように、２回目の体験授業は道徳を予定しているので、その際に意識していきたい。
　２つ目については、子どもにこの授業で何を学ばせたいかといったゴールを最初にイメージすることを学んだ。また、子どもの思考を整理することで、子どもの声をどのように授業に生かすかを意識していきたい。今後の教員としては、指導案はマニュアルや時間通りに終わることよりも子どもが意思表示できるように明るい雰囲気をつくり、子どもがわからないままで終わることのない授業づくりを心がけていきたい。

○　生徒にとって、何を用いて説明することで理解が容易くなるのか、生徒目線に立って考え、教材研究を進めていくことがとても大切であると考えた。特に、中学校の数学科においては、小学校の算数とは違い、視覚的に捉えさせることで、イメージがつきやすく、理解を深めやすいと教わった。実際、中学校の現場において、スライドや、グラフや表などに値を入れることで、自由に変化できる、表現できるサイトなどを用いて、視覚的に捉えさせながら、授業を進めておられる先生方が、とても多いと感じた。自分達が生徒だった時よりも、より具現化されたイメージを持って、問題へと取り組むことができると感じた。

○　今回は理論を基に実践した授業を体験することができた。その中で教科書を一から十まで完璧に教えなくても良いと講義を受けたことはとても励ましになった。しかし授業で取り扱う知識を軽視しても良いというわけではないことを肝に銘じておく必要もあると思った。
　具体的な授業の内容についても学習指導要領を参考に組み立てると一貫性のある授業が作れる。この点で授業を作り実行していく際に、立ち返られるものとして学習指導要領があると学んだ。
　また、実際の授業での講義が生徒のためではなく、教員のためになっていないかという問いかけはとても共感できるものであった。授業は教員にも生徒にも意味のあるものにしなければならないと私は思う。それは講義やグループ・ペア活動などを有意義なものにする必要があるということだ。つまりは教員のための時間稼ぎでの講義や、ただの形式上の活動は生徒のためにならない。このように今回の講座で受けた問いかけによって私は自分の考えをより具体化することができた。

○　今回の講義を通して、特別支援学校の教員を目指す上での心得や大切にするべきものについて改めて学習することができた。講師の方への質問で生徒との距離感の難しさが印象に残った。実際に関わるうえでも、発達年齢に合わせたかかわり方をしてしまったり、自閉傾向にあり目線が合いにくかったりする生徒に対して、距離感が近くなってしまう場合があり、障害のある児童生徒との距離感の保ち方について難しく感じることが多くあった。このような私たちの質問に対して、先生方は、児童生徒との距離感に関して、正解はなく、悩む内容の一つであるが、先生方の回答で印象に残っているのが、児童生徒とかかわるうえで客観的な視点を失ってはいけないという言葉である。決めつけるのではなくて、一度、児童生徒との距離感を客観的に見る視点を持ち、実年齢、発達年齢どちらにも視点を置いたかかわり方をするため、客観的な視点を持つようにすることを意識していきたい。

第７回〔３月８日（水）〕教育実践講座Ⅲ
講座内容：講義「小学校における外国語教育」
講義「中学校における生徒指導事例と対応」
講義「高等学校における生徒指導事例と対応」
講義「特別支援学校における医療的ケアへの対応

○　今日の谷内先生の講義を受けて、英語の授業だけに関わらず、他の教科にも大切なことを学んだ。外国語教育は三年生から始まる科目で、三年生から六年生と系統性を踏まえた指導を大切にすることを学んだ。これは英語の科目だけではなく他の科目でもいえると思う。だから、今後の演習で授業をさせていただく機会一つ一つを大切にし、その中で、この単元ではどのような力を身につけて、学年が上がるとどこの単元に繋がるのかを考えて授業の計画を立てていきたい。

二つ目は、能動的な子どもを育んでいきたい。人は褒められた方向に伸びるということを学んだ。今後の演習や教員としての実践で、授業をしてノートやワークシートに振り返りを書かせ、集める際には一人一人にコメントを書くなどして、能動的な子どもを育む授業にしていきたい。

三つ目は、この活動のねらい、目標を明確にし、この活動のゴールのイメージをもたせることが大切ということを学んだ。この活動でどんな力を身につけて欲しいかを確認することで、子どもたちは何のために活動しているのかがわかる。自分が授業をするときにも子どもたちに活動のゴールのイメージをもたせることを大切にしていきたい。この三つを自分が実際に授業をするときに活かしていきたいと考える。

○　英語好きを育てたいという思いがとても伝わってくる講義だった。導入で児童の心をつかみ、英語を話してみたい、さらに知りたい、やってみたいという思いを見逃さないという心掛けが大切だということが分かった。また、授業をする上では学級経営がかなり影響してくるということも言及されており、授業以外のところでも児童のことをよく理解しておく必要があると改めて感じた。様々な学級状況の中でも、創意工夫を凝らして英語に触れさせている様子を見ることができ、参考にしたい点をたくさん見つけることができた。例えば、身近なコンビニの絵を用いてクイズをしたり、家庭科や算数と結びつけた教科横断的な学びがあったりしたが、そういった工夫から、児童が英語は楽しい、英語があれば生活も豊かになると自分で感じることができ、より主体的な学びへと繋がっていくのだと思った。

今後の演習では、外国語の授業をさせていただくので、児童が英語に親しめるよう、体を使ったアクティビティや身近なものに結びつけて気づきを得させるなど、体験的な活動を取り入れていきたい。また、国際理解教育の観点からも、世界に目を向けた授業を心がけ、広い視野を持った児童を育むことができるようにしたい。

○　導入の大切さについて、考えさせられる講座であった。特に、英語の専科の方であったため、「勝負の導入」とされていた。ファミリーマートの色を答えさせる、ローソンの絵文字のマークの下は何かなど、惹き付けられるような授業でした。自主勉ネタなど、考えられて発問しているのも学習意欲を掻き立てられるような内容だった。私も今後の演習や教員になった時、導入を勝負の気持ちを持って挑みたいと思う。受動から能動にするために子どもの心をつかむような導入にする大切さが今回の講義で身に染みてわかった。私自身も体験しましたが、ダンベルや靴などを計算する問題である。その問題では、惹き付けられる要素がたくさんあった。最初は先生の話を聞いていただけであったが、前のめりに参加するようになった。このように受動から能動になる授業は意欲が増すことがわかった。前のめりに授業に入り込めるような導入を今後していきたい。英語の教室も工夫されていて良いと思った。季節に合わせて、英語の部屋を変えたり、ゲームが出来るようにしたり、英語に慣れ親し

みやすく、英語に抵抗感を抱く子どもが少なくなるような取り組みがおおいにされていた。私も英語は苦手意識があったため、そのような子どもたちがなくなるようにしていきたいと思う。教室環境まで工夫されているのが分かり、環境が大事であることもわかった。担任になったら、教室環境も考えていきたいと感じた。

○　生徒指導提要が昨年 12 月に改訂され、新たに加わった「安心・安全な風土の醸成」は、生徒一人一人の個性が認められ、安心で過ごすことができる学校づくりが重要であり、浅野先生の講義で大きく二つのことを学ぶことができた。

一つ目は、生徒指導とは、事象のみを指導するのではなく、そのような事象を起こしてしまった生徒の背景や内面に迫っていくものであることだ。講義内のグループワークで、遅刻する生徒にどのような指導を行うか議論した。まずは、生徒の意見を尊重してからどのような背景が隠されているのかなど、生徒の内面に迫っていき、他の先生方や管理職、保護者、場合によっては他機関と連携を行って支援していく事が大切であると考えられた。

二つ目は、表面上だけで指導するのでなく、悪いことを行った生徒には「あなたが悪い」と伝えた後に、支援を行うことが大切であることだ。このことで、生徒は「自分のことをよく見てくれている」、「自分のことを大切に思って指導してくれている」と伝わり、生徒の内面に迫ることができると考えられた。

○　本日は高等学校における生徒指導について教えていただきました。改訂生徒指導提要のポイントやいじめ問題に関して、時事的な事項を踏まえつつ学ぶことができました。特に成人年齢が 18 歳へ引き下げられ、高校３年生のクラスに成人を迎えた生徒とそうでない生徒が入り混じるという状況がこれからの高等学校には起こってくるので、その点への配慮も必要だと感じました。

また、生徒指導提要が改訂されたことによって新たに「発達支持的生徒指導」の考え方が提示され、日常的な人権学習やＨＲでのいじめを防ぐ環境づくりが大切だと学びました。また、後半の事例研究ではより実践に近い経験をさせていただきました。いじめ問題へ対応していくためには様々な視点をもちながら、決して一人で解決しようとせず、複数の先生方と協力していくことが大切だと学びました。生徒への聞き取りにはタイミングも重要だと学びました。加害者だと見なされている生徒に初めて問題について聞こうとした場合、そのタイミングや聞き方を間違えてしまうともう二度と話してくれなくなるかもしれない、という先生のお話が非常になるほどと思いました。いじめ問題は慎重に、あらゆる生徒の思いを想像しながら取り組んでいきたいです。

○　今回の講義を通して、医療的ケアを教師が行うことの意義について考える機会になった。実際に特別支援学校の教員を目指す中で、知識的に医療的ケアが必要な児童生徒の存在やどのようなことをしているかなどを学習していたが、ここまで具体的に考える機会はなかった。そのため、医療的ケアが必要な児童生徒とかかわる教師の方に対して様々な疑問があった。他の児童生徒に比べて、表情や行動が見えにくく生徒の意思や思考を読み取りにくい分どのようにして関わっているのかや初めて会ったとき何から始めるのかなどである。

実際に、看護師の方がいて医療的な部分を担うことが多いかもしれないが、「医療的ケアを教師が行う意義」について問われたときに、その子のすべてを知ろうとすることが教師としての姿勢であり、そこから、子どもたちの教育について考えていく必要があるというふうに感じた。そのため、医療的ケアが必要な児童生徒に関しても、教師ができる医療的なケアは教師が担うことで見えてくる生徒の姿やその行為を通した生徒との関係が築いていけると感じた。これは、すべての子どもとかかわる教師にいえることであると感じた。そのため、実際に子どもとかかわる際には、すべてを知ろうとする姿勢を忘れずに教育や支援について考えていきたいと思う。

第８回〔３月 15 日（水）〕教育実践講座Ⅳ
講座内容：講義・演習「特別の教科　道徳」

○　講義の内容を踏まえ、今後の演習や実践に向けて、以下のように活かしていく。

まず、日頃から子どもとたくさん関わり、子どもの行動や心をしっかり見ていく。子どもの行動・心をよく見ることは道徳教育の基本であるというお話を受け、まさにその通りだと思った。道徳教育というと、何やら難しいもののように感じるが、道徳的価値は子どもの身近な生活の中にも転がっていることが多い。したがって、道徳での学びは、道徳の授業の中で完結するものではなく、子どもの身近な生活と密接につながっていることを絶えず意識していきたい。そのうえで、子どもの身近な生活に目を向け、その中から道徳的価値を見出し、授業に活用していきたい。子どもと関わる中で起こる様々な出来事を、子どもの負担にならない程度で道徳の授業に活かすことは、子どもが道徳を学ぶ必然性を生み、学習意欲を促すと思う。

次に、日頃の授業や学級経営を通して、子どもが安心して意見を言いやすい雰囲気をつくっていく。中舎先生がおっしゃるように、道徳とは、みんなで思ったことを出し合って心を磨き合っていくことである。したがって、子どもが思ったことを言いやすいように、日頃から肯定的な声掛けや励ましを心がけていく。また、声掛けだけでなく、にこやかな表情やうなずき、相槌をどんどん取り入れていきたい。

そして、子どもの言葉を生かした授業をしていく。演習校の指導教員からよく指摘されることだが、教師はつい子どもの意見をまとめようとしたり、結論を出そうとして話をすぼめたりしがちである。だが、道徳とは、色んな子どもの意見が出されてこそ、学びが深まっていく教科であると思う。したがって、教師は子どもをもっと信頼して、子どものつぶやきや意見を促していきたい。そのためにも、教師が話す言葉をできる限りとどめるよう意識し、「〇〇さんはこう言っているけど、みんなはどう思う？？」といったように、子どもの言葉を積み重ね、つなげながら授業を進めて行くよう心掛けていきたい。

私は３回目の研究授業が道徳であるため、今回の講演がとても参考になり、充実した学びとなった。

○　今回の講座を通して、道徳教育について大きく二つ学ぶことができた。一つ目は、道徳教育における心の働きについて、二つ目は、道徳の授業づくりについてである。

一つ目の道徳教育における心の働きについては、道徳教育により何を学び、どのような価値を身につけるのかを考えやすくなった。道徳教育は、みんなで思ったことを出し合って「心」を磨き合うという。これは、心の働きである道徳性を良くすることによって、ありとあらゆる場合に主体的に判断し、行動するために必要であることが分かった。これにより、今までは身につけたい道徳的価値をどのようにしてつけていけばよいのか明確に答えを出すことができていなかったが、授業を行ううえで子どもたちの考えを多く出し合わせ、心を磨き合わせていこうと考えた。

二つ目の道徳の授業づくりについては、一つ目のことを実践していくうえで重要なことである。みんなで思ったことを出し合うにも教室内の雰囲気が良くなければ素直な考えや意見が出しづらい。そのため、普段の学級経営にも言えることだが、授業内だけでいうと導入の段階で自分の考えや意見を言いやすい雰囲気づくりをすることが大切である。また、身につけたい道徳的価値をまずは教師が理解するために教材を読み込み、描かれている道徳的価値の展開を読み取ることも重要である。授業の準備をしっかりと行い、中心発問をどこで組み込むかなどを考え、児童たちが発言しやすい雰囲気づくりをしていこうと考える。

以上のことから、道徳教育における心の働きについてと道徳の授業づくりについて学んだことを自分が道徳の授業を行うときだけでなく、日々の学級経営から活かしていこと考える。

○　今回の講義では、次の三つのことを活かしていきたいと考えている。

一つ目は、時と場に応じて児童が主体的に判断して行動できるような授業にすることである。この

ような授業にすることは、深く考えた授業や児童が自分の気持ちに正直になれた時に教材を通して考えることが可能になると考えているため、考えやすく深く考えられるような授業作りをしていきたい。

二つ目は、国語と道徳の違いである。教材が物語のようなものが多いため、つい筆者が言おうとしている事等に目を向けがちであるが、道徳科は気持ちの変化を捉えることであるため、変化する前後で気持ちの変わりをはっきりさせてこれからの気持ちや行動に表せられるように繋げていく事を軸として授業していきたい。

三つ目は、導入部分で今の自分の心の気持ちを発表させたり考えさせたりして気持ちの変化を視覚でわかるようにすることである。今回はホワイトボードに書き、視覚的にわかっていたが、実際にはワークシートに書くと視覚的に気持ちの変化がわかるようなると考えて、実践していきたい。

○　道徳科は小・中学校では、担任がするためにどの教科の専門であっても授業ができなければならない。道徳教育とは生徒の人間力を高めるものであり、生徒指導と似ている部分が多いと思っていた。しかし、生徒指導は外面的なことから内面につなげていくという、起こってから正すというような感じであるが、道徳教育は内面から外面へと発展させていくという面で、真逆な性質があることに気づけた。教員になり、このような本質的な意味を理解したうえで道徳の授業を考えていきたい。そして、内容項目は中学校では、22 個存在するので、教材に合った内容項目をしっかり考えていきたい。そして、中舎先生がおっしゃっていた教師の授業時での在り方は、教壇の上で授業をずっとするのではなく、時々机間指導なども行い、生徒の中に教師が入っていけるような授業づくりを心掛けていきたい。そうすることで、授業中に生徒も容易に発言や話し合いをするようになり、授業の雰囲気はより一層よくなっていくと考えられる。

○　今回の講義では、道徳教育を通じて、児童・生徒が自分の心を言葉で表すためにどのように指導すべきかを学んだ。これを今後の演習において、生徒の意見を聞き出す発問をする際に活かしていきたい。

高等学校では、道徳を教科として取扱うことがないため、教科指導や生活指導など学校生活全体で、道徳教育を行う必要がある。例えば、私の演習校では、とある先生が教科指導において、一人の生徒に対して、２、３回の頻度で発問を行っていた。私が授業後にその発問の意味を先生に伺うと、「いろんな質問を投げかけ、いろんな言葉を発言させることで、生徒の思考を深めようとしている」と仰っていた。このことは、中舎先生が仰っていた「意見しやすい雰囲気作り」に繋がると思った。このことから、道徳教育における発問の意図や授業における雰囲気作りは一般の教科指導にも通ずる物があると実感した。道徳における「こころをこころで磨き合う」ことは教科指導における「学びを学びで深め合う」ことと類似すると思える。

以上の様な道徳教育の指導法を、私の研究授業における発問や生徒の深い思考を促すスキルとして活用していく。そして、生徒の見えないこころに寄り添い、生徒同士のこころの磨き合いを促すことができる教員になる。

○　特別支援学校で道徳の教材を必ず使う機会というのはあまりないかもしれないが、教員の数が比較的多く、児童・生徒の数が限られた教室内では、日々過ごしている生活が道徳教育にあたるのではないかと感じた。例えば演習を通して、中々相手の気持ちを読み取ることが苦手な子も、教室内の友達に対しては、自分の気持ちにどこかで折り合いをつけて過ごしているように感じてきた。また、子どもたち自身で悩み、失敗を繰り返しながら、生活がより豊かになる方向へ向かっているのだと感じた。私が教員になった際は、彼らの教室内での経験を大切にしていきながら関わっていきたいと強く感じた。

しかし、児童・生徒が手本とするのは、友達はもちろん、教員も同じであると感じる。実際、私も小・中学生の頃は先生のことをよく見ていた。

そのため、学校内ではもちろん、自分自身も日頃から他者の気持ちに寄り添ったり、深く考えたりしながら過ごしていこうと思った。子どもたちに道徳性を伝える身として、自分自身も行動をよく振り返り、子どもたちの考えや行動の基となれるようす過ごしていこうと思う。

第９回〔４月 19 日（水）〕教育講座Ⅰ
講座内容：講義「京都府における人権教育」

○　今日の講義で最も印象に残っているのは、教師が人権教育の担い手であり、常にそのことを意識しておくべきだということである。人権尊重を基盤とした教育を行っている京都府の教員として、私が実践していきたいのは以下の２点である。
　１つ目は、安心で居心地の良い学級づくりである。いじめや不登校が起きる原因の１つとして教師と児童の信頼関係がうまく構築できていないことがある。教師は常に児童の心に寄り添い、話を聞き、受け入れる姿勢を示すことで児童が安心して過ごせる学級をつくりたい。
　２つ目として、「隠れたカリキュラム」を大切に学級づくりや学校づくりを行いたい。道徳や授業としての人権教育だけでなく、班活動や掃除の時間などで児童が自ら学び取れる活動を全力でサポートする。例えば係活動や一人一役の活動でまわりの人に感謝する場面を設けるなど意図的な工夫ができる。
　以上の安心感のある学級づくりが「包み込まれているという感覚」につながり、かくれたカリキュラムが自己肯定感や主体的に行動できる児童の姿につながる。教員として人権の意識を常にもち続け児童に接していく覚悟である。

○　今回の三木先生の講義を聞き、人権教育に対する自分の考えを見つめ直すことができた。そして、今後に活かしていきたいと考えていることが二つある。
　一つ目は「人権は意識して守っていかなければならない」ということだ。今までは、人権週間など学校として考える期間のみ考えていたが、日々の生活の中で人権を自然と意識させることが大切なのだと学んだ。人権教育はあらゆる教育活動の基盤であるため、日々意識することで良い方向に変わっていくと考える。
　二つ目は、「改善された事実を知るだけでなく、なぜ改善されてきたかという経緯を学ぶこと」だ。京都府は様々な問題をかかえながらも、差別と貧困の連鎖を断ち切るために、教育に力を入れ、今の人権教育に至ることを学ぶことができた。その改善された経緯を学ぶことで、自分自身の人権教育についての知識や考え方を深め、広い視野を持ち、児童たちと一緒に人権について深められると考えた。
　以上のように今日学んだことを活かし、高い意識をもって人権教育と向き合える教員になりたい。

○　今回の講座を受講し、人権教育について私は以下の二点を実践に活かす。
　一点目は、人権教育は知識だけではないということだ。いじめをしてはいけないという知識は、誰もがもっている。それがいかに様々な場面で具体的な態度や行動に現れるかが大切だ。そのため、私は日常的に人権教育について学級で話をする。例えば、いじめ解消に向けて、学級でいじめは絶対に許されないことを伝え、具体的にどのようなものがいじめになるかといったところまで共有する。これらの具体的な考え方や行動を指導していきたい。
　二点目は、自身の人権教育に対する意識の変化である。人権教育をする上で自分自身がどれだけ知識として理解し、行動に現せているかが大切である。そのため、正しい人権教育の知識を身につけると共に、京都府での人権教育は何を求めているかというところまで考えて教育していきたい。また、日常的に児童とコミュニケーションを取ることや個別面談などを通して得る人権教育につながる「気づき」も、様々な教育課題の改善につなげていきたい。
　このような実践を行いながら、子どもたちをめぐる人権問題について、より深く知っていきたい。

○　今回の講義では、「人権教育」において教員としての取組、学校全体としての取組について学んだ。講義にあった「人権感覚チェックリスト」に記載されていることを今後の演習や教員として

の実践に生かしていきたい。今すぐに始められることは、児童生徒を呼ぶ際には必ず「～さん」と言うことや児童生徒を傷つけないように常に自分の発言に注意することを行いたい。このような些細なことから人権教育を行っていきたい。

「正しいことを正しく伝える」という教えがとても印象に残っている。児童からの問いに対して答えられなかった経験は少なからずある。はっきり答えずうやむやな答え方をしてしまったが、今後は分からないことははっきり分からないと伝え、すぐ調べて答えたいと思う。

「平等」と「公平」についても理解が深まった。学力差を公平な支援（個に応じた指導）を行うことで誰一人取り残さない学習支援を実現できるようにしていきたい。

○　私が今回の講義を通じて大切であると感じたことは２つである。

１つ目は、自身の人権意識を高めることである。京都府の教育の基本理念として「包み込まれている感覚」を全ての教育に関わる者に大切にして欲しいという願いを掲げている。これは人権意識を高く持つために最も必要な事であると考える。また教科指導を行う上では高い専門性が求められる。このことは人権教育においても同様である。児童生徒の人権意識を高める指導をするためには、人権について正しく理解し、正しく伝えるための知識が必要となる。

２つ目に大切だと感じたことは、人権問題を自分自身の課題と捉えることである。課題解決に向けては、普遍的な視点のアプローチと個別的な視点のアプローチがあり、常に解決に向け何をしなければ成らないかを考え続けていこうと思う。

私は教員となって生徒たちに人権意識を高める指導ができるよう人権問題を正しく理解し、子どもたち一人一人が安全に安心して生活できる学校を他の先生方と協力して創りあげていきたい。

○　今日の講義を踏まえて、人権学習だけが人権教育でなく、あらゆる指導や教育活動が人権教育であることを学ぶことができた。そこで私は教員が高い人権意識や人権感覚を持ち、日々の指導に生かすことが最も重要だと考える。その理由は教員が人権への高い意識を持ち、行動に示すことで生徒の人権意識を高める事につながるからである。また、教員が十分な知識をもち行動することで個に応じた指導の充実や生徒の自己肯定感の向上、包み込まれているという感覚につながると考えるためである。

具体的に教員としての人権感覚を磨くためには、書籍や映画で知識を得たいと考える。それを踏まえ、日常生活の中での偏見や差別に気づき、より理解を深めていきたい。そして正しい知識を正しく生徒に伝えていきたい。

また教員自身が人権意識を高めた上で、個性を認め、尊重し合う学級づくりや学校づくりに努めたい。

○　今回の講義を通して、生かしていきたいことは、２つある。

１つ目は、正しいことを正しく伝えることである。このことは、情報をうのみにして人に伝えてしまうと正しくないことが広まる危険性がある。また、自分の発言には、責任を持つということも大事になると考える。なので、教員になった時に生徒の前で話をする際にも聞いたことを言うのではなく、一度自分で調べてから生徒に伝えるなど、自分が理解をしてから、話をするようにする。

２つ目は、常に人権教育につながることを言い続けることである。突然いじめの話をしても生徒の心には響かない。だからこそ、毎日少しずつでも人権に関わる話を続けることで生徒が考え始めると思う。こうした話をするためには、正しい情報や深い知識が必要だと思うので、教員になる前から自分の考えを持ち、正しいことを伝えられるようになりたい。

第 10 回〔４月 26 日（水）〕教育講座Ⅱ
講座内容：講義「学習指導要領に対応した学習評価」

○　今回学んだ「学びの深まりを生むためには、子どもたちの見方・考え方の成長が必須である」という考え方を大切にしたい。この考え方から、子どもたちの見方・考え方の成長を支える手立てを作っていくのは「私たち」であることも感じ取った。私は見方や考え方を育んでいくために、感覚で進んでいく思考とそのための問題、そこから広がるもっとやってみたいという気持ちの三つが合わさった、学びの始まりをつくりたい。

学びの始まりはどこにでも、いつでもあると演習から感じる。しかし新幹線の座席配置に関する問いはこれまでと違った学びの始まりを感じた。頭の中で考えが勝手に始まり広がった。反射に近い感覚の中で、生活と算数がつながり、考えや見方を広げた。もっとやりたいという気持ちでいっぱいになった。

しかし生活を学びに持ち込むためには、気づく感性やレンズが必要になる。私にとってそこが難しいところでもあり、乗り越えたい部分でもある。平山先生も講義後、そんなプロの感覚を若手に伝えるためにも言語化したいと話されていた。そのことから私が生活と学びを結ぶための「見方・考え方」を養う方法は「子どもたちを揺さぶる」アンテナを授業で子どもたちと先生の姿から強めることだと考えた。

演習中、授業に参加しながら、子どもの目線や発言、机間巡視を通して子どもたちの頭の中を見取りながら、現場の先生の「揺さぶり」と自分ならどうするかという意識をもって授業に臨んでいく。揺さぶるために日常と結びつける力、物事に例える力や子どもを見取る力、その感性を今後の演習で磨き続けていく。

○　私は今回の講義を通して以下の二点を学ぶことができた。

１　児童の振り返りから学びを見取り評価を行う

授業から学んだことを吸収することができているか、次につなげられるようにできているのかを一番見取りやすいのは児童の振り返りである。文章の量だけで学びを評価するのではなく、はじめの考えからどのように考え方が変わり、今後はどのようなことに気を付けていきたいかなど、児童自身が学びを具体化することができているのかを見て評価しなければいけないということを学んだ。私はこの学びを演習や教員としての実践で、児童の目線での振り返りも含めて児童の成長や今後につながる評価をするという点で活かしていきたい。

２　間違いを恐れない雰囲気作りは日頃の接し方から

授業の中で、児童の考えが多くあるからこそ児童同士の学び合いがあり理解が深まるようになるため、教師は間違いを恐れない・間違いを笑わないなどの学級の雰囲気作りを徹底しなければいけない。その中で、教師は自分の失敗談を話すようにしたり、間違いを授業内で活用するときは児童に「みんなのためにこれを使いたい」などの声をかけたりしてケアをしなければいけないということを学んだ。私はこの学びを演習や教員としての実践で、普段の学級経営から授業の充実度につなげるという点で活かしていきたい。

○　私は今回の講義を受けて、教育を人が行う必要性について考えることができたと考える。ICT の導入が進む中で、「指導と評価の一体化」を行う必要性を提言されているが、その場の児童に合わせて指導を変化させたり、授業を行う姿勢から学習意欲を掻き立てたりするためには、人が教育を行う必要があると考えた。今回の学びを活かす具体例を２点に分けて述べる。

１点目は、「指導と評価の一体化」という視点から、授業を行うことである。学習評価を行う時には、３つの視点から評価を行うとされており、評価を行うためには授業の中で指導の仕掛けを行う必要がある。そのために、ヒントカードや今日のポイントを児童自身が見つけるなど、評価が変わったことに伴って授業を変化させていきたい。

２点目は、「何のために学ぶのか」を児童に理解させる授業を行うことである。数学・理科の学習に対する生徒の意識の調査結果から、日常生活に役立つとは思っているが、学ぶことは楽しいと思っている生徒は少ないということが分かった。この背景からキャリア教育が生まれたが、日常生活に役立つということを生徒自身が感じるために、各教科の本質的な意義を明確にした授業

を心がけたい。
　以上の２点から、教育を行うのは人でなければ児童のその場の反応に瞬時に反応したり、授業の面白さを伝えることができなかったりする。今後の実習や教員として授業を行う中で、児童の学ぶ意欲を引き出す指導の仕掛けを児童に合わせて考えていきたい。

○　今回の講義から、学習指導要領がなぜ改訂されたのか、その背景として必要とされている力、学習指導要領の見方など様々な視点が得られました。また、学習指導要領の中身の説明だけではなく、そこから派生し、評価の仕方、ある力をつけさせるための授業の工夫などの実践的なことも学ぶことが出来ました。
　このことを踏まえ、私が教員になった際は見方・考え方を工夫し、生徒に伝える活動に活かしていきたいと考えます。具体的には、日頃から、発言を恥ずかしがらない、失敗を恐れないようにするために、自身の失敗を話すなど誰にでも失敗はあるという認識を生徒に付けさせます。そして授業の終わりに、内容で大切であったポイントを生徒に発言させます。これにより振り返りをさせるとともに、生徒の集中を持続させ、見方・考え方をつけるための土台を作ります。最後にそれを用いて様々な物に応用できる発問を用意することで、見方・考え方をつけ、深い学びを進めていきます。

○　今回の講座で大きく二つのことを学んだ。一つ目は生徒たちが主体となって活発な授業を成立させるには、クラスの雰囲気作りが重要であるという事。二つ目は色々な対話的な授業の形が考えられるという事だ。
　高校で演習をさせていただいている中で主体的で対話的な授業を作ろうと意識しても、生徒たちがなかなか積極的に発表を行わないという現実に向き合うこととなる。その結果、教師が指名していく形態に落ち着いてしまう。教師が求めているものとは違うことを皆の前で言う事への抵抗を払拭するためには担任を持っているクラスであれば普段のホームルームの時間、授業担当だけのクラスであれば授業以外の隙間時間での関りの中で教師と生徒の間だけではなく、生徒同士の関係性も良くしていくことが必要であると思うので、この学びを活かして演習でも授業時間外での生徒との関わりをもっと重視していきたいと考える。
　また、対話的な授業を作っていこうとした時にペアワークやグループワーク、教師からの指名による発表などにどうしても頼ってしまうところがあったが、生徒たちが板書を書き写したノートや教科書に書いてあるメモなどから授業で教師が言っていたことを思い返し、学習に活かしていくことも記憶を通すかたちでの教師と生徒の対話をしているということを今回の講義で学んだので、これからの演習では授業内での活動だけではなく、板書にも今まで以上に目を向けて活動していきたいと考える。

○　小学校での学校ボランティアや教育実習の経験から、今日の講義を聞かせて頂き学んだことが２つある。
　１つ目は手強い問題が出た時の子ども達の自己調整への向かわせ方だ。難しい問題や、前回の授業の応用編などの問題が出ると、「習ってないし、わからへん」という言葉が出ていたことを思い出した。「前のページを見てみたら？」と言葉がけを行っていたが、その行動が子ども達の自己調整を行うための第一歩の手助けとなっていたことを学んだ。
　２つ目はふりかえり方のポイントである。小学校で教育実習を行い、ノートのふりかえりを見せてもらったが、文量の多さや自分の感情を書いている児童が多く見られた。
　しかし、ふりかえりとは「何のために授業を行ったのか」という点を明確にさせるものであり、「面白かった」「楽しかった」などの感想を書く場所ではないことを学んだ。これらの学びから、振り返りを行うことは、「今回の授業はどこがポイントだったのか」を振り返る時間であり、またそれ以降の授業の知識の引き出しとしての役割もあることを学んだ。
　今日学んだことを、今後の教育実習の際や、教員として教壇に立った際、ただ授業の流れの一環として振り返りの時間を置くのではなく、目的意識を持ちながら振り返りを行っていこうと思った。

第 11 回〔５月 10 日（水）〕教育講座Ⅲ
講座内容：講義「京都府における特別支援教育」

○　今後の演習や教員としての実践に活かしていきたいことは２つある。
　１つ目は、的確な合理的配慮を考えていくことである。演習において、ノートを書くことや、時間の見通しをつかむことが苦手な児童が見られる。教員として、必要な支援をするにあたり、特に挑戦したいことは、ICT 機器の積極的な活用である。例えば、今後ますます普及すると考えられるデジタル教科書の音声読み上げ機能の活用を通して、言語を耳から取り入れられる。１時間の授業の中の活動を TO DO リスト化して板書するなどの工夫を通して、一人一人の児童が今何をすれば良いのか明確になる。支援が必要な児童だけでなく、他の児童にとっても有効な手立てになりうることもあるという意識を持って支援に努める。
　２つ目は、他の教職員や関係機関との積極的な連携である。６年間を通して、一貫した支援が必要であると考える。的確な支援を行っていくにあたり、より専門性のある教員等から指導のアドバイスを受けることも大切である。演習において、支援の手立ての迷いから、的確な支援ができないときがある。最近の演習で大切にしている、特別支援学級や通級指導教室の教員との情報共有を、今後も大切にし、子どもの学ぶ権利を保障していきたい。また、連携や自身も勉強することを通して、特別支援教育に関する専門性を身に付けた教員を目指す。

○　今回の講義では、特別支援教育において全ての教員の専門性の向上が必要であると改めて感じた。学んだことを踏まえて、学習面と生活面それぞれで気をつけていきたいと思う点がある。
　まず学習面においては、小さな壁を無くしていくということが大切だと感じた。例えば、文字が多くて文章理解ができない子には、予め問題文を簡単にしたワークシートを用意するなど、その子に応じた教材を準備していきたい。その問題が解けた時には、最大限に褒め、どのような場面でもその児童のいい所を探すように心がけていく。
　生活面においては、児童同士で「障害」という壁をあえて感じさせないように心がけていく。障害があるから出来ないと思い込むのではなく、同じ土台に立てるように教員の合理的配慮を行い、同じ目線で話すことを意識する。
　上記のことを徹底するためには、まず自分自身の専門性がもっと必要だと感じる。教員になってからも学びつづけていきたい。また、視野を広く持ち、自分の常識を覆す場面も必要であることを念頭に置きながら教員として、特別支援教育と向き合っていきたい。

○　今回の講義を通して、特別支援教育をおこなうにあたって教師は「子どもの学ぶ権利」を大切にしながら、個々に合わせた指導を行い、障がいのある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた支援をすることが大切であることを理解することができた。
　今回の講義で学んだことから、今後の演習や教員としての実践に特に活かしたいと思ったことは個々に合わせた指導を行うために児童理解を積極的に行うことである。個々に合わせた指導を行うための積極的な児童理解は、児童が持っている強みを育てたり苦手を克服したりすることにつながると考える。毎日多くの児童と接する教師は、効率化を図り子どもを傾向やカテゴリで分類し、それに合わせた対応や指導を行いがちになる。そうなるとその指導や対応方法に合わない児童の成長は期待できない。教師が児童一人ひとりに目を向けて、その子どもに応じた教育や支援を行うことで、その子どもが持っているよさを伸ばし、苦手と感じる部分を丁寧にサポートすることができる。
　このような子ども一人ひとりが輝ける教育を行うためには、教師の「見る力」と「気付く力」が必要なのではないだろうか。今後の演習では子ども一人ひとりの様子をじっくりと観察して子どもの様子の変化に気付いたり、コミュニケーションを通した子どもの思考の理解を積極的に行

ったり、子どもへの理解の深め方を身に付けたい。

○　私は今回の講座を受けて、特別支援教育について以前の自分より知識が増えた。私の中で教員になって、活かしたいと思ったことが２つある。

１つは通級指導教育において誤解をしている生徒や保護者に対して、正しい知識の共有や誤解のない説明をすることである。私が現在演習をさせていただいている中学校では、今年度新たに通級指導が導入された。そこで現場の教員の方々が懸念していることは、生徒や保護者の誤った通級指導に対する認識である。私が教師になった際は、今回の講座で学んだ特別支援教育の認識を生徒や保護者に対して、誤解がないように、正しい知識を伝え、共有していきたいと思う。

もう１つは、学級活動において障がいのある生徒と障がいのない生徒が、同じ空間で授業を受けられる工夫の仕方である。講座内でグループワークを行った際には、両者の能力差が問題となった。障がいのある生徒が、障がいのない生徒に合わせる活動を行えば、活動についてこられない可能性があるし、逆にすれば、ない生徒にとっては簡単すぎる活動になる可能性がある。そこで大切なのが「個別最適な指導」である。授業を工夫して各個人に意味のある活動にするために、教師が教育的ニーズを把握し、与えることが必要だと感じた。その意識を元に、生徒理解に尽力し、工夫した授業を行えるように活かしたいと思う。

○　今回の講義を通して、私は全ての子どもが同じ場で平等に学べるような授業づくりや環境づくりを行っていく必要があると学んだ。

講義の中で行ったワークで、書くことが苦手な子に対する対応を考えたが、その子の苦手を取り除くことでハンデを無くし周りの子たちと同じスタート地点から「平等」に授業に参加し学ぶことが出来ると考えた。私たちはその子の苦手を取り除くために、キーボードを使用して板書を記録したり、周りの生徒にも板書を写真に撮ることを許可したりするなど考えた。しかし、これは苦手な「書く」という作業を取り除くことには成功しているが、苦手とはいえ「書く」という行為は教育的に必要なことであるからその子だけ「書く」能力を育てる機会を奪うことになるのではないかという意見も出た。

そういった意見や議論を通じて、本当の意味で「平等」に同じ場で学ぶということはそう簡単なことではないと気づけた。そして、教員側が一方的に良かれと思って対応を考えるだけでなく、生徒自身の意志や思いも大切にしながら授業づくりや学級経営を行えるようになりたい。

○　今回の講座を通して、京都府における特別支援教育について、また、交流及び共同学習の意義を理解することができた。そのため、実践に生かしたいことは２点ある。

１点目は、教員として特別支援教育に関する専門性を備えつつ、交流及び共同学習を行う意義を意識して活動に取り組むことである。活動を行うにあたって、漫然と他学級や他校と一緒に活動するだけでは意味がない。交流及び共同学習が子どもたちの人間性を豊かにすることや、障害理解を促進する機会になることを念頭に置き、共生社会を見据えた活動にしていきたい。

２点目は、活動内容において、障害のある人もない人も互いに歩み寄る姿が見られるようにすることだ。事例の中では一方の歩み寄りが顕著であり、共に活躍する場面が見られなかった。そのため、共生社会がともに支え合うことを目指していることも踏まえて、子どもたちが支え合うことのよさを学べる内容になるよう模索していきたい。

以上を踏まえて、交流及び共同学習では、教員として「つながる力」を備えて子どもたちの模範となりつつ、子どもたちにも多様な人と協力して生きる力を身に付けさせられるような教員を目指す所存である。

第12回〔５月13日（土）〕オープン講座Ⅱ
講座内容：①講義「新しい時代の教育の在り方等について
～『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～」
②講義「教員を目指す皆さんへのメッセージ」

○　今回の講義では、今までふわっと理解していた「令和の日本型学校教育」がどのようなものなのか、中村先生のお話を聴く中できちんと確立された。私は二つのことを今後の演習や教員としての実践に活かしていきたいと考えた。

一つ目は教育政策を知り学ぶことだ。教育政策は社会の縮図であると学んだ。教育は世の中の人々の関心が高く、保護者への説明も求められる。政策の方向性を理解し説明できるようにするためにも、教育政策を学ぶ意味があると考える。また、教育政策は中教審のトップの方々が話し合い、折り合いをつけて作られた納得解であり、最新の教育に関する会議であるため、常にどのようなことが議題にあがるのかアンテナを張り、注目していく。

二つ目は、「個別最適な学び」と「協同的な学び」は一体的に充実させることである。それぞれの特徴を活かし、多様な体験を通して子どもたちの可能性を引き出し、どのように社会が変化してもめげない子どもたちを育てていきたい。

教育長の講話は、大変こころ温まる内容で、お話を聴く中で涙があふれた。教師としての「覚悟」より、自分自身が教員に対して「幸せ」を感じ、ロマンティストであり子どもの頃の心を忘れないことが大切であるというお話を聞き、教採に向けて焦っていた気持ちから心の中を見つめ直すことができた。言葉を選び、伝え方を学び、温かい言葉かけができるようになりたいと感じた。

○　今回の講義では今後の新しい教育についてと教育長の想いについて聞いた。本講義での学びから今後に生かしたいことは二つある。

一つ目は令和型の学校教育についてである。令和の日本型学校教育について、正直今までお話を聞いたことがあっても、理解しきることが出来なかった。だが今回の講義を通して、日本独自の教育は守りつつ、新しく見えてきた課題に対してどのように行動していくのかが大切であると学んだ。今後私が教員になれた際にも時代は変わり続けていくため、令和型にとどまらず、何が大切で何に配慮が必要なのかについて考え続けられる教員になりたい。

二つ目は教育長のお話を聞いてである。教員という職はやろうと思えば終わりのない仕事であると私は考えているが、そこで様々なことを追求することが面白さでやりがいだと感じている。今まで私は子どものためには何が必要なのかをすごく考えて来たが、教育長はお話の中で児童・生徒だけでなく先生にとっての幸せが何かについても述べておられ、教員になった際子どものためにはまず自分の土台をしっかり保つ必要性があるのだと考えさせられた。

これらの事を通して、私は自分のためにも児童・生徒のためにも学び続け、児童のためにも自分を作っていきたい。

○　今回の講義を踏まえ、生かしていきたいことは２つある。

１つ目に、「伝える力」を身に付けることである。私自身、気を配ることに関しては長けていると自負していたが、現場に出てみると、気付いたことをうまく言語化できず、もどかしい思いをすることが多かった。周囲の先生方がうまく言葉を引き出してくださることも多く、自分の長所を生かせていないと感じた。そんな中、教育長の講義で「伝える力」の重要さを再認識することができ、これからは言葉を吟味しつつ、伝えたいことを自分の中で明確にしていきたいと思った。また、感情を入れることが必ずしも悪いことではないと知り、不安や悲しみといった負の感情であっても、感情を表すことで明日を元気に過ごせるのならば表現して、前向きに捉えていこうと思った。それがレジリエンスにもつながると思った。

２つ目に、教育政策を教師としての「軸」づくりに生かしていくことである。これまでは漠然と読むことが多かった教育政策だが、自身の授業実践などを見直す指標だと捉え、実践の充実につなげていきたい。その際、独りよがりに何事も決めるのではなく、他の教職員と児童や地域等の実態をしっかり話し合ったうえで、具体的な指導計画や方針を決めていくようにしたい。

○　今回の講座と講話をふまえて、今後の実践に生かしていきたいことは二つある。

一つ目は、自分事として捉えることができる授業を行う。京都府の教育の現状として、基礎・基本の定着の一方で学ぶ意義を実感できる生徒の育成に課題がある。私は教育実践演習で経験した社会科と道徳の授業をもとに、学ぶ意義を実感できる授業を行う。特に暗記が目的になりやすい社会科では、現代の諸問題と関連付けること、因果関係を適切に踏まえさせることに重点を置く。このような社会的な見方・考え方を育成することができる授業を行うことで、生徒の学ぶ意義の実感に繋げていく。

二つ目は、気づくことに重点を置く。講話を通して五つの力の関係性を知った。自身の経験と五つの力の関係性を踏まえて、起点である気づく力を特に大切にする。私は学生時代に、死別、いじめなどの辛く、弱い立場を身近に経験した。伸びるためには学習に取り組むことができる環境にある必要があるため、特に辛い思いをしている生徒に対して、自身の経験を生かし、寄り添った包み込まれる感覚を与えていく。そのために生徒と日常的に関わり、小さな変化も見過ごすことなく気づくことが出来る教師を目指す。

以上のように、京都府の現状や教育理念に基づいた教育活動を行う覚悟である。

○　今回の講座と講話を受けて、私は「令和の日本型学校教育」について以下の二つを実践に活かしたい。

一つ目は、「協働的な学び」において教員はコーディネーターとして関わっていくということである。外部の方が授業を行う目的・ねらいや生徒とどのように関わってほしいかを「教育の専門職」という立場で相手側に提示する必要がある。「学校外の人が参入した方が効果的であり、子どもたちもきっとワクワクする」という思いが教師側にあって初めて成立する学びであるため、今後、授業を展開していく上で「どのような力を子どもたちに身につけさせたいか」といった軸を明確にして行っていきたい。

二つ目は、「相手の背景を想像する」ということである。教育長の講話の中で「優しさとは相手のことを想像する力である」という言葉があった。他の講座生の質疑応答を経て「あの時生徒にどういう言葉をかけていたら正解だったのだろうか」と考えることよりも、「あえてその質問を生徒が投げかけてきたのはなぜだろう、何か思っていることがあるのだろうか」と想像することの方が大事であると私は気づいた。言葉の選択にも気を配りつつ、子どもの背景を探ろうとする姿勢を絶やさないようにしたい。

以上の内容を活かし、生徒との関わりに繋げていく。

○　私は今後の演習や教員としての実践に、二つのことを活かしていきたいと考える。

一つ目は子どもたちと同じように学び続けることである。子どもたちは日々、学校という場で新しい学びに立ち向かい、悩んだり、友達や先生と考え解決をしたり、試行錯誤で学びを深めていっている。

教師は子どもたちに「教える」という立場であるから何を学ぶべきなのか分かった気持ちで常に自分も新しいことを学ぶという気持ちを持つことを意識していきたい。

二つ目は、子どもたちに伝えるときの姿勢や言葉選びに気をつけることである。ただ伝えたいことを伝えるのではなく、どうしたら子どもたちの心に刺さるだろうと考えることが大切であると考える。現在、注意するときなど特に否定的な言葉ではなく言い換えることを意識して演習に取り組んでいる。同じ内容でも言葉を変えていうことで子どもたちは理解をしてくれることを実感した。

以上の二つのことを意識して、今後の演習や教員としての実践に活かしていきたいと考える。

第 13 回〔５月 17 日（水）〕教育講座Ⅳ
講座内容：講義「ＩＣＴを活用した授業実践」

○　私は、「ＩＣＴを活用した教育実践」のために、教員と児童生徒の両方が主体性を持って学び、自律的に行動することに留意する必要性があると考える。答えのない問いに向き合うことが求められる中で、自ら行動を起こすことが全ての始まりであると考える。そのために、私は以下の二つの実践を進める。

一つ目は、教員としてＩＣＴの活用の学びを深めるために、つながりを多く作ることである。養成講座生だけでなく、演習校の先生方ともつながりをもち、ＩＣＴ活用の方法を共有し、自らの授業に取り入れていく。多くの人と色々な授業実践を試していくことで、よりよい活用方法を作り上げていきたい。

二つ目は、子どもたちの活用方法を限定しすぎないことである。ある程度のルールは必要であるが自分で考えて使うために、方法を柔軟に捉えられるようにする。その中でより良い活動になるよう、誤った使い方にならないよう指導していきたい。

以上のように教員のつながりと柔軟な活用によって、それぞれが主体性と自律性をもって行動していく。積極的に活用していくことで、ＩＣＴ活用の学びを深め、授業づくりに生かしていく。

○　「ＩＣＴを活用した教育実践」を進める上での留意点は、ＩＣＴを活用すべき場面かそうでないのかを見極め、使い分けることだと考える。また、ＩＣＴの活用を目的とするのではなく、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた手段として考えることが重要である。何のためにＩＣＴを使っているのか明確にした上で活用していきたい。

私は今後、「児童が主体的に学習に取り組むことができる」ようにＩＣＴを活用していきたいと考える。児童の主体性を高めるためには児童自ら「学びたい」「調べたい」という意欲を引き出す必要がある。ＩＣＴを活用することで、「個に応じた学習」がしやすくなる。児童一人一人の実態に応じて、学習の方法を変化させることで、取り残され学習に対する意欲が低下するという問題を防ぐことができると考える。児童に選択肢を与えることで、児童が最も興味・関心をもって取り組める学習を選ぶことができる。

本日の講義を受講するまで「ＩＣＴを活用するために～を行う」という考え方があった。しかし、そうではなく「○○するためにＩＣＴを活用する」という考え方にするべきと学び、この視点をもってＩＣＴ活用をしていきたい。

○　これからの予測不可能な時代を生きる子どもたちに必要なのは、問題発見力や的確な予測をする力など、これまでと大きく変わっている。個別最適な学びを通してこの力が身に付くと考えた。これは子どもが学びのツールを選択できるようにするなど、ＩＣＴの活用が欠かせない。

ＩＣＴを活用した教育実践で留意するのは情報モラルを身に付けることである。子どもが日常でモラルの本質を理解し、情報モラルを身に付けるために、まずは教員自身が情報モラルを身に付ける必要がある。著作権侵害やセキュリティに関する教員の不祥事をよく目にする。これは決して他人事ではなく、自分にも起こりうることだと自覚して、慎重に実践する。

また、今後の演習やボランティアで、先生方がＩＣＴをどのように活用しているか学び、自身の指導に取り入れたり、京都府デジタル学習支援センターのホームページでアイデアを学んだりして自分の引き出しを増やす。そして、教員になったら地域や教員とＩＣＴについての情報を共有し、学びを深めることで独りよがりにならないよう意識する。

ＩＣＴを活用するために授業づくりをするのではなく、目的を達成するためにＩＣＴを活用するという考えを大切にして情報モラルやセキュリティに留意しながら授業づくりと学級経営に励む。

○　本日の講義でも、個別最適な学びのためにはＩＣＴの活用が不可欠であると言われていたように、ＩＣＴは教育において欠かせないものとなっている。だが、ＩＣＴを活用していく上で、情報モラルの指導や、ＩＣＴを使用することに困難を感じている子への支援など、留意すべき点も挙げられる。留意すべき点をふまえて、私は以下の二点について具体的に実践していく。

まず一つ目は、授業内外での調べ学習を行うことである。正しい情報であるか否かを判断するためには、子ども自身に体験させることが一番良いのではないかと考えるため、教科を問わず、インターネットを利用した学習活動を行い子どもに情報の取捨選択能力を身に付けさせたい。

二つ目は、教員自身がＩＣＴに関わる様々な交流の場に参加し、知識を身に付けることである。知識を身に付けると共に、他校種の方々ともたくさん交流をし、ＩＣＴに困難を感じる子どもの支援について考え続けていきたい。また、様々な支援方法、活用方法についても学び続けていこうと考える。

以上のような実践を行いながら、高い意識をもってＩＣＴ教育に向き合っていける教員となりたい。

○　ＩＣＴ教育を進める上で、授業だけでなく、授業との組み合わせを含めた日常的な活用を積極的に行うべきであると考える。そのためには「〇〇するためにＩＣＴを活用する」という視点を大切にしていきたい。そのような視点をもとに今後、実践していきたい点を二つあげる。

一つ目は、未来を想定した教育を実践していきたいと考える。これからの社会を担う人を育てる立場として、社会に出たときに必要となる力を見据えた教育をしていくべきだと考える。クリエイティブな考えを育て、新たな価値観を育てるためにＩＣＴ教育を実践していきたい。

二つ目として、デジタルシチズンシップ教育より、日常からＩＣＴを活用していきたい。今の教育現場ではモラル違反を恐れ、ＩＣＴ教育の推進に抵抗感がある考えも散見できる。しかし、生徒を信じ、失敗を恐れず一度やってみようという取組も危険への対応を準備しながらＩＣＴ教育を牽引していきたい。

これら二つのことを実践する上で、自分自身が失敗を恐れずトライする気持ちをわすれず、ＩＣＴ教育を進化させていきたいと考える。

○　特別な配慮を要する生徒が増加している昨今、ＩＣＴを利活用して、学びの機会を保障することが可能になる。また、変化が激しい社会においても、新たな価値を創造し、還元できる力が求められているという背景を鑑みて、私は二点を実践する。

まず、生徒への配慮や教材の工夫、働き方の改善にＩＣＴを有効活用しつつ、人や地域、教職員同士等のつながりを拡大する。生徒の特性や興味関心に応じて、学習形態を変容させたり、資料を用いたりすることは、生徒がより主体的に問題の本質を捉える学びには必要不可欠である。しかし、ＩＣＴの使用ばかりに執着することなく、教室内で各個人の学びを広げるためにも協働や学外連携を通した活動の充実が必要である。

次に二点目としてＩＣＴの利活用や実践例について学び続け、教職員や地域社会にそのノウハウを共有していきたい。なぜならば、生徒の学習機会の保障や新たな価値の創造、学外の人材・機関との交流には、ＩＣＴを通して、求められる教育を実現するには教育に携わる全ての者が貢献しなければならないからである。

○　「ＩＣＴを活用した教育実践」を進める上で、児童生徒に付けたい力を明確にすることを留意する必要があると考える。ＩＣＴを活用することで、児童生徒が紙などの教材では興味を示さなかった学びに対して関心を持つ可能性がある。文字だけでなく、イラストや動画など様々な角度から情報を得ることができるからである。ＩＣＴは児童生徒にとって興味・関心が持てることとともに主体性を引き出すことのるツールである。そのため、ツールをどのように生かしていくのか目的を持って活用することが大切であると考える。

今後、児童生徒の実態を理解した実践を進めていきたいと考える。特別支援学校の児童生徒の実態を理解した実践を進めていきたいと考える。様々な特性を持ち、一人一人ができること、言葉の理解が異なる。そのため授業の目標もそれぞれで異なる。どのような目標を立て、それを達成するためには、この子にはどのような力を付けたいという目標を立て、その達成に向け、楽しく主体的に活動するためにＩＣＴを活用していきたい。

第14回〔５月31日（水）〕閉講式
講座内容：①主催者挨拶・説示　②各演習校代表あいさつ
　　③講座生交流　　④講話

教師力養成講座　教育実践演習校一覧表

学　校　名		住　　所
1	向日市立向陽小学校	617-0005　向日市向日町南山3
2	向日市立第4向陽小学校	617-0002　向日市寺戸町三ノ坪20
3	大山崎町立大山崎小学校	618-0091　大山崎町字円明寺小字百々18
4	宇治黄檗学園 宇治市立宇治小学校	611-0011　宇治市五ヶ庄三番割27
5	宇治市立菟道小学校	611-0021　宇治市宇治塔川102
6	城陽市立久津川小学校	610-0101　城陽市平川指月1
7	八幡市立くすのき小学校	614-8365　八幡市男山金振9
8	京田辺市立田辺小学校	610-0331　京田辺市田辺鳥本102
9	木津川市立高の原小学校	619-0224　木津川市兜台4丁目4-1
10	亀岡市立千代川小学校	621-0046 亀岡市千代川町北ノ庄国主ケ森21
11	南丹市立園部第二小学校	622-0041　南丹市園部町小山東町平成台2号78
12	宇治市立宇治中学校	611-0021　宇治市宇治矢落64-1
13	宇治市立東宇治中学校	611-0011　宇治市五ヶ庄池ノ浦36-1
14	城陽市立城陽中学校	610-0121　城陽市寺田北山田35
15	城陽市立西城陽中学校	610-0121　城陽市寺田乾出北82
16	亀岡市立詳徳中学校	621-0821　亀岡市篠町柏原中又7
17	府立山城高等学校	603-8335　京都市北区大将軍坂田町29
18	府立鴨沂高等学校	602-0867　京都市上京区寺町通荒神口下ル松蔭町131
19	府立洛東高等学校	607-8017　京都市山科区安朱川向町10
20	府立南陽高等学校	619-0224　木津川市兜台6-2
21	府立宇治支援学校	611-0031　宇治市広野丸山10
22	府立八幡支援学校	614-8236　八幡市内里柿谷16-1

第16期　京都府教師力養成講座 「夢・未来」講座日程表

回	実施日時	場　所	講座名　・　内容	講　師(敬称略)
1	２月１日(水) 18:30～20:00	キャンパスプラザ京都 ４階　第2講義室	開講式 講演「先輩修了生からのエール」 【指標の主な観点：①⑦】	挨拶・説示 教育次長　木上　晴之 宇治立東宇治学校 教諭　谷井　亮太（14期生）
2	２月12日(日) 13:15～15:15	オンライン	オープン講座Ⅰ ①「教師のやりがい・使命」 ②「第2期京都府教育振興プラン」 【指標の主な観点：①⑤⑥】	挨拶 教職員人事課　課長　坂田　康一 ①木津川市立加茂小学校 （京都府小学校長会　会長） 校長　久保　嘉章 ②総務企画課　副主査　劔持　加奈子
3	２月18日(土) 14:00～16:00	京都教育大学	京都教育大学<教職キャリア高度化センター>発 「学び続ける教員へのメッセージ」講演会 「これからの教育（令和の日本型学校教育）と教師に求められる資質・能力～一人ひとりの子どもを主語にする学校をつくる」	独立行政法人教職員支援機構 理事長　荒瀬　克己
4	２月22日(水) 18:30～20：30	京都産業大学むすびわざ館 ３－Ａ教室 ３０２教室 ３０１教室 教育委員室	教育実践講座Ⅰ 「小学校における児童理解と学級経営」 「中学校における生徒理解と学級経営」 「高等学校における生徒理解とホームルーム経営」 「特別支援学校における児童生徒理解」 【指標の主な観点：①②④⑤】	小　乙訓教育局 指導主事　中西　真理子 中　城陽市立城陽中学校 教諭　近藤　千晴 高　府立北嵯峨高等学校 教諭　加納　友矢 特　府立八幡支援学校 教諭　園井　のぶ子
5	２月27日(月) ～ ３月10日（金）	京都府総合教育センター	集団討論 【指標の主な観点：①⑦】	
6	３月３日(金) 18:30～20:30	京都府総合教育センター 大研修室 第１パソコン研修室 第2研修室 第1研修室 第5研修室 演習室 第4研修室 第2パソコン研修室 第7研修室	教育実践講座Ⅱ 「授業実践講座」 【指標の主な観点：①③⑦】	総合教育センター 主任研究主事兼指導主事　辻村　重子 研究主事兼指導主事　岡村　佳之 研究主事兼指導主事　植田　博樹 主任研究主事兼指導主事　芦田　有一 研究員　堀川　泰雅 主任研究主事兼指導主事　針尾　有章子 研究員　渡辺　佳代子 研究員　山﨑　亮太 教師力向上総括アドバイザー　高光　宗是 研究主事兼指導主事　田村　知史 研究主事兼指導主事　岩崎　佳子 研究主事兼指導主事　森本　尚之 研究員　佐藤　雄太
7	３月８日(水) 18:30～20:30	キャンパスプラザ京都 第3講義室 第4講義室 第3演習室 第4演習室	教育実践講座Ⅲ 「小学校における外国語教育」 「中学校における生徒指導事例と対応」 「高等学校における生徒指導事例と対応」 「特別支援学校における医療的ケアへの対応」 【指標の主な観点：①②③④】	小　南丹市立八木西小学校 教諭　谷内　祥絵 中　八幡市立男山第三中学校 教諭　浅野　淳 高　高校教育課 指導主事 日下部　富伯 特　特別支援教育課 指導主事　新田　幸世
8	３月15日(水) 18:30～20:30	キャンパスプラザ京都 ４階　第2講義室	教育実践講座Ⅳ 「特別の教科　道徳」 【指標の主な観点：①②③④】	京丹波町立和知小学校 校長　中舎　良希
9	４月19日(水) 18:30～20:30	キャンパスプラザ京都 ４階　第2講義室	教育講座Ⅰ 「京都府における人権教育」 【指標の主な観点：①②】	学校教育課　人権教育室 総括指導主事兼係長　三木　孝史
10	４月26日(水) 18:30～20:30	キャンパスプラザ京都 ４階　第2講義室	教育講座Ⅱ 「学習指導要領に対応した学習評価」 【指標の主な観点：①②③④⑤⑥⑦】	学校教育課 総括指導主事兼係長　平山　孝次
11	５月10日(水) 18:30～20:30	キャンパスプラザ京都 ４階　第2講義室	教育講座Ⅲ 「京都府における特別支援教育」 【指標の主な観点：①②③④】	特別支援教育課 総括指導主事兼係長　星川　涼華
12	５月13日(土) 9:20～11:15	京都府立京都学・歴彩館 大ホール	オープン講座Ⅱ ①「新しい時代の教育の在り方等について ～『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～」 【指標の主な観点：①⑤⑥】 ②「教員を目指すみなさんへのメッセージ」	挨拶 教職員人事課　課長　吉岡　伴幸 ①学校教育課　課長　中村 義勝 ②教育長　前川 明範
13	５月17日(水) 18:30～20:30	キャンパスプラザ京都 ４階　第2講義室	教育講座Ⅳ 「ICTを活用した授業実践」 【指標の主な観点：①②③】	ICT教育推進課 指導主事　坂根　悠子 研究員　居合　佑樹
14	５月31日(水) 18:30～20:00	キャンパスプラザ京都 ４階　第2講義室	閉講式 各演習校代表者スピーチ 講話	挨拶・説示 管理部長　仲井　宣夫

【演習校での教育実践演習の様子】

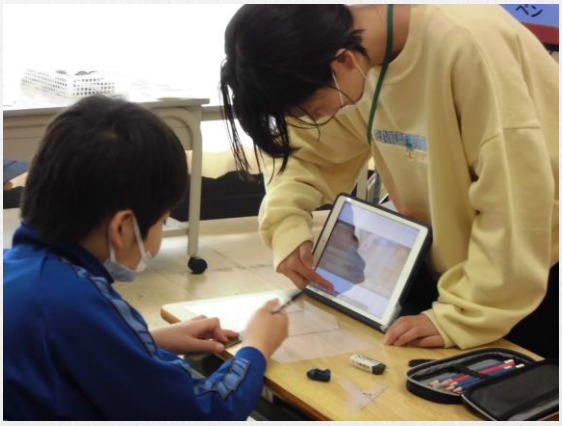
〇体験授業や研究授業
〇学習支援や授業補助
〇その他

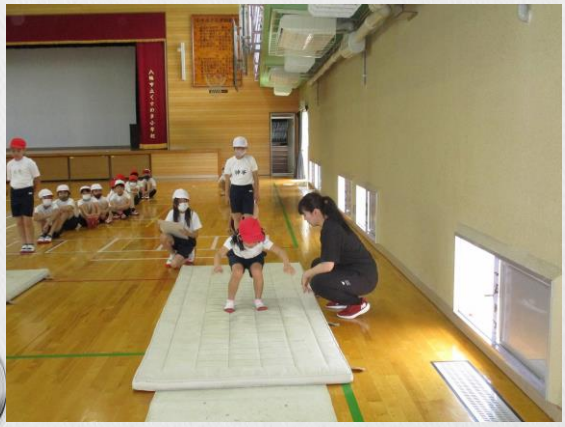
左右
上
下

ぬあて
ながさのあらわし
いくつ分かな？
7と2分の1ひく
14センチ
199センチ
8こ

お母さんにばれたら…
あやまる？にげる？
おこってるんじゃ…
ねこがあしをぬすんだ。
山田さんのお姉さんがあやまりに
その家の
お直しBOX

たん たん たん うん
おなかが
ぐうぐう
かみの
ちょき
ほこりを
ばあばあばあ
じゃんけんぽんで
ぐう ちょき ばあ
じゃん けん ぽん





ボランティアとはどのようなものだろう？
こまっている人を助ける
いいことをする
じぶんなりの
ほめられて
うれしい
みんな見てやって
ボランティアは（ほめられるから）やるんじゃなくて人のために自分からやる
おばあちゃんがこまってたから
ほうしゅうがあるからやるんじゃなくて人のためにやる気持ち。
人を助けることをさいごまであきらめ

京都府教員等の
資質能力の向上に関する指標
（抜粋）

2 指標における各観点の考え方について

京都府教育委員会では、教員の成長の道しるべとなるべき「指標」を策定するに当たり、教員一人一人が、これからの教員に必要とされる資質能力を具体的に捉えることができるよう、文部科学省の「公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針」も踏まえ、「基本的資質能力」、「人権」、「学習指導」、「生徒指導」、「マネジメント」、「チーム学校」、「京都ならではの教育」の７つの観点とそれぞれの観点ごとの主な要素を掲げました。

それぞれの観点を設けた趣旨や考え方については以下のとおりですので、資質能力の向上を図る際の参考としてください。

１　基本的資質能力

教員は、児童生徒一人一人が幸福で豊かな人生を送ることができるよう、その個性を尊重しながら、「生きる力」を身に付けさせ、健全な育成と全人格の形成に携わるという崇高な使命を負った職であり、教育の直接の担い手として、自らが高潔な人格と豊かな人間性を兼ね備えるとともに、児童生徒から慕われ、その模範となる存在でなければなりません。

また、初任者であっても経験豊富な教員であっても、常に社会状況の変化を意識しながら、現状に満足することなく、自ら学び、成長し続ける姿勢を持つことが大切です。

このような教員という職の特性を踏まえ、必ず備えておくべき素養を「基本的資質能力」として観点の第一に掲げています。

この観点は、言わば不易のものとして、教職生涯にわたり成長していく上で根本となるものです。

〈主な要素〉

使命感、責任感、教育的愛情、コンプライアンス意識、社会性、人間性、
コミュニケーション力、自己省察、自己研鑽

２　人権

京都府教育委員会では、これまでから、人権尊重の意識を高め、自分と他者の人権を大切にする教育を進めるとともに、児童生徒が自立的に社会に参画できる力を養うよう「一人一人を大切にした教育」を進めてきました。人権教育を推進するための基本的取組方針においても、あらゆる教育活動を通して人権教育を推進することとし、教職員の人権意識の高揚のため、「人権教育推進の担い手として人権尊重の理念についての認識深化」、「同和教育の成果と手法への評価を踏まえた継承と活用」、「あらゆる人権問題についての研修の推進」を掲げて取り組んでいるところであり、個別の人権問題に係る児童生徒への支援、人権問題の解決に向けた実践力の育成に引き続き取り組むことが必要です。

また、昨今、子どもの貧困が大きな課題となっており、全ての児童生徒が、生まれ育つ環境に左右されることなく、その将来に夢や希望を持って成長していける社会の実現を目指し、困難な状況にある児童生徒が置かれている背景を踏まえた取組を進める必要があります。

さらに、特別な配慮を必要とする児童生徒に対して、インクルーシブ教育の考え方の下、特性等に応じた指導方法を工夫できる力や個別の教育支援計画・個別の指導計画などの特別支援教育に関する基礎的な知識の習得、合理的配慮やユニバーサルデザイン等に関する理解が、全ての教員に求められています。

これらのことは、第２期京都府教育振興プランで京都府の教育の基本的な理念として掲げている「包み込まれているという感覚」を土台とした「自己肯定感」を、全ての子どもが実感できるようにしていくことにもつながる要素として位置付けています。

〈主な要素〉

人権尊重、人権教育の推進、特別な配慮を必要とする児童生徒への支援

３　学習指導

京都府教育委員会では、児童生徒に「確かな学力」を身に付けさせるため、「基礎・基本の確実な定着」、「活用力・対応力の育成」及び「学ぶことの意義や楽しさを感じられる多様な学び」に取り組んでいるところですが、そのためには学習指導要領等の趣旨や内容を的確に理解した上で、教育課程を編成し、それを実践するための指導方法の工夫・改善や指導技術の向上が必要です。

学習指導要領等では、各教科等［注３］の指導を通して、児童生徒のどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら、発達の段階や特性等を踏まえつつ、知識及び技能が習得されるようにすること、思考力、判断力、表現力等を育成すること、学びに向かう力、人間性等を涵（かん）養することを偏りなく実現していくことが求められています。

そのためには、全国学力・学習状況調査や京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～、高校生のための学びの基礎診断の結果等を効果的に活用しながら基礎・基本の徹底や学習習慣の定着を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」の充実を常に意識し、その実現に向け、不断に授業改善に取り組み、高い授業力を身に付けることが求められます。

また、ＩＣＴの活用や学校の特色化等の視点を効果的に教育活動に位置付けて学習指導に取り組むことが必要です。

〈主な要素〉

学習指導要領等の趣旨の実現、教育課程の実践、指導方法、指導技術、
ＩＣＴ活用、学習評価

［注３］　この指標では、学習指導要領等における各教科・科目、特別の教科である道徳、外国語活動、総合的な学習（探究）の時間、特別活動及び自立活動等を「各教科等」と表記します。

４　生徒指導

近年、いじめ問題や不登校児童生徒の増加傾向、問題行動の低年齢化やＩＣＴ活用等に伴う情報モラルの問題等、教育課題が複雑化・多様化する中にあって、その解決に向け、教員が生徒指導や教育相談に関わる資質能力を高めることが大変重要です。

教員は、学級（ホームルーム）経営、生徒指導、教育相談等のあらゆる場面で児童生徒理解に努め、受容的・共感的に関わりながら児童生徒一人一人を大切にした指導を行うために必要な知識や技能を身に付けなければなりません。

特に教育活動の基本単位である学級（ホームルーム）の経営においては、児童生徒一人一人の個性や人間関係を踏まえて、個別指導と集団指導を適切に行うことが求められます。

また、児童生徒一人一人が自らの進路を主体的に切り拓き、自己実現に繋げることができるよう、発達段階に応じたキャリア教育を進めていくことが大切であり、そのために必要な資質能力も本観点に盛り込んでいます。

〈主な要素〉

学級（ホームルーム）経営、児童生徒理解、生徒指導、教育相談、進路指導
キャリア教育、情報モラル教育

５　マネジメント

教員には、各キャリアステージに応じて、学校運営に関わる資質能力が求められます。学校の校務分掌組織の一員として責任を果たすことで学校運営に参画することや、校務分掌組織のリーダーとして、学校運営の中核となって役割を果たすことが必要です。

熟練期においては、自校の経営方針や運営目標を踏まえ、校長が行う学校経営に積極的に参画し、指導的な役割を果たすことも求められます。

また、学校の教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、教育の内容を組織的に配列し、教育課程の編成、実施、評価、改善のＰＤＣＡサイクルを確立するとともに、教育活動に必要な人的・物的資源等を活用する、「カリキュラム・マネジメント」を実現していくことが求められます。

さらに、教員の多忙化が社会問題となる中、効率的な業務の遂行に向けて、自らの働き方を工夫するなど、適切なセルフマネジメントができ、組織全体の業務の効率化や働き方改革に繋げていくことのできる資質能力も必要です。

加えて、児童生徒の健やかな成長を保障し、教育活動の充実を図るためには、学校は安心・安全な環境が確立された場所である必要があることから、全ての教職員が、危機管理の観点を持って安全管理や児童生徒への指導に取り組み、万一事故等が発生した場合は、組織的に迅速で的確な対応ができるようにしておく必要があります。

〈主な要素〉

学校運営への関わり、効率的な業務の遂行、カリキュラム・マネジメント、学校安全、危機管理

６　チーム学校

教員は、様々な課題に対して個人で対応するだけではなく、それぞれの教員が有する得意な分野、専門的な知識や技能を生かして、補完し合いながら、チームとして連携して対応することが大切です。学校内における教員同士の学び合いや、学校外の資源を活用した学びにより、資質能力の向上を図ることが大切であり、教員一人一人がそれぞれの立場で学校内の人材育成にも積極的に関与し、チームでの役割を果たすことが求められます。

また、学校を取り巻く環境が変化する中で、様々な教育改革や教育課題に適切に対応していくためには、同一校種や異なる校種など、他校の教職員との連携や交流を積極的に図っていくことが重要です。

さらに、児童生徒を取り巻く状況の変化や複雑化・困難化した課題に向き合うため、多様な専門性を持つ人材が学校運営に参画することにより、学校の教育力・組織力を高めていくことがこれからの時代には不可欠であり、教員には、それらの人材と効果的に連携・分担して、チームとして組織的に諸課題の解決につなげていくことができる資質能力が求められます。

加えて、信頼される学校づくりのためには、保護者はもとより、地域住民からの信頼を得ることが不可欠であり、その意見や願いを学校運営に適切に反映させるとともに、家庭や地域社会と積極的に連携・協働し、支援や協力を得ながら、学校運営を改善していくことが求められます。

これらの様々な視点を踏まえた取組の必要性があることから、「チーム学校[注4]」の観点を設けています。

〈主な要素〉

他の教職員との連携・協働、家庭や地域社会との連携・協働、関係機関や多様な人材との連携・協働、人材育成への関わり

［注４］　京都府教育委員会では、「京都式チーム学校」を「複雑化・多様化する教育課題に的確に対応するため、教員が多様な専門性を持つ人材とチームとして連携・分担する体制を学校や地域の実態を踏まえて整備・強化した上で、校長のリーダーシップの下、学校運営や教育活動を組織的にマネジメントすることにより、教員の負担軽減を図り、それぞれの教員や人材がその持てる能力を十分に発揮し、子どもをしっかりと指導できる学校として、京都府がその実現を目指す学校の在り方」と定義しています。

７　京都ならではの教育

我が国の教育を巡る状況に目を向けると、過去の様々な調査での比較によれば、日本の児童生徒の自己肯定感や自尊感情が諸外国と比べて低いという結果が示されています。京都府においても、児童生徒が自分の価値を認識し、かつ、他者の価値も尊重することができるよう、また、自信をもって成長し、より良い社会の担い手となることができるよう、そのための環境づくりに取り組む必要があります。

また、ＩｏＴやＡＩの進展等に伴い生じるライフスタイルの変化や、家庭環境の変化、人口減少や人口構造の変化等の、さらなる社会の変容が予測される中、これからの時代を生きる児童生徒には、「主体的に課題を発見し、解決に導く力」、「志」、「リーダーシップ」、「創造性」、「チャレンジ精神」、「忍耐力」、「自己肯定感」、「感性」、「思いやり」、「コミュニケーション能力[注５]」、「多様性を受容する力」といった資質や能力が求められています。

このような中、第２期京都府教育振興プランでは、「目指す人間像」として「めまぐるしく変化していく社会において、変化を前向きにとらえて主体的に行動し、よりよい社会と幸福な人生を創り出せる人」を掲げました。そして、それに向けた人づくりのため、人権尊重を基盤とした『包み込まれているという感覚』と『自己肯定感』を、教育に関わるすべての人が大切にしたい思いとして位置付けています。その上で、京都府の豊かで美しい自然、世界に誇る貴重な文化財、そして府内各地域の伝統・文化など、「京都の強み」を生かして、「主体的に学び考える力」、「多様な人とつながる力」、「新たな価値を生み出す力」を育むこととしています。

この京都府の教育の基本理念に基づき、これからの社会を担う人材を育成するためには、教員自身が多様な人とつながり、主体的に学び、時代の変化を見据え、京都の自然、歴史、伝統・文化への理解を深めたり、コミュニケーション能力を高めたりすることが必要です。

また、教員は、学校という狭い枠組みの中だけで教育を捉えるのではなく、その背景にある社会情勢や世の中の出来事について積極的に情報収集して、俯瞰的に物事を捉えることができるようにするとともに、多様な体験や交流を通じて視野を広げ、知識や教養を深めながら、見識を備えておく必要があります。

〈主な要素〉

京都府教育振興プランの実現、京都の伝統・文化の理解と発信、
超スマート社会やグローバル社会への対応

［注５］　平成23年８月29日に取りまとめられた、コミュニケーション教育推進会議（文部科学副大臣主催）の審議経過報告は、コミュニケーション能力を「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ合意形成・課題解決する能力」と捉えることとしています。

3 指標におけるキャリアステージの考え方について

1　ステージの設定

教員一人一人が採用されて以降、長期的な視点をもって、計画的にキャリアアップを図っていくためには、教職生涯にわたる自らの成長像や節目を捉えることができる視点が欠かせないことから、指標には、成長段階として、５つのステージと目安となる採用後の経験年数を設定しています。

このステージや経験年数は、大学卒業後すぐに採用され、着任する教員を例に設定していますが、教員の着任時の年齢や経歴は様々で個人差があることから、一律に当てはめることが困難な場合も想定されます。このため、各教員は、指標のステージや経験年数を目安に、自身の経歴やキャリアを踏まえて自らが今どの位置にあるのかなどを常に省察しながら、キャリアアップを図っていくことが必要です。

また、教員が一定の経験を積んだ段階では、一人一人の経歴や経験の違いにより、学習指導や生徒指導等の各分野や領域ごとの専門性に差異が生じてしまう場合が想定されますので、特に経験が浅い、早いステージにおいては、全ての観点の資質能力をバランス良く身に付けるよう努力することが大切です。

2　ステージごとに求められる役割と資質能力

各ステージにおいて観点ごとに求められる具体的な資質能力については、指標で示していますが、以下では、各ステージがどのような段階で、大枠としてどのような役割や資質能力が求められるのかを示しています。

ステージ０（着任時・教職経験０年）

教職生涯の出発点において、教員養成課程を修了し、将来にわたって成長していく上で必要となる資質能力や知識の基本をしっかりと身に付けた段階であり、これらの資質能力や知識は、京都府教育委員会が任命権者として採用段階で志願者に求めるものであるとともに、大学等における教員養成の目標となるものである。

〈求められる資質能力〉

○　児童生徒への教育的愛情、教職への使命感や情熱、教員という職に適した基本的な人間性

○　学習指導や生徒指導をはじめとする教育活動全般にわたる基本的な知識と基礎的な指導技術

○　京都府の教育施策に対する知識と理解、その実現に向け他者と連携して取り組む意欲と姿勢

ステージ１（初任期・教職経験１年～６年）

大学等で学んだ知識や指導技術を生かしながら、初任者・新規採用者研修や２年目研修等の受講、日々の業務遂行におけるＯＪＴ等を通して、学習指導や生徒指導等の専門性や指導技術等の基礎・基本を身に付け、教職生涯の基盤を構築する段階

〈求められる資質能力〉

○　教育公務員としての自覚・使命感
○　管理職や先輩教職員等から積極的に学び、その学びを自身の教育実践（学習指導、生徒指導、学級経営等）に生かす力
○　校務分掌組織の一員として、責任を持って役割を果たし、学校運営に参画しようとする意欲・態度

ステージ２（中堅期・教職経験７年～15年）

研修や経験を通して実践的指導力を高め、自己の指導スタイルを確立し、ミドルリーダーとして校務分掌の業務を遂行するとともに、先輩教職員から学びつつ、後輩教職員に対して経験や年齢が近い立場から助言するなど、人材育成に関わる段階

〈求められる資質能力〉

○　ミドルリーダーとしての自覚・責任感
○　安定した教育実践（学習指導、生徒指導、学級経営等）と課題に応じた工夫ができる実践的指導力
○　校務分掌組織の中心として他の組織とも連携しながら学校運営に積極的に貢献できる力

ステージ３（充実期・教職経験16年～24年）

研修や経験を通して実践的指導力をさらに高めるとともに、学校内外に幅広い視野を持って教育実践を発展させながら、校務分掌組織の主任等として学校経営に参画し、同僚や後輩教職員への助言・支援も行うなど、中核教員としての役割を担う段階

〈求められる資質能力〉

○　中核教員としての、自己の役割と責任の自覚
○　これまでの教育実践を省察し、さらに積極的に実践的指導力を高める姿勢を有し、自らの経験をもとに同僚や後輩教職員に適切な助言・支援ができる優れた教育実践力
○　校務分掌組織をまとめて導くリーダー性、分掌間の連携を円滑に進める調整力

ステージ４（熟練期・教職経験25年～）

豊富な経験と継続的な自己研鑽に裏打ちされた優れた教育実践力、他の教職員の模範となる安定感や信頼感を有し、さらなる工夫・改善にも不断に取り組むとともに、各分野におけるリーダー（副校長、教頭、主幹教諭、指導教諭等を含む。）として学校経営に積極的に参画する段階

〈求められる資質能力〉

○　学校内外におけるリーダーとしての自己の役割と責任の自覚
○　経験や高い専門性をもとに、広く周囲に適切な指導・助言ができる優れた教育実践力及び人材育成能力
○　企画力、実行力、分析力、判断力、リーダー性

学校経営に参画するためには、さらに以下の資質能力が求められる。

〈求められる資質能力〉

○　学校教育のさらなる充実に向けた改善意欲
○　学校教育目標の達成に向け、校長を補佐し円滑に組織を動かすマネジメント能力
○　教職員の服務、勤務時間、健康等の適切な管理ができる人事管理能力（管理職）

校長については、学校を統括する者としてのリーダーシップ等、校長に特に求められる資質能力を他の職と区別するため、別の指標を設けています。

【採用からの年数の目安について】

○　**ステージ１（初任期）**は、基礎・基本を形成する期間として、新規採用以降１年目から６年目として設定
○　**ステージ２（中堅期）**以降は、キャリアラインの分かれ目となる40歳代半ばまでの期間を９年ずつに分け、前期の７年目から15年目を中堅教諭等資質向上研修の対象となる期間を含む**ステージ２（中堅期）**、後期の16年目から24年目を**ステージ３（充実期）**として設定
○　**ステージ４（熟練期）**は、キャリアラインが分かれる時期である40歳代半ば以降の期間として設定

ステージ４（熟練期）の中に、「**学校経営への参画**」として、学校経営に参画するために必要な資質能力の枠を設定

指　標

義務教育諸学校

観点	（主な要素）	ステージ0 着任時	ステージ1 初任期（1年～6年）
基本的資質能力	使命感、責任感、教育的愛情、コンプライアンス意識、社会性、人間性、コミュニケーション力、自己省察、自己研鑽	○教育的愛情と使命感・情熱をもっている。 ○教職生涯にわたって健康を維持できる心身のたくましさがある。 ○多様性の尊重やハラスメント防止等、社会人として必要なモラルや常識を身に付けている。 ○円滑なコミュニケーションができ、良好な人間関係を築くことができる。 ○求められる京都府の教員像を理解し、それに向かって自己を省察し、常に学び続けようとしている。 ○ICT等を適切に活用し基本的な校務の処理ができる。	○教育的愛情や使命感・情熱に基づき、行動できる。 ○コンプライアンス意識を有し、多様性の尊重やハラスメント防止等、社会人として良識ある言動ができる。 ○他の教職員、児童生徒、保護者等と円滑なコミュニケーションができる。 ○自己を省察しながら研修に励み、他から積極的に学ぶ姿勢を有している。 ○ICT等を適切に活用し、正確に校務の処理ができる。
人権	人権尊重、人権教育の推進、特別な配慮を必要とする児童生徒への支援	○人権尊重の精神と人権教育の担い手であるという自覚をもっている。 ○人権教育に関する基礎的な知識を有している。 ○困難な状況におかれた児童生徒には、背景にある様々な状況を踏まえた対応が必要であることを認識している。 ○一人一人の児童生徒を大切にし、配慮できる姿勢と、ユニバーサルデザインや合理的配慮の提供についての基礎的な知識を有している。 ○特別な配慮を必要とする児童生徒への支援に関する基礎的な知識・技能を有している。	○人権尊重の精神に基づいて行動できる。 ○人権教育の基本的取組事項と重点的取組事項を理解し、それに基づいた取組ができる。 ○困難な状況におかれた児童生徒の背景にある様々な状況を踏まえた対応に取り組むことができる。 ○特別な配慮を必要とする児童生徒への支援を含め、あらゆる児童生徒に対して、ICT等を有効活用し、ユニバーサルデザインや合理的配慮の視点を意識した指導や授業に取り組むことができる。
学習指導	学習指導要領等の趣旨の実現、教育課程の実践、指導方法、指導技術、ICT活用、学習評価	○学習指導要領等や指導案作成に関する基礎的な知識を有し、指導案を作成できる。 ○各教科等の指導内容や指導方法についての基礎的な知識や指導技術を有している。 ○学習評価に関する基礎的な知識を有している。 ○ICT活用の基礎的な知識や技能を有し、授業改善のための方法・技術を学ぼうとする姿勢がある。	○学習指導要領等に基づいた指導案を作成し、それに沿った授業ができる。 ○児童生徒の興味を引き出す教材研究に取り組み、指導技術を高めることができる。 ○各教科等の指導において、ICTの有効活用も含め、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実による、児童生徒中心の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組むことができる。 ○学習過程や成果に対して評価や評定を行うことができる。
生徒指導	学級経営、児童生徒理解、生徒指導、教育相談、進路指導、キャリア教育、情報モラル教育	○児童生徒理解や受容的・共感的な関わりの必要性を認識し、基礎的な知識を有している。 ○生徒指導や教育相談の基礎的な知識や技能を有している。 ○学級担任の職務や役割についての基礎的な知識を有している。 ○キャリア教育に関する意義を理解し、基礎的な知識を有している。 ○情報モラル教育についての基礎的な知識を有している。	○担当する児童生徒の個性や人間関係を踏まえた個別指導と集団指導に取り組むことができる。 ○児童生徒理解をもとに、受容的・共感的に児童生徒と関わることができる。 ○児童生徒の変化に気づき、不登校やいじめ等の課題の解決に向けて、他の教職員と協力して対応できる。 ○同学年の教員と協力しながら、担任として責任をもって学級経営ができる。 ○キャリア教育の視点を生かした教育活動ができる。 ○情報モラル教育について、教育活動全般を通じて指導できる。
マネジメント	学校運営への関わり、効率的な業務の遂行、カリキュラム・マネジメント、学校安全、危機管理	○校務分掌や学校運営の仕組みなどの基礎的な知識を有している。 ○組織の一員としての自覚を有し、校務に積極的に参画し、他と協働して自らの役割を果たそうとする姿勢がある。 ○学校安全や危機管理の重要性を理解し、基礎的な知識を有している。	○担当する校務分掌における自己の役割を理解し、責任をもってその役割を果たすことで学校運営に参画できる。 ○効率的な業務の遂行に向け、セルフマネジメントができる。 ○学校安全や危機管理の観点から、適切に報告、連絡、相談を行うなど、学校の危機管理マニュアルに沿った行動ができる。
チーム学校	他の教職員との連携・協働、家庭や地域社会との連携・協働、関係機関や多様な人材との連携・協働、人材育成への関わり	○他の教職員、家庭や地域社会、関係機関や多様な人材と連携・協働することの必要性を理解している。 ○資質能力の向上の重要性を理解し、管理職や先輩教職員の指導・助言を受け、自己の資質能力を向上させようとする姿勢がある。	○校務分掌組織の一員として、他の教職員と連携・協働して業務を遂行できる。 ○保護者や地域社会と積極的に交流し、実態の把握に努めることができる。 ○専門家や関係機関と連携しながら業務を遂行できる。 ○管理職や先輩教職員から積極的に学ぶ姿勢をもち、その指導・助言を受けて、同僚と切磋琢磨しながら自己の資質能力の向上に取り組むことができる。
京都ならではの教育	京都府教育振興プランの実現、京都の伝統・文化の理解と発信、超スマート社会やグローバル社会への対応	○京都府教育振興プランを理解している。 ○社会情勢や世の中の出来事について知識を有し、多様な体験や交流の経験がある。 ○京都の自然、歴史、伝統・文化に対する基礎的な知識を有し、児童生徒に継承していくことの必要性を理解している。 ○超スマート化やグローバル化等の社会変化を認識し、京都の強みを生かして、多面的・多角的視点をもって新たな価値を生み出す力をはぐくむことの重要性を認識し、自らのコミュニケーション能力、発信力を高める努力をするとともに、児童生徒に身に付けさせる必要性を理解している。	○京都府教育振興プランの実現に向け、社会情勢や世の中の出来事について日々情報収集し、多様な体験や交流を通じて自らの視野や教養を広げ、教育活動に還元しようと努力できる。 ○京都の自然、歴史、伝統・文化について自らの理解を深めるとともに、児童生徒の学習を構想し実践できる。 ○超スマート化やグローバル化等の社会変化を認識し、京都の強みを生かして、多面的・多角的視点をもって新たな価値を生み出す力やコミュニケーション能力、発信力の育成を意識した指導ができる。

高等学校

観点	（主な要素）	ステージ0 着任時	ステージ1 初任期（1年～6年）
基本的資質能力	使命感、責任感、教育的愛情、コンプライアンス意識、社会性、人間性、コミュニケーション力、自己省察、自己研鑽	○教育的愛情と使命感・情熱をもっている。 ○教職生涯にわたって健康を維持できる心身のたくましさがある。 ○多様性の尊重やハラスメント防止等、社会人として必要なモラルや常識を身に付けている。 ○円滑なコミュニケーションができ、良好な人間関係を築くことができる。 ○求められる京都府の教員像を理解し、それに向かって自己を省察し、常に学び続けようとしている。 ○ICT等を適切に活用し基本的な校務の処理ができる。	○教育的愛情や使命感・情熱に基づき、行動できる。 ○コンプライアンス意識を有し、多様性の尊重やハラスメント防止等、社会人として良識ある言動ができる。 ○他の教職員、生徒、保護者等と円滑なコミュニケーションができる。 ○自己を省察しながら研修に励み、他から積極的に学ぶ姿勢を有している。 ○ICT等を適切に活用し、正確に校務の処理ができる。
人権	人権尊重、人権教育の推進、特別な配慮を必要とする生徒への支援	○人権尊重の精神と人権教育の担い手であるという自覚をもっている。 ○人権教育に関する基礎的な知識を有している。 ○困難な状況におかれた生徒には、背景にある様々な状況を踏まえた対応が必要であることを認識している。 ○一人一人の生徒を大切にし、配慮できる姿勢と、ユニバーサルデザインや合理的配慮の提供についての基礎的な知識を有している。 ○特別な配慮を必要とする生徒への支援に関する基礎的な知識・技能を有している。	○人権尊重の精神に基づいて行動できる。 ○人権教育の基本的取組事項と重点的取組事項を理解し、それに基づいた取組ができる。 ○困難な状況におかれた生徒の背景にある様々な状況を踏まえた対応に取り組むことができる。 ○特別な配慮を必要とする生徒への支援を含め、あらゆる生徒に対して、ICT等を有効活用し、ユニバーサルデザインや合理的配慮の視点を意識した指導や授業に取り組むことができる。
学習指導	学習指導要領等の趣旨の実現、教育課程の実践、指導方法、指導技術、ICT活用、学習評価	○学習指導要領等や指導案作成に関する基礎的な知識を有し、指導案を作成できる。 ○教科・科目の内容についての専門的な知識がある。 ○各教科等の指導内容や指導方法についての基礎的な知識や指導技術を有している。 ○学習評価に関する基礎的な知識を有している。 ○ICT活用の基礎的な知識や技能を有し、授業改善のための方法・技術を学ぼうとする姿勢がある。	○学習指導要領等に基づいた指導案を作成し、それに沿った授業ができる。 ○教科・科目に関する高い専門性を有し、各教科等の教材研究に取り組み、指導技術を高めることができる。 ○学校の設置学科・コースの特色や教育目標を理解している。 ○生徒の興味を引き出す教材研究に取り組み、指導技術を高めることができる。 ○各教科等の指導において、ICTの有効活用も含め、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実による、生徒中心の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組むことができる。 ○学習過程や成果に対して評価や評定を行うことができる。
生徒指導	ホームルーム経営、生徒理解、生徒指導、教育相談、進路指導、キャリア教育、情報モラル教育	○生徒理解や受容的・共感的な関わりの必要性を認識し、基礎的な知識を有している。 ○生徒指導や教育相談の基礎的な知識や技能を有している。 ○ホームルーム担任の職務や役割についての基礎的な知識を有している。 ○キャリア教育に関する意義を理解し、基礎的な知識を有している。 ○情報モラル教育についての基礎的な知識を有している。	○担当する生徒の個性や人間関係を踏まえた個別指導と集団指導に取り組むことができる。 ○生徒理解をもとに、受容的・共感的に生徒と関わることができる。 ○生徒の変化に気づき、不登校やいじめ等の課題の解決に向けて、他の教職員と協力して対応できる。 ○同学年の教員と協力しながら、担任として責任をもってホームルーム経営ができる。 ○キャリア教育の視点を生かし、生徒の希望進路の実現に向けた指導ができる。 ○情報モラル教育について、教育活動全般を通じて指導できる。
マネジメント	学校運営への関わり、効率的な業務の遂行、カリキュラム・マネジメント、学校安全、危機管理	○校務分掌や学校運営の仕組みなどの基礎的な知識を有している。 ○組織の一員としての自覚を有し、校務に積極的に参画し、他と協働して自らの役割を果たそうとする姿勢がある。 ○学校安全や危機管理の重要性を理解し、基礎的な知識を有している。	○担当する校務分掌における自己の役割を理解し、責任をもってその役割を果たすことで学校運営に参画できる。 ○効率的な業務の遂行に向け、セルフマネジメントができる。 ○学校安全や危機管理の観点から、適切に報告、連絡、相談を行うなど、学校の危機管理マニュアルに沿った行動ができる。
チーム学校	他の教職員との連携・協働、家庭や地域社会との連携・協働、関係機関や多様な人材との連携・協働、人材育成への関わり	○他の教職員、家庭や地域社会、関係機関や多様な人材と連携・協働することの必要性を理解している。 ○資質能力の向上の重要性を理解し、管理職や先輩教職員の指導・助言を受け、自己の資質能力を向上させようとする姿勢がある。	○校務分掌組織の一員として、他の教職員と連携・協働して業務を遂行できる。 ○保護者や地域社会と積極的に交流し、実態の把握に努めることができる。 ○専門家や関係機関と連携しながら業務を遂行できる。 ○管理職や先輩教職員から積極的に学ぶ姿勢をもち、その指導・助言を受けて、同僚と切磋琢磨しながら自己の資質能力の向上に取り組むことができる。
京都ならではの教育	京都府教育振興プランの実現、京都の伝統・文化の理解と発信、超スマート社会やグローバル社会への対応	○京都府教育振興プランを理解している。 ○社会情勢や世の中の出来事について知識を有し、多様な体験や交流の経験がある。 ○京都の自然、歴史、伝統・文化に対する基礎的な知識を有し、生徒に継承していくことの必要性を理解している。 ○超スマート化やグローバル化等の社会変化を認識し、京都の強みを生かして、多面的・多角的視点をもって新たな価値を生み出す力をはぐくむことの重要性を認識し、自らのコミュニケーション能力、発信力を高める努力をするとともに、生徒に身に付けさせる必要性を理解している。	○京都府教育振興プランの実現に向け、社会情勢や世の中の出来事について日々情報収集し、多様な体験や交流を通じて自らの視野や教養を広げ、教育活動に還元しようと努力できる。 ○京都の自然、歴史、伝統・文化について自らの理解を深めるとともに、生徒の学習を構想し実践できる。 ○超スマート化やグローバル化等の社会変化を認識し、京都の強みを生かして、多面的・多角的視点をもって新たな価値を生み出す力やコミュニケーション能力、発信力の育成を意識した指導ができる。

特別支援学校

観点	（主な要素）	ステージ0 着任時	ステージ1 初任期（1年～6年）
基本的資質能力	使命感、責任感、教育的愛情、コンプライアンス意識、社会性、人間性、コミュニケーション力、自己省察、自己研鑽	○教育的愛情と使命感・情熱をもっている。 ○教職生涯にわたって健康を維持できる心身のたくましさがある。 ○多様性の尊重やハラスメント防止等、社会人として必要なモラルや常識を身に付けている。 ○円滑なコミュニケーションができ、良好な人間関係を築くことができる。 ○求められる京都府の教員像を理解し、それに向かって自己を省察し、常に学び続けようとしている。 ○ICT等を適切に活用し基本的な校務の処理ができる。	○教育的愛情や使命感・情熱に基づき、行動できる。 ○コンプライアンス意識を有し、多様性の尊重やハラスメント防止等、社会人として良識ある言動ができる。 ○他の教職員、児童生徒、保護者等と円滑なコミュニケーションができる。 ○自己を省察しながら研修に励み、他から積極的に学ぶ姿勢を有している。 ○ICT等を適切に活用し、正確に校務の処理ができる。
人権	人権尊重、人権教育の推進、特別な配慮を必要とする児童生徒への支援	○人権尊重の精神と人権教育の担い手であるという自覚をもっている。 ○人権教育に関する基礎的な知識を有している。 ○困難な状況におかれた児童生徒には、背景にある様々な状況を踏まえた対応が必要であることを認識している。 ○一人一人の児童生徒を大切にし、配慮できる姿勢と、ユニバーサルデザインや合理的配慮の提供についての基礎的な知識を有している。 ○特別な配慮を必要とする児童生徒への支援に関する基礎的な知識・技能を有している。	○人権尊重の精神に基づいて行動できる。 ○人権教育の基本的取組事項と重点的取組事項を理解し、それに基づいた取組ができる。 ○困難な状況におかれた児童生徒の背景にある様々な状況を踏まえた対応に取り組むことができる。 ○一人一人の児童生徒を大切にし、ICT等を有効に活用して、ユニバーサルデザインや合理的配慮の視点を意識した指導や授業に取り組むことができる。
学習指導	学習指導要領等の趣旨の実現、教育課程の実践、指導方法、指導技術、ICT活用、学習評価	○学習指導要領等や指導案作成に関する基礎的な知識を有し、指導案を作成できる。 ○それぞれの障害の特性を理解し、個別の指導計画や教育支援計画について基礎的な知識を有している。 ○各教科等の指導内容や指導方法についての基礎的な知識や指導技術を有している。 ○学習評価に関する基礎的な知識を有している。 ○ICT活用の基礎的な知識や技能を有し、授業改善のための方法・技術を学ぼうとする姿勢がある。	○学習指導要領等に基づいた指導案を作成し、それに沿った授業ができる。 ○児童生徒の興味を引き出す教材研究に取り組み、指導技術を高めることができる。 ○障害の特性を理解した個別の指導計画を作成し、それに基づく授業ができる。 ○各教科等の指導において、ICTの有効活用も含め、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実による、児童生徒中心の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組むことができる。 ○学習過程や成果に対して評価や評定を行うことができる。
生徒指導	学級経営、児童生徒理解、生徒指導、教育相談、進路指導、キャリア教育、情報モラル教育	○児童生徒理解や受容的・共感的な関わりの必要性を認識し、基礎的な知識を有している。 ○それぞれの障害の特性を理解し、生徒指導や教育相談の基礎的な知識や技能を有している。 ○学級担任の職務や役割についての基礎的な知識を有している。 ○キャリア教育に関する意義を理解し、基礎的な知識を有している。 ○情報モラル教育についての基礎的な知識を有している。	○担当する児童生徒の個性や学齢に応じた個別指導と集団指導に取り組むことができる。 ○児童生徒理解をもとに、受容的・共感的に児童生徒と関わることができる。 ○児童生徒の変化に気づき、不登校やいじめ等の課題の解決に向けて、他の教職員と協力して対応できる。 ○同学年の教員と協力しながら、担任として責任をもって学級経営ができる。 ○キャリア教育の視点を生かし、児童生徒の自立と社会参加に向けた教育活動ができる。 ○情報モラル教育について、教育活動全般を通じて指導できる。
マネジメント	学校運営への関わり、効率的な業務の遂行、カリキュラム・マネジメント、学校安全、危機管理	○校務分掌や学校運営の仕組みなどの基礎的な知識を有している。 ○組織の一員としての自覚を有し、校務に積極的に参画し、他と協働して自らの役割を果たそうとする姿勢がある。 ○学校安全や危機管理の重要性を理解し、基礎的な知識を有している。	○担当する校務分掌における自己の役割を理解し、責任をもってその役割を果たすことで学校運営に参画できる。 ○効率的な業務の遂行に向け、セルフマネジメントができる。 ○学校安全や危機管理の観点から、適切に報告、連絡、相談を行うなど、学校の危機管理マニュアルに沿った行動ができる。
チーム学校	他の教職員との連携・協働、家庭や地域社会との連携・協働、関係機関や多様な人材との連携・協働、人材育成への関わり	○他の教職員、家庭や地域社会、関係機関や多様な人材と連携・協働することの必要性を理解している。 ○資質能力の向上の重要性を理解し、管理職や先輩教職員の指導・助言を受け、自己の資質能力を向上させようとする姿勢がある。	○校務分掌組織の一員として、他の教職員と連携・協働して業務を遂行できる。 ○保護者や地域社会と積極的に交流し、実態の把握に努めることができる。 ○専門家や関係機関と連携しながら業務を遂行できる。 ○管理職や先輩教職員から積極的に学ぶ姿勢をもち、その指導・助言を受けて、同僚と切磋琢磨しながら自己の資質能力の向上に取り組むことができる。
京都ならではの教育	京都府教育振興プランの実現、京都の伝統・文化の理解と発信、超スマート社会やグローバル社会への対応	○京都府教育振興プランを理解している。 ○社会情勢や世の中の出来事について知識を有し、多様な体験や交流の経験がある。 ○京都の自然、歴史、伝統・文化に対する基礎的な知識を有し、児童生徒に継承していくことの必要性を理解している。 ○超スマート化やグローバル化等の社会変化を認識し、京都の強みを生かして、多面的・多角的視点をもって新たな価値を生み出す力をはぐくむことの重要性を認識し、自らのコミュニケーション能力、発信力を高める努力をするとともに、児童生徒に身に付けさせる必要性を理解している。	○京都府教育振興プランの実現に向け、社会情勢や世の中の出来事について日々情報収集し、多様な体験や交流を通じて自らの視野や教養を広げ、教育活動に還元しようと努力できる。 ○京都の自然、歴史、伝統・文化について自らの理解を深めるとともに、児童生徒の学習を構想し実践できる。 ○超スマート化やグローバル化等の社会変化を認識し、京都の強みを生かして、多面的・多角的視点をもって新たな価値を生み出す力やコミュニケーション能力、発信力の育成を意識した指導ができる。